



熊本県立大学
津曲研究室
チーム Coho'zu



平成28年
熊本地震



復興へと 向かう一歩

平成28年熊本地震



大津町22名の
取材記録



大津町22名の
取材記録



熊本県立大学津曲研究室
チーム Coho'zu



熊本地震において、自分の持ち場で懸命に行動していた人たちがいた。その人たちが起こした行動の1歩は復興へと向かう未来に繋がっていた。これを多くの1歩へと繋いでいくため、熊本地震に向き合った大津町の姿を記録している。

熊本県立大学
津曲研究室 × 大津町

平成
28年
熊本地震

復興へと

向かう
一歩

大津町 22 名
の取材記録

A STEP TOWARDS RECONSTRUCTION:

22 people Oral History in Ozu town.

The book contains the memory of people
who have faced the disaster in Kumamoto.

Prefectural University of Kumamoto

Tsumagari laboratory Team Coho'zu Press, 2017.3

はじめに

本書は熊本県菊池郡大津町の人々の震災についての記憶の記録です。大津町は、「平成28年熊本地震」の震源に近い地域です。甚大な被害をもたらした地震からの復興に向け、大津町の人々はどう行動し、その時、何を考えていたのかを中心に取材し、オーラル・ヒストリーとして語っていただきました。それを本書には綴っています。

なぜ、私たち大学研究室のメンバーが大津町について、こうした震災の記憶を記録としてまとめることになったのか、その事情は次のようなことでした。

大学研究室は、4月になるとメンバーのほとんどが入れ替わり、全く新しい体制となります。平成28年4月、熊本県立大学津曲研究室の新メンバーは、課題を持ち、それぞれの取り組みを開始しようとしていました。その中のチームの一つにCoho'zuがありました。津曲研究室の4年生3人（飯沼玲佳・上田幸奈・多賀有紀）で構成されたチームです。このチームは熊本県立大学「学生GP制度」の下、大津町と連携し、町の広報紙が持つ課題について、卒業研究として取り組むことになっていました。チーム名は、広報紙と大津町の読みを参考に命名したものです。Coho'zuは、課題に取り組むため、先行事例の調査、文献調査を始めようとしていました。その矢先、平成28年熊本地震が発生しました。

熊本地震によって、新しい年度が始まったばかりの県内は大混乱となりました。被害が集中した益城町の混乱は特にひどかったのではないかと思います。大津町は、益城町に隣接する自治体です。強い揺れは大津町全体にも被害をもたらし、特に、役場庁舎は甚大な被害を受け、使用できなくなりました。役場の日常は4月14日以降、一変しました。この混乱で、役場とCoho'zuとの当初の連携は自然消滅したのでした。当初の連携はなくなったものの、私たちにできることはないだろうかと学生たちと考えました。何ができるのだろうか、必死に考えました。ボランティアとして活動することも一つの選択肢でした。本書で取材した大学生が、「何かをやらなければ」との衝動に突き動かされ、ボランティアとして行動したように、震災後、大学生の多くが災害ボランティアへと参加しました。Coho'zuのメンバーもそれらの中の一人でした。緊急時、具体的に行動することの大切さは改めて言うまでもないことです。しかし、震源に近い大学に身をおく私たちとしては、それだけで良いのかとも考えたのです。大学で学んできた経験を生かして行動することも大事なことでないかと、そう考えました。

震災という初めて体験する緊迫した状況の中で、熱狂からあえて距離をおき、冷静になって自分たちができることを考えた結果、辿り着いたのが、震災の記憶を記録として残していくことでした。参考にしたのが、東京大学社会科学研究所（以下、東大社研）の岩手県釜石市での調査でした。調査結果の概要は、「釜石と震災、もう一つの記憶」とのサブタイトルがついた「〈持ち場〉の希望学」として刊行されました。この書物は、東日本大震災の際、釜石市の人々が何を考え、どう行動したのかを記録したものです。津曲研究室では、「希望学」という領域としてこの書物を事前に学んでいました。

記憶は比較的短い間に曖昧になる、あるいは変容していきます。熊本地震において大津町ではどういったことが起き、そして大津町の人たちは震災という突然の災難にどう向き合い、そしてその困難からどう立ち上がりとしてきたのか、そういったことを記録しておくことは、取材や調査の方法を多少なりとも経験してきた津曲研究室だからこそ実行できることではないかと考えました。また今回のように大規模な現象に対する取材とその記録化には膨大な時間を要します。時間という制約のため、実行するのは一般には非常に難しいものです。しかし、それでは震災の記憶を風化させてしまいかねません。今回の震災についての記憶が消えてしまうのは、地域にとつての貴重な財産を失うのと同じではないかと思いました。震災の記憶はどうかして記録として残していくべきだろうと考えました。調査に、かなりの時間を要する活動です。私たちは、こうした地道な活動こそ、大学の研究室にできるボランティアだと思いました。

そこまで考えたところで、私たちは行動を開始しました。準備段階を経て、平成28年8月から平成29年1月にかけてCono.nuは22名の取材を行いました。延べ30時間以上に及ぶ音声記録から文字起こした量は32万文字に達し、A4用紙で350枚ほどになりました。

本書は半年間かけて取材した記録を整理し、まとめたものです。大津町22名の皆さんが熊本地震の際に何を思い、どう行動し、復興に向けてどうやってきたのか、その思考や行動の記録となっています。22名と限定された方々ではありますが、震災の困難を乗り越えようとした人々の行動から様々な教訓を読み取ることができるかと思っています。震災の記憶を継承し、大津町の未来へと繋げていくための貴重な資料の一つになるものと考えています。

本書は、大津町の皆様の協力なしには作れないものでした。多忙な方々ばかりでしたが、時間を作っていただき、主に勤務時間外に取材させていただきました。お陰様でこのような記録資料としてまとめることができました。本文中、簡略化のため、取材した方々の敬称を省略しております。また、所属を付記しているところがありますが、それらは全て平成28年度時点のものです。それぞれ、ご了承いただければ幸いです。

この活動は、大津町役場地域づくり推進係の皆様に支援していただきました。地域づくり推進係の強力な支援なしに本書を完成させることは不可能でした。この場を借りて、謝意を表したいと思います。

津曲隆

平成28年熊本地震

復興へと向かう一歩 ■ 目次

目次

はじめに i

序章 2

第Ⅰ部 震災の記憶を読み解く

第1章 人々の行動の原動力 17

第2章 非常時における人々の持ち場 37

第3章 人々の心境変化と防災意識 51

第Ⅱ部 それぞれの記憶の記録

1 古庄日菜子（天津町在住 大学生） 70

2 佐々木香澄（天津町在住 大学生） 78

3 三池和臣（道の駅・天津社員／東熊本青年会議所） 87

4 上野賢一（道の駅・大津社長（駅長））……………96

5 齋藤剛司（大津町地域おこし協力隊 隊員）……………105

6 古庄政広（大津町消防団第6分団長）……………117

7 阪田一孝（大津町外牧地区 区長）……………127

8 佐藤真二（大津町議会議員）……………137

〈大津町役場職員〉

9 前田健司（総務部 総務課）……………147

10 岩下潤次（総務部 総務課）……………156

11 中原裕二（総務部 財政課）……………166

12 伊東正道（住民福祉部 環境保全課）……………176

13 原野さくら（住民福祉部 住民課）……………186

14 豊岡莉奈（住民福祉部 住民課）……………192

15 松嶋愛里（住民福祉部 住民課）……………200

16 松本美由紀（住民福祉部 住民課）……………207

17	高橋由紀美（住民福祉部 福祉課）	216
18	姫野慎吾（住民福祉部 健康保険課）	226
19	大塚昌憲（住民福祉部 健康保険課）	235
20	新開和則（土木部 都市計画課）	243
21	桐原航平（教育部 学校教育課）	254
22	宇都宮研輔（教育部 学校教育課）	263

おわりに	272
------	-----

附録

熊本地震後の大津町年表 【2016.4.14~2017.1.16】

Coho'zu の「取材活動の目的」

「広報おおづ」平成28年12月号特集記事

編著者・掲載者紹介

序章 （プロローグ）

序章―大津町における震災の記憶収集

津曲隆

混乱と試練のはじまり

平成28(2016)年4月14日(木) 21時26分、私たちは大学の研究室にいた。新年度、新しく始めた勉強会の1回目が終わったばかりでくつろいでいた時、ガタガタと小刻みな揺れを感じた瞬間、強烈な揺れが襲ってきた。悲鳴と共に机の下にすぐに隠れる学生、一方で私や数人の学生は、呆然と、ただひたすら書棚を抑えていた。現在、「前震」と呼ばれている熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード6.5の地震であった。この時、益城町では震度7(計測震度6.6)を観測した。

甚大な被害を受けた地域以外は、一夜が明け、日中の復旧作業によって状況はかなり回復し、夕方には多くの人が帰宅の途についた。翌日4月16日は土曜日であり、前震発生から徹夜の作業で疲れた多くの人が15日の夜は自宅で疲れを癒していたのではないだろうか。その寝込みを「本震」が襲った。

4月16日(土) 1時25分、多くの人が寝静まっていた深夜、熊本地方を震源とするマグニチュード7.3の本震が発生した。前震よりも強く、遥かに長い揺れを感じた本震は各地に甚大な被害をもたらした。

前震、本震ともに夜であった。強烈な余震が続く中、上空を飛び交う無数のヘリの音に緊迫感はさらに煽られた。真夜中、暗闇から大型航空機らしき爆音が聞こえてきた。着陸に向かっていて高度から聞こえてくる。肉眼ではすでに確認できなかったが、益城町にある熊本空港に向かっていたのであろう。深夜、大型機の爆音を近距離で聞くのは初めてのこと、只事ならない事態になっていることを自覚した。た

だ、混乱の中であつたが、空港の滑走路は被害を受けていないのだろうかなど、妙に頭は冷静で、救援活動が始まっていることに、少しだけ安堵したことを記憶している。ただこの時、停電、水道も止まり、ガスも停止。本震は熊本地方の生活インフラの全ての機能を停止させた。この現実を前に、安堵からはほど遠く、非常事態の中に住民は投げ込まれることになる。自宅が全壊・半壊した住民のみならず、生活インフラが消失したことで、多くの住民は避難生活を強いられた。

本震による被害は甚大で、想定外の事態に見舞われたところが多く、熊本地方にとって平成28年度のはじまりは同時に、混乱と試練のはじまりとなった。

私たちの研究室は天津町役場と連携して広報紙に関する研究を進める予定であつたが、この混乱で計画は白紙となった。

平成28年熊本地震データ（概要）

4月14日21時26分の前震と4月16日1時25分の本震は最大震度7の強い揺れを発生させた。熊本地震では前震とその約28時間後の本震という2回の強い揺れの発生が特徴的であつた。

震源地、規模、そして天津町での震度などはそれぞれ以下の通りである。



本震で床に落ち、割れた時計
(本震時間で止まっている)

(1) 前震

発生日時…平成28年4月14日21時26分

震源地…熊本県熊本地方(北緯32度44・5分、東経130度48・5分)

震源の深さ…11キロメートル

規模…マグニチュード6.5

大津町の震度…5強

(2) 本震

発生日時…平成28年4月16日1時25分

震源地…熊本県熊本地方(北緯32度45・2分、東経130度45・7分)

震源の深さ…12キロメートル

規模…マグニチュード7.3

大津町の震度…6強

熊本地震は余震の多さも特徴的であった。平成29年2月16日時点で震度1以上の地震が4250回(震度7…2回、震度6強…2回、震度6弱…3回、震度5強…5回、震度5弱…12回、震度4…117回、震度3…407回、震度2…1153回、震度1…2549回)にも達した。

地震によって使用できなくなった
大津町役場庁舎



大津町の地震被害

大津町は、熊本県菊池郡にあり、熊本市の東方約19キロメートルに位置する。国道325号（久留米↷阿蘇↷延岡）と国道57号（長崎↷雲仙↷大分）が縦・横断し、熊本空港、九州縦貫自動車道熊本ICからも近く交通の条件に恵まれた田園産業都市である。熊本市のベッドタウンとしても人氣が高く、人口34,233人（平成28年度10月末現在）、世帯数13,668戸（平成28年度10月末現在）で、人口減少が叫ばれている時代に、現在も人口が増え続け、発展している町である。大津町の代表的な企業としては本田技研工業熊本製作所がある。

熊本地震では4月14日（木）の前震で震度5強、4月16日（土）の本震時では震度6強が大津町では観測された。大津町内の被災状況は全壊94件、大規模半壊155件、半壊442件、一部損壊648件であった。この震災で大津町役場旧庁舎は壊れ、現在使えない状況となり、職員は急遽建設されたプレハブ庁舎で業務を続けている。

報道の中心から外れて

震度7の揺れに2度も見舞われた益城町、阿蘇大橋の崩落、そして熊本のシンボルである熊本城の石垣の崩落など、衝撃的な映像や写真を繰り返し返



大津町役場仮庁舎（プレハブ）

しテレビや新聞といったメディアが報道した。また同時に、避難生活やこの大災害に立ち向かう人々の様子なども繰り返し報道された。こうした報道を通して、被害の深刻さを全国が、そして当の被災した熊本の人々が知ることになった。

しかし、そうした報道が繰り返し返される度に、私たちが気になっていたのが、連携予定だった大津町のことであった。大津町は、こうした報道で取り上げられることはほぼなかった。状況はどうなっているのだろうか。益城町や西原村と被害の大きかった地域と隣接し、また山林斜面が大規模崩落した南阿蘇村立野地区とも隣接している地域である。被害が予想されるものの、被害中心から周辺となった大津町の様子がマスメディアを通して流れてくることはほとんどなかった。報道はされなくても、被害の大きかった地域同様、大津町でも様々なことが起きていたはずである。震災被害に向き合い、困難に毅然と立ち向かい、乗り越えようとしている人たちがいたはずである。縁あって連携をする予定だった地域である。大津町のこと気がなった。

混乱が少し治まりを見せ始めた5月、私たちに何ができるか考えた。考えて、私たちは決めた。当初の連携内容ではなく、大津町の人々がこうした困難に対してどう立ち向かっていったのか、報道からこぼれ落ちていた大津町の状況を、今この時の記録を、残していこうと決めた。それが私たちにできることだと考えた。

今回の熊本地震についての一般論は、おそらく多くの人々が関わる中で検証され、まとめられていくだろう。また、被害の特に大きかった地域などは多くの人の注意を引きつけてきたので、自然にその記録は残されていくに違いない。そうした地域と比較して、大津町は関心が相対的に低く、メディアのレンズか

らもこぼれ落ち、この場所で、あの時に、この人々がどうやって熊本地震を乗り越えていったのか、大津町についての個別具体論が展開されることはないのではないかと考えた。大津町も間違いなく被害を受けた。それに立ち向かう人たちもいた。それらの記録を、今残せる範囲で残しておくことが連携をしようとしていた私たちがやるべきことだと思った。大津町の記録を残していくこと、それを今回の震災における自分たちの持ち場であると信じ、大津町役場の支援の下、大津町に足を踏み入れることにした。

大津町での取材活動

私たちが震災後、大津町に最初に入ったのは平成28年6月30日のことであつた。震災からの復旧活動で殺人的なスケジュールとなっていた役場に、多少なりとも余裕ができた時期だつた。私たちは、震災という困難に対し、自分の持ち場で復旧・復興に向けて行動した人たちを探し、取材していきたいと思っていた。そうした意図を伝え、大津町役場総務課地域づくり推進係の協力を得て、取材対象者を選定していった。

特に私たちは、こうした災害の際に活動することになる行政（役場職員）を中心に話を聞くことに決めていた。ボランティアなどはメディアで取り上げられやすいが、災害時、最前線で奔走することになる行政は、ある意味ではやって当たり前、褒められるというより逆に非難の対象となりやすい縁の下の方力持的存在であり、本来の活動があまり知られていないと思えたからである。こうした人々の震災からの行動をオーラル・ヒストリーとして語ってもらい、それを記録として残しておくことは、おそらく大津町において先々役立つであろうと考えたのである。

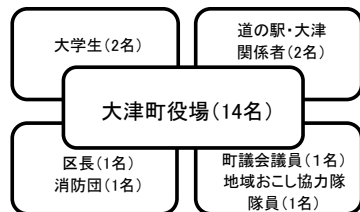
もちろん、行政職員だけでなく、それ以外の大津町の人々について、特徴的な行動をされていた方や色々な年齢層をピックアップして取材を試みた。ただし、やはり今回は行政職員を主対象とすることを決めた。縁の下
の力持ちであるがゆえに、そして公的な立場ゆえに、行政職員が一人の人間として自らのことを主観的に語る機会は少ない。しかし、今回の震災の際、職員個々が主体として災害時にどう対応していったのかを記録しておくことは、大事であろうと思った。そうしたことを急ぎ考えながら、急ピッチで取材の準備を進めていった。

取材は、平成28年8月から平成29年1月の半年間にかけて行った。取材したい方の多くは現役で働く社会人であり、また取材する学生たち特有の制約もあり、それらの条件の兼ね合いの中で調整し、アポを取った結果、期間中、22名の方に取材することができた。内訳は、大津町役場職員14名、大津町在住大学生2名、道の駅・大津2名、外牧地区区長1名、消防団第6分団長1名、大津町議会議員1名、地域おこし協力隊隊員1名の計22名であった。

取材した方々の性別・年齢構成は表に示す通りである。男女比は男性が15名、女性が7名と男性の割合が多くなっている。年齢別に見ると、29歳未満の若い世代が男性3名女性5名の合計8名、30歳から49歳までの働き

	男性	女性	合計
29歳以下	3	5	8
30～49歳	9	2	11
50歳以上	3	0	3
合計	15	7	22

取材対象者の年齢・性別分布



取材対象者の所属

盛りの世代が男性9名女性2名の合計11名、そして50歳以上は男性3名となっている。幅広い世代に対して取材を行った。これらの方々の取材記録を第Ⅱ部で紹介している。

インタビュー取材の内容

取材は、原則、東日本大震災からの復興に向けた時期、東京大学社会科学研究所（以下、東大社研）による釜石市での調査を踏襲し、

- （1）震災後数日間の行動（前震・本震直後）
 - （2）震災後1ヶ月間の行動
 - （3）一区切りついたと思った瞬間（時期、出来事など）
 - （4）震災前と震災直後、現在の心境の変化
- の質問を基本とし、これに独自に、

（5）今後の自分自身や大津町に望むこと

という質問を付け加え、半構造化インタビュー形式で取材した。

震災直後の極めて混乱した時期に、人はどのような行動をとったのか。また、生きることが最重要であった混乱の時期を乗り越え、人は生活や仕事の復旧に向けて行動していくことになる。復旧に向けた行動を続けていくと、いつかは区切りのつく時期がくるはずである。人々が区切りがつく時期、安堵する時期とはどういった時なのか、人々が意識として震災の混乱から抜け出すのはどういった時なのかを知ることは興味深いことである。最後に、この一生の中で初めて経験するような災害でどういった心境の変化が

起きるのか及び今後について聞いた。

取材した多くは現役で仕事をされている方々であった。勤務時間外の貴重な時間に協力してもらったの取材だったため、取材時間は1時間程度を基本にした。1時間で効率よく取材を行うために、取材前には電子メールで質問事項を送り、震災時の状況や様子をあらかじめ振り返っておいてもらった。また震災以後からの主だったことを書き留めたカレンダーなどを準備し、当時のことをできるだけ思い出してもらう工夫をしながら、震災からの体験をオーラル・ヒストリーとして語ってもらった。

取材はお1人に対し学生2人で話を聞くスタイルで行い、先ほど述べたように1人1時間程度を目安に話を聞かせてもらった。取材時は、事前に提示していた5項目の質問について、中身を掘り下げて聞いていった。中には、そこから派生した深い話題へと展開していくこともあり、2時間を越す取材となることもあった。

取材は大津町を訪問し、大津町役場（仮設庁舎）、町民交流施設（オークスプラザ）、地区公民館などを取材場所として提供してもらった。調査回数は20数回ほどとなり、取材時間は延べ30時間以上、文字起こした記録は32万文字となり、全部でA4用紙350枚ほどの量の記録を収集することとなった。



取材風景
(学生2名による取材)

希望の種

私たちは、震災の前に、「希望」の問題について学んでいた。東大社研の釜石市での調査は、東日本大震災前から行われていて、それは、希望とは何かを探ることを目的にしていたものだった。調査から「与えられた希望は、本当の希望ではない」「動いてもがいて、そこで突き当たった中に、希望がある」という共通メッセージを見出し、それを踏まえて、希望とは、人々の「行動によって何かを実現しようとする思い」と定義されている。単なる夢とは違って、希望とは、行動がそこに伴っていることを要求する概念である。

行動は、失敗を生み、挫折を促す。本書で取材した皆さんはそれぞれに震災時に何らかの行動をしていた人ばかりである。話を聞いていると、その行動の先に待っていたのは困難であった。困難に突き当たってはいたけれど、震災を乗り越えようと行動していくことで、多くの人には、ある種共通する大津町にいての希望が芽生えていたように思う。

東日本大震災直後、村上龍氏が、ニューヨーク・タイムズ紙に寄稿したメッセージ「危機的状况の中の希望」が世界中で注目を浴びた。そのメッセージの終盤に次の言葉がある。

私が10年前に書いた小説には、中学生が国会でスピーチする場面がある。「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」と。

今は逆のことが起きている。避難所では食料、水、薬品不足が深刻化している。東京も物や電力が不足している。生活そのものが脅かされており、政府や電力会社は対応が遅れている。

東日本大震災後の状況の凄まじさは想像を絶するものであった。そうであったけれども、その中で、村上龍氏は、状況を次のように見ていた。メッセージの最後をこう締めくくっている。

だが、全てを失った日本が得たものは、希望だ。大地震と津波は、私たちの仲間と資源を根こそぎ奪っていった。だが、富に心を奪われていた我々のなかに希望の種を植え付けた。だから私は信じていく。

東日本大震災の時の壊滅的状况と比べれば、熊本地震による大津町の状況は軽微であるのかもしれない。しかし、あの深夜の本震は、この地域に住む全員が初めて経験する恐怖の体験であった。生活インフラの全てを消失し、大規模な避難生活が始まるとは誰もが全く想像もしていないことであった。

取材の中で、大学生の一人が「当たり前が崩れるってすごく一瞬なんだということに気づかされました」と話していた。深夜、突然襲った恐怖は死に対する恐怖であったことはもちろんであるが、日常を失うことへの恐怖でもあった。この体験で、日常とは様々な人たちの日々の膨大な努力の中で構築され、維持されていることを理屈なしに理解できた。あまりにも当たり前すぎて見えなかった日常が、今回の震災によって人々の目にはつきりと可視化されたのであった。かけがえのない日常から断絶させられた経験は、人々に、復興へと向かう強い気持ちを生み出していくことを取材を通して知った。これらの気持ち、村上龍氏の言う「希望の種」に他ならないのだと思う。

熊本地震の発生以後、それぞれの持ち場で、具体的なアクションを起こし、大津町の未来へと繋がる希望の種が埋め込まれたオーラル・ヒストリーをこれ以降の章で紹介していきたいと思う。

本書の構成

本書は、取材記録をもとに編纂したものである。2部構成としている。第1部は、取材を通して、大津町全体について3つの視点で考察したものである。1つは人々の行動の原動力は何であったのか（第1章）、そして、非常時に人々はどういった持ち場で行動していくのか（第2章）、最後に、この震災を経験した人々の心境の変化（第3章）について考察している。

第Ⅱ部が取材した人々の震災の記憶である。本書の最も大事な部分であり、22名の取材記録を収めた。附録には、震災以後の大津町関連の年表と今回の取材を踏まえて作成した大津町広報紙「広報おおつ」平成28年12月号の特集記事などを掲載している。本書のタイトルは、この特集記事のタイトルを使わせてもらった。



震災の記憶を読み解く

行動・持ち場・心境という3つの視点から
取材記録を読み解き、熊本地震が大津町に
おいてどのようなものであったかを考える。

(注)文中、氏名の下()内に所属を記載している。
その所属の表記について、次の通り略して記載した。

道の駅・大津⇨道の駅

消防団第6分団長⇨分団長

地域おこし協力隊隊員⇨協力隊員

外牧区長⇨区長

大津町議会議員⇨議員

大津町役場職員の所属⇨所属課のみ記載

第1章 人々の行動の原動力

多賀有紀

この章では、取材した22名からの30時間以上に及ぶオーラル・ヒストリーから読み取れる人々の行動について考える。前震発生時から時間軸に沿って次の3つの期間

〔1〕 前震発生（4月14日） 直後

〔2〕 本震発生（4月16日） 直後

〔3〕 4月17日以降

に分けて、取材した人々の中から代表的な行動について見ていく。その結果を踏まえ、章の後半において、今回の地震時の人々の行動の原動力となったものなどについて考えていきたいと思う。

時間軸に沿って見た人々の行動変化

〔1〕 前震発生（4月14日） 直後の行動

〈大津町役場職員〉

前震の時、大津町は震度5強を観測した。多くの人々が恐怖を感じた中、自宅で地震に遭遇した役場職員新開は、その瞬間を次のように語っている。

新開（都市計画課） 自宅でテレビを見ている時に揺れが起こり、テレビに震度が表示され、かなり大きな地震が起こったことを認識しました。防災計画で震度5以上の場合は役場へ行くようになっています。私は両親と3人で住んでいたのですがまずは家族みんな集まり安否確認をしました。（その後）すぐに着替えて地震から5分後には自宅を出ました。

同じく子どもたちと総合体育館にいた高橋も役場へと向かった。

高橋（福祉課） 町の総合体育館にいた時に地震があつて、周りから「キャー」という声が聞こえ始め、大きく揺れたので「地震なんだ」と気づきました。（中略）その後、テレビで震度を確認し、「すぐ役場に行かない」となり、（中略）子どもたちをまずは家に一度連れ帰って、手当たり次第に物を詰め込んで義理の母と子どもたちを避難所へ連れてからすぐ役場に行きました。

大津町役場の場合、防災計画の中で震度5以上では役場に行くということが決められている。取材した全員が役場に向かっていたが、その際に共通して言えることは、家族の無事を確認した後役場へと向かっていたということである。少なからず家族の無事を確認することができたからこそ、次の行動へと移ることができたと言える。

役場に続々と職員が集まってきた。旧庁舎は「震度5以上の揺れが起けると倒壊の危険がある」と言わ

れていたため、災害対策本部の移動が急務であった。隣の電算室に災害対策本部を移すことになり、余震が続く中、旧庁舎からパソコンや電話などの必要機材を最小限運び出し、早急に準備が行われた。そこで指示を受けた各職員は、電話対応や避難所の運営、被害の状況確認などを行っていた。大津町内の見回りに向かったという伊東はその時の様子をこのように語る。

伊東（環境保全課） 私は、北部地域を1時間半ほど見回ったのですが、電気もついていましたし、道路上にブロック塀が倒れているといった被害もなく、大津町内はそれほど被害はないのかなと思いました。

ライフラインは無事で、被害もそこまで大きくなかったようだが、油断ができないまま、緊迫した状況の中で多くの職員が一夜を過ごすことになった。夜が明けた15日、多くの職員は、引き続き避難所運営などの震災対応を行っていたが、避難所に来る住民はそこまで多いというわけではなかった。また、地震で窓口対応が庁舎でできなくなったため、庁舎前にある町民交流施設（オークスプラザ）で業務は行われていた。その時の様子を松本は次のように語る。

松本（住民課） 通常は5台くらいの端末を使って証明書の発行や転出入関係の処理をしていましたが、電源確保などの問題もあり、2台だけを移動させました。必要最低限の台数のため、15日に関しては証明書の発行に限って、通常通り8時半から17時15分まで業務を行いました。

震災直後は住民票などを取りに来る人などいないようにも思えるが、そうではなく、被災して新しいアパートを他の市町村で借りるという場合などには住民票が必要となる。その申し込みのための住民票や保証人になるための所得証明書などが住民には必要であり、震災後も窓口業務の機能を維持することは不可欠だった。

〈道の駅・大津社員〉

道の駅・大津に勤務する三池は、熊本駅にいる時に前震に遭遇した。熊本駅内でも多くの人々がパニックに陥っている状況の中で、考えたのは会社のことであった。

三池（道の駅） 14日は熊本駅にいました。駅内はパニック状態に陥っていました。それから会社（道の駅・大津）が心配だったので、すぐ大津町に帰りました。（中略）震災の影響で会社の防災サイレンが鳴り近所の方に不安と迷惑をかけていないかが一番気になりました。

幸いにも前震時、防災サイレンが鳴り響くということではなかったので、人々の恐怖心を煽ることはなかったようだ。また会社の被害も大きいというわけではなかった。道の駅で社長を務める上野は、社員の三池と会社の片付けを15日に行っている。当時のことをそれぞれ次のように語る。

上野（道の駅） お酒の瓶が割れたり、壁面の陳列棚が倒れたりしていましたが、次の日1日かけて片付けて、やれやれ、終わったなという感じでした。明日からまた通常営業ができるなということで安心して帰りました。

三池（道の駅） 店内の様子は商品が少し倒れていたのと、一部売り場の外壁が壊れたぐらいですかね。それくらいだったので、15日は臨時休業という形を取って売り場を販売できる体制に戻して「じゃあ明日頑張ろう」って言うって帰りました。

会社の被害自体は少なく、上野も三池も翌日からの営業再開に向けた準備を整えて帰宅の途についた。売り場をきれいに片付け、「明日からまた頑張ろう」と話しながら別れた。その夜に、再び地震が起こることなど予想もしていないことだった。

〈大津町民〉

本震を経験した後になってみると、前震の被害の記憶は薄れてしまっているが、その時はやはり、前震も人々に強い恐怖を与えていたことは言うまでもない。震度5強を観測した大津町内で、当時、アルバイトをしていた大学生の佐々木は、このように語っている。

佐々木（大学生） 私が最初に揺れに気づいて、店長を呼んだ瞬間、大きく揺れました。（中略）

14日はとにかく家族が心配でした。バイト先にいましたけど、母がタンスに潰されていないか、家が潰れていないか、とか。

アルバイトを終えるとすぐに母親に連絡を取り、急いで自宅へと戻った。父は仕事、兄も県外にいて他に頼れる家族がない状況の中で、佐々木は慌てずに飲み物や毛布を車に詰め込み、震える母を心配しながら避難した。

〔2〕本震発生（4月16日）直後の行動

〈大津町役場職員〉

前震から約28時間後、大津町では、震度6強を観測する本震が発生した。前震と同様に自宅で本震に遭遇した新開は、当時の状況を次のように語る。

新開（都市計画課） 就寝中に目を覚まし、揺れ始めから大きいなと思ったところ、時間が長く横揺れも大きい、前震とは全然違う揺れでした。部屋中のもものが倒れ、停電と断水で大変なことになったなとすぐに思いました。ただその時も家族にけがとかはなかったので、着替えてすぐ役場に行きました。

前震よりもはるかに大きな揺れ、そしてライフラインの消失。その状況でも役場職員は役場に向かってい

た。本震時は自宅子どもと寝ていた高橋も家族の無事を確認し、安全を確保した後、すぐに役場へと向かった。

高橋（福祉課） 2階で私は娘と寝ていたのですが、携帯で緊急通報が鳴って、すごい揺れだったので、ただ娘を抱きしめておくことしかできませんでした。（中略）外に出るとブロック塀は倒れ、タイヤがパンクするんじゃないかと思ったのですが、車で行くしかなかったので、とにかく家族を連れて避難所へ行き、その後、役場に行きました。

自宅にいた役場職員は、家族の安否を確認した後、役場へと向かっていた。特に子どもや家族を他に任せられる人が近くにいるようなケースでは安心して役場へと向かうことができたようだ。家族のことを任せる人がいなかったとしたら、職員の行動も変わっていたのかもしれない。震災時の行動に関して行政職員の場合は役場に行くことが防災計画で決められている。しかし、今回のような危険な状況の中、また家族の状況によっては、役場に行くことはそう容易なことではないであろう。それでも、緊急事態の際、役場職員が役場にいることは不可欠である。職員を緊急時に町として確保するために、特に、特定のポジションの職員や特定知識を持つ要（かなめ）となる職員などについては、プライベートな点まで配慮した防災計画の検討が必要なのかもしれない。

新開が役場に到着した時、災害対策本部は停電していた。非常用電源や非常用照明を運び、電源確保に努めた。また電話も前震時とは違い猛烈な勢いでかかってきた。職員は電話対応を行いながら、ホワイ

ボードに倒壊の被害状況などを集約していった。前震同様に役場に集まった多くの職員たちは、混乱の中でも指示を受けながら避難所対応、物資の確保などに当たった。県庁に物資を取りに行くことになった大塚は、当時の状況を次のように述べている。

大塚（健康保険課） 食料や水がほとんどない状態だったので、私ともう1人で県庁に物資を受け取りに行きました。（中略）どこも停電している中、国道57号（東バイパス）を通って県庁に向かっている時、マンシヨンの1階部分がペシャンコになっている状況などを見て、今回はただ事じゃないと感じました。

指示を受け、物資の受け取りに県庁に向かった。本来であれば、どの課がどのような対応をするという役割分担が防災計画の中で決められていたのだが、本震直後はそれに従う余裕はなく、役場に到着した人間から順次動いていった。その後、次第に防災計画に従った震災対応をそれぞれの課で行うことになっていくのだが、当初は、その場その場で指示を受け、目の前の問題を処理するべく、職員は懸命な対応に当たっていた。

〈大津町民〉

外牧地区で区長を務める阪田は、自宅で本震に遭遇した。家族の確認をした後は、区長という立場から地区の見回りに向かった。

阪田（区長） 小さい孫がいるので、それを一番心配しました。道路はもうブロック塀が全部倒れていて車で通れませんでした。子どもたちや近所の人には県道の先に行くように言い、私は集落を見に行きました。組長さんにけが人の有無などを聞くと、異常はなかったようですが、停電してなにしろ真っ暗なので、夜が明けるまで待ちました。

公民館に備えていた発電機で照明を確保し、地区の人々と一夜を過ごした阪田。大津町の防災事業の一環で、発電機を要求し、確保していたのが今回役立った。突然起きる災害に備え日頃から準備をしておくことの必要性を強く感じる。さらに、前震時アルバイト先にいた佐々木は、本震時は自宅で就寝中であつた。

佐々木（大学生） その時は自宅でみんな寝ていました。14日とあまり変わらないだろうと思って「揺れとる、揺れとる」と言っていたら、揺れが長いことに気づいて「はっ、出らん」って、みんなで車に避難しました。荷物は全部集めていたので、車の中に移動させて、車中泊になりました。（中略） 16日については次きたら死ぬんじゃないかって、とにかくもうダメだと思いました。

家族と一緒に避難した佐々木。おそらく多くの町民が家族と一緒に避難所へ向かったのではないだろうか。死を考えるほどの強い揺れが発生し、人々は恐怖に耐えながら一夜を過ごすことになる。

〔3〕 4月17日以降の行動

前震、本震と2度の強い地震を体験したわけであるが、人々は地震に打ちひしがれることなく自分できるところを探しながら行動を起こしていた。本震から1日が過ぎてからの人々の行動について見ていく。

〈大津町役場職員〉

被災後、行政職員の主な仕事は、震災対応となる。震災対応とは、避難所の運営、物資の配給、窓口対応、り災証明書の発行、家屋被害調査、電話対応など、それまでに経験したことのない業務ばかりで、多岐に渡っている。

①避難所対応

4月17日9時30分、本震から32時間が経過した時点で、大津町では、避難所が73箇所に及び、避難者数も12,879人とあちこち避難者で溢れていた。その時の様子を役場に入ってすぐの新人職員である原野は次のように語っている。

原野（住民課） 私は、まだ業務が何も分かっていなかったの、自分から「避難所に行きます」と言いました。私が残っても、業務はできないわけです、誰かは避難所に行かないといけなかったの。

窓口業務を行う住民課では、業務に詳しいベテラン職員を残し、主に新人職員が避難所へと派遣されてい

た。避難所はどこか決められた場所へ常駐するというわけではなく、様々な避難所を担当する形だった。混乱期であったこともあり、問題が発生したところもあったようである。さらに、少ない職員だけで多くの避難者の対応をすることも容易ではなかった。

② 物資対応

大津町では、大津中学校体育館を使って救援物資の搬入、仕分け作業を行っていた。担当した大塚は、次のように語っている。

大塚（健康保険課） 主に物資を担当しました。翌日（17日）からです。（中略）物資を受け付けていたのが大津中学校の体育館なのですが、5月の連休明けに学校が再開するまで、受け付けた物資を避難所に送っていました。

大津中学校の体育館を用いて、全国からの物資を当初は15名ほどの職員で対応していたが、それだけでは追いつかず、その後、支援職員やボランティアの協力を得て物資の仕分け作業は行われた。物資も全国各地から届くようになり、膨大な量となっていた。大津中学校で物資の担当をしていた姫野は、次のように語っている。

姫野（健康保険課） ほぼ毎日10トン車に満杯で物資が送られてきました。国からの支援物資以外にも、他の市町村や県外の方が自分の車で持ち込んだものもあり毎日忙しかったです。（中略）最

初はバケツリレー形式でみんな手で物資を運んでいましたが、途中で農協からローラーコンベアをお借りして、それで多少楽になりました。

多くの物資が天津中学校の体育館に運び込まれ、体育館の中央に山のように積まれることになった。各避難所に必要な物資はそこで仕分され、送り出す作業が行われていた。

③震災ゴミ対応

家庭で多くの家具、電化製品、食器などが壊れた。住民が家庭での生活に目を向けるようになると、震災ゴミの問題が出てくる。震災ゴミは、旧杉水処分場などで処分することになっていたが、多い時には、1日800台もの車が押し寄せ、伊東はその対応に追われた。

伊東（環境保全課） 震災ゴミも分別することを第一に対応していました。ゴミは税金で処理をするわけですが、少しでもそのコストを下げるには分別が必要となります。そのため、ゴミは瓦や木材、金属類などに分けました。ただ、町民の皆さんからは「非常事態にどうして分別しなくてはならないのか」ということも言われました。

震災ゴミの処分にもお金がかかるので、その費用を抑えるために分別をしなければならないが、混乱した状況の中、住民にとっては分別どころではない。職員は葛藤の中で、住民の対応に当たることとなった。矢護川の処分場で震災ゴミの対応を行った新人職員の桐原はその時のことを次のように語っていた。

桐原（学校教育課） 1 回だけ災害ゴミの仮置き場の担当をしました。矢護川という場所です。ゴミの量はすごかったですね。びっくりしました。（中略）相当大変だったと思います。私はたった 1 日でしたが、それだけでも非常に大変でした。

緊迫した中で、震災ゴミ処分場での住民対応についての職員の苦労は、大変なものであったと想像される。もっともそれは、震災ゴミだけでなく、避難所運営、物資配給、食料配給など、職員は普段とは異なる業務に従事しながら、非常事態の中で、通常を越えるレベルでの対応が求められていたのである。こうした時、迅速に動いていく現場力が要求されるわけであるが、役場職員は個々にそうした能力を発揮して具体的に行動していた。もちろん、住民のために行動していたのは役場職員だけではなく。様々な人が町のためにできることを行っていた。次はその事例である。

〈道の駅・大津社員〉

道の駅・大津社長の上野は地震後、営業再開で頭がいっぱいであったが、周囲からの一言で冷静になり、町のために炊き出しを行うことを決める。

上野（道の駅） レストランのオーナーさんから（中略）豚汁やご飯各 1000 食分用意して炊き出しをしたいという申し出がありました。（中略）私も我に返り、「今は営業よりも炊き出したな」と思ったのです。それから 19 日は準備をして、20 日には SNS で炊き出しについて情報発信を行い、

たぐさんの方が来店されました。

炊き出しでは、温かい豚汁や丼ものが提供された。多くの人が「久々に温かいものが食べられた」との言葉を口にしていたそうである。また、社員の三池は、被災した住民に向けSNSで物資配給の情報を発信していた。

三池（道の駅） Facebook では、道の駅のネットワークで届いた物資を告知して、住民の皆さんに配布していました。（中略） Facebook のアクセス数もすぐくて、大津町の人口は3万5千人くらいなのですが、4万とか5万件アクセスしていました。

SNS による情報発信では驚異的なアクセス数である。テレビやラジオではカバーしきれない、こうした超ローカル情報は住民にとって重要な情報であったと推測される。ただし、この情報発信では、届いた物資をきちんと確認後、正確な情報を伝えていくといった工夫が不可欠であった。道の駅・大津としては、できるだけ早く営業再開したいところであったろうが、町全体が被災した中、まずは、地域のための行動を起こしていた。

〈大津町民〉

大津町の方々もまた震災後、自分たちができる範囲で、町のための行動を起こしていた。例えば、大学

生の佐々木は友人とボランティア活動を行っている。

佐々木（大学生） 23日に大津町運動公園（スポーツの森・大津）に行って、そこで友人たちとボランティアをしました。大津高校の卒業生である私たちみんな「何かしないと」という話になったからですね。（中略）車中泊上の注意のチラシを配って、（中略）ゴミ拾いをしました。

今回多くのボランティアが県外から来ていたが、県外の人だけに任せるのはいけない、私たちも何かやらないといけないということで、自発的にボランティア活動へと向かっていた。また、消防団の分団長を努める古庄は、道路の補修作業や瓦のブルーシート張りなどのボランティアを行っていた。

古庄（分団長） 道路の亀裂が入っているところをそのままにしておくとおくと水が入って、崩れてしまうので、そこにシートを張って、土嚢を乗せるんです。

こうした作業は素人である大学生だけでは難しい作業である。そうしたところは、知識とスキルを持つ大人世代が手分けして、目の前で困っている町の問題のために活動をしていた。

人々の行動の原動力

人々の行動を見ていくと、震災以降の人々は【1】家族のため、【2】友人のため、【3】職場のため、

【4】 町のため、と時間の経過とともに対象とする他者の範囲が拡大していった。

【1】 家族のための行動

一人暮らし以外のほとんどの人が、地震後すぐ家族の安否確認を優先しており、まずは何らかの形で「家族のため」に行動していることが分かった。それは全てに共通する行動であった。

先に紹介した役場職員（新開）の発言を見ても、まずは家族の安否を確認することが最優先であった。前震時は被害もそこまで大きくなく、メールや電話が使える状態だったこともあり、ほとんどの職員が家族の安否を容易に確認することができた。しかし、本震時は状況がまるで違った。電話は繋がらない、家族にメールを送っても返信が来ないなど、連絡が取れないまま役場へと向かう職員も数名いた。そうした職員は避難所へと向かう途中や震災対応の合間にとにかく家族の無事だけでも確認しようとした。そして確認ができると安堵していた。妊娠した妻のいる職員や、子どもを避難所に残した職員もいたが、家族の無事を確認できていたからこそ、役場へと向かうことができたと言える。

役場職員以外でも、道の駅・大津社長の上野や大学生の佐々木なども、最初に考えたのは家族のことであつたと話しており、地震直後にほとんどの人が行うことは、まず家族の安否確認であり、「家族のため」の行動が最優先であつた。

【2】 友人のための行動

大学生の佐々木は「家族のため」の行動の後、「友人のため」の行動を行っていた。

佐々木（大学生） 心配で顔を見に行くと、水がないと言っていたので大津の避難所にいる友人のところに水を持って行きました。

他の大学生についても同様の行動を行っており、職場を持たない大学生などの場合、家族のためにという行動が一段落した後に行うのは、友人のためという行動のようだ。

【3】職場のための行動

仕事を持つ人々の多くは「家族のため」の後は、職場へと向かう行動を行っていた。これは前震後も本震後も同様で、大津町役場職員および道の駅・大津社員に共通している行動であった。

役場職員の場合、震度5以上の場合は役場へと向かうことが防災計画で決まっており、次の職員の言葉にある通り、ほとんどの職員が家族の安否確認や無事を確認した後には役場へと向かっていた。

伊東（環境保全課） 防災計画では震度5以上の地震が発生した場合、職員は役場に参集することが決まっていますので、（中略）役場へと向かいました。

原野（住民課） ちょうど前震の日に、「地震とか大雨とかの災害の時には役場に来るんだよ」という話を課長としていて、行かないか、と思っすぐ家を出ました。

新開（都市計画課） 停電と断水で大変なことになったなとすぐに思いました。ただ、その時も家族にけがとかはなかったので、着替えてすぐ役場に行きました。

道の駅・大津で働く上野と三池も職場へと向かった。

上野（道の駅） 仕事には16日の朝から職場に行きました。この道の駅で雇用しているスタッフは、ここが営業できないとなると生活ができなくなるわけですから、非常に気になりました。「俺が守りますから」と言って頑張らなくてはいけないと思いました。

三池（道の駅） 家の中もグチャグチャで、夜中の地震でしたので慌てて一度裸足で避難しました。それから、すぐ会社に行きました。

両者ともに家族の心配をした後は、やはり職場へと向かっていた。仕事は生活に欠かせないものである中で、家族の無事が確認できた後に気になるのは職場のようだ。前震、本震後、共に職場に來ていることからも「職場のため」という行動は、ほぼ本能に近い行動のように感じる。

【4】町のための行動

人々は「家族のため」、そして「友人のため」、「職場のため」の行動が一段落すると「町のため」とい

う次の行動へと移行していった。役場職員は、仕事自体が町のためである。このため、震災時も同様に仕事として「町のために」行動していたのであるが、通常よりも強い使命感を持って町のために行動しているようであった。

道の駅・大津でも本来であれば営業を早く行いたいところであろうが、先に紹介したように、震災を受けて炊き出し、物資配給、そしてそれをSNSを通して住民に知らせていくなど、「町のために」行動していた。これらの行動は共助として多くの住民の支援に繋がったものと思われる。

行政、企業以外にも多くの町民が町のためにできることは何かないと探し、それぞれの行動を起こしていた。

齋藤（協力隊員） 避難所やまちづくり交流センターのお手伝いをしながら、並行して始めたのが、町内のお店情報の発信です。避難所も含め町内の方にお店の開店状況を提供しようと、町内を回って調べていたんです。

古庄（分団長） 主に見回りです。2、3日すると、他県車が入ってきて良からぬ噂が回ったりして、結構住民の方も心配されていたので、夜中までずっと警戒していました。

本震以降、行政職員以外にも多くの町民がボランティアや炊き出しなどを行っていた。町民自体が「町のため」にできる活動をそれぞれが行っていた。

まとめ

地震直後からの22名の行動に共通することは、「家族のため」、「友人のため」、「職場のため」という行動を経て、最終的に「町のため」という行動に至っていたということである。このことは次のように解釈できるのではないだろうか。

命の危険を感じる地震が起きた時、まずは自己の身の安全を守る行動をとるであろう。ただし、我が子の命を優先する場合があるように、家族を守ることを優先することもあり、このため緊急時は、1人称及び2人称の他者に対する支援行動が行われる。その後は、友人という2人称で括れる他者へと向っている。さらに時間が過ぎ、状況が分かってくると、職場や町のために人は行動していった。この時、無意識に浮かんでいるのは3人称的關係にある他者であり、そうした他者に対して行動していた、と解釈して良いだろう。

地震直後から時間の経過に従って、人々の支援の対象は、1人称から2人称、そして3人称の他者へと拡大していった。時間に沿ったこうした展開は、状況に応じて、その人が見えている範囲が変わっていくからであろう。それぞれの時点で対象は変化しているけれど、人は、最終的には「誰かのため」を行動の原動力にしていた。

人は誰かのため、他者の支援のために行動を起こす。それは直感的に理解できることである。22名のオーラル・ヒストリーを読んでいくと、震災という混乱した状況では、そうした行動がより鮮明に生まれているように感じた。

第2章 非常時における人々の持ち場

上田幸奈

人には自分の「持ち場」がある。その持ち場において人は行動する。日々のそうした行動の集合として私たちの日常は作られている。だが熊本地震は、その日常を一瞬で壊し、人々の日々の持ち場を奪った。そうした時、人はどうするのであろうか。本章では、取材記録を通して、この点を見ていきたいと思う。

取材記録を読み進めていくと、地震直後の混乱した時期、人々がどのような持ち場で活動するのか、そこには特徴的なパターンが見られた。一つは役場職員のように、「1」日常の持ち場を死守していた人々、本来の持ち場が地震によって失われたため「2」自発的に持ち場を創造していった人々、そして、日常においては別の持ち場で主に活動しているが非常時に「3」潜在的な持ち場を顕在化させた人々などである。人々の「持ち場」という視点で、この3つについて、大津町における非常時の様子を見ていきたい。

「1」日常の持ち場を死守する

役場職員は口々に、「震度5以上の揺れが起きると役場に直行という決まりなので、揺れが収まるとすぐに役場に出る準備をした」と語っていた。実際、役場職員は家族の安否を確認できると、すぐに役場に向かっていたことは第1章で見てきた通りである。役場職員とは、震災以前及び以後も、それぞれの「持ち場」は役場であり、日常からの持ち場を非常時でも死守すべき役割を担っている人々であると言える。

パニック状態の中でもとにかく役場に向かい、町のために役場職員としての仕事を全うしていく。役場職員という立場は、本能に近いぐらいに職員の体に刷り込まれており、今回の震災はそのことを顕在化して見せた。職員の意識を通し、役場という持ち場は、非常事態の時であっても死守された。

事例 1

大津町役場に勤務する岩下は、外の懇親会から帰宅しようとしている時に前震に遭遇した。経験したことのない強い揺れに驚き、震度 5 以上の地震で職員は役場に直行する、という決まりに従いすぐに役場に向かった。

岩下（総務課） 私が到着した時点で既に 20 ～ 30 人はいました。この非常時に即座に人が集まるんだというのを初めて経験したので、役場って頼もしいなと職員ながらに思いました。

震災に直面した時、家族の傍にいたいと思う職員も皆無ではなかったと思うが、少なくとも取材した役場職員は全員がすぐに役場へと向かっていった。役場職員としての持ち場の意味を理解し、自分の本来の持ち場を全うしようとした気持ちの表れといえる。こうした強い気持ちがあるから、非常時であっても、本来の持ち場が維持されたのだと考えられる。逆にそうした強い気持ちがない組織では、こうした災害時に本来の持ち場は消えてしまうであろう。

登庁した岩下は、上司の指示を受け、町内の被害状況の確認に行った。その後、災害対策本部に待機し、

避難所開設や被害状況の情報を取りまとめを行いながら朝を迎え、そのまま15日は住民からの被害状況の電話対応や、町内での被害状況の確認、避難所の社会福祉協議会での避難者の受け入れや物資の支給などを行っていた。

そして16日深夜、本震が起きた。本震後は、自宅に帰れない状況が10日間続いた。役場職員として、常日頃から災害が起こった時は仕事の方を優先せざるを得ないと妻に伝えていたという。役場職員にはこうした非常時も維持しなければならない持ち場が存在するということは、その職員の家族は、必然的に、その職員がいない家を守っていくことが持ち場になる。普通にはあまり考えられていないことであろうが、緊急時、職員が死守すべき持ち場の問題を考える際、こうした点を見無視することはできないかもしれない。

事例2

大津町役場に勤務する伊東は、前震が起きた直後、妻と子どもを指定避難所の子育て・健診センターに預けた。伊東の所属課はすぐにゴミ置き場で住民対応に当たることになった。

本震は、自宅で就寝していた伊東一家を襲った。前震時と同様、妻と2歳に満たない子どもを避難所に預け、すぐに役場に登庁し、様々な業務に携わった。そして、本震翌日の17日から、伊東は本来の「持ち場」であるゴミ処理場の運営に追われることとなる。

最も忙しかったゴールデンウィークの期間には、1日800台もの自家用車や大型トラックに積み込まれたゴミを処理していたそうである。通常と比べ、狂ったように増えるゴミ。そして次々にやってくる住民に対し、伊東は、自分の「持ち場」を全うしていくのに苦悩することになる。

伊東（環境保全課） ゴミは税金で処理をするわけですが、少しでもそのコストを下げるには分別が必要となります。そのため、ゴミは瓦や木材、金属類などに分けました。ただ、町民の皆さまからは「こんな非常事態にどうして分別しなくてはならないのか」ということも言われました。一刻も早く片付けをしないといけないという気持ちはとても分かります。しかし処理費用も税金で賄われているので「分別にご協力ください」とお願いするしかありませんでした。

通常時であれば顕在化することはほとんどない問題が、一気に噴出することになったのであった。ゴミ処理場の担当になった新人職員の桐原は、この時のことを、

桐原（学校教育課） 相当大変だったと思います。私はたった1日でしたが、それだけでも非常に大変でした。担当課の方たちはそれを毎日されていたので、本当にきつかっただろうと思います。

と語っている。本来の持ち場であっても、非常時、ある種の極限状態の中で自分の持ち場を死守していくには、強い精神力は当然のことであるが、伊東のように、冷静に物事を分析、理解していく力も同時に要求されることを教えてくれる。

役場職員は、災害時は原則的に持ち場である役場に出て行く義務がある。その場で震災対応を行っていくことになるわけであるが、そうした業務は本来の業務とは内容が異なる。役場としての機能を死守して

いくには、異なる内容であっても、そこを持ち場にして業務を遂行していく力が要求される。災害時のことと考えると、役場という持ち場を死守するには、次々と変化する状況に対応していく行動力と冷静な分析力はもちろんのこと、高いレベルの適応能力が職員には求められていると言える。

「2」 自発的に持ち場を創造する

熊本地震は、今まで普通にあった日常を一瞬に破壊した。そのために普段の自分の持ち場を失った人も多くいた。人は本来の持ち場を失った時、それを取り戻そうとすることがエネルギーとなることがある。そのエネルギーを支えに、自発的に新しい持ち場を作り出していった人々の事例が取材記録の中には見受けられた。

事例 1

地震直後から学校は休校となった。学生や生徒たちにとって学校とは、授業を受ける、友達と話をする、部活をするといった、学びのための場＝学生の持ち場である。だが多くの学生・生徒からそれが奪われた。大津町在住で熊本市内の大学に通う古庄もその一人である。古庄は、前震と本震ともに大津町の自宅で被災した。本震後、2日間の車中泊を強いられ、その後、室小中学校で避難所生活を2週間ほど送ることになる。

古庄（大学生） 東日本大震災で東北の人たちは被災をされたわけですが、話には聞くけれど実感

というか、やっぱり地震を経験した人にしか分からないような気持ちがあるんだなということが分かりました。上手く言えませんが、東北の皆さんに、申し訳ない気持ちになりました。当時、こうした実感がなかったので、支援も備えも何もできていなかったのです。

古庄は、東日本大震災の時に、何もできなかった自分を悔やみ、今自分にできることは何かを考えた結果、ボランティアという自らの持ち場を見出すことになる。避難所生活が何日か続いた4月末、古庄はTwitterで流れていた「避難所が人手不足である」という情報を見て、地元の友達と一緒に指定避難所である大津町運動公園（スポーツの森・大津）に向かい、ボランティアとして活動した。

事例2

地域おこし協力隊隊員として勤務する齋藤は、町の特産品開発や6次産業の発展といった活動が通常の持ち場であった。震災直後、その持ち場は開店休業状態となった。持ち場が一時的に消失し、「これからどうなってしまうのだろう」という漠然とした不安と闘いながら、独特の持ち場を作り出していく。

齋藤は、東日本大震災を関東在住の頃に経験していた。今回の震災時の齋藤の行動は、その時の経験が生きていた。

齋藤（協力隊員） 中央公園にある子育て・健診センターの担当職員が避難所を開設する、と宣言されたので「手伝わせてください」とお願いしてついていきました。（中略）施設内の電気をつけ

て回ったり、備蓄倉庫から毛布や緊急用具を出すお手伝いをしました。

東日本大震災の経験をふまえたアドバイスをを行いながら、避難所での震災対応を次々と行っていくことになった。そうした初期行動が契機となって、その後、避難者支援のための自らの持ち場を作り出していくことになる。

齋藤（協力隊員） 避難所やまちづくり交流センターのお手伝いをしながら、並行して始めたのが、町内のお店情報の発信です。避難所も含め町内の方にお店の開店状況を提供しようと、町内を回って調べていたんです。それを続けていて、その5月4日の時点で、大津町内の大体のお店が開き始めたんですよ。（中略）もう一つ心がけたのが、お酒を飲ませるお店の情報。スーパーや、ドラッグストアといった生活用品のお店だけでなく、居酒屋さんとか飲食店も開いているっていうのができるだけ伝えたかった。

齋藤は、大津町内の店舗の開店状況を知らせる情報発信を始めた。避難所での支援という自らの持ち場をさらに発展させる持ち場を作り出したのである。開店情報を住民に流し、日常が町に戻ってきつつあることを地域に知らせていくという、避難者に対する一種の自立支援を促していくことをこの時の自分の持ち場としたのであった。避難所において支援物資だけに依存していると、住民の自立を難しくしていく可能性もある。この意味で、齋藤が作り出した持ち場は、この時期、重要な役割を担ったのに違いない。

もちろん、齋藤は、次々と変わる状況を見ながら、目の前の問題を解決していただけたのかもしれない。しかしそうした具体的な行動の結果が新たな持ち場の創造に繋がり、非常時の町に貢献していく活動を確立させていくことになったのではないかと思われる。

事例3

道の駅・大津は地震で営業継続がしばらく困難となり、社員は本来の持ち場を失うことになった。

道の駅・大津は、震災以前、国土交通省の調べで、年間170万台もの車両が駐車する大いに賑わっている道の駅であった。地震直後、社長の上野が、道の駅・大津にやってくると、平常時に多くのお客さんを集めていたその駐車場は、避難者で昼夜問わず溢れる状況になっていた。

上野は一刻も早い営業再開を考えていたが、道の駅内のレストランオーナーによる、「阿蘇の水害時（平成24年7月九州北部豪雨）に周囲の人々が助けてくれた。その恩返しをしたい」との主張から、避難者に向けた炊き出しをまずは開始することになった。その後、道の駅・大津の駐車場を利用した被災者支援が、この非常時における上野の持ち場となる。

震災時にインフラとしての水道が使えなくなり、最も困ったのはトイレであったが、それについては上野が本来の持ち場で培ってきたネットワークを利用して、問題を解決している。

上野（道の駅） 駐車場トイレも、断水で流れないようになって大変なことになっていましたので、福岡にある九州沖縄道の駅連絡協議会事務局へトイレの状況を報告したところ、連絡協議会の方か

ら国交省へ連絡をしてくださって、簡易トイレを軽トラックで6台持ってきていただきました。

さらに、取引先や福岡の道の駅連絡協議会、千葉県成田市、また滋賀の道の駅の駅長から、たくさんの方の支援物資を受け取り、その都度 Facebook で積極的に情報を流しながら、支援物資の配給を行った。道の駅・大津の社長である上野は、社員を守るため、営業再開を常に考えていた。それが非常時に新しく作り出した持ち場を運営していく原動力の一つであったのかもしれない。

少し話題が逸れるが、新たな持ち場で活動する中で、上野は本来の持ち場における意味を捉え直す機会を得ることになった。

上野（道の駅） 震災後、営業が苦しい中で、わざわざお店に商品を買いに来てくださるお客様がたくさんいらっしゃいました。今回の震災で、そういったお客様のご恩で道の駅・大津は支えられているということを強く感じたのです。

こうしたことも原動力となり、非常時の持ち場で上野はパワフルに活動することになる。

上野（道の駅） この時期は私の長年のサラリーマン人生の中で最も働いた時期だったと思います。

本来の持ち場を失った時、人は何かの思いによつて、自らが行動していく新しい持ち場を主体的に作り出していく。ただ、いくつかの事例で見たように、そこで中心的に行動していくには、やはり、日常の持ち場においてどう活躍していたか、その経験値が強く影響しているようである。日常の仕事で培った経験は、震災のような非日常時、本来の持ち場とはまるで異なる持ち場においても重要である。日常で培った経験は、本来の持ち場が失われた後、自分がやれることを持ち場として創造し、そこで主体的に行動できる可能性を生み出している。普段から培ってきた知識、スキル、ネットワークが、非常時においても重要な役割を持つことをこれらの事例は教えてくれる。

「3」潜在的な持ち場を顕在化させる

通常は本来の持ち場で活動しているが、非常時に要求される持ち場を潜在的に保有している人たちがいる。潜在的な持ち場は、震災といった非常事態においては顕在化し、そういった人々は非常時には顕在化したその持ち場で震災への対応に当たっていた。

事例 1

消防団第6分団長の古庄は、消防というのを仕事にしているわけではない。普段は本来の仕事を持っている。災害発生時には消防団員としての潜在的な持ち場で活動を始める。

古庄（分団長）（地震が）発生してすぐ各団員に招集をかけました。

自宅にいたため家族の安否確認はすぐにできていた。そしてその直後には、消防団としての持ち場で動き始める。その行動を古庄は次のように説明する。

古庄（分団長） 消防団の宿命というか、家族よりも町に対して活動を、という風習が昔からあったものですから。

町のためにいきなり動き始めることができるのは、震災前から、地域のイベントや、その土地で生活していく中で、地域において、密接なコミュニケーションをとっていたことも大きいようだ。震災前から、地域に目を向け、地域の問題や住民の悩みを解決する役割を日常的に担っていた。また、地域との連携の他に、団員間の関係はさらに重要である。

古庄（分団長） 基本訓練は年に1、2回ですが、地元なので、上下関係もしっかりしてるしほとんどが顔見知りです。さらに、仲良くもなっていますから。そういうこともあって、災害時でも連携は取れるんです。

こうした関係があつたからこそ、稀にしかない非常時において、地域を守る消防団として潜在的な持ち場を、しっかりとした形で顕在化させて行動できたのだと思われる。非常時の行動は、普段行われている活動の延長線上で行っていたという点が重要であつたということも言える。地域のイベントに消防団は不可

欠な存在となっていた。住民は地域の要である古庄たちを頼り、古庄たちの指示に従う。古庄が行っていた日常の延長線上が今回の潜在的な持ち場に繋がっていた。

事例 2

外牧区に住む阪田は、区長となったばかりで熊本地震に遭遇した。突然の事態で、しかも区長としての自覚を持つ余裕もないままに地震が発生したわけである。震災による非常事態時、住民からの問いかけに阪田には重圧がのしかかった。

阪田（区長） どうしたら良いのか、何とすべきか、全く分からなかった。ただそれでも、皆さんが、これからどうするかについて、私にどうしても聞いて来られるのです。

混乱した様子が伝わってくるが、区長という役割は、潜在的なその地域のリーダーとしての任務を任されている。新人であるが、ベテランであるが、リーダーとしての役割期待を潜在的に持たされている。非常事態を乗り切るために阪田は、気持ちの準備も明確にできていない中で、突然顕在化した区長としての持ち場を全うしていく。そうしたことが可能になった理由を阪田は次のように語っている。

阪田（区長） やらなきゃいけないという使命感も当然ありましたが、やはり皆さん方が頼って来てくださるというのが一番でした。そういうのが励みにもなります。

全員が顔見知りである地域住民が、阪田への役割期待を明示的に表明していくことで、潜在的であった区長としての行動が促され、震災という非常時を地域全体で乗り切っていくことになった。

2つの事例ともに本来潜在的であった持ち場が、非常時に顕在しているパターンであったが、潜在的なものが顕在化し、上手く機能するのに大事なことは関係している他者の顔が見えているということではなからうか。顔が見えていない時、突然顕在化した持ち場での行動はスムーズにいくものでもないであろう。この意味で、非常時を上手く乗り切るのは、平常時の行動のあり方だと言える。自明のことではあるが、これらの事例は普段のあり方についての教訓を改めて提示しているであろうと思われる。

まとめ

本章では、熊本地震発生後の非常時において、人は自分の持ち場をどう作り出していくのかを取材記録をもとに考えてきた。取材に協力してもらった人々の行動を見ると、あの非常時において、自らが行動していくための持ち場を作り出す努力をしていた。役場職員は、通常の持ち場を非常時においても死守する努力をしていたし、それ以外では、日常の持ち場が壊れ、新しい持ち場を創造しようと努力していた人々、また潜在的に持っていた持ち場を非常時のために顕在化させた人々など、多様であった。それらの持ち場で人々が行動することで、震災直後の混乱した大津町の秩序は維持されていたのだと思う。

震災によって、それまでの人々の持ち場が壊された時、持ち場は非常時に対応すべく再編され、再編された持ち場が集まったことで、直後の難局を乗り切れたのだと思う。こうしたことを知った時、日常の意

味をさらに深く理解した。当たり前に暮らしている日常とは、単に存在しているのではなく、人々がそれぞれの持ち場で行動している結果として、作り出されているものである。それぞれの持ち場で行動する人々の努力なしに、「当たり前」が存在することはないと言える。さらに、日常のあり方が実は、非常時と密接に関係していることも知った。震災という非常時の持ち場について考えていく中で、こうした事実を改めて確認し、理解することができた。

第3章 人々の心境変化と防災意識

飯沼玲佳

熊本地震を経験した22名は、地震後、心境が大きく変化していた。この章では、22名のオーラル・ヒストリーをもとに、熊本地震がもたらした大津町の人々の心境変化を考えていく。

3つの時期の人々の心境

22名のオーラル・ヒストリーの中で心境についての語りの部分を読んでいくと、「1」熊本地震発生前、「2」前震後から本震前、「3」本震後の3つの時期で人々の心境について顕著な変化が見られた。以下、この3つの時期に分けてそれぞれの心境を見ていこう。

「1」熊本地震発生前

熊本県では長年大きな地震を経験していないと報じられてきた。実際、熊本地震を経験した長年熊本に住む方も「これほどの地震に遭遇したことはない」と述べている。過去、熊本県下に大きな被害をもたらした地震は、明治22年（1889年）7月に、熊本付近を震源としたマグニチュード6.3の地震（死者20人、負傷者52人、家屋の全壊228戸）が記録として残っているが、これ以降は熊本を震源とする大きな地震は起きていない。

今回の取材対象者22名のうち、19名は熊本生まれ熊本育ちであった。その19名に「熊本地震発生前、熊本で地震が起ると思っていたか」と尋ねると、一様に「全く思っていなかった」と答えた。例えば、外牧区で区長をしている阪田は、

阪田（区長） 思ってたなかった。もうまさかでした。小さな地震はあるかもしれないけれど、よく、3日分は食べ物と水を自分で準備しておくようにと言われてはいるけれど、なかなか実際にはできませんね。自分がその身にならないと。

と述べている。長くこの地に住む阪田にとって、地震は想定外であり、だから、それに備えることへの意識は低かったようだ。

一方、熊本県外出身、あるいは大きな地震に遭遇したことのある方に関しては、地震はどこで起きてもおかしくはないとして、次のように語っている。

佐藤（議員） 私は大分県の出身で地震はどこでもあるのだという考えを持っています。でも私も今回初めて知ったのだけど熊本の人って熊本には地震がないと思っていた人が多いというのを聞いてびっくりしたんですよ。どうしてそう思っていたのかなって感じでした。

大塚（健康保険課） 私は阪神・淡路大震災の時に兵庫県にいました。自分のところは被害があっ

たわけではなかったのですけど、その時に、自分の家を建てる時は、家族を安心して残しておける頑丈な家を建てなければなと思っていました。同時に食料も確保しておくようにしていました。

齋藤（協力隊員） 元々関東の人間で、東日本大震災の際、前の職場で相当な揺れを経験しました。それがあつたので家の中の家具は転倒防止など耐震対策をしていて、そのおかげで家財道具が散乱しておらず、すぐに外に出ることができました。

地震の恐れがあるとされていた地域や震災に遭遇した経験のある人は地震はどこかで起きるものであるという意識があつたことが分かる。その一方で、熊本で生まれ育った人にとって地震は遠い存在であり、意識するものではなかった。取材では「大雨や台風への関心はあつた」と、可能性の高い災害に対する防災意識はあつたものの、それに比べると、いつ起こるか分からない地震に対する意識は一樣に低かった。

意識の低さは、熊本への企業誘致のため県の魅力などを伝えていたWebサイト「企業立地ガイド KUMAMOTO」などでも見ることができる。熊本地震以後は削除されたが、そのサイトには「熊本県は過去120年間マグニチュード7以上の大きな地震を経験しておらず、企業の立地に最適である」との内容が記載されていた。熊本県全体として地震への危機感が薄い傾向にあつたと言える。

「2」前震発生後から本震発生前

前震で大津町は震度5強を観測している。取材で、「前震が起こった時の様子と心境」を尋ねたところ、

地震が起きた瞬間は「驚いた」「突然のことで何もできなかった」「思わず机の下に隠れた」という声が聞かれたが、その後は時間の経過と共に人々の心境は明るいものとなっていた。「被害がほとんどなくて良かった」「片付けをしないと」「明日からまた頑張ろう」など比較的落ち着いた、前向きな話が目立った。このことは、役場職員である姫野が、

姫野（健康保険課） その時（14日の時点）は目立った被害はなかったです。（中略）避難所には、10人ほどいましたね。でも（15日の）朝方にはその方々も、おられなくなりましたので、庁舎に9時頃に戻り、通常業務を始めました。

と語るように、前震による町の被害や混乱が小さかったことが大きな要因であろうと思われる。

前震によって人々がどれほど地震についての意識を高めたのかを把握するために、「前震後に、また大きな地震が来るかもしれないと思っていたか」と聞いたところ、22人中15人が「また来るかもしれないと思っていた」ということであった。残り7人は「もう大きな地震は来ないだろうと思っていた」と話しており、楽観的に捉える人が意外に多く見られた。なお、次の地震を心配した15人にさらに質問したところ、避難グッズなどの防災準備をしたのは15人中わずか2人であった。全員が、「前震より強い揺れはないと思っていた」と話しており、次は発生しても余震という感覚が強かったようで、そのため防災準備にまで至らなかったようだ。

〔3〕 本震後

本震は天津町で震度6強を観測した。地鳴りを伴いながら断続的に余震が続き、人々は不安を募らせた。電気、水道、ガスなどのライフラインも遮断されたところが多く、町は一瞬にして真っ暗な世界となった。前震時とは比べ物にならないほどの大きな揺れと混乱が生じた。ここでのような心境の変化があったのか知るために、「本震が起きた時の行動やその時の心境」を尋ねた。その時の行動について、役場職員は次のように語っている。

高橋（福祉課） 停電で真っ暗の中、携帯で足元を照らしながら1階に降りたらタンスとか全部が倒れていて、食器は棚のロックがかかるようになっていたので割れてはいませんでした。他のクローゼットは全部開いて、荷物もほとんど落ちてかなり散乱していました。これは避難生活が長期になると思ったので、お菓子とか避難所に持っていける食べ物や懐中電灯などを全部詰め込んで地区の公民館に義理の母と一緒に行きました。

桐原（学校教育課） 少し揺れたので目が覚め、その後大きく揺れ出したので机の下に隠れました。結構長かったですから。その後、「これは危ない」と家族と話し、すぐに避難所に行きました。

他の人々からも、前震時とは全く異なり、「死ぬかと思った」「命の危険を感じた」「家族を守ることに必死だった」などの声が聞かれた。前震後においては、「明日からまた頑張ろう」という前向きな声が聞か

れたが、本震後は「これからどうなるのだろうか」「いつまでこの状況が続くのだろうか」と、不安の声が多く聞かれた。先行きについての不安は、「会社は潰れていないだろうか」「仕事は続けられるのだろうか」といったものが多くあり、地震によって建物や機材が壊れてしまったら、仕事がなくなってしまうこと、生活ができなくなってしまうことへの危機感や不安を募らせていた。

三池（道の駅） 夜中の地震でしたので慌てて一度裸足で避難しました。それから、すぐに会社に行きました。会社の建物自体は潰れていなかったのとおりあえず安心して「これで営業はできるかなあ」と思いましたね。営業ができないことは僕も仕事がなくなるかもしれないし、生活ができなくなるかもしれないという恐怖があったので、それは安心しました。

齋藤（協力隊員） 「これからどうなっちゃうんだろう」という不安がありました。（中略）「町はどうなるのだろうか」といった不安です。先ほど話したように町は地震で「特産品開発」、「6次産業」どころじゃなくなったわけです。でも、私はそれを目的に雇われたわけで、果たしてこれから「大津町で必要とされて生活していけるのかな」ということを思いました。

避難所などにすぐに向かっていた人も多くいた中、三池が真っ先に向かったのは職場であった。また、齋藤は地震によって仕事が消滅することへの不安を語っていた。仕事は人々にとって大きな意味を持っていることを改めて示している。

本震後の人々の心境変化

人々の心境は3つの時期で差があった。「1」熊本地震発生前は、熊本に生まれ育った人たちは地震について無頓着で、地震を警戒している様子は全くなかった。そのような状況で前震が発生したのだが、「2」前震後から本震前の時期も、地震に対する警戒感がそう強まることはなかった。危機感が薄かったところに本震が襲ったのである。その結果、「3」本震後は人々の地震に対する意識は極めて強くなった。前震も揺れが小さかったわけではない。この時、地震に対する人々の心境が大きく変化していれば本震の際には慌てず対応ができたのかもしれない。ただ、前震が起きて、一度、安堵していたという精神状態の時の本震だったからこそ、本震は、地震に対する人々の意識を強化することになったとも考えられる。強化された意識は、地震そのものに対してだけでなく、多様な心境の変化をもたらした。地震はこないと思っていたへ地震を意識していなかった人々」と、そうではなく、地震は起こり得ると危機感を持っていたへ地震を意識していた人々」に分けて、特徴的な心境変化をオーラル・ヒストリーから拾った。

へ地震を意識していなかった人々へ

古庄（大学生） 地震を経験したことで、気づいたことがたくさんあると思うのです。家族の大切さだったり、友達もそうだし、住む場所があることもそうです。（中略）当たり前が崩れるってすごく一瞬なんだということに気づかされました。

上野（道の駅） 震災を経験して「生きていて良かった」と思いました。その思いがあるからでしょうか、地震を契機に、本当に必要はモノは何だろうと考えるようになりました。本質を考えるようになりました。

伊東（環境保全課）（地震は）もうこないだろうと楽観的に考える人もいますが、起こり得るので、普段からの備えが重要だと思うようになりました。

〈地震を意識していた人々〉

佐藤（議員） 防災についてはこれまでも色々な議員が町に対して提言をしたりしてきましたのですが、私たちも含め、すぐに起こるわけじゃないという油断があったのだと思います。でも今回の震災を受けて、熊本の断層や過去の地震とか色々なことを調べますよね。差し迫っていると例えば、南海トラフがあります。正直言って、それは他人事だと思っていましたが、熊本にも影響はあるなど考え直し、少なくとももう1回大きい地震が起きる、ということを言いながら活動しているところです。

大塚（健康保険課） 地震の後、多くの住民の皆さんの生活環境が変わったと思います。（中略）今はまだ大変ですが、落ち着いたら、住民の皆さんも、ぜひ自身の体を見直していただきたいと思っています。やっぱり健康が大事です。仕事として、引き続き住民の方々の健康づくりのお手伝いできればと思っています。

齋藤（協力隊員） 大津町はから芋（さつまいも）が有名なのですが、その貯蔵庫が震災でたくさん壊れてしまいました。（中略）から芋がダメな時の危機管理のことを考えなければいけないと思うようになりました。

地震に対し無頓着であった人々は、地震前と比べてかなり心境が変化している。特徴的なのは身近な人やものについての捉え方が大きく変化していた点である。これまで、なかなかできていなかった身近な事柄の大切さを実感していることが特徴であった。また、地震を意識していた人々も、どこかで油断していた部分があったこと、また、今回の地震を受けて再認識したことなど、それぞれに変化が見られた。

地震後の人々の行動変化

前述した6人について心境の変化を紹介したが、取材を進めると、その変化は行動の変化へと繋がっていた（次表）。

(協力隊員) 齋藤	(健康保険課) 大塚	(議員) 佐藤	(環境保全課) 伊東	(道の駅) 上野	(大学生) 古庄	
機から芋がダメな時の危 い管理を考えたければ	生活環境が変わり、健 康の大切さを知った	南海トラフ地震の影響 は必ずあるなと感じた	普段からの備えが大事 だと感じるようになった	物事の本質（仕事の本 質）を考えるようになった	家族や友達のありがた さを知った	心境変化
津域おこし協力隊で「がんばれ、熊本・大 津町応援セット」を始めたので、その経験 を今後の復興へ、そしてさらなる発展へ向 けた枠組み移行させていく	自分の役目である健康づくりにも力を入れ ていこうと、準備をしている	議会と必要があるかも知れないが、まずは町 民の声を聞くなど、個人でできることをき ちんとやっていく	貴重品や水、食料などもしもの時に備えて 準備しておくようになった	道の駅が阿蘇へ行く途中に寄る場所ではな く、行きたいと思ってもらう場所にするた め、積極的に営業に出向くようになった	同じ場所にいる時間を長くするなど、家族 や友達との時間を大切にしようになった	行動変化

心境の変化は人々の行動を変えていた。前述したように、2回の地震で、それに対する意識がかなり強化されたことで、行動変化が促されることになったのではないかとも思われる。同様の事例をいくつか紹介したい。

松本（住民課） 地震を経験してからはどこかで地震が起こったというだけで色々なことを思い出し、何か自分にできないかなと思えるようになりました。（中略）地震の時の状況を話し合う場はまだ1回しか設けられていませんが、そこでたくさんの意見が出ていたので、その意見も防災時のマニュアルに盛り込んでいけたら良いと思います。時間が経つと忘れてしまうので、その前に行動しようと思い、なるべく時間を作って参加するようにしています。震災前の私は、早く帰宅することを優先していたように思います。今回の地震は私にとって大きな転機になる経験であったと思いますので、これからも色々なところに参加していこうと思います。

災害に対して積極的な姿勢に変わっていた。これは個人だけでなく、多くの町民の様子からも分かる。

新開（都市計画課） 住民の方は地震があつて自分の建物や住宅を改めて見直されているようで、普段は気にかけないようなヒビや傷に対して「この傷は大丈夫なのか」とか「修理はこれで良いのか」という問い合わせがあります。自分の家が大丈夫なのかということを考え直されているようです。

熊本地震を経験し、それから人々が起こした行動は多様である。心境の変化はそれぞれで異なるものがある。行動が違っていることは不思議なことではない。ただし、どの行動にも当てはまることがあった。それが広い意味での防災の視点での行動変化に繋がっているということであった。地震を経験し災害の恐ろしさに気づいたことが、防災のあり方を見直すきっかけとなっている。

防災に向けた意識の変化

東日本大震災において、被災後は「自助」、「共助」、「公助」が上手く分担できて初めて大規模災害に対処できることが認識された。その教訓から、市町村内の一定の地区の居住者及び事業者（地区居住者等）が行う自発的な防災活動に関する地区防災計画制度が平成26年4月から創設されるなど、防災計画は今や国や自治体だけが作るものではなくなっている。

この意味で、熊本地震の経験を通し、大切だと思ったこと、欠けていたことを一人一人が振り返り、次に備えるという行動は立派な防災計画と言える。防災計画というのは国や自治体、地域だけでなく個人でもできることで、それは先の言葉を借りると「自助」であり、共助や公助のベースとなるものである。前述した人々の防災に向けた個人の行動は、個人から、地域、そして町へと防災の意識が広がるための大切な一歩であると言える。

個人の力ではできないことを最終的にサポートするのが国や自治体の役割である。大津町でも熊本地震以前から防災計画は作られていたが、実際に行動する中で多くの課題が見つかり、「計画通りにはいかなかった」「見直す必要がある」という声が聞かれた。オーラル・ヒストリーからいくつかの声を拾ってみた。

原野（住民課） 今日は小学校、次は中学校、というように1日ごとに（避難所を）移動していました。違うところに行くと、その状況はすぐには分かりません。（中略）気遣いの必要な高齢者の方がいらしたのですが、全然気づけなかったことがありましたから。そういうこともあって転々とするよりも、1箇所にいた方が良かったのではないかと思います。

地震直後の混乱で、行ける人が行ける避難所に派遣されるという形が取られていたのだろう。ただ、避難所の町民にとって同じ担当者が来ると安心していたということもあるため、今後は、考慮が必要かもしれない。また、物資の受け入れ作業をしていた姫野はボランティアとの関係について次のように話していた。

姫野（健康保険課） （来ていただいた）ボランティアさんを動かさないといけないのは大変でした。指示を出す必要がありますが、私たち自身が慣れていないのですから。私たちも手探りでやっていることが多かったので、ボランティアさんから「もつとしつかり指示を出してくれ」と言われても上手く対応できなかつたりして、そういったところは少し大変でした。

自分自身がよく分かっていないところで他者に指示を出していくのはかなり難しいことである。この問題はどうかクリアすれば良いのか、具体的な策を挙げるのは容易ではないが、今後のことを考えるならば解決しておくべき点であろう。特に、他所で大規模災害が起きた時、今度は大津町役場職員が被災地に派遣さ

れることになる。災害支援のことまで考えるならば、検討しておくべきだと思う。連絡手段についてもいくつか指摘があった。

中原（財政課） 道路状態などを道路管理の担当課に知らせる時も、LINEであれば、すぐに写真を撮って送れるので便利です。

伊東（環境保全課） 私も含め、職員同士では、LINEで連絡を取り合っていた人もいましたが全員がLINEを使える状態にあるわけではありません。混乱時にも確実にとれる連絡方法を今後模索していかなければいけないかと思っています。

熊本地震の際、LINEは連絡手段として極めて有効であった。特に電話や電子メールが繋がりにくくなっている時にLINEはほぼ正常に使えた。多くの人に情報共有の手段として非常に重要なツールであった。中原が指摘するように、町の被災状況を集約するのにも有用なツールとして活用できるであろう。しかし年配の方やスマートフォンを持たない人々にとっては身近なものではなく、多様な人々がいる中では、それだけを連絡手段とするのは難しい。非常時、情報共有のための連絡手段の多重化は課題の一つではないだろうか。施設面に関する声もあった。

齋藤（協力隊員） 大津町役場はすごく古い庁舎でした。（中略）こうして震災が発生すると、本来

災害時に司令部にならなきゃいけないところが使えなくなっちゃったわけですよ。これは非常に残念なことです。住民の抛り所にならなきゃならないところですから。そう考えると、いざという時に物質的にも精神的にも頼れるような災害に強い庁舎っていうのが絶対に必要なんだっていうのを今回の震災で思いました。

宇都宮（学校教育課）（震災直後に応急措置的に業務が行われた）町民交流施設（オークスプラザ）は電力の関係で全員がパソコンを使うと電源が落ちてしまう環境だったので、何人かで交代しながらパソコンを使う状況でした。電話も各課に1台しかなかったたので、全然仕事が進まなかったです。

被災時、町の復旧に向け役場機能の確保は不可欠であることを改めて教えてくれる。現在はプレハブの仮設庁舎が完成し、そこで業務は行われている。なお、こうした大規模災害になると役場だけの対応は不可能になる可能性が高い。こうした時のために、例えば、道の駅・大津で自主的な物資配給が行われたが、こうした半公共的な場との協定が不可欠になるのではないか。

上野（道の駅） 町との防災協定がしっかりしていれば今回よりももっと支援できただろうと思います。

地域住民においても自助のレベルを越えた共助のレベルでの防災についての意識が強まったようだ。

古庄（分団長） 地区として防災組織を作ろうというとは思いました。私は平川地区に住んでいますが、平川地区で防災組織が必要なのではないかと思いました。すべて行政任せでは難しいですから。その組織が、今度立ち上がります。

阪田（区長） 今後起きるかもしれない災害に備えて連絡網を作ろうと思っています。皆さん携帯電話を持ってもらえるので、それぞれの家単位に緊急時に連絡するリストを作っておかないといかないなあと思いました。

オーラル・ヒストリーを読むと、ここに挙げた点だけでなく他にも課題が挙げられている。詳細は第Ⅱ部を参照してもらいたい。今回の地震を受けて、人々の心境は変化し、防災についての意識が高まっていることが取材を通して分かった。この機会に、防災について見直しをしていくことは非常に重要ではないかと思う。

まとめ

熊本地震は建物など物理的なものに被害を与えただけでなく、人々の心境にも大きな変化を与えることになった。特に本震は震度6強の揺れであり、それが前震からの二重の強い刺激となり、人々に与えた衝撃は大きかった。これが契機となった変化についてここで概略を見てきたが、結論的に言えば、今回のことで人々に明確な防災の意識が植え付けられたのではないかと思う。

熊本地震の発生は人々が地震への関心を高めるきっかけとなり、その心境の変化は人々の行動を促し、〈現在〉だけでなく、〈未来〉を見据えた災害対策について考えることに繋がった。そして、このことは町の未来のあり方へと繋がっているようであった。災害の発生という事実だけを検証するのではなく、人々の心境など内面的な面にも焦点を当てていくことが必要であろう。

熊本地震以降も、国内外で大きな地震が頻発している。こうした状況下で、「熊本で地震はもう起こらない」とは言い難く、さらに私たちは台風や豪雨といった自然災害と隣り合わせに生きている。今回の地震は、いつ、どこで起きるか分からない災害に立ち向かうため、一人一人が災害に関しての対策の重要性について気づく契機となった。今後は防災に関する対策が進むであろう。そうした自己の災害対策をしっかりと行っていくことは、他所で災害が起きた時に、どのように支援していけば良いかを考えることにも繋がっていくものと思う。



それぞれの記憶の記録

年齢も立場も異なる大津町の22名
それぞれが語る、震災時の苦悩や
奮闘についてのオーラル・ヒストリー

(注)本文中の表記について
C = Cono'zu の略

大津町在住 大学生

取材日 平成28年8月9日

古庄日菜子（19歳） ふるしょうひなこ

大津町から熊本市内の大学に通っている古庄。

避難所での日々を過ごす傍ら、自分に何ができるかを考え、避難所でボランティアを行うなど、自ら持ち場を見出し行動していた。当たり前が壊れるのは一瞬だった。連絡が取れない南阿蘇村の友人を案じたり、地震の被害を目の当たりにする中で、自らが動かなくては、という思いを強くした。

C 震災後の1ヶ月間の行動についてお聞きしたいと思いますが、まずは前震時の様子を教えてください。

古庄 私は自宅のリビングにいました。父と母もリビングにいて妹だけが2階にいました。その時に前震が起きて、私と母はテーブルの下にすぐ隠れ、父も妹を呼びに行き、4人で机の下に隠れました。そして、父は歩いて3分くらいところに住んでいる祖母の様子を見に行きました。

C 揺れた時はどう思いましたか。

古庄 本当に死ぬかと思いました。

C その時は避難しましたか。

古庄 前震の時は避難はしていません。自宅にいました。

C 本震が起こる前日の15日はご自宅だったのですね。その時は家族で前震の話とかはしましたか。

古庄 はい。お湯を溜めるかどうかについて議論にな

りました。私は溜めた方が良いと思っていたのですが、父は「いや、大丈夫だ」と。認識の違いがありました。15日は大学も休みになりましたし、家族4人で自宅で過ごしていました。

C お父さんはお湯を溜めなくて良いとおっしゃったということは、地震はもう起こらないと思われたというのでしょうか。

古庄 はい、そんな感じでした。でも私もまさか次に大きい揺れが来るとは思ってもみなくて。本震の時は、私と母が飛び起きて、寝ている父と妹を叫んで起こして、庭に飛び出し、揺れが収まるまで待っていました。

C その後は、どのように行動されたのですか。

古庄 父は前震時と同様に、祖母の家に行つて確認したところ大丈夫だったので、父が戻ると全員で車に乗り込みました。前日から毛布などは色々準備していたのでそれを積んで、避難所である室小学校に行つて、その日は車中泊をしました。

C 車中泊は大変ではありませんでしたか。

古庄 はい。眠れなくて、結局一睡もできませんでした。

たね。

C 車中泊はしばらく続きましたか。

古庄 2日間（16、17日）は車の中にいて、それから2週間は家族4人で避難所にいました。

C 水や食べ物には困ったりしませんでしたか。

古庄 避難所の体育館にいましたが、18日の配給はバナナが1人1本だったので、お腹が空いて困りました。家にもお菓子しかなくて、とりあえずその時はそれで凌ぎました。19日になってTwitterで情報収集をしていたら近くのドラッグストアで売り出ししているところがあったので、ダメもとで行ってみましたら在庫があったので、そのお店で買い出しをしました。おかげで19日からはちゃんと食べられるようになりました。

C 17、18日はまともな食事ができずに大変でしたね。買い出しは自分で行かれたのですか。

古庄 家族全員で行きました。

C 避難所生活はどうでしたか。

古庄 小さいお子さんの泣き声だったりいびきなど色々な音が聞こえてきて、全然眠れず寝不足になりました。

した。昼間、寝ていようかと思ったのですが、小さい子どもたちがバタバタと走り回っていて全然眠れませんでした。

C それ以外に大変だったことはありませんか。



室小学校体育館の避難所の様子

古庄 トイレの衛生状態が1、2日で悪くなったことです。18日くらいまで水が流れましたが、すぐに止まってしまつて。それからプールの水をバケツリレーして活用していました。1週間くらいしたら母がトイレ掃除をするようになりました。

C 自宅に帰ろうという話にはなりませんでしたか。

古庄 私と妹は帰りたいと言ったのですけど、母が「今日までは」というのが1週間くらい続きました。

C 避難所では、4人一緒だったのですか。

古庄 父は仕事があつたので、3人でいることが多かったですが、不安はあまりなかったです。

C 避難所で生活している間は家族以外の人と連絡を取っていましたか。

古庄 仲の良い友達の家が近かつたので、その友達が水とか届けてくれました。だから水には困らずに済みました。

C 地震が起こつたらお風呂の水を溜めておけば良かったと思いましたか。

古庄 思いました。本当にそう思いました。

C 2週間くらい避難所で生活した後、自宅に戻れてから大学再開までにはまだ1週間ほどありましたが、その間はもう過ごされてしまいましたか。

古庄 友達に会いたくなかったので集まれる人だけでも集まり、近くの公園で過ごすこともありました。

C 友達には、古庄さんから連絡を取ったのですか。

古庄 そうです。私からです。「集まれそうかな」と連絡を取ったら6人くらい来てくれました。

C その時はどういった話をしましたか。

古庄 地震の時はどこにいたのかとか、どういう気持ちだったのかなどを話していたように思います。それ以外には、大学がいつから始まるかとかです。

C 震災直後、「死ぬかと思った」という話が先ほどありましたが、それ以外にはどんなことを思いましたか。

古庄 まず思ったのが、東日本大震災で東北の人たちは被災をされたわけですが、話には聞けけれど実感というか、やっぱり地震を経験した人にしか分からない

ような気持ちがあるんだということが分かりました。上手く言えませんが、東北の皆さんに、申し訳ない気持ちになりました。当時、こうした実感がなかったのも、支援も備えも何もできていなかったため。

C ただ、今回の熊本地震の後、古庄さんはボランティアに行っていたというのを聞きました。それは避難所にいる時でしたか。

古庄 4月の終わり頃からやり始めました。

C どういう経緯でやることにしたのですか。

古庄 Twitterで情報収集をしていた時に、大津町運動公園（スポーツの森・大津）の避難所の人手が足りないという情報が伝わってきて、それで「行かなきゃ」と思い友達と出かけました。でも、行くと決めた時に、親に伝えるかどうか迷いました。やはり心配するでしょうから。実際話してみたら「行つておいで」と言われてホッとしました。

C 4月末からどのくらいの期間、ボランティアをされたのですか。

古庄 2、3日くらいでした。そこでは、避難している

方のご飯を運んだり、ゴミを拾ったり、エコノミークラス症候群予防の啓発チラシを車のワイパーに挟んで回ったりしました。

C 人手が足りないという情報を見つけてすぐに、ボランティアに行こうと思ったのですか。

古庄 場所が近かったのもあると思います。御船町にも行こうと思いましたが、遠かったのでなかなか行けなくて。

C 避難所を出て、自宅に戻ったのはいつですか。

古庄 5月の頭くらいですね。

C その時の自宅はどんな状態でしたか。

古庄 2階に上がった時、妹の部屋を見ると、机が180度回転していて、ショックを受けました。

C 片付けが大変だったかと思えます。内部は大変な状況だったでしょうが、自宅の建物自体はいかがでしたか。

古庄 建物自体は、ヒビは少しありましたが、大丈夫のようでした。私の住んでいる地域もそこまで被害はないかなと言う状況でした。

C 水・ガス・電気といったインフラは。

古庄 ガス・電気は通っていませんでしたので、庭でガスコンロを使ってキャンプみたいにしてご飯を食べていました。4月の終わりか5月上旬に復旧し「やっと温かいご飯が食べられる」と話し、非常に嬉しかったことを覚えています。水の復旧はもう少し早かったのですが、泥とかが混じっていてすぐには飲めませんでした。

C そうした地震直後の混乱から徐々に落ち着いてくるわけですが、復興に向かっていく中で、古庄さんが一区切りついたと感じる時期や、出来事があれば教えてください。

古庄 二つあります。一つはやはり大学が始まった5月9日が大きいです。「早く始まらないかな」って友達とよく話していましたので。

C 普段だと「テストが嫌だなあ」と話したりすることもあるわけですが、それがこんなに待ち遠しくなるとはですね。

古庄 そうですね。今回のことで日常が普通のことじゃないんだな、ということを実に思いました。日常って、非常に有り難いことなのだと再確認しました。

C 普段であれば、日常は普通ですからね。私たちも想像していませんでした。

古庄 もう一つは余震があまり気にならなくなった6月頃です。まだ回数は多かったですが、気持ち的には区切りだったように思います。

C 大学が再開し、そして周囲の環境も安定してきて、それで心境的に徐々に落ち着いてきたからでしょう。それぞれ時の話をもう少しお尋ねします。大学が始まった時の様子を少し詳しく教えてください。

古庄 再開した日は月曜日でした。1限目はなくて、2限目からだったのですが、その講義が始まる前から久しぶりに再会する友達と喋りっぱなしでした。その内容はもちろん地震のことでした。大学の校舎がどうなっているか、あそこがヒビ入っていたとか、雨漏りしているらしいとか、そういったことをずっと話していました。

C 余震が気にならなくなった時は、具体的にどのような心境でしたか。

古庄 ようやく普通に夜、眠れるようになったので少しホッとできたのだと思います。起きている時に余震が少しでも起きたら母が机の下に隠れたりしていたのですが、その頃からかなり落ち着くようになりました。

C 確かに最初の頃は少しでも揺れると体が反応してしまっていたように思います。ところで、こうした大きな震災を体験して色々とも考えることもあったのではないかと思います。もし震災を契機に自分自身の考え方や行動に変化が生じた点があれば教えてください。

古庄 4月の28日から30日に益城町に一度行ったのです。家屋が倒壊しているところを直接見てショックを受けました。その時、今すぐにでも何か力になれることをしたいと思いました。他には南阿蘇の方にも何度か行ったりしました。

C 色々なところに行ったんですね。

古庄 はい。車が潰れていたり、住宅の屋根が地面す

れすれにまで崩れているのを見ると、泣きそうになりました。そうした光景を前にしていると、やはり今すぐ何かしたいと、そう思いました。

C 益城町と南阿蘇村には一人で出かけたのですか。

古庄 益城町へは友達と、南阿蘇村へは親と一緒に行了きました。

C 何かしたいと思った思いはどこから生まれたのでしょうか。

古庄 高校の友達が南阿蘇村の出身で、その友達と全然連絡が取れなかったのですごく心配だったというのがあります。それと、大学近くで1人暮らしをしている同じく南阿蘇村出身の友達は親と連絡が取れない状態になっていて、そうしたことを自分に置き換えて想像すると、生きた心地がしなくなりました。結構身近な人たちでしたので。

C 身近な人と連絡が取れなかったり、大変な状況を見聞きしたからこそ、自分にできることはないかというところで行動を起こしたというわけですね。自分ので

きる範囲で何かしたいと思う気持ちは分かります。他に何か考え方で変化したところはありますか。

古庄 地震を経験したことで、気づいたことがたくさんあると思うのです。家族の大切さだったり、友達もそうだし、住む場所があることもそうです。普段は当たり前にあるものですが、それが一瞬に壊れてしまう。当たり前が崩れるってすごく一瞬なんだということに気づかされました。

C 確かに一瞬の揺れで全てが変わってしまうようにでした。古庄さんご自身について聞きましたが、震災後の家族や友達、近所の皆さんの行動で変化が生じたことで何か感じることはありませんか。

古庄 それまでは近所付きあいも多い方ではありませんでしたが、地震後は隣に住んでいる年配の方に「一緒に避難所に車に乗せて行きますよ」と手助けをしたり、情報交換などを行っていました。

C 震災という事態によって近所の方との助け合いが生まれたということでしょうか。友達や家族について

の変化は感じますか。

古庄 家族は、やっぱり防災に対する意識が格段に上がり、生活が落ち着いた頃には新しい防災袋にカンパンを入れて蓄えたりするようになりました。友達も備えの意識が高くなっていると思います。私にとつて友達はいいと生きていけない存在です。仲の良い友達が地震後、私の家に来てくれたこともありました。とても嬉しかったです。友達の大切さを強く感じました。

C 最後になりますが、震災に対する心構え、震災を受けて望むことなどがあれば教えてください。

古庄 心のどこかで、自分が生きている間は絶対に大きな地震は起こらないっていう気持ちで誰にでもあると思います。でもそうではない、ということ伝えていかなければと思います。ただそれを単に話しても、人の心に響かないでしょうから、どうしたら良いかは課題ですね。望むこととしては、大津町はもちろんですが、大津町に限らず南阿蘇村でも地震の影響で店舗を閉められたところがあります。図書館なども利用者

が少なくなったりしているようです。なので今まで以上に元氣にならなきやいけないと思っています。

大津町在住 大学生

取材日 平成28年8月12日

佐々木香澄（20歳）

大津町から熊本市内の大学に通う佐々木。

前震発生直後から家族や友人を気遣い、日常生活を取り戻すために奔走していた。

大津町の避難所でのボランティア活動を契機に熊本市花畑広場のボランティアセンターに赴くなど、「できることは自分たちでしなくては」という思いのもと自分の持ち場を広げた。

C 前震4月14日の木曜日21時26分の状況や様子を教えてください。

佐々木 前震の時は大津町の居酒屋でバイトをしていました。私が最初に揺れに気づいて、店長を呼んだ瞬間、大きく揺れました。その時店内にいたお客さんの中には東北や関西で地震を体験された方もおられ、揺れても微動だにせず食事を続けられたので、私と店長で「どうしよう」と焦っていました。お客さんは全然

お帰りになる気配がなかったのですが、2回目にはまた少し揺れた時にはさすがに帰られたので、私も「もう帰って良いですか」と店長にお願いして、母に連絡を取って帰宅しました。

C お母さんのところへ戻り再会した時はどうでしたか。

佐々木 すぐ怯えていました。父は仕事で、兄は県外に就職していて、私しかいなかったもので、「しっか

りせんと」と思い、飲み物や毛布を確保して、目についた食料も少し持つてきて、着替えなどの荷物も全部車の中に詰め込みました。

C 14日は自宅の車の中にずっと避難していたわけですね。15日は自宅ですか。

佐々木 15日は兄が鹿児島から帰ってきました。自宅は半分だけ建て替えをしていたので、傾いたり瓦が落ちたりは全然なかったたので、建て替えた新しい方に、家族4人で寝ました。

C お兄さんとはどんな話をしましたか。

佐々木 兄は心配性な人で、「戻って来れて良かったあ」とか「顔見れて良かったあ」ってずっと言っていました。その日は兄を安心させる日になりました。

C 14日はまずお母さんを、15日はお兄さんを安心させる日だったわけですね。お母さんは15日にはもう落ち着いていましたか。

佐々木 敏感なので、ちょっと揺れたら「はっ」となっていました。余震が頻発し、地震で車が揺れるわけですが、そうした揺れでも怖がっていましたので、ずっ

と手を繋いでいました。

C 家族の他に誰か一緒にいましたか。

佐々木 山のふもとに住んでいたいところも避難して来て、一緒に過ごしました。

C 本震が起こった16日1時25分は、皆さん自宅ですよ。

佐々木 その時は自宅でみんな寝ていました。14日とあまり変わらないだろうと思って「揺れとる、揺れとる」と言っていたら、揺れが長いことに気づいて「はっ、出ないと」って、みんなで車に避難しました。

新しい方の自宅に荷物は全部集めていたので、車の中に移動させて、また車中泊になりました。

C 車は何台ありましたか。

佐々木 私と母と父、いとこで4台ありました。私と母、父と兄、祖母で使いました。

C 基本的にはずっと車中泊でしたか。

佐々木 16日以降はずっと車中泊です。

C 避難所に行ったりは。

佐々木 行っていない。自宅の目の前が天津南小学

校で、避難所となるべき体育館の照明が落ちてしまつて使えなくなりました。他に避難してきた人たちも体育館に入らず、結局グラウンドで車中泊になっていました。自宅は道を挟んで隣なので、自宅にいても一緒だろうと。

C 車中泊はどのくらいしていましたか。

佐々木 4月24日か25日くらいまでやっていました。私は「車が嫌だ」と言つて家の中で過ごすようになりましたが、家族の一部はその後車中泊を続けました。

C その時は家族とどんな話をしていましたか。

佐々木 母が精神的に不安定だったので地震の話は避けて、私たちの小さい頃の写真を母に見せたりしていました。

C 気を紛らわせるようなことをしていたわけですね。ところで、地震が起こつて、家族以外の人とは連絡は取っていましたか。

佐々木 高校の時の友達に無事かどうか連絡を回していました。大津の子が多かったので、返事がなかった

子には「みんなこの子が出ないから連絡して」って生存確認していました。あと、少林寺拳法をしているので、全国の先生たちから「大丈夫か」という連絡もいただきました。

C 食べ物や水は、自宅にあるものでやりくりしていたのですね。

佐々木 そうです。ガスコンロがあつたので、煮込みハンバーグを作ったりしていました。

C 水は使えましたか。

佐々木 私の家は16日か17日まで出ていたので、その間に溜められるだけ溜めました。

C 水道が使えるようになったのはいつでしたか。

佐々木 電気、ガスは早く、2、3日で復旧したので19日あたりは大丈夫だったと思います。水道はどうだったかな…。

C もう随分前になりますからね。質問を少し前に戻しますが、被災直後14日と16日の心境を教えてください。

佐々木 14日はとにかく家族が心配でした。バイト先にいましたけど、母がタンスに潰されていないか、家が潰れていないか、とか。父は大丈夫だと思っていたので、とにかく母のことが気がかりでした。犬も縄で繋がれていたのも、家が倒れたら危ないんじゃないか、というのが頭の中にならずとありました。

C 普通はそうでしょう。家族が心配ですよ。

佐々木 16日については、次きたら死ぬんじゃないかって、とにかくもうダメだと思いました。建て替えていない古い方の家は、瓦が1回目でほとんど落ちてしまつて、ちょっと斜めになつて扉が開かなくなりまして、新しい自宅の方も隙間がたくさんできていましたので。

C 今（取材日現在）は古い自宅で暮らしていますか。

佐々木 私が古い方で、父と母が新しい方に住んでいます。

C 地震後、車中泊をしながら、自分で何か行動を起こしたりしましたか。

佐々木 4月末まではバイト先の片付けをして、その

後は大津町の避難所にいる友人（古庄さん）のところに水を持って行ったりして、5月に入つたくらいから熊本市の花畑広場でボランティアを始めました。それからはずっと花畑ですかね、ゴールデンウィークも。

C バイト先の片付けは自分から行つたのですか。

佐々木 いえ、「片付けて」と連絡が来まして。4月はほぼ毎日行っていました。

C お母さんから「行かないで」と言われたりとかは。佐々木 母も昼間は仕事があつたので、私もバイトの片付けに行つていたのは昼間だけだったので大丈夫でした。夜は一緒にいましたので。

C 目まぐるしく状況が変わつた地震後の1ヶ月間だったと思いますが、そこでは何が大変でしたか。また何か問題は起きましたか。

佐々木 多分私のところは意外と他のところより被害は少なかったと思います。そうは言っても、家についてはお風呂など、家にたくさん隙間ができました。夜は、明かりで虫がいっぱい入つて来て「嘘でしょ」と

いう感じですよ。あと、山のふもとにいる祖母に「私の家に避難して」って地震がひどかった日に言っても、途中から「自分の家が良い」と言つてうちに来なくなりました。「いや、危ないけん」と言つても動かなくて、もどかしさを感じました。

C 確かに、自宅が良いという気持ちは分かるような気がします。

佐々木 分かりますけどね、やっぱり心配じゃないですか。「山がミシミシいう」と祖母が言うのを聞いたりにしていたので、尚更です。

C ところで先ほど避難所に行っていたということでしたが、それはボランティアですね。

佐々木 はい。23日に大津町運動公園（スポーツの森・大津）に行つて、そこで友人たちとボランティアをしました。大津高校の卒業生である私たちみんな「何かしない」という話になったからですね。水がないって言っていた友人が心配で顔を見に行こうと思つて行つたのが始まりだったと思います。

C 23日にボランティアへ行かれたわけですが、その日はどんな活動をしましたか。

佐々木 23日は車中泊している人に車中泊上の注意のチラシを配つて、そうした作業をやりながら、ゴミ拾いをしました。あとおじいちゃんたちから「できるんだつたらマッサージして」って言われて足を揉んだり、話し相手になりました。

C 確かにおじいちゃんたちも話し相手がいるだけで全然違うでしょうね。それから熊本市の花畑広場でボランティアをすることになったというわけですが、それは何故ですか。

佐々木 大学の先輩に紹介されたからです。ボランティアに参加する人に「こういうことをしてください」と説明するボランティアが必要で、人と話すのが得意だということで私に連絡されたようでした。

C いつから行かれたのですか。

佐々木 5月3日からです。

C 花畑広場で結構活動していましたか。

佐々木 5月3日から4、5、7、8、14、15、28、そ

して6月、7月は時々やっていました。
C 長くやったのですね。花畑広場でやってたことを少し詳しく教えてください。



熊本市のボランティアセンターでの打ち合せの様子

佐々木 ボランティア参加者の中から、必要な数の人たちを集める係を担当していました。被災された方から「こういうお手伝いをしてもらいたいです」と言われたものを総務担当が書類にまとめ、それが私たちのところに来るんです。「5人集めてください」、「この道具を持って集めてください」とか。

C 運営スタッフとしての仕事ですね。

佐々木 同時にバス出しの係もしていました。20人出る時はバスを出さないといけなくて。ただ私は初めてで、車もたくさん種類があるから分からなくて、遅くなると怒られました。帰宅したら予習復習をしました。翌日には車の種類が増えていた、ということがあったりして大変でした。慣れたら楽しかったのですが、最初は「どうしよう、どうしよう」って焦っていました。

C ボランティアをやっている時の最初の心境は「どうしよう」って感じだったわけですね。

佐々木 できることがないって実感しました。「私、何もできない」と。

C ショックを受けながら…。

佐々木 受けながらも、ボランティアしている人だから周囲はとても良い人ばかりで、私が焦っていたら「大丈夫だよ」とずっと支えてもらいました。

C ボランティアに行こうって思った原動力やモチベーションはどこから来ていましたか。

佐々木 電気が復旧してニュースを見ると、「県外からボランティアが大勢来てくれています」と報道されていて、それを聞いてどこか人任せのような気がしたのです。大津町もかなり強い揺れでしたが、益城町ほどはなくて。だけど他の地域はすごい被害を受けているわけで、「私たちは近いのだから、私たちが行かない」と思いました。

C 自分たちでできることをやっていこう、ということでしょうか。

佐々木 はい。「できることはしないと」みたいな。

C そういった思いがあってボランティアをされていたのですね。

佐々木 ボランティアの参加者から「ここを改善して

ほしい」と要望が来ますけど、ボランティアに行ったら先の現地の方からの意見も一緒に来て、やっぱり結構きついことを書かれました。最初は「こんなことを色々と言われるんだ、ボランティアって」って悲しくって、精神的に辛かったです。でも花畑広場の運営の人たちは、私たちよりも遅く帰っているのに、翌朝集合する時間より早く来て、書類など全部作ってくれていたんで、私たちが「きつい」って言ったらいけないと思いました。毎日笑顔で「今日もお疲れさま、ありがとう」って言うてくださるのに、きついとか言えないでしょう、頑張らないといけないと思いました。

C 次に復興に向けての歩みについて聞いていきたいと思います。佐々木さん自身が一区切りついたと思う時期や出来事があつたら教えてください。

佐々木 バイト先の居酒屋が再開した時です。確か5月17日でした。

C それは何故ですか。

佐々木 いつもバイトに行っていたから、「ああ、バイトだあ」って日常が戻ってきた感がありました。3月、4月はバイトばかりしていたので。

C その時の心境は。

佐々木 「えっ、開くんですか」という感じでした。

C 驚きの方が大きかったんですね。建物の被害はありましたか。

佐々木 床に大きいヒビが入っていて、角部屋の床は雨が降ったら浸水するくらい沈んでいたりで、被害は意外に大きかったです。

C お店の再開に不安はありませんでしたか。

佐々木 すごく不安でした。ただ私は、他人よりもポジティブで切り替えが早いところがあるので、「何とかなるでしょ」と思っていました。

C 震災前後で、自分自身の考え方や行動に変化が生じたなと思うところはありますか。例えば、震災に対してや家族、友達に対する思いとか。

佐々木 大学が休校で、友達に会えないのがすごく寂

しかったんです。学校、友達と会える場所って大事ななと思いました。

C 5月9日に大学再開と聞いた時の心境は。

佐々木 「やっと学校に行けるね」という話はしていて、嬉しかったです。

C 行動に変化が生じたと思うことはありますか。

佐々木 大事なものを身に着けるようになったと思います。いつでも持ち出せるように。特に父は2階の自室に上がらなくなつて、新しい自宅の1階に荷物や着替えを置いています。私もバッグの中に財布を入れたまま。食料も未だに新しい自宅に缶詰が置かれていますね。それと夜は家にいることが多くなりました。バイトも今は週2くらいしかやってなくて、飲み会も極力参加しないようにしています。お酒は飲まないですけど、誘われると結構出かけていたのですが、今はずっと家にいるようになりました。

C 家にいるのはお母さんを安心させるためですか。震災で自粛の雰囲気もあった影響もありますか。

佐々木 自肅より親ですね。母はずっと家にいて、父も早く帰るようになって、兄も土日になると帰って来て。家族でいる時間が増えましたね、そう思うと。

C お互い心配っていうところもあるだろうけど、近くにいる方が安心なんでしょうね。今になって震災に對してこうしておくべきだったと思うことはあります。か。もともとこう動けていれば良かったとか。

佐々木 近所の人に声をかけたりする勇気が私にもう少しあれば、近所の人たちとも協力して色々できたのではないかと思います。一緒にもつと協力できれば良かったなって、今更ながら後悔しています。

C 最後になりますが、震災を通して思ったことがあればお聞かせください。

佐々木 以前、震災後の大学の授業で「時間が経つと危機感は薄れていく」ということを聞きました。今まさにその状態なのではないかと思っています。地震はまだなくなっただけじゃありませんので、その辺りのことを考えておかないといけないと思います。それ

と、ボランティアセンターが花畑広場から動植物園に移動しました。できれば私も行きたいのですが、交通費が結構高いのです。個人的な意見としては、ボランティア参加者の金銭的な負担を軽くするシステムがあれば、県内の人も、もつとボランティアがやりやすくなるんじゃないかな、と思います。

道の駅・大津社員／東熊本青年会議所

取材日 平成28年9月16日

三池和臣（37歳）

熊本県大津町に生まれ、高校を卒業してから、道の駅・大津で働く三池。

大津町のために何かしたいという気持ちは人一倍強く、震災時には、Facebook

や道の駅のホームページを使って、お店の情報や物資の情報を発信し続けた。

道の駅・大津の社員としても、東熊本青年会議所（JCC）の一員としても、大

津町の人々のために行動している。

C 三池さんは道の駅・大津のスタッフとして、また、

JCCでも活動されていると聞いています。JCCとは

どういった団体でしょうか。

三池 JCCとは東熊本青年会議所のことです。「明るい

豊かな社会」を実現するために活動する20歳から40歳

までが所属する組織です。

C まずは地震時の動きについてお尋ねしたいと思っ

ます。4月14日の21時26分に前震が起った時の三池

さんの状況を教えてくださいますか。

三池 14日は熊本駅にいました。駅内はパニック状態

に陥っていました。それから会社（道の駅・大津）

が心配だったので、すぐに大津町に帰りました。帰る

途中もあの道は大丈夫かな、あそこは大変なことにな

っているのではないかと色々な心配が次々に頭に

浮かびました。しかし、大きな被害もなく、停電など

もすることなく、水、ライフラインも届いていました。

店内の様子は商品が少し倒れていたのと、一部売り場の外壁が壊れたぐらいですかね。それくらいだったので、15日は臨時休業という形を取って売り場を販売できる体制に戻して「じゃあ明日頑張ろう」って言って帰りました。

C 14日、熊本駅から大津町までどうやって帰って来られたのですか。

三池 車で帰ってきました。電車が止まっていたので、ついでに同級生とか、先輩の子どもとか、地元の知り合いも乗れるだけ乗せて帰ってきました。その後は、営業再開のために準備をしていました。

C その時の心境についてですが、一番心配したことは何でしたか。

三池 家族の安否はもちろんですが、震災の影響で会社の防災サイレンが鳴り近所の方に不安と迷惑をかけていないかが一番気になりました。実際、白山通りのゲームセンターでびっくりするくらいサイレンが鳴っていたので。これがずっと鳴っていたら、迷惑どころか住民の恐怖心を煽るだけだと思います。

C 実際、サイレンは鳴っていましたか。

三池 14日は鳴っていなかったので安心しました。本震の時は鳴りましたけど。

C それでは、16日の1時25分の本震が起こった時の状況や様子を詳しく教えてください。

三池 当日は家にいました。地震はもうこないだろうと安心していたのでびっくりしました。

C 確かに取材している中で、皆さん15日は来ないだろうと思っていたようです。ご家族と暮らしていらっしやいますか。

三池 いや。1人でアパート暮らしです。アパートは半壊状態で、家の中もグチャグチャで、夜中の地震でしたので慌てて一度裸足で避難しました。それから、すぐに会社に行きました。会社の建物自体は潰れていなかったのとおりあえず安心して「これで営業はできるかなあ」と思いましたね。営業ができないことは僕も仕事がなくなるかもしれないし、生活ができないかもしれないという恐怖があったので、それは安心しました。それからは、震災の影響により鳴り響

いた警報を解除して、その日は社長に連絡して帰りました。それから2週間くらいはずっと車中泊でした。

C 16日から30日くらいまでということですね。

三池 そうですね。28日までは車中泊をしました。

C 車中泊というのはご自宅の駐車場ですでにいたのですか。

三池 小学校や中学校などの駐車場を転々としていました。断水してお風呂も入れない状況だったので、温泉に入るために菊池の方へ行ったりもしました。

C 本震後、道の駅・大津ではどういったことをされていたのですか。

三池 道の駅・大津での避難者支援のボランティアやFacebookの更新で近隣の情報を更新することが主な活動でした。Facebookでは道の駅のネットワークで届いた物資を告知して、住民の皆さんに配布していました。初めの頃は被災者に限定せず、多くの人に届けたいと思って、あまり数も制限せず、2リットルのペットボトルを6本とか配っていました。

C それは上司の方の指示でされたのですか。

三池 そうです。社長から「物資が来るから告知してほしい」と言われて、Facebookで告知したら、実際に物資が届くこともありました。商品が届く前からそういう情報を流してしまうと人が並ぶんです。すると配る側が整理する間もなく、配らないといけないような状況になってしまうので、それはいけないとなつて、改善していききました。その頃のFacebookのアクセス数もすごく、大津町の人口は3万5千人くらいなのですが、4万とか5万件アクセスしていました。

C それだけ多くの人が見ていたというわけですね。

三池 それまでは道の駅・大津のFacebookページの「いいね」は400件くらいだったのが、いきなり900件くらいまで上昇しました。

C 今回三池さんはSNSやホームページで情報の更新や発信をしておられましたが、震災期間中、SNSの有効性を感じましたか。

三池 それはものすごく感じました。情報の発信だけでなく、受け取ることも多かったですね。例えば「へ

リコプターの音で防災無線が聞こえませんか」とか、自分の仕事とは関係のないことも来るので、有効性と同時に手に負えない無力さも感じました。

C SNSを利用する中でこれからの課題だと感じた点がありましたか。

三池 はい。やっぱり見切り発車はリスクが高いと感じました。緊急時は異常に情報が広がっていくようで、正確な情報載せるべきだったと思います。物資一つにしても、「何時から、どこで、何個ずつ、お一人さま何個まで、一家族何個まで」というのを徹底しなければならなかったと感じました。

C 被災者の支援をしながら、道の駅は営業再開していたのですか。

三池 4日間は休みました。でも「早くお店を開けないといけないなあ」と強く感じていました。私は、たまたま東北の震災を経験した道の駅の方の講演会を聞いたことがありました。なぜかそれを非常に覚えていたんです。トイレは水が流れないから手でかき出した

とか、温泉はモーターが焼き切れるぐらいまで稼働して地元の人々のために開放したとか、そういった話を聞いていて、これらの話に今回すごくパワーをもらいました。それで、道の駅は1日も休まない方が良くない、「意地でも開きたい」という思いが強くなりました。やはり、4日間休んだだけです。「開いていますか」という電話も多かったです。



地震後の道の駅・大津内部の様子

C 結果的にお店は開けていた方が住民の方も立ち寄れますし、お店とは、こういう時色々な意味で大事な場所ですね。

三池 そうですね。

C 次に三池さんが所属されているJCについて、地震後の状況を教えていただけますか。

三池 JCでは炊き出しを主に行いました。ただ結果的に炊き出しはやり過ぎてしまった部分があったと思います。

C 「やり過ぎ」とは、どういう意味ですか。

三池 立地の良いところで炊き出しをしたので、誰でも食べに來れたので、本当に必要な人に届いていなかったのではないかと思います。中心部から少し離れた地域には行けていないので、そうしたところでは自分たちでやれる範囲で炊き出しをしていたという話でした。そうした地域からは必要性を発信する人がいなかったので気づけなかったということもあるのかもしれないですね。

C 立地の良い場所での炊き出しは、そこまで被害が

ない人にも提供してしまったところがあったのですね。

三池 「炊き出し太りした」と言ってる人も中にはいましたし、「パンはいらん」という発言もありましたからね。

C 炊き出しは天津町交流会館（まちづくり交流センター）でされたのですか。

三池 そうですね。幸い、ここは電気があってガスもありました。水だけがなかったのですが、ここを拠点にみんなでおにぎりを作って配ろうというのが始まりでした。ガスが足りなくなったらガス屋のJCメンバーにプロパンガスを持ってきてもらったり、飲食店経営者到大鍋を借りたりして行いました。食材も地震の影響で中止になってしまった天津つつじ祭りを使う予定だったものを全部炊き出しに回しました。また、錦野とか南小校区とかに「足りてますか」と電話して、足りない物資を運んだり、防寒のために近くのホテルからテーブルクスを大量に持っていったりと、JCのみならず協力しながら動きました。

C 町の皆さんのネットワークを上手く活用されていますね。

三池 そうですね。町からの支援もあって、結果的に物資は豊富で、食べ物にも困りませんでした。

C 町とは独立した存在だったこともあって、色々な活動へと繋がっていったということでしょうか。

三池 そうですね。J C のみんなで「町ができないことを、自分たちで色々やろう」となりました。そのうちに一緒に避難している人たちも手伝ってくれ、地域の人の強い繋がりを感しました。またJ C ではこのような事態になった時のために社会福祉協議会と災害時の協定を結んでいるのです。協定を使うことはないだろうと思っていました、今回のことで、「(協定が) あって良かったね」と話していました。

C 転ばぬ先の杖ですね。

三池 J C は地域のための団体なので、こうした災害があると、やはり必要性を感じますね。

C 話題を変えますが、被災後1ヶ月間の生活で一番

大変だったことは何ですか。

三池 個人的には寝る場所とお風呂が一番困りました。仕事面では風評被害です。道の駅・大津は阿蘇の玄関口ということもありゴールデンウィークの一番稼ぎ時にお客様が来ないというのは厳しいものがありました。例年の半分くらいのお客様でした。ただまあ、建物が残っただけでも、自分が生きているだけでも丸儲けなんじゃないかって思うことにしました。

C 地震後、当たり前ではない状況になったからこそ、そう思ったのでしょうか。

三池 はい、それからはもう「やるしかない」という状況でした。お客様から励ましの言葉をかけてもらうことで、やる気になりましたね。また、県外など遠方からのボランティアスタッフをみると「こんなに来てもらっているから頑張らんといかんねえ」と全員がそういう気持ちになったと思います。

C そのようなことが復興の足掛かりになっていたようですね。活動を続ける中で、三池さん自身が一区切

りついたなと思われた時期はありましたか。

三池 57号線が開通しないと何とも言えないかなとは思っています。個人的なことと言うと、4月28日に久留米まで焼き鳥を食べに行ったことがありました。「明日からゴールデンウィークだね」という気持ちもありました。まだ全然復興が終わったとは思っていません。たですけど、食べたならなんかホッとした気になり、それが一つの区切りだったのかもしれない。全体的にはまだまだなのですが。

C では次に震災前と現在について教えていただきました。のですが、震災を経て三池さん自身、何か変化したことはありましたか。

三池 何か非常にポジティブになったような気はします。そして僕だけでなく、みんな変わったなと感じますね。

C 具体的にはどういうことでしょうか。

三池 やはり一番はお客様を今まで以上に大事にするようになったと思います。ゴールデンウィークの時の

ようにお客様が来ない時期があると、お客様一人一人を大事にしようと思う気持ちが湧いてくるんですよ。それは私だけでなく社長を含め、従業員全員そうではないかと思っています。この感覚は、地震の経験をしたからこそだったと思います。

C 考え方にも変化はありましたか。

三池 変わりました。考え方は180度くらいガラッと変わりました。仕事の面に関して言うと、より地元に着していきたくて考えるようになりました。今までも、密着してきたつもりでした。観光協会だとか、つつじ祭りなどのイベント企画とか。でも、密着の仕方をさらに考えなければだめだと思ったんです。

C 具体的な考えはありますか。

三池 大津町の人たちに「道の駅に行こうよ」と思ってもらえるようにすることが大事だと考えています。肥後おおづがんばろうマルシェという朝市イベントでは、子どもを対象にした朝市をやっていますが、子どもたちが「朝市に行こう」「どこでやってるの」「道の駅におおづだよ」って、道の駅に来てくれるようになって

ているのです。今までは、「地域密着とかは、そこま
で考えなくてもお客様が来てくれる」と思っていました。
でもそれは、阿蘇があるからであって、本当の商
売は阿蘇頼みだけではいけないということに気づきま
した。

C ある意味震災を機に、仕事の本質が分かったとい
うことですか。

三池 それでもまだ分かってないのかもしれないです
けど、そうですね。

C 今後、三池さん自身が天津町に望むことや、取り
組んでいきたいことがあれば、教えていただきたいで
す。

三池 私は道の駅を中心にした町づくりをやってい
きたいと考えています。今、道の駅・大津を防災拠点
にしていこうとか、駐車場を拡大しようという企画も
あるようで、実現するといったと思っています。また
ここが、天津町の人が集える場所にもなってほしいで
す。習い事の発表会とかができる場にもしていけると

良いなと思っています。

C なるほど。

三池 道の駅・大津は、普通の道の駅とは違って、自
治体の資産ではなく、個人の建物なのです。

C 町所有のものだと思っていました。個人所有の道
の駅は多いのですか。

三池 個人所有の道の駅は数少ないと思います。町の
資産ならば利益は町に返せるわけですが、個人の建物
なので利益分は建物代などにもなっていくわけです。
それもあって、「他の道の駅は町の収入になっている
のに」とか、「町に何の貢献もしてない」と思われる
こともあるんです。でもそうではありません。僕たち
は大津町のために何かしたいという気持ちで店をやっ
ているので。だから、道の駅・大津を大津町のシンボ
ルにして、「道の駅に行こう」と周りから頼りにされ
るようになっていきたいです。

C 今回の震災時の活動で道の駅・大津は賞を受賞さ
れたと聞きました。

三池 はい。震災期間中の活動について地域貢献を認められ、九州道の駅からの賞をいただきました。

C おめでとうございます。震災時の拠点として動いたことが評価されたんですね。

三池 あの時は見返り（利益）など求めず、ひたすら利他の精神で活動していたことが評価されたということでしょう。ただ、賞は結果で、それ以上に、今回の震災を経験していく中でも大事なことを勉強させてもらいました。

C それはどういったことでしょう。

三池 一生懸命に考えることです。大学生だと、ブレインストーミングとか、ワールドカフェとか、ああいう手法を取り入れて、話し合いをしていますね。私の場合、そうしたロジカルに物事を考えましようというのを知らなくて、大人になってからそういったものを学びました。でも、この「考える」というのはものすごく大事なことで今になって思います。今回の震災では、緊迫した状況の中で、周囲と話し合いをしながら、必死で考えて解決策を見つけていくことが要求

されました。そうした場面で、きちんと考えることの大事さを改めて感じたのです。

C そうした力をつけて、今後の大津町のために生かしていきたいということですね。

三池 はい。大津町のために何かしたいと思い、この職に就いたので、それを形にして、大津町に還元していきたいと思っています。

道の駅・大津社長（駅長）

取材日 平成28年9月14日

上野賢一^{うえの けんいち}
（56歳）

道の駅・大津の社長（駅長）として、経営と運営をしている上野。

震災時、道の駅で多くの避難者を受け入れ、その支援に尽力した。

全国の道の駅から多くの支援を受け震災を乗り越えてきた。今回の震災を通して、お客様の大切さに改めて気づかされ、感謝の気持ちを具体的に表していること、子どもたちの笑顔を支援することを目標に活動している。

C 前震の時の様子を教えてください。

上野 14日はそんなに被害はありませんでした。お酒の瓶が割れたり、壁面の陳列棚が倒れたりしていましたが、次の日1日かけて片付けて、やれやれ、終わったなという感じでした。明日からまた通常営業ができるなどということでは安心して帰りました。

C 14日の前震時は営業中だったのですか。

上野 レストランは営業していましたが、他の

所は18時30分くらいで終わっていました。レストランにもお客様はなく、不幸中の幸いでした。

C 14日の地震から、片付けを済まされた時の心境を聞かせてください。

上野 15日は営業再開、通常営業に向けて頑張ろうと思っていました。

C そして、その夜、16日になって本震が起きたわけですが、被害はどのようなものだったでしょうか。

上野 14日とは全く違う状況でした。店内あちこちで色々な商品が落ち、天井の一部が壊れ、本当にすごかったです。色々な臭いもしましたね。停電、断水もしていましたから、どこから手をつければ良いか分からないような状況でした。

C 本震が起こった時、上野さんはご自宅でしたか。

上野 自宅でした。すごい揺れで、妻も普段にはない大きな声を出してとても怖がっていました。外に出て初めて身の危険を脱し、生きていて良かったと思います。また、家の前が小さな公園なのですが、そこにはたくさんの人たちが逃げてきていました。「怖かったですね、でも生きていて良かったですね」という話をした覚えがあります。

C ご自宅では家族、ご一緒だったのですか。

上野 家族は長男が県外にいて、妻と次男の3人で暮らしています。

C 地震後は3人で避難をされたということですね。

上野 はい。2階が寝室だったのですが、真っ暗だったので寝室のドアを開け、1階に降り玄関の扉を開け

ました。私は避難口確保が一番だと思って玄関のドアを開けに行ったのですが、妻は私が先に逃げたと思っただけでした。大きな声で「大丈夫、俺がついている」と言えば良かったなと思っています。それを今でも後悔しています。やっぱり言葉が必要ですね。

C 避難はどちらに。

上野 自宅前の公園です。妻も息子も家の中に入りたくないというので公園のベンチに座っていました。

C 地震が起こった時というのは、まずはご家族のことが一番でしたか。

上野 はい。最初はやはり家族のことでしたね。

C 震災後、職場に最初に行かれたのはいつですか。

上野 16日の朝からです。

C ご家族はご自宅におられたということですね。

上野 そうです。家の被害は少しで済みましたので私は完全に仕事優先でした。

C 職場が気になられたでしょう。

上野 私は出向ですので、帰るところはありますが、この道の駅で雇用しているスタッフは、ここが営業で

きないとなると、生活ができなくなるわけですから、非常に気になりました。「俺が守りますから」と言っても頑張らなくてはいけないと思いました。

C 道の駅・大津の営業準備をされたのですね。

上野 19日に断水解除になり、この時点で当駅は電気、水道といったインフラが全部使えるようになりました。道の駅は広い駐車場があり、安心ということでした。たくさんの人が昼夜を問わず避難されていました。店の中も応急処置で営業できるようになり、営業再開を決め、スタッフにもそのように話をしました。

C 営業を開始されたのですか。

上野 その話をしましたら、レストランのオーナーさんから20日の日は通常営業ではなく、豚汁やご飯各1000食分用意して炊き出しをしたいという申し出がありました。私の方は、従業員の生活を守るという役目もあるので、通常の営業を再開したいということで頭がいっぱいでした。しかし、レストランのオーナーさんは、数年前、阿蘇地域での大水害時に周りの人が協力してくれた、だから今度は自分たちが炊き出しを

して支援したいと私に話されました。それを聞いて、私も我に返り、「今は営業よりも炊き出しだな」と思っただけです。それから19日は準備をして、20日にはSSSで炊き出しについて情報発信を行い、たくさんの方が来店されました。温かい豚汁とか丼ものに皆さん「久々に温かいものが食べられた」と喜んでいただきました。

C しばらく、おにぎりやパンばかりだったでしょうからね。

上野 その後、福岡の取引先から「できることはありませんか」との打診がありました。避難している方々の話を聞くと、ブルーシートや水、離乳食、おむつ、生理用品が欲しいということでしたので、福岡地区のドラッグストアなどで大量に買い込んでトラックで直接持参されました。現物を確認し、「3時間後に配布します」という情報をSNSで発信したところ、たくさんの方がいらつしやいました。

C きちんと体制作りができていたのですね。

上野 いえ、最初は失敗したんです。「おむつがあり

ます」というようなことを発信したんです。そうしましたら、並ばれていた方の中にはお年寄りの方もいて、「子ども用だけで大人用はないのか」と怒られました。それでこれは現物を確認して正確な情報発信をしなければ皆さんに迷惑がかかると思いました。その頃は道路状況も悪く、ここに来るにも時間がかかりましたので、物資到着後3時間くらい間を開けないと必要とされている方々へ情報も届かないだろうと思います。3時間後の配布に決めたのです。

C 最初に失敗があつて、その後に体制ができあがつていったということですね。SNSとこの場合はTwitterやFacebookですか。

上野 そうです。情報の更新は、SNSが得意なスタッフの三池が行いました。発信の反響は非常に大きかったです。

C 道の駅の駐車場で車中泊されていた方々は、どういった方々だったのですか。

上野 南阿蘇村の立野地区の方が多かったです。立野

の皆さんは阿蘇大橋が落ちた時の音とか、その時の土砂災害などからの避難で皆さん喉や声が、かれておられました。崩れた時の音は想像を絶する、ものすごいものだったらしいです。その方たちが、怖くてたまらないということで大津に避難されていました。

C こちらに避難されていた方の人数は。

上野 駐車場は約100台駐車できますが、それがいつも満杯になるくらい避難されていました。

C たくさんの方がこちらで車中泊されていたわけですが、被災後の1ヶ月間で大変だったことがあれば教えてください。

上野 駐車場トイレも断水で流れないようになって大変なことになっていましたので、福岡にある九州沖縄道の駅連絡協議会事務局へトイレの状況を報告したところ、連絡協議会の方から国交省へ連絡をしてください。簡易トイレを軽トラックで6台持って来ていただきました。これは非常に助かりました。

C 駐車場に6台設置されたんですか。

上野 そうです。

C 水が出なかった16、17日にも避難されてくる方はたくさんいらしたと思うのですが、その時は、トイレはどうされていたんですか。

上野 流れないので、ティッシュを上に乗せて対応しました。断水解除になったらそれを取り除きトイレがやっと使用できるようになりました。

C 駐車場が満杯ではなくなってきた時期というのはいつ頃でしたか。

上野 そうですね。4月はずっと多かったですけど、5月に入ってから落ち着いてきました。

C その間の支援物資は道の駅連絡協議会を通じて運んできてもらったということですね。

上野 熊本空港が使えなかったのも、千葉県の成田市から熊本に福岡空港経由で救援物資を送るという話があつて、第一陣はうちで引き取りました。これも道の駅連絡協議会からの支援です。そのことは「空の駅から道の駅へ」のタイトルでブログに紹介しました。

C 道の駅ならではの支援ネットワークですね。



道の駅・大津での物資配給の様子

上野 益城町出身で滋賀の道の駅せせらぎの里こちらの平田駅長が、熊本出身だからということでワゴン車1台分、お米や水などを持って来られてそれを配布したこともあります。私たちはお礼も兼ねて、支援物資をいただいたら、それを写真に撮りSNSで物資提供元を載せて情報発信していました。

C 物資は全てこちらで配られたのですか。

上野 そうです。全部道の駅・大津で配りました。最初の20日はたくさんの方がいらつしやいました。後からは「必要な方はお取りください」というような形で大丈夫になりました。

C 上野さんは、この時は支援物資の管理を主に行われていたのですか。

上野 そうです。そして営業再開の準備も同時進行していました。

C 営業を再開しながら物資の配布というのも行われていたのですか。

上野 やはり営業は早く再開したかったので。レストランは炊き出しをしていただきましたので遅れましたが、それ以外のお店は20日からは営業再開にこぎつけました。

C ご苦労されたでしょうね。

上野 必死でした。この時期は、私の長年のサラリーマン人生の中で最も働いた時期だったと思います。営業再開後、大津のローカルヒーロー「グランパワーヒノクニ」のスタッフが大津の子どもたちの笑顔を取り

戻したいということで5月は2回、6月は毎週末でくれ、ヒーローショーがある時は子どもたちがいっぱい集まって子どもがニコニコしているのを見て、「子どもたちの笑顔を支援する」ことを道の駅・大津はこれからも続けていこうと思いました。

C この震災を経験する中で、印象に残ったことを教えてくださいませんか。

上野 最初は営業再開のことばかり考えていました。そんな中で、ボランティアの方、支援物資を届けていただいた方、東北の震災を経験された方から「大丈夫ですか」「何か支援できることはありませんか」とか「支援したいので道の駅・大津の商品を送ってください」と声をかけていただきました。買い物で援助したい、東北の震災時にお世話になったので、恩返ししたいという電話などもいただきました。

C 直接お話があったのですか。

上野 連絡協議会を通じてということもありましたけれど、道の駅の全国大会やその研修バスで隣になった

りした時に名刺交換をした方々から、注文や励ましの

言葉が多数ありました。例えば、宮崎県都城市の道の駅の方から熊本の商品を送って欲しいという連絡がありました。道の駅・都城に商品を送り、それを販売していることを地元の新聞がその様子を掲載し商品が売れる。すると追加の注文が都城からまた来るといったような好循環が複数の道の駅で起り、9月までになりの売り上げがありました。地震の影響で売り上げが2割減になっている中で、道の駅の各地での売り上げは資金繰りの面では本当に助かりました。名刺交換などで出会った人たちからの支援というのは本当に有り難かったです。

C 縁とはこうした危機的状況の時にこそ大事になるのですね。

上野 ええ、そうした方が、なぜ道の駅・大津のことを知っているのかなと思いました。公式のFacebookをご覧になってという方もおられたのですが、名刺のフォルダを見ていたら、「あ、あの時のあの方だ」というのがあって感激しました。今回の震災によって、

人の縁の大切さを改めて理解することになりました。

C 道の駅・大津は、震災前と後ではどういった変化がありますか。

上野 阿蘇あつての道の駅です。立野地区の崩落で57号線が通行止めになり、阿蘇方面に行くにはミルクロード経由となります。かなり渋滞するので阿蘇方面の観光を敬遠されている部分があると思います。その影響もあり、お客様は約2割減で、これが回復するにはまだまだ時間がかかるのではないかなと思います。

C 震災から復興に向けた動きの中で、上野さんが一区切りついたなと感じる時はありましたか。

上野 復興は早いところもあります。しかし阿蘇地域を見ると道路が開通していないので店も休業されているところが多くあります。私自身としては一区切りはまだしてないと思います。うちもまだ援助を受けてどうにか営業しているという感じなのでまだまだこれからという思いが強いですね。

C まだまだこれからということですね。復興に向け

て活動されていく中で、考えなどが整理されていったと思うのですが、考えや行動の変化はありましたか。

上野 震災を経験して「生きていて良かった」と思いました。その思いがあるからでしょうか、地震を契機に、本当に必要はモノは何だろうと考えるようになりました。本質を考えるようになりました。地震は大きな揺れでしたけど色々目覚めさせてもらいました。

C なるほど。

上野 それと、たくさんの人たちが何かの縁を通して、協力したいと言ってくれました。そうしたご恩に感謝し、この経験を色々な方に伝えるのが私の役目かなというのは非常に思いました。見ず知らずの人から励ましてもらったり、お買い物をしていただいたり、それがどれだけ嬉しかったか。自分もそうならなければいけません。

C それ以外には何かありますか。

上野 前よりもお客様との会話が增えました。震災後、営業が苦しい中で、わざわざお店に商品を買いに来てくださるお客様がたくさんいらっしゃいました。

今回の震災で、そういったお客様のご恩で道の駅・大津は支えられているということを強く感じたのです。お客様を大切にしていきたいとの思いで、会話が增えたように思います。

C お客様の大切さを感じたということですね。これからどういったことをやっていかれますか。

上野 地震前、国交省の調査によると、うちの駐車場には年間約170万人の利用がある旨の調査報告がありました。多くはトイレ休憩で利用されると思いますが、こうした方々は、阿蘇へ、あるいは大分へと向かわれる方々だと思います。そうした方が立ち寄ってくださいって道の駅は成り立っているわけですから、来てくださった全ての方へ感謝の意味で、観光や道路情報などを伝えていくことが大切だなと思っています。さらに、来られた方に感謝の気持ちを表したくて、8月は綿菓子を無料で配ることもしました。いらっしゃった方にプレゼントするという形で。お金がない道の駅ですが、来てくださった方に感謝を伝えたい、それを形にしたいと思うようになりました。

C 今後何か計画されていることはありますか。

上野 先ほど「子どもたちの笑顔を支援したい」と申しましたが、それを実践し、お子さんに、くまモンのついたお菓子をプレゼントしたりしています。

C 子どもの笑顔を支援すること、来てくれた人に阿蘇の情報を流していくことなどが道の駅・大津の駅長である上野さんの役割なのですね。

上野 そうですね。そう思います。福岡にも商品販売で、出稼ぎに行きましたが、熊本出身の人にたくさん声をかけていただきました。多くの人たちが助けてくれるのを感じ、日本人は捨てたもんじゃないなと思いました。九州大学の学生さんも手伝ってくれたりして、たくさんの人との出会いがありましたね。地震は大変でしたが、それによって色々勉強になることも多かったです。

C 震災以後、道の駅・大津を引っ張ってこられたわけですが、この間、大切だと感じたことなどはありますか。

上野 レストランのオーナーや支援してくださる方とお話した中で、「早く考えを切り替えることが大事」と話されていました。「とにかく前に進むしかない」

わけで、この言葉が私の刺激になって、頑張っていれば色々な人たちが支援してくれる、頑張っていればいいんだと思うようになり、この言葉を大切にしています。私は道の駅・大津の社長ですので落ち込んではいられません。引っ張っていく立場ですから。道の駅・大津を守るため、従業員を守るため、とにかく前に進もうと思っています。

C 最後に、これからの大津町やご自身に望むことがあれば教えてください。

上野 今回の震災後の取り組みで、当駅は九州沖縄道の駅の総会で表彰していただきました。しかし町との防災協定がしっかりしていれば今回よりもっと支援できただろうと思いますので、この経験を踏まえ、良かったこと、失敗したことを皆さんに伝え今後を活用していかなければと思っています。

大津町地域おこし協力隊 隊員

取材日 平成28年9月12日

齋藤剛司（48歳） さいとう たけし

地域おこし協力隊員として大津町に勤務する齋藤。震災時は、避難所での住民支援を行いながら、日常を早期に取り戻すべく、齋藤自身が足で稼いだ町内のお店情報を、町民に提供することを自分の持ち場として活動していた。できる範囲で泥臭くやっていくことをモットーに、その後も地域おこし協力隊員として町の復興に向けた活動に従事している。

C 齋藤さんは、地域おこし協力隊員として活動されているわけですが、これは具体的にはどういったお仕事でしょうか。

齋藤 地域おこし協力隊というのは、地域の外から来て、その地域に定住しながら、地域の協力活動を行い地域の強化を図っていく事を目的とした、総務省が創設した制度です。全国で現在3000人以上が活動していて移住定住促進や地域のPR、行事を通してコ

ミュニティ作りなどしていますが、私は主に特産品の開発や大津町でとれる農産物を活用した産業の発展を目的とした活動を町から命じられています。また、からいもフェスティバルや朝市など町内の行事や催事のお手伝いもやっています。震災があつてからは復興のお手伝いをしています。

C それでは震災についてお尋ねしたいと思います。前震が起きた時のことをお聞かせください。

齋藤 前震は21時26分、家で妻と食事をしていました。最初の大きな揺れが収まるのを待って、駐車場に出ました。私は元々関東の人間で、東日本大震災の際、前の職場で相当な揺れを経験しました。それがあったので家の中の家具は転倒防止など耐震対策をしていて、そのおかげで家財道具が散乱しておらず、すぐに外に出ることができました。外に出た後、「役場の様子を見に行ってくる」と妻に伝え、役場に向かいました。すでに多くの職員さんが集まってきました。

C 役場の様子はいかがでしたか。

齋藤 夜でしたので外観自体はそれほどダメージがあるようには見えませんでした。この時はまだ電気も来ていたので建物の中に入っていくと、書類棚は倒れ書類も床に散乱し壁も至る所で剥がれていました。建物と建物の連結部分には足が入るくらいの隙間もできているなど、かなり深刻な状況で危険な感じがしました。地震の揺れのせいで防火扉が閉まっていた所もあったので、避難の事も考えて職員と一緒に防火扉を開けて回りました。

C その後どうされましたか。

齋藤 職員は、担当別に各地区の被害状況の把握などの業務を開始していましたので、私が手伝えることがないかなと思っていた矢先に、中央公園にある子育て・健診センター（以下健診センター）の担当職員が避難所を開設する、と宣言されたので「手伝わせてください」とお願いしてついていきました。その職員の方とはそれまで面識もなく、多分職員の方も「誰だこの人は」と思われたのではないのでしょうか。その職員の方が、テキパキと指示を出されるのに従い、施設内の電気をつけて回ったり、備蓄倉庫から毛布や緊急用具を出すお手伝いをしました。

C 多くの避難者が来られましたか。

齋藤 続々と集まってきた次第に足の踏み場もなくなりました。エレベーターの廊下前で寝るお子さんとか、駐車場にもどろんどろん車が入ってきて満車になりました。入りきれない車は近隣のスーパーや百円ショップの駐車場にも停められていたように思います。

C 14日の深夜から15日にかけて健診センターの避難

所のお手伝いをされていたのですね。

齋藤 15日になってかなり落ち着きました。日が昇るに従って、家の様子を見に帰られる方が多くなり避難者はかなり減っていました。私は、配給されたアルファ米をおぼつかない手つきでおにぎりを握って配ったりしていました。17時ぐらいいまで健診センターにいて、「一旦家に戻ります」と職員の方に伝え、妻と自宅に戻り夕食を食べ、疲れていたので早々に寝ることにしました。ただ余震が怖かったので廊下の電気はつけっぱなしにし、洋服のまま床にきました。そして真夜中の1時を過ぎて本震が来たわけです。今でも、電気が消える瞬間の「パーン」というような破裂音が忘れられません。幸いにもこの時も家具類が倒れたりはしなかったのですが、揺れが一旦収まるのを待ち、妻に「外に逃げるぞ」と言って、非常持ち出し袋を持って出て、集合住宅の駐車場で他の住民の方たちと一緒に、午前2時ぐらいいまでいました。次々と揺れが来る中、みんなで自分たちの住む集合住宅をぼーっと見ていたのが今考えると少し不思議に思えます。

C その後は何をされていたのですか。

齋藤 しばらくして気を取り直し、「避難の方がまた大勢くるだろうから健診センターに行ってくるよ」と妻に言って健診センターに行きました。

C どのような状況でしたか。

齋藤 前日以上に人が押し寄せ、職員の方も対応におおわらわの様でした。健診センターの建物は地下にたくさん杭が打ってあって地震には強いと聞いていたのですが、強い余震が何度も続き、窓ガラスが割れるのでは、と心配で緊急速報が流れる度に窓の近くにいる避難者に「窓から離れて」というのを散々繰り返し叫んでいました。また、避難所となった健診センターのある中央公園は、災害時の屋外避難場所となっていて、簡易トイレも設置できるようになっていますが真っ暗な中、小さい懐中電灯の明かりを頼りに組み立て図を見ながら、職員とトイレのテントを悪戦苦闘しながら組み立てました。そんな状況のまま明け方まで余震に怯えながら過ごしていました。

C 健診センターにその後もずっとおられましたか。

齋藤 私は商業観光課に席を置いてもらっていて、先にお話した通り、6次産業の発展や、特産品開発が仕事なのですが、職場である庁舎自体が地震により立ち入れる状態ではないですし、役場の職員の方も災害対策にかかりつきり、農家や事業者の方たちもご自身の家や店舗、工場の復旧で先々の話などできる状況でなかったのです。そのため、5月8日のゴールデンウィークが明けるとまで健診センターの避難所のお手伝いをしました。毎日、朝8時半から17時ぐらいまではここにいたというような状況ですね。ただ、合間に旧道にある大津町交流会館（まちづくり交流センター）の方でもお手伝いもしていました。ここは自主避難所となっていました。公式の避難所に入りきれない方や京都から旅行で大津町に来られていた方が行き場がなくなつて、ここに数日間避難されていました。全部で10人近い方が滞在されていたと思います。また、まちづくり交流センターは民間支援物資の集積場所ともなっていました。東熊本青年会議所の皆さんと、大津町商工会青年部の方たちが手を組んで、全国青年会議所のネットワークで集まった支援物資を大

津町のみならず、県内の被災地にご自分たちで運ばれ配布されていました。他県ナンバーの様々なエリアの青年会議所の方たちが乗ったワゴン車やトラックが次々と横付けされ物資が届く様は非常に感動的であり、勇気をもらいました。更に、まちづくり交流センターは本震から一週間近くの間、炊き出しの場所ともなっていました。近隣の飲食店の経営者の方々が暫くはお店の営業ができないからと、ストックされていた食材を提供してくださったり、農家の方や養豚農家の方が、炊き出しするならと野菜やお肉を提供してくださり、それを本職の調理人の方がまちづくり交流センターの調理場で様々な料理を延々と作ってください、東熊本青年会議所の方がふるまいをされていました。町も防災無線で告知してくださったり、物資を提供してくれ、無線を聞いて来られた方に食べ物以外にも必要な物を差し上げたりできました。道が渋滞するほど、多数の方が来られて、非常に喜ばれていたようです。温かい食べ物を目当てに来られる方が殆どだったとは思いますが、人が大勢集まっている所にいるだけ

で一人ではないという安心感も提供できたような気がします。避難所にいる方だけではなく、ご自宅にいても何らかの支援が必要な方に対してサポートできた意義は大きいのではないのでしょうか。公的な施設を活用し官民連携して被災住民の支援にあたったことは素晴らしい事例だったのではないかと思います。

C 地震に対する準備で必要なことは何でしょう。

齋藤 私に關して言えば、家具や家電に突っ張り棒や耐震ジェルマットを設置していたのが良かったなと思います。また電池でつく照明を枕元に置いていたのも役に立ちました。家財道具が散乱しておらずそれで暗くても足元を照らしてパッと逃げられた。一番怖いのは、建物から外に脱出できなくなることです。建物の耐震性が一番大事ですが、その次に建物から外にすぐに逃げられることではないでしょうか。非常持ち出し袋の準備も不可欠でしょう。私の場合、東日本大震災以来、水や非常食などをバッグに入れて夫婦2人分の用意しており、すぐに持ち出せるようにしていたことが良かったと思っています。最初の3日間さえ乗り

越えれば、あとは支援で何とかなります。3日乗り切るための準備の必要性を実際に体験して感じました。

C 水を溜めるなどの対策は。

齋藤 水は浴槽に常に溜めていました。それはもうずっと大津町に来る前の関東にいた時から水だけは溜めておこうと。

C 生活用水ですね。

齋藤 そう。水が止まった時、飲み水は何らかの形で入手できるのですが、トイレを流す水というのは避難所の健診センターでもとても苦労しました。井戸水は健診センターでも使えるようにはなっていたのですが、枯渇するんです、あれだけ人がいて大量に使うと。たまたま見回りに来られた消防団の方に職員が相談すると中央公園内の公衆トイレの前に小さい貯水プールを作ってくださり定期的に水を補充してくれたので安心できました。まちづくり交流センターも水が使えなくなつて、最終的にはペットボトルのミネラルウォーターをトイレの水に少しですが避難されている方のために提供していたのです。これはすごく罪悪感があり

ました。だからとにかく飲み水以外の生活用水をどうストックしておくか、或いは用水路に流れている水をどう汲んでくるか、これは大事だと感じました。

C 5月8日まで避難所などの支援に奔走されていたわけですが、その間、ご自身はどう生活されていたのですか。

齋藤 電気や水が来ておらず、家には帰れないので、私たち夫婦も4日間ぐらいこの避難所で生活していました。疲れて横になると漠然とですが、「これからどうなっちゃうんだろう」という不安がありました。

C どういうことでしょうか。

齋藤 今後、「自分たち夫婦はどうなっちゃうんだろうなあ」ということであったり、「町はどうなるのだろう」といった不安です。先ほど話したように町は地震で「特産品開発」、「6次産業」どころじゃなくなっていたわけです。でも、私はそれを目的に雇われたわけではなく、果たしてこれから「大津町で必要とされて生活しているのかな」ということを思いました。

C 齋藤さんの場合、町がどうなるかということ自体が、自身のことと直結されていたのですね。

齋藤 まさかこんな大きな地震が2回も来るとは普通思いませんからね。それでそんな不安を感じていたのですが、それに比べて、熊本の人の明るいこと、前向きであること、起こったことはしょうがないというようないやめえ方をしておられる。「起きちゃったらしょうがないね。じゃあこれからどうしようか」というような空気感というのがありました。それに救われた気分でした。

C それは県民性みたいなものでしょうか。

齋藤 全部が全部じゃないにせよ、そういう比較的前向きに捉える方が多いというのは九州の人の特性なのかもしれません。そうした空気に接していて不安をかなり解消できたように思います。それと、健診センターには小さい子どもさんがたくさんいましたので、屈託なく過ごしている子どもさんの笑顔にも救われたっていうのもありました。

C それでは次に、復興に向けた歩みについてお聞きしたいと思います。復興に向けて齋藤さん自身が一区切りついたと思う時期や出来事はありましたか。

齋藤 厳密には一区切りついていないと思っていますが、強いて言えば、5月4日です。避難所やまちづくり交流センターのお手伝いをしながら、並行して始めたのが、町内のお店情報の発信です。避難所も含め町内の方にお店の開店状況を提供しようと、町内を回って調べていたんです。それを続けていて、その5月4日の時点で、大津町内の大体のお店が開き始めたんですよね。この頃になるとカラオケ屋さん、レンタルビデオ屋さんも開きだしました。こうしたある意味で生活必需には関係ないお店まで開き始めたところで、役目を終えたと思う、お店情報の調査と発信を停止したのです。それで、5月4日っていうのが私の中の活動の一区切りしたところだったと思います。

C お店情報を発信されていたFacebookは齋藤さんが更新されていたのですか。

齋藤 私ともう1人普段は観光協会にいる地域おこし

協力隊の同僚の渡部さんと2人で作成していました。

C お店情報を集めて拡散というのは、自ら訪ねて行って、自分で見たものを伝えるという形を取られていたということですね。

齋藤 そうです。全ては回りきれないので中には電話で確認したものもあります。ですがイオン、ナフコ、コスモス、ダイレックス、ヒロセ、ミカエル、鮮ど市場といったお店には自分の目で見て「今日は何が増えている」とか、お店の人に「今日何を買いに来られる方が多いですか」といったことを聞くとやはり違うんです、日によって。「ビニールシートが今ないんだよね」とか、「明日になれば入るんだよね」とか、それ以外には「おむつのサイズが入りにくい」とかそういう情報はやはり実際に行ってみないと分かりません。

C なるほど、そうですね。

齋藤 地震直後の数日、町内で一番早く開店したドラッグストアでの行列が凄まじかった。

C そうなんですか。

齋藤 もうずらーつと並んだ。これはもう精神的な

不安感からですよ。多分あるはずなんです、トイレトペーパーとか、家の中には。だけど「次、なくなつたらどうしよう」っていう不安感で並んでいたのではないでしょう。そして、この行列を見てさらにまた行列が増える。昔のオイルショックじゃないですけど。これはまずいな、と。デマも流れているかもしれないし、正確な情報を伝えたいと思ったので、お店情報の発信を始めたのです。

Ｃ 混乱を避けるための正確な情報の発信だったわけですね。発信はFacebookだけだったのですか。

齋藤 ネットで情報を収集している人も多かったけれど、そうでない人もおられるので、Facebookで読んでいる方に「この情報をプリントアウトして家の外の、人の目につく所に貼ってください」とお願いの文言を一緒に書いていました。その後は、徐々に役場の職員の中でも「これは使えるよ」ってことになったように、各避難所に届ける書類の中にこのお店情報を印刷して入れてもらえるようになりました。

Ｃ 避難所の人は情報を得る手段が限定されているで

しょうから、こういう情報をもらえることの意味は大きいかと思います。

齋藤 東日本大震災の時もそうだったんですけど、地震が起きた直後にコンビニに電池を買いに行ったのですが、それから30分経って同じ店に行くと、もう電池類は何もありませんでした。懐中電灯や携帯の充電器なども一斉になくなっていました。ただですね、少し足を延ばせば実はあつたりするんですよ。みんな分かります。コンビニとかには行くんですけどちょっと離れた町の電気屋さんには、まだ置いてあつたりしたのです。そうした経験から、情報難民になっちゃいけないっていうのがあつてですね。

Ｃ 役場を通して、情報が各避難所にも行くようになったということですね。

齋藤 そうです。これは個人でやるより格段に拡散力が違います。もう一つ心がけたのが、お酒を飲ませるお店の情報。スーパーやドラッグストアといった生活用品のお店だけでなく、居酒屋さんとか飲食店も開いているっていうのをできるだけ伝えたかった。普通

の生活が戻ってきていることを伝えなかったし、町の経済を普通に戻したかったです。

C どういうことですか

齋藤 地震が起こると国や民間から様々な支援物資が届きますよね。その様な支援があつて非常時を乗り越えられているわけですが、だんだん貰うことに慣れていく自分があるわけです。でも地元のお店はどんどん開いているのです。そのお店は地元の人が経営していたり雇われています。お店で物を買ったり、一杯飲んだりすることで地元にお金落ちて経済が回っていくんですよ。もちろん震災で被災し明日の生活もままならない方は支援を受けるべきですが、生活に支障のない方は日常の消費サイクルに意識を変えないと、町の経済も回らないと思つたからです。

C それではお店情報の発信が必要だと考えられたのですね。

齋藤 支援から普通の生活に戻っていくには、自分自身に必要なものを購入していくことが必要でしょう。さらに気持ちに少し余裕がでたら娯楽にも気持ち

を回していって良いのだと思います。そのためにカラオケもやっているよ、TSUTAYAのDVDも借りられるよとか、ですね。

C 日常に戻っていることを町民の皆さんに分かつていただくために、ということですね。

齋藤 そうやって普通に外食もしましょう。仕事が終わったら一杯飲んで酔っ払いましょう。そうしたらタクシー会社や車の代行業者に仕事が生まれるわけです。そういう風に経済を、お金を回していくというのが大切だと思います。そういえば関西方面から災害支援に来てくださったある自治体職員の方とお話したのです。災害支援の出動命令が出た際、その職員の上司から、「大津町に行ったら、夜は遠慮せず町のお店で飲み食いしてお金を使つて来い。それも支援だから。」と言われて来たそうです。その上司の方は阪神・淡路大震災を経験された方だったそうですが、体験上分かつてらしたのかもしれないですね。

C 別の質問をします。震災以後、齋藤さん自身の考

え方や行動に変化が生じた部分があったでしうか。

齋藤 はい。大津町役場はすごく古い庁舎でした。何回も建て直しの話があったらしいのですが、その度に小学校の耐震など他の優先順位の高いものに予算を充てていたそうなのです。立派な考えだなあと思いましたよ。だけど、こうして震災が発生すると、本来災害時に司令部にならなきゃいけないところが使えなくなっちゃったわけですよ。これは非常に残念なことです。住民の抛り所にならなきゃならないところですから。そう考えると、いざという時に物質的にも精神的にも頼れるような災害に強い庁舎つていうのが絶対に必要なんだつていうのを今回の震災で思いました。

C それ以外にはありますか。

齋藤 もう一つは危機管理のことです。大津町はから芋（さつまいも）が有名なのですが、その貯蔵庫が震災でたくさん壊れてしまいました。大津町のから芋の貯蔵庫は結構有名なんですよ。ご存知ですか。

C 詳しく教えてもらえますか。

齋藤 基本的にはコンクリ造りで煙突がある、から芋専用の倉庫です。各からいも農家さんが畑の近くに設けておられます。から芋は収穫直後は甘みが少ないので、この貯蔵庫の中で60日ぐらい熟成させます。貯蔵庫は、湿度・温度管理や芋の出すガスの排出が煙突を通してできるんです。ところがこういう大事な施設が多く壊れてしまった。貯蔵し、熟成させ、ワインみたいに寝かせて甘みを増した芋がウリなわけです。ところが貯蔵する場所がないために甘みが足りないまま出荷せざるを得なかったりするわけですね。

C 大津町のから芋の特徴がなくなりますよね。

齋藤 その通りです。こういう状況を体験したことで、から芋が有名だけではダメではないかと思いました。から芋がダメな時の危機管理のことを考えなければいけないと思うようになりました。大津に来てからから芋を使ったお土産、例えばお饅頭やケーキだったりというのを一生懸命考えなければと思っていましたけど、震災を契機に、生芋だけでなく、裏ごししたペーストにして冷凍保存して通年出荷できるような、危機

管理というのが大事だと思いました。

C それ以外に考え方が変わったことはありませんか。

齋藤 ある意味ゼロからもう一度立ち上げだなど。今までのように、から芋が有名だからから芋でいいではなく、から芋がダメだった場合も考え、ゼロベースで、特産物も含めてですけど、もう一度、まちづくりを見直す必要性であるのだろうなあと思いました。

C まちづくりから見直すというのは、地域おこし協力隊の隊員の立場もあつてそう考えられたということでしょうか。

齋藤 そうですね。もともとそれは私だけでなく、役場の職員や大津を愛する住民の方も同じように思っているんじゃないでしょうか。

C 最後に、これから自分自身や、大津町に望むこと、やっていきたいことなどをお聞かせください。

齋藤 西原村、益城町の方が被害は大きいことは事実ですが大津も相当深刻なダメージがありました。けどみんな遠慮するんです大津町の人たちは。「西原・



地震で壊れた、から芋貯蔵庫

益城よりはまだマシだから」と言つて。でも自宅で風呂も入れなかったり、納屋が崩れかけたままで生活していたりする人もかなり多いのです。そういう人たちをお手伝いしていかねければと思っています。私みたいなよそ者が、あまり声を出さない、出せない人たち

の代わりに、声を出していった方が良いのではないかな
と思っっています。それと、地域おこし協力隊で6月か
ら「がんばれ！熊本・大津町応援セット」を始めまし
た。南阿蘇村など、県内あちこちで観光協会や物産振
興会社がやっているのですが、大津町では我々が主体
となつてやつていつています。これを通して町の事業
者とのコミュニケーションができるようになった。さ
らにこれを発展させて今後ふるさと納税の返礼品や町
オリジナルの通販サイトでの販売に応用できないか
と。震災を契機に応援セットでの経験を今後の復興
へ、そしてさらなる発展へ向けた枠組み移行させてい
くのが私の仕事だろうなと思っっています。特に、これ
は当初のミッションである特産品開発や農産業発展に
非常に密接に関わることもありますから。

C 町内の事業者のことも考えながらこれから対応し
なければならぬということですね。

齋藤 どんどんお手伝いしたいと思っっています。それ
と私と同じ様に町の復興に向けて活動している有志と
話し合い計画しているのですが、主に仮設住宅に入っ

ている方々に向け、から芋掘りをやつてはどうかと
思っっています。東日本大震災の時もそうだったので
が仮設住宅だと知らない人同士が隣り合うことにな
り、会話不足で引きこもりになることも多いそうで
す。特に年配の方々が。そういった方々をから芋掘り
の様な催しで外に出てきてもらつてはどうかと。そう
することで新たな知り合いができて地域づくりにも繋
がるでしょうから。大津町の場合、南阿蘇村の立野地
区の人と一緒に仮設住宅もあるのでそうしたところでは
新たな地域づくりを促すことが非常に大切だと思いま
す。そのためのコミュニケーションの場として、岩坂
という場所です。今度9月25日から芋掘りをやるん
です。から芋掘りを楽しんで、焼き芋も食べてもら
い、仲良くなつてもらえたらなと思っっています。

C 今後はどうされていきますか。

齋藤 できる範囲の部分からちよこちよこお手伝いし
ていくつもりです。あんまり立派なこと言つてもしよ
うがないですからね。泥臭くやつていきます。

大津町消防団第6分団長

取材日 平成28年11月8日

ふるしょうまさひろ
古庄政広（44歳）

大津町消防団の第6分団長として、普段から地域や住民に目を向け、地域コミュニティを強化する役割を担っていた古庄。

震災時は、避難所開設や炊き出し、土嚢作りを消防団で率先して行うことを、自分の持ち場として活動していた。日常的に、地域の問題の解決に向き合っていたからこそ、震災後すぐに、今一番何が必要かを見極めて、住民のために行動することができた。

C 前震時の状況や様子を教えてください。

古庄 発生してすぐ各団員に招集をかけました。全員で58名います。ただ、町外に住んでいる団員も結構いるので、あの時集まったのは20名くらいでした。

C 前震直後にですか。

古庄 直後に。私の判断で電話をして、とりあえず各地区の見回りや、けが人がいないかどうかの確認ですね。

C どういった連絡網になっているのですか。

古庄 私は分団長で、その下に幹部がいて、各地区に各班長がいます。私が幹部の一人の副分団長に電話して、そこから電話が各団員に流れるシステムです。

C 前震が起った時は、ご自宅の方におられたのですか。

古庄 自宅で家族と一緒にでした。両親と祖母、妻と3人の子どもがいました。

C ご家族の安全確保が先かなと思ったのですが、すぐ電話をかけられたんですね。

古庄 消防団の宿命というか、家族よりも町に対して活動を、という風習が昔からあったものですから。

C その後は何をされたのですか。

古庄 宮本地区の宮本地区農業研修センターというところを公民館と共有で消防の詰所として使っているのですが、そこを拠点に、見回りをしている各団員の報告を待っていました。

C 翌朝までずっと公民館におられたのですか。

古庄 そうです。私と幹部と宮本地区の区長さんがいきました。

C その時の報告はどのようなものがあげられてくるのですか。

古庄 まず、けが人などがないかですね。暗くて周辺の被害状況はなかなか把握できないわけですが、まず人命です。各団員が一軒一軒見て回ります。

C 朝まで待機をした後、ご自宅の方に一旦帰られましたか。

古庄 一旦帰りました。15日も朝から仕事があったので、帰ったのは7時30分くらいだと思います。公民館で一旦解散となりましたが、その時に出したのが避難所開設をやってみないかという話でした。当初は役場が避難所を開設しますって話でしたが、公民館を解散した後、7分団の分団長と少し話して、「じゃあ消防で避難所を試験的に開けてみようか」ということになりました。

C その公民館ですか。

古庄 指定避難所の大津北小学校の体育館です。その時は軽い気持ちでした。その時はまさか本震がくるとは思っていませんでしたから。

C ということは、15日の時点で大津北小学校の体育館を避難所にするとしていたんですね。

古庄 そうです。14日はまだでしたが、役場から、避難所を開設しますという話はもらっていたので、翌日15日の夜からでも開設しようと思いました。

C 役場職員が来る前にですか。

古庄 そうです。役場の職員の負担にならないように

しよう、ということが自分の頭の中にあつたものですから。

C どんな思いで開設しようと思われましたか。

古庄 そんなに深くは考えていませんでした。もうはつきり言つて、避難所にはそんなに来る方はいらっしゃらなかつたので、今後ともまあ来ないだろうと。本当に軽い気持ちでした。知識としては、災害が起こった時には、このようにしようというのはあつたものですから、それでまあ試験的にですね。

C 避難所を開設しようとして、15日の夜、本震が起こる前も体育館にいらつしやつたんですか。

古庄 分団には班がありますので、1日ごとに担当班を決めまして、15日は4名が泊まりの当番でした。私はその夜の20時か21時に避難所に行つて様子を見てから、自宅に戻りました。

C 自宅で震度6強の本震に襲われたのですね。その時の状況や様子をお聞かせください。

古庄 飛び起きてまず、家族全員を車に乗せました。

そして、大津北小学校は避難所が開いていると分かつていましたので、すぐにそちらに向かいました。

C 避難所ではどうされましたか。

古庄 避難所にはもう結構車が入つて来ていました。それでももうとりあえずは交通整備です。運動場になるべく車を詰めてもらうように誘導して、あとは何名かでもう一度地域を見回つてもらいました。

C 交通整備は泊まりでいた4名の方と一緒にですか。

古庄 そうですね、私含めて5名ですね。そうして他の団員も何名か来しました。

C その後は、消防の分団長として行動されていくわけですね。

古庄 家族には申し訳ないんですけど、消防団の方が多くの比重を占めていました。家族の安否は分かっていたので。もしも家族の安否が分からなければ、ひよつとすると少し違う行動に出ていたかもしれないですね。

C その状況で何か大変だったことはありますか。

古庄 一番大変という心配だったのが古城区、米山区です。電話が繋がらず、なかなかその班長と連絡が取れなかったんです。だからもう、とりあえず、積載車で団員に見に行ってもらいました。そうしたら、古城区の皆さん、その頃にちょうど避難して来られたんです。米山区の皆さんはとりあえず道路沿いに避難している状態でした。車の中ですね。

C その時の心境はどのようなものだったのですか。
古庄 混乱して焦っていたのは間違いないのですが、それでも色々なことを考えましたね。この後、消防団としてどんな動きをしようかとかです。マニュアルがあるわけでもありませんので。

C そうして朝を迎えたというわけですか。

古庄 避難者の車の出入りも落ち着いたので、16日の夜にはとりあえず解散しました。一旦解散し、翌朝17日の6時か6時半に再度集合しました。

C 古庄さん自身は、解散後、ご家族と大津北小学校におられたのですか。

古庄 大津北小学校の車の中にいました。一応体育館

も開けてはいたのですが、最初のうちは夜中に余震もあったので皆さん入りがらなかったですね。避難所は、消防の発電機を使って照らしていたのですが、避難者はなかなか入らなかったですね。



大津町消防団積載車

C 車は何台くらいありましたか。

古庄 もういっぱいでした。ぎゅうぎゅうに詰めていて、出る時はバックでしか出られない状況でした。

C 誘導大変そうですね。古庄さんは、現場も見ながら、他の班長と連絡を取り合ったりしながらの活動だったんですね。

古庄 はい。そうですね。

C 17日朝、消防団で集まられてどんなことをされたのですか。

古庄 電気と水が止まっていました。電気は発電機で起こせるので、問題は水の確保でした。とりあえず、町の方に要請して、据え置き給水器のようなものを持ってきてもらったのですが、もう全く水が足りなかったです。1時間も経たないうちに空になった状態でした。

C どうされたのですか。

古庄 幸い、近くに湧水のある場所があって、そこで汲んでくることにしました。ただ、見に行ったらちよつと濁っていたんです。それで、私たちの地区の隣の地

区に矢護川という地区があるんですけど、その分団長さんにお願ひして別の湧水の間所を教へてもらいました。消防団員で、あるだけの容器を持て、色々なものにとりあえず、汲みました。そして、軽トラで何回も何回もピストン輸送ですよ。その日は6回くらい繰り返したのかな。それで結構な人数が必要でした。

C 水がないとどうしようもないですね。

古庄 そうです。ただ、湧水は衛生的にあまりよくないかなとも思ったのですけど、飲めないよりは良いかなど。あとは食料。物資が来るのは分かっていたのですけど、いつ来るのかと聞いてもよく分からない。大津町全体が混乱していましたので。それもあり、炊き出しをしようかという話が出ました。

C 炊き出しについて詳しくお聞かせください。

古庄 全て私たちが作るの、おにぎりだけです。米も団員に呼びかけて、持ち寄ってもらって、あと炊飯器も。

C 電気は発電機を使つてですね。

古庄　そうです。それで、私たちはあまりおにぎりを握ったことがなくて、妻たちにお願いました。

C　その炊き出しを運営されていたのは主に古庄さんだったのですか。

古庄　そうです。消防が主体でやったことですので。とりあえずみんなが食べればいいかということをやっていました。役場に頼らず、自分たちで動いていかなと、という気持ちもあつたものですから。

C　炊き出しはどの程度の期間されたんですか。

古庄　炊き出しする準備はいつでもできていたのですが、ある程度、食料の確保ができてきたので、実際したのはその日だけだったかな。まあ食料が足りなければやろうと考えていました。

C　お話を伺っていると、震災以後、消防団は非常にスムーズに動いているように感じました。普段からの訓練の成果ということでしょうか。

古庄　基本訓練は年に1、2回ですが、地元なので、上下関係もしっかりしているし、ほとんどが顔見知り

です。さらに仲良くもなっていますから。そういうこともあつて、災害時でも連携は取れるんです。

C　地震が起きても指示なしで動けるような連携ができていたのですね。ところで、古庄さんも含め、消防団の方たちは、家族のためにというよりは、地域のために行動された部分が大きいと思うんですが、そういった活動の原動力となつたものって何だと思われるすか。

古庄　原動力というか、もう体に染みついたものです。やはり、私の場合は先輩からずっと教えられてきた部分が大きいです。

C　消防団員としてのあり方を学ばれてきたことが、「住民のために」という行動に繋がっているわけですね。

古庄　消防団は、普段、住民の皆さんから補助金をいただいたり、色々していただいていますから。

C　消防団と住民が直接触れ合うのは、普段はどんな時ですか。

古庄　年末警戒の時、それ以外には、火災予防週間と

というのが春と秋の年に2回あるので、そういった時ぐらいいです。

C 今回、まさかこんなに大きな災害が起きるとは予想できていなかったですよね。

古庄 もちろん、そうです。

C この大きな震災を受けて、その中で活動してきた地元消防団は、地域の皆さんに相当感謝されていると思います。「俺らがやらなきゃいけない」といった気持ちでしたか。

古庄 そういう気持ちが多少はあったでしょうね。ただ、避難所などについてもですが、消防団が主になるのもどうかかっていうのが一つありました。6分団はその中にいくつか地区を抱えているのですが、地区によって要望が違ふこともあり、そうなった時、消防団が各地区から要望を集めると混乱することがあります。その意味で、地区が一つにまとまってもらい、区長さんたちが主導しているところを、その横で消防団がサポートしていくのが一番理想だったんじゃないか

なと思いますね。

C 本来は区長さんをリーダーに、地区が避難所運営などの活動をして、そのサポートを消防団が行うような形ですね。

古庄 そうです。消防団は、サポートの方が上手いくんじやないかなと思っています。今回、消防団主導で運営したことで問題も生じたんです。物資の問題です。先ほど、食料は足りたと話しましたが、物資は、避難所の体育館にいる避難者数しか来ないわけです。そうなると、避難所から少し離れたところに車で避難されている方やその他の自主避難所に避難される方の分はないわけです。でも、両者に差をつけることは難しい。そうなると車中泊の方も含め全部で食料はどれだけ必要ですかと、役場から聞かれた時に、我々消防団ではなかなか答えにくかった。各区長さんはそれぞれ把握しているでしょうが、全体の数が消防団では、把握できていませんでした。

C なるほど。

古庄 後で思ったことが、区長の皆さんと1日1回、

震災期間中は、強制的でも良いので会議をするなりして、随時状況の変化を共有しておく必要があったなと思います。今後の課題です。

C 地域住民との避難所生活は円滑にやっていけたか。

古庄 避難所運営はそこに住む住民がやった方が上手くいくのかなと思いました。一つの事例ですが、少し年配の方が愚痴っぽい言葉を発していた時がありました。その時、知り合いだったら寄り添えるじゃないですか。話を聞くだけでもだいぶ和らぎますよね。そういうところはやはり地元のよく知っている人が携わった方が良いのかなと思いました。他の地区で、そういった点で問題が起こった話を少し聞いていました。

C 震災対応中の消防団の主な活動は見回りですか。

古庄 そうです。主に見回りです。2、3日すると、他県車が入ってきて良からぬ噂が回ったりして、結構住民の方も心配されていたので、夜中までずっと警戒していました。

C 震災対応中は眠る時間もなかったのではないですか。

古庄 避難所での待機は消防団は24時までと決めています、その後は当番に任せて帰るようにしていましたので睡眠はなんとか取れていました。

C 消防団員を指揮して行くのは大変でしたか。

古庄 そうですね。やはりある程度期間が長くなると、疲労とか、疲労から来る色々な不満とかが団員の中に出てきますから。

C その時に、分団長として気をつけていたことは何ですか。ここは意識したとかいうことはありますか。

古庄 あまり話が上手い方ではないので、指示を出す時にぶれないこと、それを注意しています。指示の方向性がころころ変わると、団員が混乱しますのです。

C 震災以降、古庄さんが一区切りついたなと思われる出来事と時期はありますか。

古庄 5月いっぱい避難所が閉鎖した時点です。それと、その次の週のことですが、土嚢が400あつ

たんですけど、それを今回の地震で全部使ってしまったので、6月5日に消防団で作ったのです。それが一つの区切りであったと感じます。

C 土嚢はどこに使われたんですか。

古庄 道路の亀裂が入っているところをそのままにしておくと水が入って崩れてしまうので、そこにシートを張って、土嚢を乗せるんです。

C 土嚢は普段から準備されているのですか。

古庄 私の分団はそう決めています。基本は水害で使うのがほとんどなのですが、全部出したので、作っておかないと、梅雨シーズンに入りますので。

C この強烈な震災を経験された前後で、考え方や行動が変わりましたか。

古庄 私にとつては今回の活動も、今まで通りのことなので変わったことはないのですが……。一つ言うなら、地区として防災組織を作ろうというとは思いませんでした。私は平川地区に住んでいます、平川地区で防災組織が必要なのではないかと思いました。すべて行

政任せでは難しいですから。その組織が、今度立ち上がります。

C 震災の経験を踏まえ、足元をきちんと作ってこういうことですよ。古庄さん以外、周りの変化は見られませんでしたか。

古庄 以前は、なかなか出てこない団員もいたのですが、震災後気持ちが変わったのでしよう、出て来るようになりました。嬉しいですよ。

C 消防団は無償というか、全て自分の意志で行動されているような印象を持ったのですが、なぜそのような気持ちになって、そのような行動を起こせるのでしょうか。

古庄 消防団に入っている人は、逆境になると燃えるタイプなんです。『やってやろう』という気持ちになるといか、負けん気が強いとか。困難があった時に「じゃあやってやろう」という気持ちになるんですよ。私なりの言葉で言うと、消防団ってバカなことでもできるんですよ。バカなことができるような人の方がそういう時には役に立つんですよ。大変でし

たが、そうした消防団員のおかげできつい時にも笑い声が絶えませんでした。

C 役場職員は持ち場が決められていたからその持ち場を全うするしかなかったのですが、民間の方はそれと少し違い、自分で持ち場を探しに行かれた方が見受けられました。古庄さんはそのどちらでもないなと感じました。

古庄 消防団の場合は、元々地元に住んでいる人ばかりなので、本当に地元が好きなんです。だから「地元のために」という気持ちで本当に強いと思いますね。特に消防団は大津町には8分団ありますが、その中でも私たちの6分団は、昔から伝統的に、何でも負けるのが嫌いなんですよ。例えば、操法大会なんかでも勝ちたいという思いが強いですね。一生懸命練習しますしね。それも一つの地元愛だと思うので、地元に対しては無償でできるんですよ。自分の地区だからこそできるっていうのもあると思います。

C これから古庄さんが大津町に望むことや自分自身で望むことはありますか。

古庄 そうですね。私が消防団にいるのも任期的に平成29年3月末までとなります。それで、分団長としての仕事は終わるんですけども、その後は一住民に戻ります。その中で、OBとして協力できる部分は協力していきたいと思っています。今回の経験を生かしつつ。今も先輩方に協力してもらっていますので。

C 最後に消防団の役割は、地域にとって何だと思われますか。

古庄 昔から言われていますけど、消防団は地域の中心だと思っています。年代的にも一番元気がある年代ということもあり、何かイベントをするにしても中心に入っていますので。田舎ほど消防団の役割は大きいだろうと思っています。

大津町外牧地区 区長

取材日 平成28年10月29日

阪田一孝（70歳）
さかた かずたか

大津町、外牧地区の区長を務める阪田。

熊本地震を受け、様々な面で判断を求められる中、一番に考えたのは区民の安全であった。

区長になったばかりで熊本地震に遭遇し、何も分からない状況で地区をまとめ様々な判断をしていった。自分の判断が地区住民の安全に影響する重圧の中で、「阪田さんだから任せられた」、そんな声を励みに地域の対応に当たった。

C 前震が4月14日の21時26分に起こったわけですが、その時どこで何をしていたのか、当時の状況を教えてください。

阪田 前震の時はほとんどの人が、自宅にいましたね。私たちのところには若い人がいないので、年寄りばかりでほとんどの人が自宅におられました。

C 阪田さんご自身もご自宅にいらしたのですか。
 阪田 そうです。

C ご家族と過ごしていらっしゃったのですか。

阪田 家内と長男夫婦、2人の間にいる5歳と3歳の子どもと一緒にいました。

C 小さなお孫さんもおられ、心配なさったでしょう。

阪田 私の家は古い家なので心配でした。それで、いつもは車を車庫にバックで入れているのですが、14日に揺れてからは、家と家の間のちょうど真中に車を

置くようにしました。いつでもすぐ逃げられるように。

C 車の位置を変更して良かったですか。

阪田 非常に良かった。おかげで助かりました。

C 14日の揺れの時は、被害自体はいかがでしたか。

阪田 14日は被害自体はあまりなかったです。しかし、お墓に行くと、墓の上の石は若干横を向いたりしていましたけれど。

C それ以外の被害は。

阪田 前区長さんから「神社の鳥居が壊れている」という話を聞いたので、見に行きました。写真だけでも撮っておこうと思い、3枚撮りました。ただ、そこまでの被害ではなかったもので、石材屋さんに頼めば良いだろうとその時は思っていました。

C どちらの神社ですか。

阪田 外牧神社です。

C その後、どうされました。

阪田 また、前区長さんたちと会って、先ほどの神社について、修理は前に発注したことのある石材屋にお

願いしようと、そういった話をしていました。前回の修理費が8万円くらいだったので、今回もまたそのくらいで収まるだろうと思っていました。

C 墓や神社の管理は区長さんのお仕事ですか。

阪田 そうです。今は区長の仕事です。

C 14日は主に、近所を見て回られたのですね。

阪田 はい。近所の家も見えて回りましたが、ほとんど瓦が落ちた様子などもなかったですね。結構古いのですが。

C 15日はどのように過ごされたのですか。



地震で壊れた外牧神社の鳥居

阪田 普段通りです。

C 14日から、その後、何か行動をされましたか。

阪田 特段しなかったですね。しかし、地区の中では、「まだ分からない。また来るかもしれない」という話は出ていました。その話をしていたから、16日の本震があつた後、ある程度は気持ちの準備ができていたのかもしれない。

C 16日の本震の時、どのように過ごされていたのですか。

阪田 自宅にいました。

C 強烈な揺れでしたね。

阪田 そう。私の家には小さい孫がいるので、それを一番心配しました。家から出ようとしたら道路はもうブロック塀が全部倒れていて車で通れませんでした。子どもたちや近所の人には県道の先に行くように言い、私はこの先の集落の方を見に行きました。集落のみんなは外に出ていました。組長さんにけが人の有無などを聞くと、異常はなかったようですが停電して、なにしろ真つ暗なので、夜が明けるまで待ちました。

C 真つ暗なままに過ごされていたのですか。

阪田 いえ。発電機を持っていました。昨年町の防災事業の一環で、私どもの地区は発電機を要望していたのです。町から10万円までということだったので、発電機はあるだろうと思い発電機にしました。今考えると発電機で良かったです。公民館から持ち出して、みんなが集まっているグラウンドに投光器を設置しました。

C 発電機は誰が管理していたのですか。

阪田 私と、区長代理、会計の3人で管理をしていました。

C 発電機をお願いした理由というのは防災のためだったのですか。

阪田 はい。防災のためと農業水路のためです。農業水路はやっぱりどうしても電動工具を使います。いつもはリースで借りてきたりしているのですが、それで発電機が欲しいと思っていました。

C 発電機があつたからこそ電気をつけたりできたということですね。ちなみに夜に集まったのは何名ほど

でしたか。

阪田 100人ほどおりました。夜が明けると隣の集落から私に電話があつて、岩戸の里という温泉施設にも避難している人がいるとのことでした。確認に私一人で行つてみると、天井は落ちているし、中は入れる状態ではありませんでした。帰宅し、地区の皆さんと相談して私たちは大津町運動公園（スポーツの森・大津）に行くことにしました。

C 区の全員で行かれたのですか。

阪田 全員で行きました。中には子どもさんが市内におられる方もいらつしやいますので、その方たちは市内に行きましたが、それを除くと全員。必ず別の場所に行く人は組長に行き先を伝えてもらうようにしました。残りは全員で大津町運動公園（スポーツの森・大津）に行きました。

C 集まつてこられた人たちの中で、誰がいないというのはいすぐに分かるもののですか。

阪田 分かりますよ。だいたい顔を知っているのです。それと、地区に組長さんが5人いるのですが、その組

長さんに自分の組の安否確認をしてくださいとお願いしました。私が一番心配したのは、お年寄りの一人暮らしの方ですね。8軒くらいいらつしやいます。その人たちが一番心配でしたね。



天井が床に落下した岩戸の里

C ご家族がいらっしゃらないからですね。

阪田 そして、一人暮らしの家は、昔からの家なので古いのです。もしかしたら倒壊したかもしれないと思いました。自宅の裏にある家も古いし、いつまでも出て来ることがなかったので、心配しました。これはもしかしたら危ないかもしれないと思っていましたが、皆さん大丈夫でホッとなりました。

C 夜が明けて全員で大津町運動公園（スポーツの森・大津）に行くまではどう過ごされていたのですか。

阪田 夜が明けて皆さん、とりあえず自分の家がどうなっているかを一旦見に行かれました。それから、9時か10時頃に全員で出発しました。

C その後はどうされたのですか。

阪田 大津町運動公園（スポーツの森・大津）に2日間いましたが、給水車が来れば、かなりの行列ができて、並ばないともえない、そして次の給水車が来るまで待たないといけません。そのうち「もう公民館に帰ろう」と皆さんが言われるようになって、戻ることに

にしました。

C 食事はどうされるつもりだったのですか。

阪田 水は瀬田の神社の裏とかから水が出ているだろうし、田舎だから米はあります。ご飯と味噌汁ぐらいしかできないですよと皆さんに話し、了解してもらって公民館に帰ってきました。

C 住民の方の意見を阪田さんがまとめ、戻られたわけですね。公民館ではどういったことをされたのでしょうか。

阪田 水を手分けして探し、200とか500リットルのタンクを軽トラックで運んできて、トイレ用と炊事に分けて置いておきました。それで20日頃から炊き出しを始めました。

C いつまでされていたのですか。

阪田 1週間で終わろうと思ったのですが、皆さん家の片付けなどがまだ落ち着いていない状況だったので10日間ぐらい続けました。

C 4月末までは炊き出しを行われていたというわけですね。

阪田 何軒かはですね、家の中で炊事ができる状態じゃなかったのです。

C 炊き出しは誰がされたのですか。

阪田 炊き出しは女性メンバーにお願いしてやってもらいました。当番制にする話も出たのですが家のことも皆さんあるのでそれは難しく、お願いをできる方に手伝ってもらいました。農家の人たちは家のことがあるのでなかなか簡単にはいきません。当番制は難しかったですね。あの時はできる人がやっていかないと仕方なかったです。

C 何人ぐらいいらつしたのですか。

阪田 10人ぐらいいました。

C お願ひした皆さんとは知り合いの方ですか。

阪田 みんな知っている人たちです。

C 炊き出しには多くの人が来られましたか。

阪田 そうですね。自宅で寝泊まりができるよう皆さんには家の片付けを優先してほしかったので、昼間は家のことをしてほしいとお願いしました。それで、昼と夜になると防災無線で「ご飯の準備ができたので来

てください」や「公民館にお集まりください」という案内を行っていました。

C 夜は皆さん公民館での寝泊まりですか。

阪田 家が傾いたりしている何軒かの人たちは公民館での寝泊まりでした。それ以外の人は自宅へ帰られる人もいましたね。畜産農家の人たちは牛もいて大変だったと思います。離れられないということでした。生き物がおるところは大変です。

C 全部で何人ぐらいおられたのですか。

阪田 ここ公民館には20人ぐらい来ていました。若い人たちはグラウンドに車を止めて車中泊でした。グラウンドには何十台もの車がいっぱいありました。

C 阪田さんご自身は、自宅の片付けはどうされていたのですか。

阪田 私は全然できなかったですね。家内からは雨漏りが心配だと言われていたのですが、公民館から離れられない状況でした。地区外からも人が来られるし、話もあるのでね。家内に家の片付けなどは任せていま

した。

C 区長としての役目があったからですね。地域の皆さんへの指示は阪田さんが出されていたのですか。

阪田 色々な場面で、「どうしますか」って皆さんから聞かれるのです。そうした時、指示を出した方が良いでしょうと思います。

C こうした初めての経験で、あのように切迫した状況で、かなり難しい判断もあったと思うのですが、その時の心境はいかがでしたか。

阪田 どうしたら良いのか、何と言うべきか、全く分からなかった。ただそれでも、皆さんが、これからどうするかについて、私にどうしても聞いて来られるのです。

C そうした時の判断には、責任も伴いますよね。

阪田 強く責任を感じました。何よりも、あの場合、安心安全が一番でしたから。

C 住民の安心安全が一番ですね。

阪田 阪神・淡路大震災を見ていたけれど、大変だろ

うなあというくらいですね。まさか自分たちに、あの大変さが来るなんて思ってもいなかったですね。

C 震災前は熊本に地震が来るとは思っていなかったですか。

阪田 思っていなかった。もうまさかでした。小さな地震はあるかもしれないけれど。よく3日分は食べ物と水を自分で準備しておくようにと言われていたけれど、なかなか実際にはできませんね、自分がその身にならないと。家に水はありますという人はいませんでしたね。最初は自動販売機があるのでどうにかなるだろうと思っていました。しかし、大津町運動公園（スポーツの森・大津）に行くとき自動販売機は全然使えませんでしたね、停電で。非常に困りました。

C どうされたのですか。

阪田 給水車が来るのを待つしかありませんでした。ひたすら待つていたわけですが、そうした中で皆さんが公民館に帰ろうと言われるようになりました。それで先ほど言った炊き出しが始まったのです。

C 公民館自体はいつまで避難所として運営されていた

たのですか。

阪田 1ヶ月くらいはしていました。5月の中頃までです。

C その時も阪田さんは公民館におられたのですか。

阪田 その頃は家に帰っていました。まだ6軒ほどいらっしやったかなあ。

C その時は、その方々にご自由にお使いくださいということでした。

阪田 はい。食事も自分たちで運営してくれと言っていました。

C 炊き出しが終了したらとりあえず、多忙さは減りましたか。

阪田 いえ、それからまた色々ありました。4月に区長になったばかりで、それからすぐに地震だったわけです。年度替わりにやるべきことが全て後回しになってしまったわけです。年度替わりの会議などが9月や10月に集中し、1ヶ月の半分以上は会議などがある状況でした。カレンダーに丸印を付けると、家内に「丸ばかり、今日も会議なの」とよく言われていました。

C 非常時を乗り切り、震災から一区切りついたと思う時期や出来事がありますか。

阪田 なかなか難しいですね。道路が復旧したとかではなくて、皆さんが自分の家で寝泊まりして、屋根の修理も終わったといった時期が一区切りになるのでしょうか、まだまだです。近所はまだ手つかずのところが多くあります。瓦屋さんには頼んでいるけどいつになるのか分かりません。まだ2年ぐらいいはかかるでしょうね。

C 地域の人の生活が安定しておらず、一区切りまではまだ至っていないということですね。

阪田 そうですね。

C ところで、この地区は豪雨被害のこともニュースで聞いていますが、地震と雨のダブルパンチとなり、大変でしたね。

阪田 6月の豪雨ですね。あの時はテレビで「外牧地区避難指示」としよっちゅう流れていましたからね。1週間くらい大雨が降り、土石流が発生し、床上浸水

2件、床下浸水12件の被害が出ました。あの頃はですね、避難勧告や避難指示が出ていたので、私どもも公民館から大津町運動公園（スポーツの森・大津）に行ったりもしていました。避難指示に関しては、問題も感じていました。

C 問題というのをお聞かせ願えますか。

阪田 避難指示が出ても、逃げない人が多いのです。避難指示が出ていた土石流のあった夜、夜中の1時半に一度地区に戻りました。道が川のようになっていて、石などもすごい勢いで落ちてくる。白川も「危ない」というのが一目で分かるくらい増水していて恐ろしい状況の時に、まだ明かりのついている家がポツポツとあるのです。

C どうして避難されないのですか。

阪田 年配者は早めに行動されます。ところが、若い人たちがそうでない。年寄りは「危ない」からと早めに避難されますが、若い人たちは「うちは大丈夫」と思ってしまうのではないかと思います。

C 意識の差みたいなものがあるのですかね。防災無

線で震災中も呼びかけをされていると思います。

阪田 防災無線でも相当呼びかけました。それでもでした。

C 区長の役目として住民の安全が第一ですからね。大地震に遭遇し、また区長にもなったばかりの時に、精力的に活動をされてきたわけですが、その原動力となったものは何だったのですか。

阪田 やらなきやいけないという使命感も当然ありましたが、やはり皆さんが頼って来てくださるというのが一番でした。そういうのが励みにもなります。

C 皆さんが頼ってくださるのが励みなのですね。

阪田 そうですね。

C 大変な経験をされたわけですが、この震災を経験し、阪田さん自身の考え方や行動に何か変化があったのではないかと思います。

阪田 震災の影響で、この地区に住んでいた人が、地区を出て行かれます。私は、今まで通り、地区の人た

ちと一緒に生活できれば良いなと考えております。行動の変化というと、今後起きるかもしれない災害に備えて、連絡網を作ろうと思っています。皆さん携帯電話を持っておられるので、それぞれの家単位に緊急時に連絡するリストを作っておかないといけないなあと思いました。

C 連絡網、大切ですね。

阪田 作らないといけないと思いますね。プライバシーの問題もあるのですが、誰々さんのところは誰々に電話するということぐらいは知つとかないといけないなと思いました。

C ご自身の変化についてお聞きしてきましたが、住民の方々の意識など、変わったなと思うことはありませんか。

阪田 皆さん、地域で協力していかなければいけないなと思うことは思っている気がします。「何かやることはありませんか」と声をかけてくださる方もおられます。非常に助かります。1人で走り回っても限度が

ありますから。

C 最後の質問です。これからの大津町やご自身に望むこと、やっていきたいことはありますか。

阪田 大津町に若い人たちが住んでほしいですね。若い人と言っても、外部の若い人たちというよりも、息子たち世代がここから出て行かずに、住んでほしいと思います。若い人たちが1人でも2人でも帰ってくるような場所になれば良いなと思います。

C 大津町に対して、何か望むことはありますか。

阪田 町もなかなか厳しいだろうと思います。一歩一歩で良いので町の方も前の状態に戻っていつてほしい。すぐには難しいでしょうけど。私たちも、町と一緒にばちばち進んでいきたいと思います。

大津町議会議員

取材日 平成28年9月20日

佐藤真二（53歳） さとうしんじ

地震後、一人の議員として自分にできる持ち場を探し、多くの避難所で支援を行った佐藤。住民に寄り添う存在であるからこそ、自らの手で避難所の生活環境の改善にも努めた。震災の経験は、これまでの考え方を改めるきっかけとなり、議員そして議会の役割とは何かを根本から考える大きな機会となった。

C 前震が4月14日木曜日の21時26分に起こったわけですが、その時の状況を教えていただけますか。

佐藤 家で晩酌しながらテレビを見ていました。そこでグラグラと来て、揺れが収まってから外に出て近所の人と安否確認をして、余震がありましたので、一応避難準備をしておこうかということで、物を持ち出していたところ、周りが騒がしくなってきたので一次避難の場所に行ってみようかということで、娘の運転

で高尾野区の公民館に行きました。

C 公民館に行かれてからというのは。

佐藤 公民館の駐車場が避難場所です。そこには防災倉庫があるので。区長さんや役員さんたちが色々準備しておられたので、テントを建てたりなどの手伝いをしました。大津町には幾つか自主防災組織を作っている区があります。高尾野区は自主防災組織がきちんとしていたのでサッと準備もできていました。

C その後はどうされたのですか。

佐藤 指定避難場所の美咲野小学校の様子を見に行きました。だいぶ慌ただしくなっていたのですが、電気もついて水道も大丈夫ということでライフラインはきちんとしていました。何人かの役員さんと話をして、体育館の壁のコンセントはカバーが被って鍵がかかっているのですが、それを全部開けてスマホとかが充電できるようにしておくという細かいアドバイスだけして役場の方に行きました。

C 避難所の確認をして役場に行かれたのですね。

佐藤 役場は前震で傷んでいたので使わないという決定がされて、電算室に災害対策本部ができている途中だったんですが、忙しそうだったので今は色々話をするのどうかと思い、以前センター長をやっていた子育て・健診センターが気になったので大津中央公園を見に行きました。そこは防災備蓄倉庫があったり、地下に水の溜めであるタンクがあったりと防災公園を兼ねているのですが、そこも混乱している状態で何もできていないようでした。私はその「どこに何がある

か」などを把握していましたので、保健師さんたちに「ここには何があります。必要な時は使ってください」と伝えていきました。でもそこにはその時点ではまだあまり避難の人は来ていなかったのとおりあえずここも大丈夫かということで、一旦家に帰りました。

C 公民館、子育て・健診センターなど色々な場所に行かれたのはやはり心配だったからでしょうか。

佐藤 そうですね。どこも気になるのだけど、まずは自分の身の回りのところをきちんとという気持ちがあつたのでしょうか。夜が明けてから8時ぐらいに役場に行きました。でも皆さん忙しそうなので邪魔にならないよう、避難所が何箇所あるとか避難者がどのくらいいるというのが書いてある紙を見て、状況だけ確認しました。

C その時はどのくらいの避難者がおられたのでしょうか。

佐藤 避難者はまだ百人単位だったです。このくらいで済んでいるんだということを確認して、家に帰りました。

C　そして本震が4月16日1時25分に起きたわけですがその時の様子を教えてください。

佐藤　また何かあるかもしれないということで町から支給されている防災服は枕元に置いて自宅の2階で寝ていました。最初は揺れた夢でも見ているのかなと思っただけ、いや違うぞと起き上がって、ベッドの上に座っていたら周りの家具がバタバタ倒れていきました。今度はもう家の中はガチャガチャの状態になり、家内と娘は1階で寝ていたのですが声は聞こえる状態だったので「大丈夫かあ」と声だけかけて、着替えてその倒れたものを踏み越えて降りて外に出ました。

C　外に出てからというのは。

佐藤　やはり同じように近隣の安否確認をしました。その後組長さんに「安否確認したらその結果を公民館の区長さんのところに報告してください」と手順を確認して「私も動き回りますから」ということで公民館に行きました。

C　公民館では何をされたのですか。

佐藤　公民館では区長さんたちと色々話して、災害時

要支援者リストが区長さんに届いているのが分かっていたのでそれを確認しました。区長さんは消防団の方に依頼して区内を見て回っているとのことでした。高尾野区は防災組織がしっかりしているから大丈夫ということでもまた美咲野小学校に行きました。

C　美咲野小学校はどのような状況でしたか。

佐藤　前震の時はライフラインがあつたけど、今度は停電に断水という状態で大混乱していました。とりあえず照明をなんとかしないと、ということで、高尾野に戻って区が持つてる発電機と非常照明灯というのが2セットあるのですがそれを1セット持つて行って、体育館の中に照明をつけました。

C　電気の問題はそれで解決したのですね。

佐藤　他にもトイレの問題が出てきました。みんな「流せない」ということだったので、ある中学生が「プールの水を使えば良いよ」ということを言いました。プールはフェンスで囲まれていて開かなかつたのですが、最初子どもたちはフェンスをよじ登つて水を運んでいたみたいです。立派だったと思います。で

もこれではいけないということで避難してきた人に工具を持っている人がいたので、それでフェンスを外して出入りできるようにしました。

C フェンスを外すことは連絡したのですか。

佐藤 教頭先生は前から付き合いがあったので「フェンスを外して良いか」と連絡しました。プール内にあるトイレのシャッターも開かなくて「トイレのシャッターも壊して良いか」と聞いて、トイレのシャッターも壊してプールのトイレも使えるようになりました。そういう避難所としての環境整備がある程度やって、その後は災害対策本部の方に行きました。そうしたらちょうど1階に議会事務局の担当の人がいて「役場の中を見てみてください」ということで、ヘルメットを被って中に入りました。

C 役場の中はどうでしたか。

佐藤 グチャグチャな状態で「ああ、これはダメだね」と話をしながら、災害対策本部の方に行ったら議長と副議長が来ていて「議会として何かしないといかないだろうか」と話があったのですが、「日頃、準備してい

ないのにいきなり何かやろうと言ってもできるはずがない」と思って、まずは役場の仕事の邪魔をしないように、しばらく行政に任せて様子を見守ってそれぞれが自分にできることを一生懸命やれば良いのではないのでしょうかね、という話をしました。

C 震災時、議員の方々はどのような活動をされるのでしょうか。

佐藤 議会によつては震災時の対応マニュアルを作っているところもあります。しかし、大津町の議会にはそのようなものではありません。そこまで準備できていなかったのです。だから他の議員さんたちも避難所に付いたり、炊き出しのチームを作ったりと、それぞれが個別に色々な動きをしていました。

C その中で佐藤さんは避難所に行くなどしてお手伝いをされていたのですね。

佐藤 はい。また、大津中央公園に行つて備蓄倉庫がきちんと機能しているのかも見に行きました。そこには簡易トイレやカセットコンロのボンベなどの物資が

あるのです。

C それは町が用意していたものですか。

佐藤 はい。そこに行くとき物資を持って行つて良いということだったので、不足していた簡易トイレを持って美咲野小学校に戻ると、避難所の運営体制みたいなものが、できつつある状態でした。そのリーダーと一緒に活動をしたことのある人で、「私がサブにつくから無理しないようにやりましょう」と言つて、そこから運営スタッフとして活動するようになりました。

C 基本的にはその避難所にずっとおられたのでしょうか。

佐藤 空いた時には他の避難所の様子も見に行きました。物資は偏在していて、あるところにはすごくあるけど、ないところにはまるでないということもあるのですが、周辺の避難所を何箇所か回り、子どもがいるところへはお菓子が余っているところから貰つて持つて行き、老人福祉施設では「おむつが足りない」と聞いて、大人用のおむつを持って行くなどしました。

C 物資移動は車を使われたのですか。

佐藤 私は軽トラを持っていたので、それがすごく役に立ちました。

C こういった状況の時にはトラックは非常に役立ちそうですね。他にも行われた活動はありましたか。

佐藤 大津町では自主的にできた避難所を含め全部で83箇所くらい避難所ができていました。しかし、車中泊している人たちの自主避難所にはコミュニティが発生しません。取り仕切る人が発生しないのでそこには支援物資も支援の情報も入っていきません。いくつか接触していくと、支援の手が届かないところがあることが分かり、そこに情報を流したりもしました。

C そういった支援活動を行つていかれる中で大変だったことはありますか。

佐藤 5月の連休明けに学校が始まるということで「避難所を5月1日に明け渡してください」と話がきて、生涯学習センターに集約するのでそこに行くように言われました。下見に行つたところ、すぐ使用できる1階のロビーを使つてくれと言われたのですが、そ

の横で農業被災者の被災状況の受け付けをやっていたのです。避難者の横で受け付けを行うのはいけなかったらと思う、受け付けが終わる5月2日までは今の避難所を使えるように交渉し、3日に移動することになりました。

C 5月3日に避難所の方は生涯学習センターに移られたのですね。

佐藤 はい。ただロビーはレンガ敷きです。それもいけないと思って、農業用のコンテナを何十個か借りて並べて、コンパネをもらっていたのでそれをコンテナの上に載せて、支援物資として来ていた畳をもらって敷いたりしました。ブルーシートや段ボールの間仕切りで囲いを作ってプライバシーも保てるように環境を整えました。

C その後はどうされたのですか。

佐藤 その後は体の様子を見ながら、災害ボランティアセンターに登録して週2、3日ぐらいのペースでボランティアセンターに行きながら家の片付けも行いました。その頃、色々な避難所にも行ってみましたが、

町内外のボランティアが入って来ていて安定していたので、もう避難所は気にしなくても大丈夫かなという感じになっていました。

C 避難所も安定してくると安心ですね。

佐藤 少し余裕が出たので今度は行政施設とか学校施設などに行って、大津南小学校の天井が落ちている体育館とかを見せてもらったりもしました。



天井が落下した大津南小学校の体育館

C 震災直後の直接的支援に始まり、復興に向けて色々と活動されてきたわけですが、その過程で一区切りついたと思う時期や出来事はありましたか。

佐藤 4段階あったかなと。最初は4月23日に美咲野小学校の避難所でラジオ体操ができた時です。体操ができる余裕ができて避難所としては安心かなというのがまず第1段階でした。次の第2段階が5月3日に避難所を閉鎖した時です。これでもうずっとそこに張り付いていなくても大丈夫かなということで、もっと色々な動きができるなと思いました。

C なるほど。

佐藤 以降は個人的なことになりますが、娘を避難先のアパートに出したのです。それが5月14日で、その時点で自宅のことがある程度一段落しました。最後の第4段階が7月15日に議会の全員協議会で町の方から被害の概要と今後のスケジュールというものが示されたので、それを見て行政の対応が軌道に乗ったんだというところである程度安心しました。それぞれに一区切りついた時だったと思います。

C それぞれの時期で少しずつ一区切りがついていったということですね。

佐藤 はい、そうですね。

C 次に震災前と現在の変化ということで、佐藤さん自身の考え方や行動に何か変化はありましたか。

佐藤 今回は議員としては何もできなかったことがあります。議員としてというか議会としてですね。議員というのは個人ですので、議会という組織として何もできなかったと思います。事前にきちんと決めていなかったからですが、今後考えなければいけないことだろうと思います。防災についてはこれまでも色々な議員が町に対して提言をしたりしてきたのですが、私たちも含め、すぐに起こるわけじゃないという油断があったのだと思います。でも今回の震災を受けて、熊本の断層や過去の地震とか色々なことを調べますよね。差し迫っていると言えば、南海トラフがあります。正直言って、それは他人事だと思っていたけど、熊本にも影響はあるなと考え直し、少なくとももう1回大

きい地震が起きる、ということを言いながら活動しているところですよ。

C 議会として何もできなかったとおっしゃっていますが、今後の議員や議会の震災時の役割はどうあるべきだと思いますか。

佐藤 難しいな。あまり定型的に言ってしまうといけ
ないのかもしれませんが、議会ってその構成メンバー
によって、すごく性格が変わってくるんです。伊勢市
というところは実際に南海トラフ地震を想定して防災
の意識をきちんと共有して何かをやるうというような
意思があります。それに対してそういう意識が全くな
いところで地震の前に、仮に防災のために何かをしな
いといけないから、みんなで何かを考えましょう、行
動マニュアルを作ってみましょうと声かけをしてもで
きないのではないかなと思います。

C なぜですか。

佐藤 私は大分県出身で地震はどこでもあるのだと
いう考えを持っています。でも私も今回初めて知った

のだけだ熊本の人って熊本には地震がないと思ってい
た人が多いというのを聞いてびっくりしたんですよ。
どうしてそう思っていたのかなって感じでした。だか
ら今後議会としては、まずその辺の摺り合わせからや
らないといけないと思います。何ができるか考える
と、もしかしたらないのかもしれませんが。行政が組織
として訓練している中で、訓練をしていない議会に何
ができるのだと。でも、住民を励ますとかそういうこ
とはできると思います。

C 議員さんが励ましてくれると住民の方も安心でき
そうですね。

佐藤 実際、避難所を見に行く時、背中に「大津町議
会」って書いてある防災服を着ていくのですが、それ
を見ると議員さんが見に来てくれたと、それだけで安
心される方もおられます。もちろん、ただ行くだけで
はなく、きちんと活動をすれば、という前提条件があつ
てのことですけどね。

C 大事な役割だと思います。防災の面でも何か考え

方に変化はありましたか。

佐藤 防災に関しては地域のコミュニティが大事だった皆さん言われると思います。大津町にはしっかりとコミュニティが残っているところと、昔はコミュニティがあっただろうけど壊れてしまっているところ、コミュニティが成立しつつある途中のところがあります。だから新しいコミュニティを作っていかないといけないのですが、どうやって成立させるかというようなことを、現在は考えています。

C そういった新しい地域ではどのようにコミュニティを作れると良いのでしょうか。

佐藤 昔ながらのコミュニティを取り戻そうとしても難しいでしょう。普段は薄いお付き合いでも何かの時にガツと集まれるようなコミュニティっていうのがあれば良いのかなと。普段から防災訓練とかやってそのコミュニティを作っていくよりもきちんとしたマニュアルを作ってそれを渡し、いざという時にはこれでやるという確認をしておけば負担にもならないし、いざという時には上手くいくのではないかと考えていると

ころです。美咲野地区は新興住宅地ですが、避難所運営がある程度きちんとできた理由として、小学校の保護者同士がLINEで繋がっていたことがあります。あの非常事態の時にすぐ役立つたのです。

C これからの大津町に望むことや、佐藤さん自身が行っていきたいと思われていることがあればお聞きたいです。

佐藤 自分自身については、一つ挙げるならもっと体力がほしかったなど。災害ボランティアに行ってお手伝いしても一生懸命に1日やると次の日は動けなくなったりしていましたので。

C 大津町についてはいかがでしょうか。

佐藤 町に関しては、誰も置き去りにしないで生活再建支援と復興をしっかりとやってほしいというのが一つです。復旧・復興のステップを踏む中で次の段階に入れた時に、その前のところに取り残される人たちがいることがあります。その時に自分たちは次のステップに進んだからもう前のところには問題がないはずだと思

い込まないで、きちんとそこを見ていつてほしいなと思います。

C なるほど。

佐藤 あとは復興計画ですね。これは大津町に限らずですが、住民と一緒に考えたものでなければいけないと思っています。きちんと住民と話をしながら大津町もやってほしいなと思います。他の市町村の話も聞いたりして、それを生かしてやっていつてほしいなと思います。

C それには行政だけでなく、議員としての佐藤さんたちの役割も大切になってきますよね。

佐藤 住民と行政が話す場所、そういつたところにはきちんと一緒にいて話ができるような促しをしていくことが大事ななと思います。

C その他にもあればお願いします。

佐藤 強いて言うならば、職員ですね。今回色々なところから応援に来てもらったので、今度はきつと応援に行く立場になると思います。その時にきちんと活動

できるような訓練を今のうちから始めてほしいです。大阪から来られた方と話をしたら、「熊本の人はず落ち着いて聞いてくれる人が多いから良いですね、大阪だったら大変ですよ」と言われました。でも、そういう時でもきちんと対応ができるように準備をしておいてほしいなと思います。今回の経験をきちんと学びにして、他への支援ができるようになっていつてほしいですね。

大津町役場 総務部総務課

取材日 平成29年1月6日

まえだけんじ
前田健司 (33歳)

大津町の広報紙作成を担当。日頃から大津町についての情報収集と発信業務を行う前田。帰宅する直前に前震に遭遇し、そこから震災対応の日々が始まった。

広報担当として、住民の情報難民化を防ぐため、「ほぼ日刊広報おおづ」として震災直後はほぼ毎日、広報紙発行を続けた。

厳しいスケジュールの中、原動力となったのは「使命感」だった。

C 前震の時の状況を教えてください。

前田 私は熊本市内に住んでいます。家に着く直前、新水前寺駅の前で前震に遭いました。地震の揺れだとは気づき、家まで走りました。役場職員として、震度5以上は出勤ですので、家の中で散乱したガラスなどを片付け、断水に備えて浴槽に水を溜め、ブレーカーを切り、役場に戻りました。

C ご自宅には誰もいなかったのですか。

前田 2人暮らしなのですがまだ帰っていませんでした。数日は帰れないだろうと思ったので連絡メモを残し、食べ物を持って22時10分過ぎには家を出ました。

C ところで揺れた時の心境とはどんなものだったか。

前田 「揺れたな、職場に戻らない」と、それくらい感じでした。私が大津町役場に入庁した年に九州北部豪雨が起きましたので、また災害だなと。私た

ち職員は住民の皆さんのために災害があれば出勤します。消防団員としても、職員としても義務があります。もちろん、家のことをどうしようかというのも頭の片隅にはありましたが。

C 家のことは後回しにしてということですね。

前田 私の場合はご近所付き合いがあつて、家族は近所の皆さんと一緒に避難しているという連絡が入り、安心したのを覚えています。

C 熊本市内から役場にはどのように行かれましたか。

前田 電車は使えないと思つたので自分の車で益城町を通つていきました。途中の細い路地は塀が崩れて通れなかったり、電気も止まり、信号がついていなかったりする場所もありました。役場には23時頃に到着し、すでに第一陣は避難所に配属されていました。

C 到着後の仕事は。

前田 野外活動等研修センターという施設で避難所を開設することでした。先輩と一緒にいき、到着するとすでに地元の人たちが開設していらつしやいましたの

で、15日の朝まで一緒に避難所で過ごしました。

C 15日は何をされましたか。

前田 記憶が曖昧ですが、通常業務に移っていたと思います。というのも広報として、通常時も災害時にも写真を撮るのが職務ですので、役場の被害状況の写真などを撮りに回っていました。

C 15日も自宅に帰ることはなかったのですか

前田 記憶がありませんが、指示を受け、20時には担当となった美咲野小学校の避難所に、別の先輩と行きました。美咲野小学校に避難されている人はその時は6人くらいで、ほとんどいませんでした。

C そうすると、避難所で16日の本震に遭われたことになりましたか。

前田 そうです。交代で仮眠を取っていたのですが、睡眠を取れていなかったこともあり、「少し寝てきなさい」と先輩に言われ、奥の部屋で休ませてもらっていました。その時に、本震が起きました。最初何が起きたのかさっぱり分からず、先輩のところに行きました。体育館の室内電灯も激しく揺れていたの、落下

の危険があったため、避難している皆さんには「電灯の下に入らないように」と注意をしていました。

C 職員は2人だけだったのですか。

前田 はい。

C その後どうなりましたか。

前田 揺れが収まると避難する人が増えてきました。最初、困ったのはトイレでした。水が流れない状況でしたので。そして、「どうしたら良いか」の話し合いをしているうちに協力者が増え、「プールの水が使えるのではないか」という意見が出ました。区長さん、PTA会長さん、町議会議員さんの力を借りてプールのフェンスを開け、その後プールからバケツリレーで水を運ぶことを始めました。

C バケツリレーは避難している皆さんにも協力してもらって行ったのですか。

前田 お声かけをして、全員に手伝ってもらう感じでした。また、マナーの話も出ました。バケツの水のストックがなくなったらまま補充せずに水を流さない人が増えてしまった時に子どもたちが、「トイレを使つた

ら水を流しましょう」、「水が少なくなったらプールで水を汲んで持ってきてきましょう」など書いてくれて、見える位置に貼り紙をしてもらったりしました。

C 子どもたちが貼り紙を作ったのであれば、守らないわけにはいかないですね。本震の時はどれくらいの避難者数でしたか。

前田 ホワイトボードで把握ができていたのは300人ぐらいでしょうか。駐車場にも人がいたので、もつといらっしゃったのだと思います。

C 夜が明けてからも美咲野小学校での避難所対応をされていたのでしょうか。

前田 朝になつてからの記憶は曖昧ですが、美咲野小学校の任務はとかれ、民間の施設を新しい避難所として開ける準備をするようにとの指示を受けましたが、なかなか上手くいかなくて大変でした。

C どういうことでしょうか。

前田 避難所予定の体育館も被災していて、使えないところがあったからです。そうした中で色々と調整をしながら避難所設営の準備をしました。なんとか開設

ができましたが、準備中にカッターナイフで太ももを切ってしまうけがをしてしまい、病院に行きました。自分ではそんなにひどくないかなと思っていたのですが、取材中に保健師さんに見ていただくと、縫わないといけないと言われ、結構大きな傷だったのだなと思いました。

C けがをしていた状態で仕事をされていたということですね。痛みとかなかったのですか。

前田 痛かったです。一応、止血はして、ウエットティッシュにアルコールを付けてそれを傷口に入れてガムテープでぐるぐる巻いて仕事をしていました。結局7針ほど縫いました。

C 被災して1ヶ月間の活動の中で大変だったことはありましたか。

前田 食料のことなどもありますが、携帯電話用の電源の確保が大変だと思いました。職員自身の携帯が本部との連絡手段となるので、その充電が切れたら本部と連絡が取れなくなってしまうです。区長さんたちが

率先して「携帯充電した方が良いよ」と言ってくださり、発電機で充電させていただいた時は本当に助かりました。

C 災害時、通信を確保するため、充電用の電源は重要な課題ですね。

前田 そうですね。

C こうした緊急対応している中で判断に困ったことはなかったですか。プールのフェンスを開ける時など、判断に困ったのではないかと思います。

前田 自分の裁量でどこまでやって良いのか分からなかったのですが、次々と避難してくる皆さんに対してお困りならば、一つ一つ誰かが判断して道を示さなければなりません。人数も限られる災害対策本部に連絡しても、町内はどこも同じ状況で折り返しの返事はないので、責任を被るつもりで行っていました。基本的に災害時は命がかかっている場合もあるので簡単なことでも覚悟を決め判断していました。

C ご自宅にはいつ頃に帰れましたか。

前田 4月19日か20日頃です。けがした後です。

C それまでは避難所や役場での泊まりが続いたのですね。

前田 私は床でも寝られるので、そこまで苦痛ではなかったのです。ただ、断水が続いている時期、風呂に入れなかったのが辛かったです。住んでいるアパートの裏に井戸があり、運よく水が出ました。その水をやかんで沸かして運よく帰れた時に入ったこともありました。頭や体を洗って髪を剃ってくらいでしたけど、非常に有り難かったです。水は濁っていたのですが、こういった状況での井戸の貴重さを知りました。

C ところで、前田さんは、災害情報を「ぼぼ日刊広報おづ」として4月24日から5月16日にかけてほぼ毎日発行され、ホームページで掲載されていたと思います。大変ではなかったですか。

前田 大変でした。副町長から南阿蘇村役場が日刊として出している災害用広報紙に倣って、大津町でも作ったら良いのではないかと言われて。それからです。

C 発行の意図を教えてください。

前田 災害時は特に高齢者の方や避難所の皆さんが情報難民になってしまいます。それを少しでも和らげるために1日1回災害情報を出していけば、外で何が起きているのか分かるかな、ということでした。ホームページに掲載していましたが、ネットを見られない方も多いのです。それで、避難所には全て印刷をして、見やすいところに掲示しておいてもらえるように持つて行ってもらっていました。

C 震災対応で避難所の対応をしながら、広報紙「ぼぼ日刊広報おづ」を役場で作成していたのですね。

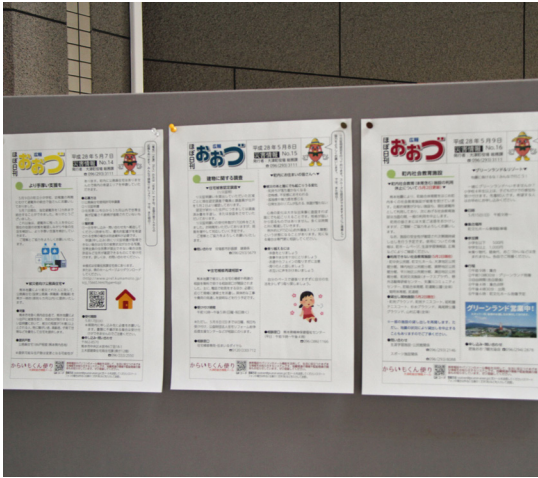
前田 一言でいうとそれを作っている間は、大変でした。昼は通常の月刊の広報紙作成のため取材や写真撮影に出かけ、夜は避難所か災害対策本部に泊まる生活でしたので。

C その仕事はどこでされていたのですか。

前田 災害対策本部の隅っこでやっていました。今思うに、自分がそこにいて一番意味があったなと思うことは、「ぼぼ日」を出すというよりは、そこにずっと

いたことではないかと思えます。本部内に残る人は交代制で避難所と現場を行ったり来たりするのですが、「ほぼ日」と広報の編集のため私一人はずっと災害対策本部にいましたから。

C どうして、その場にいることが重要だったのでしょうか。



避難所に掲示された「ほぼ日刊広報おおつ」

前田 パソコンで編集作業をやっていると、狭い場所ですから災害対策本部内でのやり取りや電話の音が聞こえます。一方で、電話の担当をしている人は変わるので、「これどうなってるの」と聞かれます。住民からの意見や質問に対しての回答は災害対策本部の壁に貼られているのですが整理がされておらずに時間をかけて探す必要がありました。その場にずっといることで私は情報や状況が分かることが多少あったので、他の職員が分かりやすいように情報を分類・整理することになりました。

C 前田さんが整理されたのですか。

前田 指示された記憶もないので私が自主的にしたのだと思います。必要な情報が分からないこともあったので、電話が少し落ち着いた時にガムテープで壁に枠を作り、水関係、電気関係、道路関係と分けて情報を整理しました。

C その場にずっといたから気づき、できたことだったわけですね。

前田 誰でも思いつくことでしょうが、整理できたの

は良かったかなと思います。自分も聞かれるので。情報が分からず、即座に答えられないことや、気づかないうちに古い情報で対応をしている可能性があることに気づいたので行動したのだと思います。

C 災害対策本部で「ほぼ日」を作成しつつ、他の職員の話聞いて情報を集めて分類してということが続けられたわけですね。そうした活動の原動力となったものは何だったと思いますか。

前田 使命感ではなかったかなと思います。職員は、あの緊急時、職務以外のことも数多くしていました。しかし、広報関係の災害時の業務は、記録を残すために写真を撮ることです。少なくとも町の歴史を残す職務を持っているのは広報担当だけですので代わりはいないと思っています。

C なるほど。

前田 ただ、今回最も後悔していることは、職務であるはずの災害写真撮影ができていなかったことです。当初は浮き足だち、本来しなくてはならなかった

ことを見失ってしまったからだと思います。広報担当者は写真を撮るために外に出なくてはいけないというのが、災害の時の基本的な動きだと思っているのですが、震災対応に追われ、混乱していた時期の写真を撮ることができませんでした。広報担当者としては、これではいけなかったと反省しています。

C 前田さんがいなければ、写真記録は基本的に残っていないのでしょうか。

前田 どうでしょう。今は皆さん携帯電話を持っていて、いつでも誰もが写真を撮れる状況にあります。しかしそれが逆に「誰かが撮るだろう」という状況を生み出し、結局は、公には残ることが少ないのではないかなと思います。

C 復興に向けて進む中で、前田さん自身が一区切りついたと思える時期はいつ頃だったでしょうか。

前田 私の中ではまだ震災対応は続いています。落ち着いたなと思った時には次の課題が出てくるので。被災された皆さんを思うとなかなか一区切りがつけない

など思いながらやっています。

C 「ほぼ日」を出さなくなった時が一区切りではなかったですか。

前田 そうですね。そこから通常業務に近づきましたのでそうかもしれませんね。「ほぼ日」を終了した理由は広報おおつ6月号を通常通りに出す必要になったからですので、それが一区切りと言えば一区切りかもしれませんね。

C 今回の熊本地震を経験して、前田さんご自身に考えや行動の変化がありましたか。

前田 今もり災証明書の発行などをしているのですが、どのように伝えれば気持ちが落ち着くかな、と考えながら話せるようになりました。最初は住民の皆さんのご意見に対してどう答えようかと悩んでいた時期もあり、失礼な言動もあったのではないかと思います。その時から考えると今はかなり落ち着いて住民の皆さんのことをより考えて話せるようになったと思います。

C こういった変化は前田さんだけではなく他の皆さんも同様ですか。

前田 そうだと思います。特に入庁1年目の新人職員がきちんと対応できているのを見ると、1年目でこんなにできるようになるのかと驚きます。明らかに成長が早いように思いました。

C それは地震を受けて活動し、住民との関わりが濃厚だったからでしょうか。

前田 そうでしょうね。つい最近まで高校生だった職員が、他の自治体職員とも関わり、客観的に自分を見ることができ、また、自分たちが後輩を持つ立場になった時にどうしたら良いのかということも漠然とですが、考える機会にもなったからだと思います。

C 今回の地震災害からの貴重な経験ですね。

前田 そうですね。偉そうなことは言えませんが。

C 最後の質問にしたいのですが、今後、前田さん自身がやっていきたいことや大津町に望むことがあります。したらお聞きしたいです。

前田 働きやすい職場になつてほしいです。全てが完璧な職場というのは恐らくなくて、人それぞれなので抽象的ですが。雰囲気は、来庁する住民の皆さんにも伝わるでしょうし、雰囲気が悪い職場にいたら、職員が不満を持ち、その不満が窓口に来られるお客様に出してしまう可能性があります。そういうことがない職場になつてほしいと思います。

C 働きやすい環境、とても大事だと思います。

前田 そして、全員が問題解決の意識を持つて住民対応できる役場になれたらと思っています。特に災害時は自分の担当じゃないから分かりませんでは済まないと思います。今回の熊本地震を通して、町の復興に向けて職員は一致団結できたように思いますので、職員全体で意識のずれのない、そんな役場になつていききたいなと思います。

C 地震があつたからこそ一致団結し、それを継続していけるような職場を望んでいるということですね。

前田 はい。住民の方にも伝わると思ふので。より親切丁寧な対応を行えるようになるのではないかと考え

ています。自身はまだまだなところがありますので、より努力していききたいと思います。

大津町役場 総務部総務課

取材日 平成29年1月11日

岩下潤次（46歳） いわしたじゅんじ

震災時は、避難所運営、災害対策本部での電話対応や被害状況の集約を持ち場にして、業務に従事していた岩下。

震災をリアルに経験する中で、行政職員としての視点で経験を冷静に振り返り、様々な課題を拾い出している。今回の大規模災害で周囲から助けられたことに感謝し、次は自分が支援する立場として率先して行動していこうと考えている。

C 前震が4月14日の21時26分に起こったわけですがその時の状況や様子を教えてください。

岩下 前震の日は地元の懇親会が終わって帰ろうとしていたところでした。初めて体験するような揺れに驚いたものの、震度5以上では職員は自主参集する規定があるので役場に直行しました。21時40分までには着いたと思います。

C 何人ぐらい職員さんは到着されましたか。

岩下 私が到着した時点で既に20〜30人はいました。この非常時に即座に人が集まるんだというのを初めて経験したので、役場って頼もしいなと職員ながらに思いました。

C 旧庁舎の中に入られたのですか。

岩下 そうです。色々なものが倒れていました。柱の傷や壁が落ちたりなどの状況は、夜であまり見えなかったので普通に集まっていました。

C その後はどうされたのですか。

岩下 公用車で町の北部に被害状況の確認に行きました。ただ夜で被害状況も分からず、道路の土砂がちよつと崩れているとかを確認できる程度でした。

C 何時から確認に行かれたのですか。

岩下 役場に着いて、駆けつけた土木部長の指示を受けてからなので、22時ぐらいからスタートしました。

C 戻ってこられたのは何時ぐらいですか。

岩下 23時か24時くらいになっていたかと思います。

C それから朝まで役場に残っていたのですか。

岩下 いえ。状況確認などをやりながら、とりあえず解散になったのが朝方5時頃でした。金曜日でしたので、その日は通常通りの勤務です。自宅に戻り、30分くらい横になるかならないかで着替えてまた、役場に出勤しました。

C 15日はどういった業務をされたのですか。

岩下 私は地域づくり推進係で窓口対応が常にあるというわけではないので、即座にやらないといけないという業務が当時はなく、地震の被害確認に追われまし

た。明るくなって庁舎内のヒビとかも見えてきて、元々が震度5弱で倒壊の恐れがあると言われていた建物ですから、「これ以上とどまったら危ないのではないか」となって災害対策本部が移ったという話でした。現地の被害調査から戻ってからは、電話が日中ずつと鳴りっぱなしだったので電話の対応に当たっていました。そして、夕方からは交代で避難所に行かないといけないので、避難所となった社会福祉協議会のある老人福祉センターに行つて、避難して来る方の受け入れや物資・食糧の支給をしていました。その時は余震の後に数日で収束していくと思っていました。

C 予想に反して16日に本震が起こったわけですがその時の状況を教えてください。

岩下 老人福祉センターにいたのですが、夜になってだんだん避難している方々も眠り始めているところで急に大きく揺れ始めました。余震も徐々に小さくなり始めた時期だったので、正直心の準備ができていなかった状態です。前震よりもはるかに驚きました。

C それから、どういった対応をされたのですか。

岩下 避難して来られる方が時間が経つごとにどんどんと増えてくるのでその受け入れに追われました。ただ本震は40分近く断続的に揺れていたもので、いつ収まるか分からず不安に思っていました。建物が大丈夫かなと思ったのと外が真つ暗なので何も見えなくて瓦の落ちる音とかガラスの割れる音だけが聞こえて「何が起こってるんだろう」といった状況でした。

C 何名の職員さんで対応をされていたのですか。

岩下 役場から2人、そして泊まり込みの社会福祉協議会の職員が数人でした。

C 数人での対応は難しかったのではないのでしょうか。

岩下 多くの人が避難して来られましたが一斉に押しかけて来られるということはなく、多少並ぶものの少しお待ちいただければ大丈夫というくらいでした。避難している方はロビーにテレビがあったのでニュースに釘付けになっている状況でした。

C テレビがついたのですか。

岩下 つきました。停電になっていなくて、それは有り難かったです。

C 岩下さんはそのまま朝まで避難所で対応をされていたのでしょうか。

岩下 そうです、交代が次に来たのが9時過ぎだったと思います。ここからは、10日間くらい家に帰れない日々が続きました。

C 総務課は物資班とかではなく、災害時にはどういった役割になるのですか。

岩下 総務課は基本的に災害対策の本部機能で、統括であったり臨機応変に動く要員となります。基本はやっぱり住民対応になります。電話と情報の集約と情報の整理がメインになります。とにかくもう電話線がいくらあっても足りないくらい頻繁に問い合わせと苦情の電話がかかりっぱなしでしたね。

C そうすると、10日間避難所での運営というよりも、災害対策本部でそういう情報をまとめたりするのが岩下さんの持ち場だったわけですか。

岩下 そうです。最初の1ヶ月はそちらの方の持ち場

が強かったですね。5月の中旬くらいからはり災証明書の発行が始まったので、その後2ヶ月強はそちらにずっとかかりつきりだったと思います。

C そこではどのように過ごされていたのですか。

岩下 災害対策本部では、今お話ししましたように、電話の対応と被害状況の集約をやっていました。その段階で勤務シフトのローテーションが組まれたので避難所か災害対策本部に詰めることになりました。役場か避難所に泊まる状況で、避難所の椅子に座って寝るか、災害対策本部では段ボールを敷くなりパイプ椅子を並べるなりで横になっていました。着替えだけに家に帰るのが時折できたくらいでした。

C ご自宅の方にご家族はいらしたのですか。

岩下 妻も前震の時は家にいたのですが、さすがに本震の時は隣の方から声をかけていただいて近くの中学校に避難をしたようです。

C ご家族のことが心配だったと思うのですが。

岩下 そうですね。電話が通じたのが幸いでした。無事が確認できていたので慌てて家に帰る必要がなく

て、その分仕事に没頭できたのは良かったです。それと、日頃から家族間の中で、何かあったら基本は職務を優先せざるを得ないというのは言っていたので、そこは十分に妻の方も理解してくれていたので有り難かったです。

C 緊迫した業務が続くわけですが、震災後1ヶ月間の活動で、大変だったことや問題が起こったことはありましたか。

岩下 大変だったことは、災害の対応自体に全く慣れていなかったことです。そのことをすごく感じました。震度5の大地震が来たという避難訓練はしていたわけですけれど、あくまで避難して終わり、避難所を開けて終わりの訓練だったのですごく想像力のない訓練をしていたのだなというのを痛切に感じました。

C 訓練が形骸化していたということでしょうか。

岩下 今までも台風とか大雨で避難して来られたことはあったのですが、何人かだけで、避難所が人で溢れる経験はなかったのです。ところが今回は、次から次

に人が増えてきて、そうすると先に避難していた人が既得権益的に場所を占有してしまうのです。それで、受け入れ時点でもうちよつと整理が必要だったなと思いました。長期化した避難所とかを想定した上で最初から「この辺りを使ってください」とか「人が増えてきたら移動してもらいます」とか一定程度の秩序やルールなりをきちんと作っていかねければならなかったなと感じています。

C 受け付け名簿には避難される方の名前を全員書かれていたのですか。

岩下 一応そうお願いはしていましたが、書かない方や名前は書いてもいなくなる方とかもたくさんいらっしゃいました。一生懸命、受け付け名簿であったり、目視で確認して避難者数を把握しようと努めていたのですが、車中泊が結構おられたのと出入りの激しさで正確な避難者数を把握できないままでした。食事は避難所で確認できた人数だけしか食料のリクエストを本部にしておらず、そこに車中泊してる方が押しかけて来ると全然足りない、パニックになったりしてい

ました。

C 食料配布の状況はいかがでしたか。

岩下 女性や子どもさん、年配の方、体の不自由な方を優先させてもらっていましたが、なかなか秩序やモラルの維持が難しかったです。避難所の中をどう秩序維持していくのか、食料配布の時にどのように整列していったら良いのか、ということをこれまで全くできていなかったなというのを痛烈に思い知らされました。避難者数の把握とかの問題も同様です。

C 判断に困るようなこともありましたが。

岩下 体の弱い方、年配の方、障害を持っている方の居場所を本当は確保してあげないといけないかったのですが、とてもそこまで手が回らず大多数の健常者の方に沿った避難所運営しかできなかったのが当時の受け入れを思い出せばあれで良かったのかなと未だに考えます。

C 職員が足りなくて、きめ細かい対応ができなかったということでしょうか。

岩下 途中で気がついたのですが、老人福祉センター

の避難所で対応している時、社会福祉協議会の職員の方が食料配布の時に手伝ってくれる人を避難されている方の中から募集されていたのです。「手伝ってくれるスタッフを募集します」という感じで声をかけられていたのです、そうすると結構協力してくださるんですね。大多数の方は協力的で、最初からこう投げかければ良かったんだというのをすごく感じました。最初は自分たちだけがどうかしないといけない、と焦って抱え込んでいたのが良くなかったですね。

C 皆さんの協力は大きな力になりますよね。

岩下 地震がある程度落ち着いてから、避難所運営に関する色々な本を読むと、避難所運営自体は行政がやるわけではなくて、避難している方自身が運営すべきなんだと書いてありました。最初の道筋だけ作って、後はその自主運営に任せるようなやり方を私たちも、もう少し勉強しておくべきだったと反省しました。

C 他に避難所運営で苦労されたことはありませんか。
岩下 ペット連れの方の対応に苦労しました。避難者

の中には動物が苦手な人もおられるので、ペットの受け入れはすごく悩ましい問題です。避難所運営においては、今後も考えておかないといけない課題かと思います。

C 教訓とかがありますか。

岩下 避難所での子どもの力って偉大だと思いました。子どもがいることですごく和むこともあったり、あるいは率先して掃除とかをしてくれると、すごく良い手本になります。トイレ掃除とかも円滑に回っていました。私が担当した小学校の避難所とかでは水がずっと止まっていたので、次の人が流すようにプールの水を汲んで持つてくるというのがいつの間にか暗黙のルールとなっていました。子どもたちの手書きで「次の人の分も水をプールから汲んで持つてきましょう」とあるのと、私たちが「持つてきてください」というのでは効果は全然違いました。それでもされない方を見かけると、大人のモラルについて考えさせられたりもしました。ただ、足の不自由な方などの場合は「私が行きますから大丈夫ですよ」と言ってくくださる方も

いて、助け合つてるところに遭遇すると微笑ましく捨てたものじゃないと思う時もあり、色々な人間模様というか人間性を避難所では見たように思います。

C そのように避難所運営をされてきて、活動の原動力となったものは何ですか。

岩下 感謝の言葉というかお礼を言われることがすごく原動力であり、報われる気がしました。私たち公務員は公のために尽くす仕事だということは十分分かっていますが、災害がひとたび起こると苦情の矛先になることばかりです。だけど、それに勝るくらい感謝の言葉も多くて、そうした言葉に接すると自分の自治体職員としての立ち位置に立ち返ることができました。感謝の言葉をもらった時、自分たちはやっぱり住民の方々のために頑張らないといけないんだということをつくづく思いました。

C 復興に向けて色々な歩みがあつたと思うのですが、その過程で岩下さん自身が震災から一区切りついたと思つた時期や出来事はありますか。

岩下 町民交流施設（オークスプラザ）で、り災証明書の発行業務にずっと携わっていて、ある程度ニーズが減ってきたのでそこを閉じてプレハブの仮庁舎に入り、それぞれの課で受け付けるようになった時です。それまでは色々な自治体や色々な方の応援を受けながらずっと対応してきたのですが、ようやく自分たちで、なおかつ自分たちの持ち場で受けることができるようになった時は一段落ついたとすぐ感じました。

C 役場職員さんの多くが、その時を一区切りと感じておられるようです。

岩下 そうでしょう。7月にプレハブでの業務が本格稼働し始め、一息つききました。3ヶ月ぐらいいはずっと働きづめでもありましたので。

C 土日も仕事だったのですか。

岩下 ローテーションじゃない日があつても何が起るかわからないので仕事にきていました。もともと休もうと思えば休めないこともなかったのかもしれないのですけど。

C 岩下さんが、個人的に一区切りついたと思われた

時期はいつ頃ですか。

岩下 半年ぐらい経った時点から少し落ち着き始め、県外の知り合いが訪ねて来てくれるようになりました。その方々の案内をしている時に、冷静に地震を振り返ることができたので、町外や県外の方々に被害状況や今の状況とかを客観的に振り返って話すことができるようになり、だいぶ落ち着いたなというのを感じました。



り災証明書発行業務の事前講習会の様子

C 今回、被害の大きかった熊本地震を経験し、何か考え方や行動について変化はありましたか。

岩下 すぐく感じているのは記録を残すことの大事さです。後で振り返ろうとした時に記憶として薄れてしまっていることがいっぱいありました。色々な面でお話をする時も、被害写真にしても、その当時の生活や状況をきちんと振り返れるような写真というのはごく少ないのです。

C 意図的に記録していかないと、記録は残らないですね。こうした取材も記録していく意味で大事ではないかと思っています。それ以外にも変化はありますか。

岩下 色々な人に助けていただいて今があります。自分たちが一人じゃないというか、色々な人の助けを受けたことへの感謝の気持ちがすぐく生まれました。この感謝を返していかないといけないと思います。だから、今度他のところで有事が起きたら率先して支援に行きたいと考えています。それと、自分たちの自治体

だけでは対応できない大災害に備えて、援助を受け入れる能力「受援力」という、どういった助けが必要なのか、助けてもらう時にどういう助けをしてももらった方が良いのかということを整理しておかないといけないというのを感じました。

C 確かに、援助する側も何に困っていると発信してもらった方が助けやすいでしょう。

岩下 明確に「こういう人がほしい」「こういった助けがある」というのを伝えた方が良いので。被害状況の情報発信がすぐ弱かったなということも今は思います。震災が起こった直後は震災対応に追われるばかりで記録も残せないし、被害状況を声高に発信することとしてこなかった。どこに被害を受けて何が大変なんだということをもっと発信していくべきだったなというのを感じています。情報の発信と記録をもう一回どうにか組み立てないといけないのではないかと思います。

C 住民の皆さんや他の職員さんで考え方や行動に変

化を感じることはありませんか。

岩下 たくさんの人に支えられて今がある、というのを実感した職員は多いのではないかと思います。色々な応援をいただきながら業務をこなしていた職員は少なくとも「有り難かった」と感じていると思うので、助けてもらうことの大きさが十分理解できたのではないかと思います。正直今までは阪神・淡路大震災もあり、東日本大震災もそうですが、その時に「じゃあ応援に誰か行くか」となると、ほとんど手が挙がらなかったのです。他人事でした。だけど、今回の地震で自分たちが被害者、被災者の側になったことで、1年後2年後にどこかで大災害があった時とかは多分支援に行こうと名乗りを上げる職員が前よりは増えるのではないかと期待しています。

C 確かに、今回の取材で、援助への感謝と次は自分たちが、ということをお話される方がおられました。

岩下 他には個人的にも色々な人から励ましの言葉とか電話、メール、をいただきました。何気ない連絡でもすごく有り難く、勇気づけられましたので、自分も

そういった些細な気配りができる人間になっていきたいと思いました。

C 最後の質問にしたいと思いますが、これから岩下さん自身や大津町に望むこと、やっていきたいことは何かありますか。

岩下 今まで話したことの重複になるかもしれないですけど、困っている住民の方々の側に立った対応は何かを考えていきたいと思っています。住民の方だけに限らず困っている方々のために何かしたいと思うので、大津町以外で災害があれば駆けつけたいとも思うし、自分の力ですごく微力でしょうけども、少しでも足しになるのであればそうした応援をしていきたいと思っています。

C やはり震災を受けた身だからこそですね。

岩下 はい。熊本地震自体も多分、何年もしないうちに風化していくと思います。当時の様子を口頭での伝承でも何でも良いので、伝えていくことができたらと思います。

C 努力しなければ風化は避けられませんね。

岩下 熊本地震は阪神・淡路大震災や東日本大震災と比べると被害は少なかったと言われています。大震災レベルではなく、地震レベルではないので、おそらく風化するのが早いのではないかと思います。もう災害がないことに越したことはないですが、こうした体験をしてしまった以上はこの経験を無駄にしてはいけないと思います。

C 行政ができることとして、例えば何がありますか。

岩下 今回の地震を経験して、非常食を用意されたところが増えたと思います。ただ、そうした非常食も2、3年で賞味期間が切れてしまいます。非常食の期限が切れる頃には、地震の記憶が随分と風化して危機感が薄れているだろうと思うのです。そうすると、災害直後、支援が届くまでの間に自力で生き延びることが難しくなってしまうので、風化させず、準備の大切さの啓発などをやっていくことが私たち行政ができることなのではないかと思っています。

大津町役場 総務部財政課

取材日 平成28年11月14日

中原裕二（30歳） なかはら ゆうじ

財政課で勤務している中原。

震災直後は避難所などでの活動をメインに行っていたが、その後は震災で使用不能となった役場庁舎を代替する仮設庁舎建設に関わる業務を担当した。入庁からずっと見てきた建物がなくなることになり寂しさも滲ませるが、復興を早めるため、町民にとってより良いものになるよう奮闘している。

C 財政課管財係で中原さんはどういったお仕事をしてるのですか。

中原 基本的には庁舎管理を担当しています。あとは物品管理や、契約事務も行っているので入札事務もを行います。

C 管財係には何名いらっしゃるのでしょうか。

中原 係長1名と私の2名です。

C それでは震災発生時のことについてお聞きしたい

と思います。前震の時はどちらにいらっしゃったのでしょうか。

中原 仕事が終わって家にいました。私は菊池市に住んでいるので大津町とは震度も違ったのですが、それでも大きな揺れでした。幸い家の中の棚や家具は倒れたりしなかったもので、家族の無事を確認した後は、テレビで震度を確認して役場に向かいました。到着後は、避難所である大津中学校に行きました。

C 役場から大津中学校に行かれた時間はいつ頃でしたか。

中原 22時半から23時だったと思います。役場に22時過ぎには着いたと思います。

C 大津中学校ではどのようなことをされましたか。

中原 基本的には避難して来られる方の受け入れ、避難所の運営です。

C 避難所の開設の際は中原さんお一人だったのですか。

中原 2人で行いました。

C どのくらいの人が避難して来られましたか。

中原 最初はそこまで来られませんでした。10人くらいではないでしょうか。駐車場も車が何台か止まっているくらいでした。

C 最初は混乱する感じではなかったということですね。大津中学校での活動というのは何時頃までされていたのですか。

中原 翌朝の7時から8時くらいまでいて、後任の職員に引き継ぎ、役場に戻りました。その後は庁舎内の片

付けをしていました。

C その後、夕方、お仕事が終わってご自宅に戻られたのですか。

中原 そうです。家に帰りました。

C ご自宅にいる時に本震が起こったと思いますが、その時の状況や様子をお聞かせください。

中原 疲れもあつてぐっすり寝ていたんですけど、菊池市でも揺れが相当ひどかったので飛び起きて、今度はテレビも見ずに「これはすぐ行かないか」と思って役場に向かいました。

C 出られたのが何時くらいでしたか。

中原 停電で全く見えなかったので出るのに時間がかかって、2時半くらいだったと思います。着いた後は、イオンに物資を受け取りに行き、再度大津中学校に行きました。

C 何名かで行かれたのですか。

中原 その時は5、6名で行ったと思います。そして、そのまま大津中学校に行つたと記憶しています。

C その時の大津中学校は人が多かったですか。

中原 多かったですね。建物内はそんなに多くはなかったのですが、駐車場が3分の2くらい埋まってしまっただけの車が来ていました。

C どんなことをされていたのですか。

中原 避難所の運営や、車の数を数えたりなどですね。たくさん来られていたので、とにかく朝方までやっていました。

C 目の前のことをまずは行われていたということですね。その後も避難所での活動が多かったですか。

中原 基本的には1週間くらいは避難所や災害対策本部に泊まったりが多かったです。昼間も、物資の配給など職員が必要な時には外に出たりしていたので、基本的には庁舎内にいるよりもどこかに出ている方が多かったです。

C 4月23日くらいまでは、ということですかね。

中原 はい。確か本震から3、4日はずっと災害対策本部にいたと思います。夜も。災害対策本部に泊まるか避難所に泊まるか、という選択肢はありませんでした。

C ご自宅には帰れずという状況だったのですね。
中原 はい。

C ご自宅に帰られたのはいつ頃ですか。

中原 日付までは覚えていないのですが、20日くらいでしょうか、結構経ってからだったように思います。ただ、一旦家に帰って、すぐに仕事に戻るという感じでした。

C では休むという帰宅ではなかったのですか。

中原 そうです。

C ゆっくり寝れるようになったのはいつ頃ですか。

中原 5月に入ってからです。連休もずっと仕事に出ていたのです。

C 4月中はゆっくり寝れる状態じゃなかったということですね。

中原 良かったです。4月は。

C 5月以降はご自宅でゆっくり休むことができるようになったということでしょうか。

中原 自宅は築数十年経っているので、家の中は危ないかもしれないということで近くの小学校に行って、

車の中で寝ていたので自宅ではなかったですね。

C その期間にご両親も車中泊が続いたのですか。

中原 そうです。

C 大変ですね。お仕事の後も車中泊では満足に体が休まらなかったと思います。14、16日と立て続けに地震が起こったわけですが、それぞれ揺れた時の心境はどうでしたか。

中原 前震の時は、ただただびっくりしたという感じ
です。

C その翌日の15日は少し安心されたかと思っています。
恐らく多くの人が安心されたかと思いますが…。

中原 そうですね。余震はあると思っていますけれど
本震があるとはなかなか思いませんよね。

C そんな中、本震が起きたわけですが、その時の心
境というのはいかがでしたか。

中原 意味が分からなかったです。何が起きたのか、
という感じで。

C その本震で役場の庁舎が使えなくなったと思いま

す。それを目の当たりにして何か思うことはありまし
たか。



地震直後の大津町役場内部

中原 入庁からずっと見てきた建物なので、もう使わないという決定がなされた時は「もうここで仕事できないんだ」という感じでした。2、3日経ってから中に入った時に、改めて被災の状況を確認して、これはもう使えないと実感しました。

C 避難所の対応などで忙しい中、親しんできた庁舎も使えないというのは辛いですね。地震後の活動についてもう少し話を聞かせてください。5月以降の震災対応で中原さんのメインとなる仕事は何でしたか。

中原 私の部署は仮設庁舎の建設を考えないといけなかったのです、そちらの方に取り組むようになりました。

C 仮設庁舎というのはどこに建てるか、ということなどを決めていくのですか。

中原 そうです、立地からです。庁舎が使えないとなった時に役場の機能を移転させないといけないので、まずは町民交流施設（オークスプラザ）と、生涯学習センターと、浄化センターという3つに分散しました。

ただ、住民の皆さんにとって分散している状況は不便なので、手続き関係の住民課や福祉課は、町民交流施設（オークスプラザ）と一緒に配置されました。ですが、それでも利便性が悪かったため、仮設庁舎を作るという判断が出て、準備を進めることになりました。

C 震災後、どここの課をどこに移すかというのは中原さんが考えておられたのですか。

中原 窓口機能は役場から近い場所です、というのは決まっていたので、限られた町の施設である生涯学習センターと浄化センターに、どここの課を割り振るかというところなどを財政課の職員で検討していきました。

C 最初から予定としてあったものではないと思うのですが、予算一つをとっても大変だったのではないですか。

中原 この係に異動してきてから3週間目だったので、何も分からないまま地震がきたという感じでしたから、大変でしたね。

C それまではどの課にいらっしゃったのですか。

中原 教育委員会の学校教育課です。

C 全く違う課に異動され、引き継ぎはされていたのですか。

中原 引き継ぎはまだ十分に受けていない時でした。

C ではプレハブの手続きなどは、自前でやっていかれることになったのですね。

中原 そうです。ただ全員が震災対応に追われていたので、4月中は通常業務に関する話は聞けない状態でした。

C 地震のせいで全てがずれてしまったのですね。

中原 はい。

C 庁舎が使えなくなり、プレハブに移る準備をする中で大変だったことはありますか。

中原 課長、係長と一緒にやっていたのですが、全くゼロからのスタートなので、他課との調整はかなり時間をかけましたね。

C どのくらいの期間調整が必要だったのですか。

中原 建物が完成して引き渡されてからも、実際使ってみると足りないものが出てきて、時間が経ってから

分かる部分もあったので、つい最近まで行っていました。

C 建つまでも準備はしていたけれど実際建つてみると、また違う問題が出てくるということですね。次は新庁舎を建てる業務をされるのでしょうか。

中原 管財係では旧庁舎の取り壊しの業務を進めているところなので、建設に関しては別の課で進めています。

C 取り壊しには相当なお金がかかるのではないですか。

中原 はい。取り壊しにはいくらかかるかというのを試算しているので、それが終わればいくらかかるというのが分かります。

C 今まで仕事していた場所が取り壊されるというのは、どういったお気持ちですか。

中原 私は7年目なのですが、最初数年は出先機関にいたので、役場で仕事をしたのは丸3年です。面接もここに受けに来ましたし、思い出はたくさんありま

す。寂しいですね、なくなってしまうのは。

C ところで、庁舎の管理や避難所での活動など、夜を徹して仕事をされてきたわけですが、その原動力になったものは何なのでしょう。

中原 他の職員が頑張っているので自分も頑張らないといけないというのが強いです。小さいお子さんがいる職員でも役場に出て来られ、家庭を顧みず仕事をされておられたので。自分も頑張らないといけないと思いました。

C 役場という拠り所があるから住民も安心でき、震災時だとなおさら役場機能がストップしてしまつては大変です。

中原 震災が起きてから1ヶ月くらいは、ずっと気を張っていました。体は疲れていても、町民の皆さんのためにも仕事を怠るわけにはいかないのです。

C 震災対応は本当に大変でしたね。

中原 今考えると、確かに大変でした。

C 震災対応で大変だったことや考えることなどはあ

りましたか。

中原 避難所に配置された時に、多くのボランティアの方々に支援をいただきました。その中でも、避難所に避難して来られた方が、そこでボランティア活動されていたのは印象的でした。自分たちの力で乗り越えることで、気持ち的にもプラスになっていくのではないかと感じました。全員がそうなるというのは難しいですが、その姿は他の避難している人々の励みにもなると感じました。

C 人のために動ける人というのは、日頃からそういう行動をしている人なのでしょうか。

中原 どうなのでしょう。ただ、地域性もあるのかもしれません。私が担当した北部の避難所ではお米とか味噌とか全部持ち寄って、区長の指示のもと女性メンバーが中心になって、調理や避難所の運営とかをされていました。他にもお年寄りへの声かけなどもされていて、全て自分たちで運営されていました。

C なるほど。

中原 有り難いことなのですが、大津町は人口が増え

ていて、町外から来られる方も多いのです。ところが、そうした新しい地区では同じようにはいかないのです。そうしたところでもコミュニティが固まれば、普段の関わりの中で知る部分や気づく部分もあるでしょうから、こうした災害時にプラスに働くと思います。

C 地区の皆さん全員で避難された地域もあるとお聞きしました。

中原 はい。最初に地域で動けるっていうのが力だなと思いました。

C 地域力というやつでしょうか。

中原 地域力がしっかりしているところは支援物資の管理までされているので、配っていても「十分足りてるから必要ないよ」と言われるところもありました。近所同士の助け合いは大きいと思います。

C ところで、中原さんが震災以後、一区切りついたと思う瞬間はありましたか。

中原 仕事では、仮設庁舎を準備するというのがメインでしたので、仮設庁舎で業務を開始した時に一段落

というか、一つの区切りだと感じました。

C 確かに、大きな区切りですね。

中原 これから先も、管理していくという仕事があるのでまだ終わったわけではないんですが、一つの区切りでした。

C 震災対応中の連絡は、電話やメールが多かったですか。

中原 事務的なものは役場のメールでした。電話も仮設庁舎で繋いでいたのですが、当時は4、5人に1台くらいしかなかったのでなかなか繋がらなくて、その時は個人の携帯にかけたりしていました。

C LINEを使っていたところもあったそうですね。

中原 それもありますね。消防団などはLINEでの連絡が多かったです。

C 安否確認とかですか。

中原 はい。道路状態などを道路管理の担当課に知らせる時もLINEであれば、すぐに写真を撮って送れるので便利ですから。

C 震災前と震災後で何か仕事に関しての変化はありましたか。

中原 震災対応の仕事をする中で、貴重な体験をさせてもらっていると思うようになりました。今しか経験できない仕事をさせてもらっていますので。庁舎の取り壊しも建て替えも、普通は40、50年に一度でしょうから、きちんとしないといけないと思っています。

C 震災後に、町民の方などに見られた行動の変化でお気づきになっている点がありますか。

中原 住民の皆さんは、大なり小なり被害を受けられています。地震を経験したことをプラスにしている人もいれば、そうでない方もおられるように感じます。私たちとしては、双方の方々の気持ちに寄り添って接しないといけないということを感じています。

C 震災から7ヶ月ほど経ちますが、直後と今とでは中原さんご自身の気持ちに変化がありますか。

中原 最初は落ち着く余裕もなかったのですが、やつと少し余裕が出てきました。仕事ではまだまだ震災対

応が続いていますが、仕事以外では日常が戻ってきて少しホッとできる時間もできました。

C 熊本地震前は熊本で地震が起きると思われていましたか。

中原 いえ、全然思っていなかったです。

C 皆さんそうおっしゃいます。11月11日の金曜日にまた震度4の地震が起きました。その時は当時が蘇ったりはしませんでしたか。

中原 その時は外に出ていて、歩いていたので気づきませんでした。役場に帰ってきたら「今すぐく揺れたよ」と、他の職員が教えてくれました。熊本地震以前の大きい地震というと、印象に残っているのは小学校低学年の時に起きた阪神・淡路大震災です。まだ小さかったけれど鮮明に覚えています。その後東日本大震災もありましたが、そうした地震はテレビで見えるもので、どこか他人事だと思っていたのだと反省しました。

C 自らが震災を経験し、見え方が変わりましたか。
中原 そうですね。違います。

C 防災グッズとかは用意されていたりしますか。

中原 水はストックするようにしました。

C 最後に今後のご自身の目標をお聞きたいです。

中原 時間がかかるでしょうが、復興に向け、力を注いでいきたいと心がけています。

C 今のお仕事でいうと庁舎管理ですか。

中原 はい。職員がしっかりと働ける環境があれば復興も早く進むと思います。他の課に異動してもそこで復興に向けて取り組みます。

C 震災対応というのは当たり前かもしれませんが、震災に対して、行政の存在はどうあるべきだと思われませんか。

中原 業務をきちんとやることが大事だと思います。その上で住民の不安を取り除けるような存在にならないといけないと心がけています。

大津町役場 住民福祉部環境保全課

取材日 平成28年9月19日

伊東正道（42歳） いとうまさみち

震災後はゴミ処理の業務を主に担当してきた伊東。

震災時すぐに役場へ向かい、町内の見回りや避難所での物資配布などに従事した。

莫大な量の震災ゴミ処理を持ち場として日々活動し、処理コストが膨らまないよう奮闘した。

現在も、町の復興に向け、震災対応を継続して行っている。

C 前震の時はどのような状況でしたか。

伊東 菊陽町であった慰労会に参加していました。慰労会も終わり、電車で大津町に帰ろうかなというところで地震が発生しました。今までにない大きな揺れだなと思いました。防災計画では震度5以上の地震が発生した場合、職員は役場に参集することが決まっていますので、私もそれに従ってすぐ、同席していた数名の職員と一緒に役場へと向かいました。

C 役場についてからは何をされたのですか。

伊東 前震が起こってから町長を本部長とする災害対策本部が立ち上がりました。そして、役場へ着いた職員から順次、町内の見回りに行くことになり、3人1組で1台の車に乗り見回りを始めました。大津町を北部・中部・南部と3つの区域に分け、それぞれ2台ずつで見回りました。私は北部地域を1時間半ほど見回ったのですが、電気もついていましたし、道路上に

ブロック塀が倒れているといった被害もなく、大津町内はそれほど被害はないのかなと思いました。

C 見回りが終わった後は何をされたのですか。

伊東 避難所を開設することとなり、私は大津北小学校の配属となり、一泊しました。余震は断続的に続いてはいましたが、被害があまりなかったこともあり、避難する人はいませんでした。

C その時ご家族はどうなさっていましたか。

伊東 妻と1歳の子どもがいるのですが、前震の際には連絡を取ろうにも電話が全然通じなくて、それでも仕事には行かないといけないので、メールで安否確認を行いました。30分後くらいにやっと電話が繋がりましたが、私は帰れないので近くの子育て・健診センターという避難所に避難してもらいました。実家の母親は携帯を持っていないので、妻から電話をかけてもらってやっと繋がり、安否確認ができました。

C 15日はどう過ごされたのですか。

伊東 通常勤務でした。私が所属する環境保全課はゴミ関係の仕事もしているため、前震の際に出た震災ゴ

ミを町の所有地に一時的に集める形で、震災対応を始めました。1人は役場に残らないといけないので、私は残って電話対応を行い、他の職員が現場に行ってゴミ収集の対応を行いました。

C その日は普通に業務を終えられたのですか。

伊東 19時頃に帰りました。前震の時点ではそこまで大きな被害はなかったので一部の防災関係の職員を除き、帰宅することになりました。ゴミ置き場も次週の土日まで開けておけば落ち着くだろうと予測して、土日の担当者を決めてその日の業務を終えました。

C その後本震が起こったのですが、その時の状況を教えてください。

伊東 自宅で寝ており、強く長く揺れるなど思いました。小さな子どももいるので何かあるといけないと思いました。倒れるようなものは寝室に置いていなかったのですが、その点は良かったところです。アパートは潰れるような感じではなかったですが、停電していたこともあり、前震とはまるで違うと思いました。妻と子どもをまた避難所の子育て・健診センターに送

り、私は職場に向かいました。

C お子さんも小さいですし、離れるのは不安ではなかったですか。

伊東 不安以前に、職場に行かないといけませんので。子育て・健診センターは役場職員もいるところですので、それで安心はしていました。ただ、避難所に行ったものの、建物に入れるのか、本当に安心安全なのか、という思いもありました。実際は、避難所では車で来た多くの人が建物内を怖がって車内にいたので。

C 職場に行かれた後は何をされたのですか。

伊東 役場も停電していて、ガソリンで発電する投光器で照らしていました。県庁に支援物資を取りに行くようにとの指示があったので、2時半頃から国道57号の東バイパスを通って軽自動車2台で県庁に向かいました。役場の公用車を使ったのですが、ガソリンが少ない車もあり燃料が心配でした。

C 地震の際はガソリンスタンドの渋滞がひどかったですからね。

伊東 役場の公用車の燃料に関してはギリギリまで運転してから給油するというのが慣例でした。普通の時であればそれで良いのですが、今回のことで燃料の大切さを実感しました。

C 県庁に行くまでの状況は。

伊東 停電が起きた時点で被害が出るだろうとは思っていたのですが、車の中のラジオで益城町はもちろん宇土市役所が倒壊しそうな状況という情報が流れ、各地で大きな被害が出ているのではないかと不安を感じました。

C 県庁に取りに行った物資はどんなものがあつたのですか。

伊東 非常事態用に備蓄していた水と乾パンをもらいました。水は市町村ごとに何パックというのが決まっていました。ただ、軽のワゴン車で乗るくらいのものでしたので、町民全員に配れる量では全くなかったです。毛布は町の社会福祉協議会に備蓄があつたのでそれを使いました。

C 伊東さんが物資を取りに行くことは決まっていた

のですか。

伊東 いえ、たまたまその場にいたからです。その時点では部署ごとの職員の役割分担が決まっている段階ではなくて、役場に到着した職員に対して次々に指示が出て動くという状況でした。

C 県庁から戻った後は何をされたのですか。

伊東 役場の電算室3階が災害対策本部でした。そこに電話や無線機といった通信機器を全部持つてきていたのですが、私はそこで電話対応を行い、その内容を上司に報告したり上司からの指示を伝えたりしていました。住民からここが壊れている、崩れかかっているといった電話がかかってくるので、その対応です。

C その後もずっと本部にいらっしゃいましたか。

伊東 16日の夜は、避難所の子育て・健診センターに宿直の指示が出ていましたので泊まりました。家族もそこにいたのですが、家族ばかり見ているわけにはいかないのです、体調が大丈夫か確認しただけでした。

C 避難所ではどのようなことをされていきましたか。

伊東 避難所では物資の配布をしていました。イオン

九州と協定を結んでいたのが、届いた商品を配布していました。最初に配っていたのはパンやおにぎりでした。配布時には避難者数を数えなくてはならないのですが、避難所にいる人だけでなく、避難所の駐車場や道向かいにあるお店（ダイレックス）に車中泊している方も多くいましたので、車1台につき3人くらい乗っていると数えていました。しかし昼には皆さん片付けで家に帰られているため、車の台数は主に夕方に数えていました。避難所内にいる方が100人ほど、車中泊されている方が400人ほど、合計で約500人の方が避難されていたと思います。

C 避難所運営で大変だったことはありましたか。

伊東 時間が経つにつれて様々な物資を支援していただけるようになったのですが、余るといふ状況が出てきたことです。車中泊などで数が読み切れなかったからかもしれません。他には配布される食料が毎日同じものであったこともあるかもしれませんが、避難者から「またこれですか」との声も聞きました。配布でき

る選択肢が少ないのはとても申し訳ないところですが、物流が回復する期間までの、無駄なく配布できる食品数の確認と、配布物資の選択肢の確保は、大きな課題と感じたところです。

C 物資以外で何か問題はありませんでしたか。

伊東 断水していたのでトイレが問題でした。室内のトイレが使えず、室外のトイレの横に消防団が持つている簡易水槽を設置し、消防団員が防火用水槽からホースで水を入れてくれました。その水を各自トイレを使用する際に水洗タンクに入れて流すという方法を取っていました。水洗タンクがあるトイレはこの方法が使えたのですが、水洗タンクのないトイレは水を流すことができず、衛生状態が悪くなっていたということ聞いています。場所によっては自衛隊の仮設トイレが設置されたところもありました。

C それ以外に避難所で気づいたことはありますか。

伊東 地区によって避難所内の自治運営に差が出ていたことです。区長といった地域の代表の皆さんが避難

所をまとめていて、自治がしっかりしているところは非常に助かりました。

C 何が違うのでしょうか、そういうのは。

伊東 前から住んでいる方が多い地域ではこの人が言えばみんな従うといった感じで、お互いに顔を知っていて、地域の輪ができてるように思いました。そういった方がいるかいないかが差の一つではないかと思っています。「子どもたちに避難所のルールを決めてもらう」という方法をとったところもあったそうです。子どもたちがルールを考え決めることで、大人も従うようになり、そうやって避難所の自治を作り上げていったという話を聞きました。

C 伊東さんの本来の持ち場であるゴミ関係のお仕事に戻られたのはいつ頃からですか。震災で大量のゴミが出て大変だったのではないかと思うのですが。

伊東 17日から震災ゴミの受け入れを再開しました。震災ゴミも通常のゴミと同じように、ゴミごとに置き場を決め、分別することを第一に対応していました。

ゴミは税金で処理をするわけですが、少しでもそのコストを下げるには分別が必要となります。そのため、ゴミは瓦や木材、金属類などに分けました。ただ、町民の皆さまからは「こんな非常事態にどうして分別しなくてはならないのか」ということも言われました。一刻も早く片付けをしないといけないという気持ちはとても分かります。しかし処理費用も税金で賄われているので「分別にご協力ください」とお願いするしかありませんでした。

C 分別ゴミの再利用について教えてください。

伊東 木材だとチップにしてバイオマス発電やセメント工場の燃料として使用できます。コンクリートは砕いて道路路盤材に使うといった、有効利用が可能となります。埋め立ては、場所がありませんので、実は一番費用がかかる処理方法です。それで再利用できるものは再利用して処理費用を少しでも抑えたいと思うのです。分別しない状態では、最もコストのかかる埋め立て処理しかできない場合もあります。それは避けた

い。その費用は皆さんが払っている税金ですから。
C ゴミの受け入れは職員で対応されたのですか。

伊東 最初は私たち職員だけで対応していましたが、後からは、他県からの職員が応援として加わり、3人ほどでゴミ置き場を運営していました。分別に関しては先ほどお話ししたように、激怒される方もおられ、そういう場合には私たちも一緒にゴミの分別作業をすることでご理解いただくようにしていました。



矢護川地区 仮ゴミ置き場

C 震災ゴミが持ち込まれたピークはいつ頃でしたか。

伊東 ピークは4月後半から5月のゴールデンウィークの頃でした。一日に延べ800台ほどの車が来ていました。

C 相当な量のゴミが運ばれていたんですね。ゴミの受け入れ場所がパンクしたりなどはなかったのですか。

伊東 震災ゴミの受け入れ場所は転々と移動しています。指定場所のゴミが満タンとなったら、業者にゴミを持って行ってもらい、その間に空いている別の場所で受け入れを行っていました。そして業者による撤去作業が完了したらまたそこに戻るといった形で運営していました。受け入れ場所が移動した情報については町のホームページや、防災無線、メールで発信していました。

C 9月の今でも震災ゴミは出ていますか。

伊東 9月でも毎日100台ほどの車が来ています。

お話を伺うと、今も少しずつ片付けているとのことでした。なお、持ち込めないゴミとか、家庭ゴミを持って来られる方もおられて、そういった方には「家庭ゴミの日にしてください」とお伝えしています。

C 伊東さんが担当されていたのは何のゴミですか。

伊東 全てのゴミです。ただし膨大に出てくる一方で、ゴミ置き場の広さの問題もあり、全ての震災ゴミを受け入れるのは困難でした。震災ゴミの受け入れ項目は市町村ごとに若干違います。それで、「他の市町村では受け入れてくれるのに大津町ではなぜ受け入れてくれないんだ」といったことも言われました。他の市町村ではその逆もあったかと思っています。

C 他に大変だったことはありますか。

伊東 震災ゴミ受け入れの問題の一つとして、どうみても震災で壊れた物ではない物を持ち込む人がいたことです。普通に処分しようとするとお金が発生するため、震災ゴミとして捨てようと考えの方がいらっしゃるようです。地震で壊れたと言って持つてこられる方に

どう対応すべきか、悩みどころでした。受け入れできないと判断したゴミは本人に持って帰ってもらおうという対応をしたのですが、この対応には多くの苦情を受けました。了承していただき、持って帰ってくださいる方も多いのですが、見ていないところで受け入れ不可能なゴミを置いて帰られる方の中にはおられました。

C 不法投棄のようなものですね。その場合はどう対応されたのですか。

伊東 不法投棄と判断したゴミは、それに沿った対応をしていきました。受け入れ時間が終わった後に職員が見回って撤去する作業をしていきました。放置していると「あそこに置いてあるじゃないか」となり、真似して受け入れていないゴミを捨てていく人が出てきますので。

C なるほど。他にも問題はありますか。

伊東 最近問題になっているのは、大津町民以外の人ゴミを持ってきているのではないかとということですね。受け入れの条件として、り災証明書を提示しなくてはいいのですが、コピーも可となっていますの

で、借りてゴミを持ってきている可能性があるのとは言われています。その対策のため、多くの市町村が許可書に変更しています。ですがそれでも偽証される可能性はあり得るので、対応が難しいところです。

C 話をお聞きしていると大変な仕事だというのが良く分かりました。復興に向けた重要な仕事を行われる中で、一区切りついたなと思った出来事がありますか。

伊東 今回の地震で役場に大きな被害が生じ、危険であることから役場内での業務ができなくなりました。4月25日から役場南にある町民交流施設（オークスプラザ）で役場としての業務を行い始めたわけですが、7月の3連休（17～19日）後から役場が仮設庁舎に移り、どうにか業務を各課できちんと行えるようになりました。同時に震災後の各種相談に来られる方も徐々に減っていき、職場的にはそこが一つの区切りとなったかなと思います。

C 良く分かります。

伊東 ただ半年が経ってこれからは、被災家屋の解体

作業が始まっていきます。り災証明書で半壊以上の判定をもらった方は、申請によって公費（国と町が費用負担）で解体できます。現在半壊以上の家屋に住む人にとって、修理してその家に住み続けるか、解体して建て直すかという選択を迫られているところです。そのうち、解体の申し込みは500棟ほどあります。熊本市や益城町では2年かけて解体を進める計画となっているのですが、家を壊すまでに時間を要することとは、生活再建を早急に進めたいという気持ちに相反することとなるため、大変心苦しいところです。町としてもいかに早く公費解体を進めていくかが問題となっていて、これに関しては一区切りというよりも、「今から」といった気持ちが強いです。

C 伊東さんの中で震災前と後で変化はありますか。

伊東 もしもの時の備えをするようになりました。地震はもうこないだろうと楽観的に考える人もいますが、起こり得るので普段からの備えが重要だと思っ

うになりました。

C これからの大津町に望むことがあればお聞かせください。

伊東 役場職員一人一人に役割意識が普段からないといけないと思います。防災計画であらかじめ個々の部署が何をするとした担当は決まっていました。ですが実際の現場では部署関係なく、来た人から仕事を振り分けられ対応してきました。職員全員が地震直後、すぐに職場に集まったかというところではなく、町外に住む職員は道が寸断されていたところもあつてすぐに来ることができない職員もありました。今後の課題としては、防災計画のマニュアルについて災害時に十分機能し得る内容かどうか再度見直し、その内容に従って職員を動かしていけるかどうかということです。日頃の防災訓練も単に集まってやるだけではなくて、実際にどう動くのかという意識を個々人が持つてやらないと意味がないのではないかと思います。

C なるほど。その他に何か課題はありましたか。

伊東 その他では、震災の際には、連絡の取り方をどうしていくかが課題ではないかと思います。震災が起こった際には電話はなかなか通じません。そのため、本部とも電話では連絡が取れずに困った場面もありました。私も含め職員同士ではLINEで連絡を取り合っていた人もいましたが、全員がLINEを使える状態にあるわけではありません。混乱時にも確実にとれる連絡方法を今後模索していかなければいけないかと思っています。

C 災害時、情報伝達と共有は極めて重要ですね。

伊東 はい。それとゴミ置き場の場所変更など、町民の皆さんに伝えなければいけない情報は、広報紙や町内の放送で発信していましたが、広報紙を見ていない、防災無線を聞いていないとなればそれまでとなつてしまします。今回ゴミ袋が震災の影響で足りなくなった時、何月何日まででは市販の袋で構いませんと決めて、各種媒体をフルに使用して、周知したのですが、実際には知らなかったという方も多く、十分に伝わっ

ていませんでした。

C そんなこともあったのですね。

伊東 役場としても3万4千人いる町民の皆さんにできる限り情報を伝える努力は必要です。しかし限界もあるだろうと思います。役場側に情報発信という点で足りなかった部分も当然あるのですが、住民の皆さんにも自ら情報を調べてもらうことが非常時では特に必要だと感じました。今後は、情報発信と情報収集の点で町民も職員もお互いにできる限りの努力が必要となってくるのではないかと思います。「情報は入ってくるだけではなく、自分でも様々なルートから知る努力が必要である」と誰かも言っていました。そのため発信、そして収集のあり方など今後考えていく必要があるでしょう。ただ、解決するのはとても難しい問題でもあります。

大津町役場 住民福祉部住民課

取材日 平成28年12月9日

原野^{はらの}さくら（19歳）

4月に新規採用職員として入庁した直後に震災に遭遇した原野。

役場に入庁したばかりの4月に地震を経験し、被災者支援活動にあたった。

各避難所を巡って支援にあたり、インフルエンザの流行阻止などに尽力した。

他県からの支援に感謝し、今後、県外で有事があれば、自らが支援できる存在になれる

ように、という思いで職務に当たっている。

C 前震が起こった時の状況や様子をお聞きかせください。

原野 役場に採用されてすぐに前震がありました。地震が起きた時は家にいましたが、「とりあえず役場に行かない」と思ってすぐに出かけました。

C ご両親は役場に行くことを心配されませんでしたか。

原野 そうでもなかったです。でも家族のことは心配

でした。

C 役場にはすぐに向かわれたのですね。

原野 そうです。ちょうどその日にたまたま「地震とか大雨とかの災害の時には役場に来るんだよ」という話を課長としていて、行かないと、思ってすぐ家を出しました。

C 役場に行かなければならないということは、知っていた状態だったということですね。

原野 はい。同期の「LINE」でも「来てるよ」とか、「今から行きます」といったやりとりをしていました。到着するとみんな集まっていました。

C 到着後はどういったことをされたのですか。

原野 災害対策本部で指示を受けて避難所に行きました。とにかく何をすれば良いか分からなくて、言われたことをきちんとやろうと思っていました。本来の仕事すらも、まだきちんと教わっていないような状況でしたから。

C お一人で行かれたのですか。

原野 住民課の先輩と2人で行きました。

C 避難所に行かれた時間は何時頃でしたか。

原野 日付がまだ変わっていないくらいの時間帯だったように思います。室小学校の避難所では、避難できない足の不自由な方々を車で移送し、誘導したりしていました。

C 15日の朝まで避難所にいた後は、どうされましたか。

原野 1、2時間ほど自宅に帰って休みました。

C 昼に役場に戻ってからはどういうことをされたのですか。

原野 役場で物資の仕分けをして、避難所に運んだりしていました。住民課がその役割でしたから。

C 本震が起きた時の様子をお聞かせください。

原野 家の近くに避難所になる「楽善ふれあいプラザ」があるので、家族全員でそっちに避難してそのままそこで活動しました。

C 役場へは行かずに家族で避難されたのですか。

原野 そうです。担当としてそこにいた役場職員の指示に従っていました。

C 役場に行くのは、絶対ではないのですか。

原野 上司に連絡を取ったら、そこで活動しろということでしたので。そこでは電気を起こしたり、人数確認をしたり、体調の悪い人がいないかとか、マンションの住人は全員避難しているかとか、そういった確認をしていました。

C 人数確認などどのような方法でされていましたか。

原野 どこに何人避難されているか、という人数把握です。それで、物資の数も変わってきますので。

C 職員は何人で対応していましたか。

原野 元々2人でしたが、私と保育園の先生が近所ということで加わり、合計4人で対応していました。大きなマンションがあつて、そこの方が全員来られていたので避難して来られていたのは100人弱くらいですかね。建物内に入れず外だったので、ほとんどの方が車の中におられました。

C 朝まですつと避難所でしたか。

原野 はい。その後役場の災害対策本部に戻りましたが、その後も転々と避難所を回っていました。例えば今日は小学校、次は中学校、というように1日ごとに移動していました。違うところに行くと、その状況はすぐには分かりません。場所も住民の皆さんのこともすぐに把握できない。そういったことは避難所に着いて引き継ぎをしてもらうのですが、引き継ぎ漏れや引き継ぎでは分からないこともありました。気遣いの必要な高齢者の方がいらしたのですが、全然気づけな

かったことがありますから。そういうこともあつて転々とするよりも、1箇所にいた方が良かったのではないかと思います。



避難者に対応する役場職員

C 避難所での支援活動が続けられていて、16日の本震以降は、いつ頃ご自宅に帰ることができましたか。

原野 避難所に泊まったり、物資が朝4時くらいに届くから役場に泊まったりというのが続きました。みんな雑魚寝していましたので、1週間近くは戻っていませんように思います。

C 泊まりが続くとご両親も心配されるのではないかと思います。どうでしたか。

原野 心配していました。「ちゃんと寝ているか」と。

C 活動は指示を受けてやるが多かったと思いますが、大変だったことはありませんか。

原野 聞きたい答えがすぐに返って来なかったのが大変でした。

C 原野さんの活動される場合は避難所が主だったので。

原野 私はまだ業務が何も分かっていなかったのですが、自分から「避難所に行きます」と言いました。私が残っても、業務はできないわけですし、誰かは避難所に行

かないといけなかったのです。住民の方に覚えてもらっていて、「お久しぶりです」といった会話もしたほどでした。

C 住民も知っている方が来ると安心しますよね。

原野 そうですね。それと、避難所そのものではありませんが、物資の配給をする自衛隊に避難所の道案内するため一緒に行動することもありました。

C ほとんど窓口にはいなかったということですが、窓口業務は全くされていなかったのですか。

原野 サポートしてもらいながら、り災証明書の発行をしたことがあります。

C 他にも何か活動されましたか。

原野 災害対策本部の電話番号もしました。4台くらいありましたが、「物資の配給はいつか」とか、「風呂はどこか」という住民の方からの質問に答えています。電話はずつと鳴りっぱなしでした。

C 電話で判断に困ることもあったのではないですか。

原野 家の調査のことなどがはつきり決まっていなかった時期でも、電話で「なんで分らないんだ」と言われることはありました。「すみません」と言うしかなかったです。専門的な質問に答える時は他の人に聞いたり、壁にたくさんのメモが残っていたので、そこから適切な返答を探して伝えたりしていました。後になってくるとそのメモも整理されて「ゴミ関係」とかに分類して貼ってあるようになりました。

C 地震後、右も左も分らない中で大変だったと思いますが、原野さんの活動の原動力は何だったでしょうか。

原野 友だちと家族ですね。私は大津町が地元なので、友達に会っていたのですが、その時に「無理しないでね」「頑張つてね」とか言われると嬉しかったです。

C 14日、16日の揺れた時の心境はどうでしたか。
原野 とりあえず両日ともみんな無事であつてほしいと思っていました。

C その震災から半年以上が経ち、復興に向けて進んできたわけですが、その中で、一区切りついたと思う瞬間はありましたか。

原野 土日に窓口を開けなくなった時です。家の解体とか修理には住民票が必要なので皆さん取りに来られます。そのため平日の他、土日も開けていましたが、7月の下旬から窓口を空けるのが土曜日だけになり、やがてその土曜日も開けなくなった時に区切りを感じました。8月中旬のことです。

C こうした大きな震災を経験し、考え方に変化はありませんでしたか。

原野 水、電気、生活インフラって大事だなと感じました。父も母も熊本の出身ではないので遠くの友達からの物資がいつぱい届きました。それを見て、友達って大切だなと思いました。母は東京なのですが、びつくりするくらい届きました。千葉から母の友達が来てくれることもありました。すごく嬉しかったです。

C 震災を受け、備蓄などをするようになりました

か。

原野 やっています。リュックに入れてます。あとは、水を大切にしようということ、やはり家族、友達を大切にということをやっと思っています。

C 原野さんにとって「友達」という存在は非常に重要だったようですね。

原野 はいそうです。助けられました。

C 最後になりますが、これから的大津町への望みや今後やってみたいことはありますか。

原野 住民の皆さんにきちんと向き合っていきたいと思います。皆さん、役場には来たくて来ているわけじゃないですよ。自分の暮らしのため、手続きのために来られているわけです。どういう思いで来られているのかを考えて、一人一人に向き合おうと思うようになりました。

C 町に対しては。

原野 防災に関して、今回のような規模の大きな災害に対しては計画がきちんとできていなかった部分も多

いのではないかと思うので、その辺りをきちんとしていくべきだと思います。

C なるほど。

原野 それから自分のことですが、今回は県外の自治体からたくさんの方の職員さんが支援に来られました。私も町外で何かあったら恩返ししていきたいと思いました。東北の人たちにも来ていただいて、アドバイスももらいました。物資を運んだりする時に物資の仕分けとか配送とかの指示をしてくれましたし。皆さん良い人たちばかりで感謝しています。

大津町役場 住民福祉部住民課

取材日 平成28年12月5日

豊岡莉奈^{とよおか りな}（21歳）

住民課に異動したばかりだった豊岡。

庁舎で仕事をしている最中、前震が発生した。

当初は避難所の対応や電話対応などに追われながらも、他の職員が懸命に働く姿を見て、自分も頑張らないといけない、と決心し業務を行っている。

C 今年度から住民課に異動されたのですか。

豊岡 はい、そうです。それ以前は税務課にいました。

役場に入り税務課に3年いて、今年度から住民課に異動してきました。

C 4月1日に住民課に異動して、引き継ぎは終えていたのですか。

豊岡 やっていきこうとしていた矢先でした。基本的には証明書発行などの窓口対応はやりながら教えても

らっていて、それ以外の細かい部分は今後やっていくことにしていました。

C 本題の質問をさせていただきますが、前震の日は庁舎で残業されていて、そこで地震が起きたと聞きました。その後はどうされましたか。

豊岡 とりあえず残っていた職員全員で庁舎の外に出ました。その後、余震が続く中、建物の中に入って3階にある総務課まで行きました。そこで避難所に向か

うよう指示があり、職員数人で一緒に大津東小学校の体育館に行って、その日はそこに泊まりました。

C 大津東小学校はどのような状況でしたか。

豊岡 私たちが体育館に着いた時には避難されている方は30人くらいいたかと思います。避難して来られた方を誘導したり、体育館にマットを敷いたり、毛布の配布をしました。当初は食べ物がありませんくて水ばかりでしたが、後からパンなどが届きました。顔見知りの方同士や、家族連れで避難されている方が多かったので、皆さん協力してくれて助かりました。朝明るくなつて、交代の職員が来るまでそこにいました。子どもたちが遊んでいたのを覚えています。

C 避難所待機を終えた後は何をしていましたか。

豊岡 一度着替えと必要な荷物を取りに行くために戻りました。その辺りの時系列の記憶があやふやなのですが、役場機能を移動させることになって、必要な機器を町民交流施設（オークスプラザ）に運ぶことになり、その仕事をしていたかと思っています。あくまで必要最小限のものを運び出しました。夜には自宅に帰っ

て、すぐ本震があつて、という感じでした。

C 16日の1時25分に本震が起こった時の状況や様子はいかがでしたか。

豊岡 その時は自宅で寝ていました。地震後は停電の中、携帯と防災服を持って、外に出たかと思っています。

C ご自宅は一人暮らしですか。

豊岡 家族4人で住んでいます。

C 携帯と防災服を持って外に出られた後というのは、役場に向かわれたのですか。

豊岡 はい。午前4時頃に役場に着きました。行こうとしたら両親にすぐく止められました。「暗いし、道路がどうなっているのか分からないのに車で行くなんて危ない」と言われて。ただ14日の前震の時に皆さん迅速に集まって来ていたので、「行かないといけない」という気持ちがありました。

C 2つの地震を経験した時の心境はそれぞれのようなものでしたか。

豊岡 14日は庁舎内で地震に遭ったわけですが、その瞬間は「死ぬかもしれない」と思いました。最初はす

ぐ収まるかなと思っていたら、ずっと揺れていたの
で、庁舎が地震に弱いという話を以前聞いていたの
で、危ないのではと思ってみんなで走って外へ出まし
た。そして16日は、朝早くから震災対応の仕事にいく
必要があったので、次の日に備えて早く寝ようとして
いました。そうしたら、布団の中でドンツと衝撃が来
ました。その時に思ったことも、とりあえず外に出な
いといけない、ということでした。そして他の職員は
皆さんもう集まって対応されているのかなということ
を考えていました。

C 身の安全というよりは他の職員が来ているかどう
かの方が心配だったんですね。

豊岡 いきなり16日の揺れが来ていたら自分の心配を
先にしたと思います。でも、14日に皆さんが地震後す
ぐに集まって災害対応をしているのを見ていたので、
これは早く行かないといけないなと思っていました。
私が着いた頃にはほとんどの職員が来ていました。

C 役場に到着され、それからどのような活動をさ
れていたのですか。

豊岡 災害対策本部に行くと、電話対応に人手が足り
ていない状態でしたので、しばらくは電話対応をして
いました。バタバタしていて、とりあえず空いている
ところの仕事をやる、といった感じでした。電話は鳴
りっぱなしで、皆さん早口になっていて聞き取りにく
い状態でした。住民だけでなく、消防団からの「どこ
の家が崩れた」といった連絡なども受けたりしていま
した。

C 相当な混乱の様子が分かります。

豊岡 それから消防団の方からの連絡を紙に書いて
ボードに貼るという作業をしました。「この道が通れ
ない」「家が崩れている」などの情報です。途中から、
災害時に課ごとに割り振られている本来の担当業務に
戻そうということになり、私は食料の仕分けなどを
行っていたかと思います。

C 食糧・物資班ではどのような活動を。

豊岡 たしか、最初はパンが届いたかと思います。避
難所がいくつかあって、そこに何人ずついるという情報
を集めて、それに応じて仕分けをしました。届いた食

料を全部振り分けて、それから避難所に運んでいました。仕分けは、最初は町民交流施設（オークスプラザ）で行っていましたが、その後、庁舎車庫に移ったかと思えます。



町民交流施設（オークスプラザ）での食料配布の様子

C 物資はどこからどのくらい届いていましたか。
豊岡 備蓄以外にも県庁やイオンさんなどから食料やタオルケットなどが届いていました。最初はやはり数も限られていましたが、あとから支援物資も届いて種類も量も増えていきました。地震の直後は水も足りていなかったのも、住民の方に対してもミルクが必要なお小さいお子さんがいるところや薬が必要な方が優先という説明をしていました。

C 食糧担当の活動は16日以降も続いたのですか。
豊岡 かなり長い期間続いていたと思います。最初の頃は朝早く来て、仕分けをして、それから通常業務として町民交流施設（オークスプラザ）で証明書発行の仕事をしていました。朝の仕分けなど、各部から何人か手伝っていただきました。食料の配布は慣れていない頃は上手くいっていませんでしたが、徐々に改善されていって、効率の良い形になっていきました。支援でいただいた食料をオークスプラザの広場で配ることもありました。

C 食料を配る中で判断に困ることはありませんか。

豊岡 必要な数の確認についてですが、避難所に行った時に区長さんとPTAの方の間で意見が違った時がありました。区長さんはまだたくさん食料は必要だと言われていたのですが、PTAの方は自分たちで炊き出しをするからパンなどを多く持って来られても余るから困ると言われました。そのような意見が割れているところがあったのと、昼間は避難所にいる人は少ないのですが夜になって戻って来られる方が多く、人数の把握が難しいこともありました。あとは、自主避難所で避難されている方々は、物資などを取りに来ていたかどうかと思うのですが、最初の頃はそういった人数は把握できていなかったのではないかと思います。

C 基本的には指定避難所の方に配られるのですか。

豊岡 自主避難の方には、電話でお尋ねがあった場合に、どこで配布しているということをお話していたかと思っています。

C 避難所で食料の配布をされた際は、こういった様

子でしたか。

豊岡 私が向かった避難所ではしつかりされた方が多く、1人1つと言って全体をまとめてくださる方や、「貼り紙をしておかないと勝手に食料や物資を取って行く人がいるよ」というアドバイスをくださる方もいらっしゃる、とても有り難かったです。

C 避難所にはいくつか行きましたか。

豊岡 私が行ったのは室小学校と美咲野小学校、平川地区公民館分館、大津北小学校でした。それ以外は、窓口業務があったので避難所には行っていない。基本的には住民課の窓口が主な仕事場でした。途中からは、り災証明書の発行も始まりましたので、そちらにも参加しました。

C 避難所に泊まることはありませんか。

豊岡 私は2回しか泊まったことはありませんでした。住民課ではどちらかというと、男性職員に泊まりの担当をしておりましたが、住民課は男性職員の数が少ないので、負担をかけてしまい申し訳ない

思っていました。

C 証明書発行はどのような状況でしたか。

豊岡 証明書発行の業務は通常通り行っていました。地震当日から所得証明書や住民票などの取得や、住民票の異動を希望される方はいらっしゃいました。ですが、最初は全てに対応できる状況になく、住民票の異動などはお断りして、証明書発行のみを行っていました。

C 他に困ったことはありませんでしたか。

豊岡 り災証明書の発行ですが、被災した建物の住所上の場所と、地番が違う場合があります。り災証明書を発行するときには判定結果と住民基本台帳の対象者、固定資産の課税対象の建物とを結び付けて発行するのですが、建物の地番と住所が違う場合、本当にその建物が該当の建物かどうか確認して結び付けをしないといけません。家の名義がかなり昔から変わっていない方もおられて、誰が持ち主になっているのかを、ご本人が分からないということもありました。

C そういった時は、どう確認するのですか。

豊岡 そういう場合は税務課の固定資産税係に確認をすることになるのですが、そういった複雑なところが慣れておらず困りました。それから、住民票上の住所とは違う場所に住んでいるという方もおられて、その場合には居住していたことが分かるようなものを持って来ていただき対応していました。アパートだと契約書や水道料金、あとは民生委員の方などをお願いしていました。

C 大津町にも防災計画があるかと思いますが、内容についてはご存知でしたか。

豊岡 地震があつたら集まらないといけないとか、どの課がどういったことを担当するといったことは、何となく知っていました。が、本当に起こってみると詳しいところが全く分かっていないという状態でした。ただ、14日の前震の時点で上司から震度がどのくらい以上で来ないといけないということを伝えられていたの

で16日の対応は早くできたのだと思います。

C 混乱した中で活動されてきたわけですが、多忙さを乗り越える原動力になったものはありますか。

豊岡 私の場合は、職員みんなで頑張っているから私も頑張らないといけないという気持ちが大きかったです。

C 住民の方と直接会話したりする機会は多いと思いますが、そういった面での大変さがあつたのではないのでしょうか。

豊岡 間違つた情報を教えてしまうと問題になりますので、分からない時は担当部署に聞いて、必ず確認してから答えるようにしていました。

C 仕事面でも個人の面でも良いのですが、豊岡さん自身が一区切りついたと思う時期や出来事というのはありましたか。

豊岡 仕事面では、仮庁舎ができて町民交流施設（オークスプラザ）から移動した時です。オークスプラザで行っていたり災証明発行業務を、新しい庁舎に移って

からは総務課単独で行うことになった時が業務上では一区切りついたように思います。仮庁舎に移動してからはほぼ通常業務でした。

C 個人として一区切りついたと思うことは。

豊岡 水が出るようになって、自宅の電気温水器の修理が終わり、市内の自宅に戻った時だと思います。

C 震災を経験してご自身の考え方や行動に変化があればお聞かせください。

豊岡 震災前は地震についてはどこか他人事で、自分が体験することになるとは思っていませんでした。東日本大震災も大変なことだと思っていました。自分のこととしては考えていませんでした。自分自身が地震を体験するという視点からは全然見えていなかったのです。実際に地震を体験し、色々とやるべきことが出てきて、初めて知ることも多々ありました。何事も、ないものとして考えるのではなく、あり得るのだということを前提にやっていかないと考えられないになりました。

C 震度5以上だとすぐに役場に集まらないといけない

いということを14日に聞いていなかったら、16日の時はどうされていたと思いますか。

豊岡 地震で道路や橋のことが心配でしたので、道路の状況が分かるように明るくなつてから役場に向かったかもしれません。行かないといけない、という気持ちは強かったです。皆さんきちんと自分の仕事をされているのに、私だけそれをしないわけにはいかないと思いました。

C 震災対応中、ご家族の心配をする機会はありませんでしたか。

豊岡 家はほとんど壊れておらず、家族も無事だったのであまり心配していませんでした。

C 職員さんに取材していると、小さいお子さんがいても役場に行かないといけないとお聞きますので、役場職員は大変な職種だと思うのですが。

豊岡 大変だと思います。小さいお子さんがいらつしゃれば本当に大変だと思うし、今回の震災で自宅が被害を受けたりされている方もいらつしゃるのですが、自分の家の片付けよりも先に仕事をされている方

ばかりです。私がそういう立場だったらと考え、よりその素晴らしさが分かります。

C 最後の質問ですが、これからの豊岡さん自身や大津町に望むこと、やっていきたいことなどはありますか。

豊岡 自分自身、災害に対して何も備えていませんでした。そこはきちんと反省をして、また地震が発生する可能性があるので今回の経験を生かしていきたいです。災害対応で良かった点、悪かった点があると思うので、それを踏まえて対策を立てていければと思います。

大津町役場 住民福祉部住民課

取材日 平成28年11月29日

松嶋愛里^{まつしまあいり}（25歳）

住民課で勤務する松嶋。前震後はすぐに災害対応に従事した。

本震後も、り災証明書発行業務の支援をしながら、住民課の業務に取り組んだ。

土日返上の多忙な業務を乗り越える原動力となったのは、「やらなければ」という義務感であった。

C 前震の時はどちらにおられましたか。

松嶋 前震の時は旧庁舎で残業していました。元々、旧庁舎は震度5くらいで倒壊の恐れがあると言われていたので、地震が起きた後はすぐに他の職員たちと外へ出ました。

C 外に出られて、その後は何をされたのですか。

松嶋 職員は総務課の災害対策本部に集合しました。避難所が開設され、私は消防団に入っていることもあ

り、室小学校の体育館の避難所に仕事を割り振られたので、すぐに向かいました。室小学校には朝までいたのですが、避難された方も皆さん帰宅されたので、そこでいったん閉じて仕事に戻りました。

C 室小学校には何人くらい避難されていましたか。

松嶋 室小学校の避難者は100人を超えていたと思います。町営の団地が近くにあるので、それで多かったのだと思います。

C 避難所を閉じた15日朝以降は何をされていましたか。

松嶋 朝まで避難所での仕事に携わっていたため2、3時間ほど一旦自宅に帰りましたが、住民課は証明書発行をしないといけなかったので、すぐに役場に戻りました。

C 旧庁舎はその時、使えたのですか。

松嶋 前震でも旧庁舎が使えなくなっていたので、証明書発行のために町民交流施設（オークスプラザ）に機材を移し、業務を続けました。最低限のものだけですが。ただ、私が役場に戻った時には、そうした移転作業はほとんど済んでいました。

C 証明書発行業務は多忙でしたか。

松嶋 前震の時は証明書発行にいらっしゃる方はあまりいませんでした。本震後すぐの頃も少なかったですが、落ちてきてから多くなりました。証明書の発行自体は忙しくはなかったのですが、住民課以外の用事で来られた方の対応もありましたので。

C その深夜に本震が起きたわけです。16日の様子を

お聞かせください。

松嶋 本震の時は自宅でした。すぐに家を出て役場に向かいました。まずはオークスプラザに向かい、避難されている方に、毛布を配ったり水を分けたりという作業をしていました。その後、災害対策本部に集合してから改めて仕事を割り振られました。私の課は食糧関係が担当だったので、主に振り分け作業をしていました。最初は運ばれてきた食料がどのくらいかを数えて、オークスプラザに食料がどのくらい届いたか、どのくらいの割合で、どのくらいを避難所に持って行くかを考え、その後、決められた数を各避難所に持っていきました。朝方まで仕分けなどの作業を行っていたと思います。

C ご自宅はご家族と一緒にですか。

松嶋 はい。両親と妹と4人で暮らしています。

C 深夜に出動されたわけで、ご家族のことは心配なかったですか。

松嶋 私が出た後、父も家を出ないといけなかったこともあり、家には母と妹だけでした。心配はありません

たが、大丈夫だろうと思って家を出ました。

C 前震と本震が発生した時、どのようなことを思いましたか。

松嶋 前震の時は、正直何が起きているのかよく分からなかったです。ただ、余震が続いていたので怖いなとは思いました。本震の時は、家の中も物が散乱したり倒れたりして大変だったのですが、まずは「役場に行かなければ」と思いました。

C 16日以降の勤務の状況についてお聞きしたいのですが。

松嶋 16日以降も食糧関係をメインに仕事をしていました。主に避難所での2回の食事用の食料の振り分けをしました。旧庁舎の1階に車庫があり、そこにパンなどの食料が運ばれてきたので、そこで作業をしました。

C 家には帰れる状況だったのですか。

松嶋 本震の翌日には一度家に帰りました。

C 食糧対応は朝からずっと、でしたか。

松嶋 主に早朝に行っていました。パンであれば、1

日に2万個ほど届くこともありました。自衛隊の方がトラックで届けてくださるのですが、大きなトレーでまとめて運ばれて来るので、それを袋に詰めて分ける作業をしていました。避難所には担当職員がおり、その避難所に何人避難されているか、という情報をもらい、それをもとに数を決めていたのだと思います。

C 食糧・物資班の活動時は、電話でやり取りですか。

松嶋 基本、電話を使っていました。上の人が連絡を取って私たちは指示を聞くことが多かったかと思っています。LINEとかではなくて、私たちは口頭が多かったですね。

C 災害対策本部が混乱していて困ったという職員もおられたようですが。

松嶋 食料の配布について「なぜそんなことするのか」という会話を聞いたことがあります。その時町民交流施設（オークスプラザ）は避難所ではなかったのですが、そこで食料を配るとの発言があり、混乱があったようです。本来渡すところではないところで渡すと、平等に配布をすることができないため、ある程度の線

引きをしないとイケなかったのだと思います。

C 色々な問題がきつと起こりますよね。災害対策本部にもおられたのですか。

松嶋 はい。電話当番が回ってきていました。電話は「家屋調査はいつ来るんだ」、とか「瓦礫はどうするんだ」とか震災関連のことがほとんどでした。



災害対策本部の様子

C 災害対策本部はどのような雰囲気でしたか。

松嶋 災害対策本部の皆さん、とにかくバタバタという状況でした。一斉に色々なことが起きていたので当然でしょうけど。災害対策本部は、あちこちで起きている現場をつぶさに見ている余裕はないわけで、上がってくる情報で判断していったのでしょうか、現場との行き違いなどは生じたと思います。国や県の方針もその都度変わっていった、昨日はできなかったけど、今日はできるということもあったので。

C 住民課での通常業務はどなたが担当されたのですか。

松嶋 住民課は、お客さんが来て、その日その時にすぐ処理をしないとイケないので、長く住民課に所属し、おおよその業務に携われる係長や私が基本的に残っていました。新人職員については、まだ4月で何も教えることができていなかったもので、避難所などに多く行ってもらっていました。り災証明書の発行が始まったら、自分の課の仕事をしつつ、週に1〜2度くらい、り災証明書の仕事もしていました。

C その中で大変だったことはありませんか。

松嶋 地震からすぐの混乱した時期は、避難所に人員を割かれていたので、証明書の発行や住民票の異動手続きなどを担当できる職員が少なくて大変でした。住民票や名寄帳など家屋などの解体申請に必要な証明書がいくつかあったのですが、その証明書を取りに、多くの住民の方が来られているような状態でかなり忙しかったです。

C り災証明書の扱いで何か困ったことはありませんか。

松嶋 り災に係る様々な証明書の無料発行をどこまでやるのかという判断に困ったことでしょうか。大津町では、震災関係で公的機関に提出する分に関しては無料になるので、解体申請に使う場合は無料で必要な証明書を発行できます。無料かどうかの基準はあるのですが、住民の方には納得いただけない場合もあって判断に困ることがありました。

C 住民も経験したことのない事態ですから、ある意

味では当然の状況なのかもしれません。

松嶋 はい。だからこそ無料にできる人を有料にすることがないように気を付けていました。使用目的を聞いて、確認をするようにしていました。それと、被災して家の中に入らず、印鑑や印鑑登録証が取れない人は一度だけ再登録を無料にするなど対応していました。有料の方にはきちんと話して納得してもらおうしかなかったですね。

C 他に困ったことはありませんでしたか。

松嶋 り災証明書は、住民基本台帳に記載されている人と住んでいる人が一致して、被災した家を特定してから発行します。固定資産の関係で、納税義務者とその日來ている人が違うとか、委任状で来ているとか、判断に困ることもありました。住民票はここにあるけど実際住んでいるのは違うところだという方の場合、行政区嘱托員や、民生委員の証明があるので、難しかったですね。勝手に判断してはいけないので、取り仕切る係に判断を仰ぎながらやっていました。

C ご自身の業務も大変だったでしょう。

松嶋 そうですね。自分の業務ができないことも多かったので、大変でした。でも、福祉課や事業系の課はもつと大変だったと思います。そこに比べると私の係はそうでもなかったのかもしれない。現場に行かないといけないところはさらに大変だったのではないかと思います。

C 激務続きで体力は大丈夫でしたか。

松嶋 休みがないわけではなかったのですが、体力は大丈夫でした。食糧担当をしていた時は朝6時くらいから、夜は業務の引き継ぎをして終わるのが21時とか22時とかでした。1ヶ月間くらい、早く帰る日もあればそんな日もあるということが続いていましたが、体調を崩すこともなく、意外と平気でした。

C お仕事の原動力となったものは何だったのですか。

松嶋 特に何かあったという訳ではありませんが「やらなきゃいけない」という義務感でした。この仕事を選んだ以上、やらなきゃいけないことだと自覚してい

ましたので。

C 地震が起きる前は熊本で地震が起きるかもしれないと思っていましたか。

松嶋 思っていなかったです。

C 予想もしなかった震災でしたが、これを経験し、ご自身の考え方や行動に変化がありましたか。

松嶋 あまりにも慌ただしかったので、変わったという感じはありません。り災証明書の発行が始まってからは、土日も含めて毎日業務をしていたこともあり、毎日があつという間に過ぎていきました。ただ、母の意識が変わったこともあります。備蓄について強く意識するようになっていたということです。私自身のことと言うと、地震後しばらくはいつでも出勤できるように防災服を着て寝ていました。

C 防災服ですか。防災服はちなみに一着だけですか。

松嶋 はい、青いのが一着です。

C それを毎日ずっと…。

松嶋 私は消防団に入っており、そちらの服もあるの
で交互に着ていました。防災服は町民交流施設（オー
クスプラザ）で仕事をしている時はずっと着ていまし
た。仮庁舎に移った7月くらいから、ようやく毎日
は着なくなりました。

C それまではとても忙しかったということですね。
住民や同僚の考え方についての変化を感じることはあ
りますか。

松嶋 被害の話を聞くことが多くなりました。今も家
屋調査が行われているので、そういった話を聞くとま
だ震災は終わっていないかと改めて思います。

C 確かにまだ震災は終わっていないのだと思いま
す。それでも復興に向けて進んでいく中で、仕事の面、
また個人の面で松嶋さん自身が一区切りついたと思う
瞬間はなかったでしょうか。

松嶋 仕事の面では、オークスプラザでの仕事が終
わった時が一段落したと感じました。

C 先ほどの防災服を着なくなった時ですね。

松嶋 そうです。オークスプラザでは場所も手狭で、
その分、人の数を多く感じ圧迫感がありました。り災
証明書も落ち着いてきて仮庁舎に移り、り災証明書の
担当からも離れ、普通の業務に戻ったと思いました。
仮庁舎への引越し作業が終わったのは7月だったの
で、その頃が仕事面で一区切りついたなと思います。
個人的な面では、特に一区切りついたという感じはあ
りません。じわじわと日常に戻った気がしています。

C 最後に、これから的大津町や自分自身に望むこと
はありますか。

松嶋 今回の地震は誰もが予測していなかったと思
います。今後はこうしたことも想定し、私自身につ
いては、基本的なことを再度認識し、防災についての意識
を高めていかないとけないと思っています。大津町
については、災害の発生で課によっては非常に業務が
増え負担がとも多くなっているのです、別途、災害対
策専用のチームができた良かったのではないかと思
いました。

大津町役場 住民福祉部住民課

取材日 平成28年11月1日

松本美由紀まつもと みゆき（38歳）

住民課で勤務する松本。

震災直後は、避難者の誘導や輸送に避難所への食料の配送、そして本来の業務である
り災証明書の発行など、多くの持ち場を兼務して被災者支援にあたった。

震災後の激務を経て感じたことは、コミュニケーションの大切さだった。

地震を契機に、意識も大きく変化し、災害に強い町にするため、日々奮闘している。

C 前震があつた時の様子をお聞きしたいと思います。

松本 住民係は5人いるのですが、当時はそのうちの4人が残って業務をしていました。最初はカタカタという揺れだったのですが、どんどん大きくなっていて、逃げることも忘れ、みんなで固まっていました。その後、庁舎が倒壊の危険性があつたため、外へ避難するように声かけがあり、残っていた職員は全員外の

駐車場に避難しました。

C 外に出た後は地震後の対応になったと思います
が、具体的にはどのようなことをされていたのですか。

松本 震度5以上になると災害対策本部が立ちあがるのですが、前震直後は、総務課なども残業していた一部の職員しかいなかったため、外で20分くらい地震が収まるまで待機していました。しかし、問い合わせの

電話が入ってくるので、外に避難していた職員は総務課に全員集合し、電話対応などそれぞれに割り振りがされました。14日夜は避難所などに職員が配置されたのですが、翌日の15日は金曜日ですから、役場の窓口をどうするかという話になりました。庁舎に関しては、前震の時点では大きな危険性はないと判断されましたが、万が一のことを考え、役場裏の町民交流施設（オークスプラザ）の会議室で窓口業務を行うことになり、そこへプリンタなどを運び込み、15日は証明書発行などの業務ができるように準備をしました。

C ご自宅やご家族に連絡を取りましたか。

松本 一番上の娘が高校に入学してすぐの研修で阿蘇に行っていて連絡が取れなかったのですが、学校からLINEで無事だという連絡が来たのでホッとしました。自宅にも電話をかけたのですが、前震直後は一切繋がらなかったです。自宅には2人の子どもと両親がいたので、前震から1時間ほど経ってから、一度無事を確認するために自宅に戻りました。電話が全く繋がらな

い状況だったので、上司に相談し、30分ほど時間もらい確認に戻ることができました。自宅も家族も特に被害はないようでしたので、家族に職場に戻ることを伝えました。子どもたちの学校も朝から臨時休校という連絡が来ていたので、特に心配することなく仕事に戻ることができました。

C 15日も業務を1日されていたのですか。

松本 証明書などの発行を行いました。通常は5台くらいの手末を使って証明書の発行や転出入関係の処理をしていましたが、電源確保などの問題もあり、2台だけを移動させました。必要最低限の台数のため、15日に関しては証明書の発行に限って業務を行いました。

C 徹夜明けでしたが、15日は最後まで勤務されたのですか。

松本 証明書の発行は、通常通り8時半から17時15分まで行いました。証明書発行に最低限必要な人数と判断ができる役職を1人だけ残し、その他の職員は全員、災害対応をしていました。

C その夜、16日1時25分に本震がありましたが、その時の状況は。

松本 15日の21時過ぎ頃に、災害対策本部に必要最低限の人数だけを残し、あとは自宅待機になったと思います。私の場合、家に帰り着いたのが22時くらいでした。またいつ地震が起こるか分からない状況でしたので、少しでも休もうと思って寝たところで本震の揺れがきました。

C その後は。

松本 家族の安否確認だけをして、すぐに役場に向かいました。車で自宅を出ましたが、自宅付近の道は狭く、ブロック塀がたくさん道路に崩れて散乱していました。それを払いのけながら少しずつ進んで、やっと役場に到着することができました。結局、通常の倍の時間がかかったと思います。

C お子さんは家にいたのですか。

松本 電気も水もストップしたので、近くの大津町運動公園（スポーツの森・大津）の避難所に避難していたようです。高1の娘も自宅に戻っていたので、安心

して役場に向かうことができました。

C ご両親がおられなかったらどうなっていたでしょう。

松本 職員の中でも、お子さんがまだ小さくてすぐに動けない人や、預けられる状況になってから出勤する人もいたみたいです。私の場合は小さな子どもはいなかったのですが、すぐに向かうことができたが、それでも子どもたちだけで避難所に行かせることはできなかったでしょう。混乱の中の避難所が安全とも言えないので、両親がいたから役場に向かうことができたと思います。

C 役場に到着された後はどのようなことをされたのですか。

松本 道が通れなかったりして、前震の時よりも職員が集まるのに時間がかかっていたので、まずは鳴り続ける電話の対応をしました。聞き取った被害の状況を書き出し、状況によっては職員が現地確認に向かいました。

C 住民からどのような被害の状況が寄せられてくる

のですか。

松本 通れなくなった道路の状況や、どこに避難すれば良いかというお尋ねがありました。少し経ってから、私は町営住宅のあけぼの団地の方々が一時避難されている場所へ向かいました。30年くらい前からある団地なので、高齢者で一人暮らしの方もおられ、足の不自由な方を室小学校の体育館に公用車で送り届け、介護が必要な方は社会福祉協議会に確認し、そちらに送り届けていました。それが午前3時くらいでした。

C それは松本さんだけで対応されたのですか。

松本 職員2人が車の前に乗り、後部座席に避難する方を乗せていました。避難所は避難してきた方の車が押し寄せていて、駐車場は身動きが取れないような状況が続いていたので、誘導などの人手が足りないと感じました。もっと早く駐車場としてグラウンドなどを開放していれば、混乱も少しは違っていたかもしれません。避難所への移送は朝方まで続きました。

C 避難所の対応にあたった職員は何人ぐらいでしたか。

松本 災害対策本部からの呼びかけで、避難所に向かいましたが、避難所となった室小学校の体育館には5、6人くらいの職員がいたと思います。避難してくる人たちの誘導をしていました。危険な場所を避けて座ってもらうように声かけをしていました。

C 災害対策本部との連絡はどういう形でしたか。

松本 地震直後は無線通信機1台で災害対策本部と連絡を取っていましたが、情報がなかなか入ってこなかったです。LINEは繋がったので職員同士はLINEで連絡を取っていました。

C 情報を得るにはLINEが無線か、だったわけですね。

松本 そうです。ただ、こちらから無線で災害対策本部に確認しても折り返しの返事が来ない状況でした。現場も本部も混乱していたからだと思います。避難している人の問い合わせに対して、自分の見解だけで答えるわけにはいかないので、本部からの回答を待つてもらった状況が続きました。

C 災害対策本部はどこにあったのですか。

松本 地震直後は総務課に集合しましたが、余震が続いていたため、倒壊の危険性を考慮し、電算室の3階に災害対策本部が置かれました。

C どういった状況でした。

松本 余震が来るたびに棚やキャビネットのガタガタという音、下から来る地鳴りのような音、天井からの音、倒壊の危険性がある庁舎の中は大変危険な状況でした。

C あけぼの団地の件に戻りますが、停電していましたよね。

松本 はい。真っ暗でしたので、消防団が発電機を設置してくれていました。たくさんの人が真っ暗な中、屋外に避難しておられました。避難所となつていて、小学校へは急な坂道なので、お年寄りの方は歩いていけないという状況で、公用車で送り届けることになりました。

C どういった方がおられましたか。

松本 例えば歩行が困難なお年寄りの方は体育館より、ベッドなどがある老人福祉センターが良いだろう

ということ、そちらへ送り届けました。

C 車での移送をずっと続けられていたのですか。

松本 みんな、その場でできることをそれぞれ判断し行動していました。しかし、17日の朝に、本来の決まっている役割分担に戻そうという話があり、私たち住民課は本来の食糧供給を担当しました。その後は、避難所の人数を災害対策本部が把握し、各避難所に食料の配送を行いました。提携していた事業所から、火を使わずに食べられるものなどを提供してもらい、各避難所に振り分けて配送していました。

C 振り分け作業はどこでされていましたか。

松本 町民交流施設（オークスプラザ）です。届いたものを一旦搬入して在庫を確認して振り分けました。ただ避難所も指定されている避難所だけではなく、どんどん増えていき80箇所くらいに避難されていたので、どこにどのくらいの人数が避難しているか把握するのが難しい状況でした。刻々と数字が変わるので、どこにどれだけの数を配送すれば良いのか分からず、割り振っても変更、変更でいつまでたっても配送でき

ない状況になる時もありました。実際持つて行っても誰もおられず、置きっぱなしにもできないため持つて帰ることもあり、効率が非常に悪かったと思います。

C 17日以降、食料の振り分けが主でしたか。

松本 土日も含めて窓口業務を継続するように指示がありましたので、住民課の職員の半分は窓口業務、残りは食料の配送関係を行う職員とそれ以外で人手が足りないところへ分かれて仕事をしていました。

C 窓口を開け続けたのですね。

松本 16、17日は災害対応のみ行いましたので窓口業務は行いませんでした。18日以降は土日もずっと開けていました。

C ご自宅にはいつ戻りましたか。

松本 17日の夜に一度自宅に帰ることができましたが、帰れない時は床の空いているスペースに段ボールを敷いて1〜2時間の仮眠を取るといった状況でした。

C お仕事で大変だったことは何ですか。

松本 少ない職員で窓口業務を行っていたので、お客様を待たせしてしまうことがありました。中には1時間近くお待たせしてしまう状況でしたが、ご協力していただいて有り難かったです。



り災証明書発行初日の列に並ぶ人々

C 震災関係でも住民課の証明書が必要なのですね。

松本 解体の申請などをするために添付書類として住民票、印鑑証明、固定資産関係の証明が必要です。月に何百件もの申請が増えたこともありました。また、被災して新しいアパートを借りる場合、その申し込みのために住民票などが必要になります。そういった状況です。窓口機能は維持しないといけなかったのです。

C なかなか自宅にも戻れない状況で大変だったと思いますが、仕事に向かう原動力は何でしたか。

松本 職員みんなが頑張っているからやるしかなかったです。みんなが一つにならないとこれは乗り越えられないという空気ができていたので、やるしかないという状況でした。疲労困憊の時も、自分だけじゃないと思いつつ頑張っていました。

C 震災直後を職員全体で乗り越え、その後も復興に向けて仕事をされてきたと思いますが、一区切りついたと思った時期はありますか。

松本 り災証明書の担当に毎日2人出していました。6月以降から住民課は担当から外れました。その時に災害対応が一区切りついたような感覚がありました。また7月17日に仮設庁舎が完成して引っ越してきた時に、気分的に変わったと思います。

C 6月いっぱい休みも取りにくい状況でしたか。

松本 他県からの支援職員は土日関わらず仕事をしてくれていましたし、人手が足りなかった。町の職員もなかなか休めませんでした。しかし、支援に来てくださったという思いで支援してくださっていました。「少しでも休んでほしい」と言われることもありましたが、「このままではみんなが倒れてしまいますよ」という話を聞き、6月に入った頃から土日のどちらかは交代で休むようになりました。

C 夜は帰れましたか。

松本 それはもちろんです。遅くまで残ることもありましたが、疲れが取れないので、5月中旬以降は21時までには退庁するように、と自分でルールを作っていました。

ました。

C ご家族とは連絡を取っていましたか。

松本 高1の娘が携帯を持っていたので、「問題ないか、まだ避難所にいるのか」ということを確認していました。避難所にいるのも大変だったようで、水は出ない状況でしたが家屋の被害は少なかったもので、しばらくしたら自宅に戻っていたようです。

C 家族に関する事で問題はありましたか。

松本 私の住む地域は水道が最後の最後に復旧したので、水が出ないことがこんなに大変なことなのかというのを痛感しました。町の中心部でさえ数日間水が出なかったのもので、お手洗いなどが大変でした。

C 地震を経験したことで、考え方や心境に変化はありましたか。

松本 元々は人付き合いがあまり得意な方ではないので、積極的にコミュニケーションをしようとは努力してきませんでした。しかし、今回の地震では、様々な場面でコミュニケーションが上手く取れているところ

と取れていないところでは状況が全然違うということを感じ、大事だと思うようになりました。職員同士も日頃からコミュニケーションが取れていないと、「いざ」という時に上手くいかないと思いました。色々な人とコミュニケーションを取って知らなかったことを知り、今までやれなかったことができるようになれば良いなと思うようになりました。

C それ以外には。

松本 これまではどこかで地震が起きても「大変そうだな、コンビニの募金箱で少しくらいは募金しようかな」という関心しかなかったのですが、地震を経験してからはどこかで地震が起ったというだけで色々なことを思い出し、何か自分にできないかなと思えるようになってきました。

C 住民の皆さんには何か変化を感じますか。

松本 大きな災害を経験すると、人それぞれ色々な部分が見えると感じました。大変な時期でしたが、窓口に来てくださった方が「頑張つて」と声をかけてくれて、元気をもらうこともありました。

C これからのご自身や、大津町に望むことはありますか。

松本 大津町は、特に中心部は人口の入れ替わりが激しい町です。隣の人の顔や同じ地区の人の顔が分かるようなコミュニティ作りをこの機会にしないといけないのではないかと思います。

C 確かにそうですね。

松本 また今回の震災を経験し、防災マニュアルの見直しも考えなければならぬと思いました。外部からの支援者でノウハウを持っている人たちが来てくれてるのに、それを生かしていない場面があったように感じました。今回の地震を経験したからこそ、災害に強い町になるためにじっくり、腰を据えてやっていければと思っています。

C 災害に強い町にしていけるにはどうしていくべきだと思いますか。

松本 地震の時の状況を話し合う場合はまだ1回しか設けられていませんが、そこでたくさん意見が出てい

たので、その意見も防災時のマニュアルに盛り込んでいけたら良いなと思います。時間が経つと忘れてしまうので、その前に行動しようと思い、なるべく時間を作って参加するようにしています。こうしたことへの参加は以前ではあまりなかったと思います。震災前の私は、早く帰宅することを優先していたように思います。先日開催された、町のフューチャーセッションにも子どもとその同級生を連れて、一緒に参加しました。自分では考えもしなかったような、色々な考え方が聞けて良かったと思います。先ほどの質問の再度の回答にもなりますが、今回の地震は私にとって大きな転機になる経験であったと思いますので、これから色々な所に参加していこうと思います。

大津町役場 住民福祉部福祉課

取材日 平成28年11月25日

高橋由紀美^{たかはし ゆきみ} (36歳)

4月に福祉課に異動したばかりで地震に遭遇した高橋。

初めての業務に迫られる中でも仲間と、困った人たちを救わなければならないという強い責任感で乗り越えていった。

地震から時間が経った今も家族との時間はなかなか取れないが、復興に向け、町のため、住民のため今も奮闘している。

C 高橋さんは福祉課福祉係でお仕事をされていると思います。どういったお仕事でしょうか。

高橋 普段は生活困窮者の相談や民生委員、災害時の要援護者リストという避難の時に支援が必要な方の名簿を整備する業務などをしています。

C それでは、震災時のことをお尋ねしたいと思います。前震が起こった4月14日21時26分の状況や様子をお聞かせください。

高橋 前震の時は町の総合体育館で、久しぶりに子どもたちを連れて職場の人とバドミントンをしていました。その時に地震があつて、周りから「キャー」という声が聞こえ始め、大きく揺れたので「地震なんだ」と気づきました。3人の子どもたちがすぐ駆け寄ってきたので、特に一番下の小学校2年生の娘を抱きしめて、2人の子もそばにいました。

C 怖かったでしょうね。

高橋 はい。すぐにテレビで震度を確認すると熊本県で最大震度7というのが出ていたので、「これは大変だ」と思うと同時に、「すぐに役場に行かない」と思いました。課長も一緒にいましたので、「すぐに行こう」となり、私は子どもたちと一緒にだったので子どもたちをまずは家に一度連れ帰って、手当たり次第に物を詰め込んで、急ぎ地元の公民館に行きました。そこにはまだ誰も避難していなくて真っ暗だったので、次の指定避難所である大津中学校に行くとそこは開いていたので、義理の母と子どもたち3人はそこにいてもらおうと思いました。

C その後、すぐ役場に行かれたのですか。

高橋 はい。庁舎に上がったら災害対策本部も立ち上がっていたので上司の指示を仰ぐようにしていました。すぐに「楽善ふれあいプラザ」の避難所開設をしてという指示があったので、電話をかけ、施設の被害状況を確認し避難所開設を依頼しました。その後も余震が続いていたので、本庁舎での業務はこれ以上は危険ということになり、別館の3階に災害対策本部が移

されました。災害対策本部にはどこに誰が避難している、何人避難しているといった報告の電話が次々にかかってくるので、その集計をしていました。その後、福祉課は避難所とか、物資を災害時には担当しないといけなかったなというのを思い出し、毛布などの物資や他の備蓄品も含め確認作業をしばらくは行っていました。

C 役場の方で備蓄している物資の確認ですか。

高橋 はい。備蓄の毛布が何枚あって、それをどこに何枚ずつ配布するかというのを、指示を受けながら周りの人たちと一緒にやっていました。あとはどこの避難所に何人避難しているという情報が随時来るので、それを受けて毛布とか水や食料を準備していました。

C 混乱していましたか。

高橋 はい。避難する人も避難場所もどんどん増えていたので。

C 高橋さんの役割というのは避難所に行くよりは、災害対策本部で電話対応や物資の割り振りをする事の方が多かったのですか。

高橋 そうですね。他には夜中の3時くらいに、防災無線を流したりもしました。

C 高橋さんの役目だったのですか。

高橋 その時たまたまいたからだと思います。

C どういった内容だったのですか。

高橋 避難される方は必要なものを持って避難してくださいとか、区長さんに向けて、安否確認や見回りとか小学校への誘導をお願いしますとか、そういった内容でした。

C 大事な内容ですね。

高橋 はい。その後は、安否確認のため、最初にお話した要援護者リスト全員分を渡さなければならぬので、すぐ印刷に行きました。

C どれぐらいあるのですか。

高橋 2000人以上はあります。最初は全区ごとに直接持つて行くところで準備していましたが、たまたま4月15日が区長さんへの発送の定期日で、確認したら15日も通常通り発送するということだったので配達に間に合うようにリストを印刷して各区長さんへ

「リストを送るので、これで安否確認をお願いします」という連絡をし、発送の準備をしていました。

C リストの印刷は高橋さんお一人でされたのですか。

高橋 4月に福祉課に来たばかりで、たまたま4月14日の昼間に要援護者リストについての勉強をしていて、これからこういう風に活用していこうかなって考えていたところだったのです。そしたら夜に地震が起こって、まさにこれをしないといけないという状況になりました。でも、まだ出力するやり方とか、システム操作の引き継ぎを受けていなかったもので、前任者がすぐに来てくれて一緒に行いました。

C そのリストは確かに災害時にはとても重要になりそうですね。

高橋 はい。ただ、要援護者リストについては課題もあります。年齢が変わったり、介護認定を受けている人の介護度が変わったりと、状況は常に変わっていきますので、随時更新していかないといけないのでその点も今後考えていかないといけないところです。

C リストは配達に無事間に合いましたか。

高橋 はい間に合いました。15日の早朝には区長発送の段取りができたので、それが終わると今度は午前7時くらいに食料を各避難所に配りに行きました。

C 多忙ですね。

高橋 パンなどをイオンさんからすぐ提供してもらったので、水などと一緒に、避難されている地区へ配りました。その時に私の子どもたちが避難している地区にも回ってみんなの安全を確認できたので安心しました。

C 余震が続く中、一晩、離れ離れだったわけですからね。

高橋 子どもたちは車中泊をしていて朝もまだ早くて寝ていたの、ちよつとだけ顔を見てすぐに仕事に戻りました。15日は夕方に自宅待機ということになったので18時くらいには家に帰り、前夜は寝ていなかったの、21時頃には休みました。

C お子さんたちも家に戻ってこられていましたか。

高橋 はい。戻って来て全員家で寝ていました。

C そして本震ですが、その時の様子をお聞きたいのですが。

高橋 2階で私は娘と寝ていたのですが、携帯で緊急通報が鳴って、すごい揺れだったの、ただ娘を抱きしめておくことしかできませんでした。周りに特に落ちてくるものはなかったけれども、横に置いていたテレビは倒れていました。長男と次男は別室で寝ていて、たまたま主人もその部屋で寝ていたので子どもの傍には親がどちらかついてたのですが、子どもたちはとても怖がっていました。停電で真っ暗の中、携帯で足元を照らしながら1階に降りたらタンスとか全部が倒れていて、食器は棚のロックがかかるようになっていたので割れてはいませんでした、他のクローゼットは全部開いて、荷物もほとんど落ちてかなり散乱していました。これは避難生活が長期になると思っただので、お菓子とか避難所に持っていける食べ物や懐中電灯などを全部詰め込んで地区の公民館に義理の母と一緒に行きました。外に出るとブロック塀は倒れているし、納屋とかも全壊のところがあったので、車で

C 緊急時で、緊迫した様子がよく分かります。その後、様々な活動をされていますが、判断に困ることはありましたか。

高橋 物資業務の中で、何をどこに配ったかというのをきちんと記録しておかないと後々検証に入った時に困ると思ったので、そういったことを踏まえて色々な準備をしていました。その当時、80箇所以上避難所があったのですが、全てに持つて行くには物資が足りなかったもので、どこに何を持つて行くかということになりました。物資が少なかつたので、まずは指定避難所17箇所に持つて行くべきだろうと考えました。ただし、持つて行くても必要ないものであったら意味がないなど、色々考えることはありました。

C 避難者数は分かっても、どのような人が避難しているかは分からないからですね。

高橋 はい。おむつとかトイレトペーパーとかカイロとか、簡易トイレとか、ほしいと言われるところはたくさんあるのですが、備蓄数もわずかだったので、どうするべきかを考えなければならぬことばかりで

した。トイレの問題だったら、大ならば新聞紙でできるのではないか、ならば新聞紙で箱を作ってしてもらおうとかいう代用を考えたりもしました。物資も最初は限られていましたので。

C それ以降というのはどんなことをされていたのですか。

高橋 ずっと物資業務です。17日から大津中学校の体育館が物資倉庫になったので、すぐに物資置き場の配置案や、受け入れ記録様式などを作成したり、在庫管理や物資受払いの各担当リーダーを決めて、それぞれの役割分担を決めたりしました。17日以降は基本的には物資倉庫に行つて、避難所から足りないものの要請があれば準備をして輸送班に持つて行つてもらつたり、支援物資が来たら指定の場所に積み込んだりと、リーダーを中心になんと一緒にやっていました。その後は福祉課福祉係は災害救助関係の仕事がメインなので、その関係の仕事にシフトしたり、り災証明書発行後の生活再建や、義援金などの手続きの準備を始め

ました。他の職員は通常業務をしながら物資業務を行っていました。

C 物資はいつぐらいまで担当されたのですか。

高橋 5月7日くらいまでは物資業務がメインでしたが、並行しながら、り災証明書発行後の生活再建受け付け体制を考えたり、災害救助法関連費用について各課と話し合ったり、そういった対応をしていました。

C 様々な手続きがあるのですね。ところで庁舎は危険で立ち入り禁止になり、隣の町民交流施設（オークスプラザ）に臨時に役場機能が移設したわけですが、手続き関係のお仕事はオークスプラザでされていたのですか。

高橋 私はオークスプラザではあまりしていません。大津中学校で物資班の仕事をしながらパソコンを持って行っていたのでそこで仕事をしていました。資料を作ったり予算関係のこともあったので。中学校と災害対策本部とを行ったり来たりしていました。

C その中で大変だったこと、問題が起きたことはありませんか。

高橋 どの課が何をするという役割分担もそうですが、災害対策本部との連携が難しかったと思います。

C 災害対策本部も、手がいっぱいだったからでしょうか。

高橋 そうだと思います。町全てが被災しているわけで、対応は無数にあったでしょうから。災害対策本部の情報がなかなか伝わってこなくて。それで、福祉課から1人本部に常駐してもらい、その人から直接、部長に判断を仰いでもらったりしていました。また、職員一人一人に情報がきちんと伝わらないといけないと思い、福祉課では4月15日の早い段階からLINEでグループを作って情報共有をしていました。

C それまではLINEグループはなかったのですか。

高橋 震災後に作りました。福祉課職員も避難所配置や、会議などでバラバラに動いていたので情報共有のために作成し、すごく良かったです。それで今現在もLINEグループを活用しています。若い職員たちも、

LINEを通してやりとりが全部分かるので物資の状況もある程度把握できていたと思います。

C 質問を少し変えていきますが、震災対応をしていく中でのもう一つの原動力は何だったのでしょうか。

高橋 責任でしょうか。困っている人がいるのは分かっているわけですから、その人たちを救わない、という気持ちがありました。他の職員は、避難所に泊まり寝れなくてもまた仕事に来て、そしてまた避難所に行くという生活を続けていたので、私も頑張らなければという気持ちが強かったと思います。

C 激務が続く中で、ご家族に会えない状況というのは心配ではなかったですか。

高橋 そうですね。義理の母もいて、主人もしばらくは仕事が終わったあたりでその点では安心できましたが、会えなかったのは寂しく、ちゃんと食事がとれているかと心配でもありました。でも、長男が物資のボランティアに来てくれたので、そこで会ったりもして、それは安心できる機会でした。

C 復興に向け仕事されてきて、高橋さん自身が一区切りついたと思う出来事がありますか。

高橋 毎日まだ震災対応の仕事なので、正直私の中では『熊本地震』はまだ続いているような状況です。でも、5月に長男の運動会があつて、地震後初めて丸1日お休みをもらった時に、「世間はこんなに落ち着いてるんだな」と感じました。お店も開いていて、普通に買い物もできる状況になってたんだと思うと、現場での仕事と、世間のギャップに戸惑いました。でもそこでも一区切りついたとは思えなくて、強いて言うならば一区切りを感じたのは10月です。

C 何かきっかけがあつたんですか。

高橋 仮設住宅に入られた方々の見守り活動を社会福祉協議会に委託し、「地域支え合いセンター」を10月に開設しました。このセンターを中心に、これから被災された方々の見守り支援を行っていくことになったのです。もちろん町としても支えていくのですが、今まで拾えていなかった仮設住宅の住民の皆さんの声や

ニーズがきつとたくさんあるだろうと不安だったのです。そうした点を地域支え合いセンターを中心にやってもらえるようになったので、大変安堵し、一区切りついたように感じました。

C 声を拾う、ですか。

高橋 行政だけじゃなくて、みんなで支えていく組織ができたと思ったのです。被災された皆さんに直接会って話を聞き、生活再建への支援に繋がったり、孤死などを防ぐためのシステムができたということにホッとして、安心をしました。

C 先ほど「地震はまだ続いている」とおっしゃいましたが、それは手続きとかの面ということですか。

高橋 そうですね。生活再建のために支援金とか義援金の支払いとか、避難所関係の最終的な清算とかが色々あります。これからは一部損壊に対しての支援もありますので。

C それらが落ち着くまでは、ということですね。震災前と震災後では高橋さん自身の考え方や行動に変化

が生じたのではないかと思うのですが、あれば教えてください。

高橋 先を見据えて行動しないといけないと思うようになりました。こういうことをしたら、次はこうなるということを考えて行動しないと、目先だけのことをしていても必ず新たな問題が発生して、余計混乱を招いたり時間だけがかって、住民の皆さんに迷惑がかかってしまいますので、大事なことだと感じているところです。

C 町民の皆さんの変化を感じることはありますか。

高橋 防災意識が高くなってきているかなと思います。区長さんたちと話す時は、「共助」とか、「自治防災組織を作る」という話もよく聞きますし。民生委員さんと関わることも多いのですが、その時も皆さん防災の意識が強くなっていると感じます。

C 地震があつたからその変化ですね。これからのご自身に望むことがあれば教えていただきたいです。

高橋 福祉課は支え合っている部分が大きいので職員

同士の関係性を大事にしないといけないと思っています。また、今回、県内外から災害派遣で多くの職員の方に支援に入っていただきました。また、市町村間で情報交換も大事だと思っていますので、色々な機会を通じて情報交換もより一層活発にし、そこでの縁とか繋がりを大事にしたいです。個人的なこととしては、子どもたちとともに会って話せているのは朝の30分くらいなので、自分の中でもそろそろ落ち着きまいなという気持ちはあります。

C 多忙さはまだ継続しているわけですね。1日にどのくらいの住民の方が来られるんですか。

高橋 り災証明書発行後は、必ず福祉課に来てもらう流れになってるので、新規の方は今は1、2件ですが、再度相談に来られる方は日に10～15件はあります。また、今後家を解体したら手続きが必要になるので、これからまた件数は増えてくるのかなと思います。

C 一番忙しかった時はどのくらいの方が来られていましたか。

高橋 5月中旬から、り災証明書発行が始まり、その時は絶え間なく来られていました。多い時で40人くらいでしょうか。私たちも初めてのことだったので、こういうケースはどうなんだとかその都度確認してやっていました。5、6月の、り災証明書発行で忙しい時期も通常業務はもちろんですので、目の回る忙しさでした。その時期からすると今は随分と落ち着きました。

大津町役場 住民福祉部健康保険課

取材日 平成28年11月15日

姫野慎吾^{ひめのしんご}（28歳）

東日本大震災をきっかけに「災害時に現場にいて動きたい」という目標を掲げ、現在はその第一線で働く姫野。

震災後は日々、支援物資の受け入れ・仕分け業務に奮闘した。

大津町の人々が安心して暮らせる環境を作っていくことが公務員の役割だと考え、その実現と震災対応業務に今も全力を尽くしている。

C 前震の時のことをお聞かせください。

姫野 外を走っている途中でした。走っていたので揺れているのがあまり分からなかったです。でも電柱などがガタガタ揺れているのを見て、おかしいなと思い、そこで地震に気づきました。家に戻って、状況を確認し、テレビのスイッチを入れました。消防団に入っているの、出動メールも来て、すぐに役場に登庁しました。21時50分頃に家を出て、役場には22時前に到

着していたと思います。役場に着くと、もう災害対策本部ができていました。

C ご自宅に戻られた時にご家族はいらっしゃったのですか。

姫野 妻がいました。家の中は花と壁に掛けていた時計が落ちたくらいで、それ以外は特に大きい被害はなく安心しました。妻は揺れに怖がっていたので、実家から父に来てもらい自宅から3キロほど離れた実家に

避難させました。私は職場に向かわなくてはならなかったのです。

C 役場についた後は何をされたのですか。

姫野 各課で分かれ、町の被害状況把握のため町内の見回りに行きました。私は消防団に入団している町の職員2、3人と消防積載車に乗り、北の方を回りました。その時は目立った被害はなかったです。その後は平川の宮本地区の公民館に行き、他の地区の消防分団員もいたので情報交換をしつつ、1時間くらいそこに待機していました。その後、電話で指示を受け避難所の矢護川コミュニティセンターに私ともう1人で24時頃に行きました。その後は朝まで避難所にいました。

C 避難所にはすでに職員さんがいらしたのですか。

姫野 2人いたのですが人手が足りないということだったので、応援としてそちらに向かいました。

C 避難所ではどんな活動をされたのですか。

姫野 基本的に避難してきた人の人数把握と避難所運営でした。消防分団員も先に来ていたので私たちは役場の災害対策本部との繋ぎの役割をしていました。避

難所には10人ほどいましたね。でも朝方にはその方々もおられなくなりましたので、庁舎に9時頃に戻り、通常業務を始めました。

C 15日はその後何をされていたのですか。

姫野 旧庁舎が使えなかったので、住民課だけ町民交流施設（オークスプラザ）に移って、住民票発行や証明書発行をしていました。証明書発行の手続きに町民の方が来られて、迷うといけないということで、1人は案内係としてオークスプラザに待機していました。そこには昼頃までいましたね。お昼以降は4〜5班ほどに分かれて、避難所に食料を配布しに行きました。非常食のアルファ米です。生涯学習センターのお湯を沸かし、備蓄していたアルファ米にお湯を注いで、10箇所くらいの避難所を回ったと思います。

C 15日は通常業務に加えて、避難所の手伝いをされていたのですね。その日は食料の配布は何時頃まで行っていたのですか。

姫野 14時過ぎまで配布していました。その後避難所に泊まりなさいということだったのでいったん家に帰

り、休憩して17時半くらいにまた登庁しました。その後、北部にある杉水地区の避難所の護川小学校体育館に行つて泊まりました。職員は私ともう1人の2人でした。その日の夜は1人しか避難している人がいなくて、夜中、本震前に3〜4人來られたくらいでした。

C 本震が起きた時の様子をお聞かせください。

姫野 体育館で仮眠していたところで本震でした。その後は避難する人がいきなり増えました。私の妻は実家から自宅に戻つてきていたため、心配になつて避難者の方々の対応の合間に電話をかけました。

C 奥さんの様子は。

姫野 家の食器棚や家具とかも倒れていたようで、パニックになつて泣いていました。1人でいるよりはと思つて近くの避難所に避難させました。電話で「避難して」という感じでした。その時、妻は妊娠3ヶ月くらいで、安定期にギリギリ入るくらいかなという時でしたので特に心配でした。できるだけ私と一緒にいたいということだったので、夜は近くの避難所に行つてもらつたのですが、明けて昼前くらいに私がいる護川

小学校に妻が來ました。私は仕事なのでついてあげることはできませんでしたが、近くにいただけでも違つたかなと思います。その後は妻の父親に連絡を取り、福岡なので、里帰りしてもらうことにしました。

C 震災対応の話に戻りますが、避難者がたくさん來た後の状況はいかがでしたか。

姫野 前震の時のように避難者数を確認したかったのですが、あまりに人が多くてできませんでしたので、とりあえず体育館に避難してもらい、人が多くなつたら誘導を始めました。車内にいて建物内に入らない人もいたので、小学校の校庭に入ってくる車の誘導もしていました。私ともう1人だけでは全ての避難誘導は厳しかったのですが、地元消防団の方やその地域に住んでいる職員が何人か応援に来てくれて、何とか対応できました。その方々と一緒に交通誘導と避難者からの要望対応を朝方くらいまでしていたと思います。

C その後は。

姫野 朝になつてご飯はどうしようという話になりま

した。体育館に備蓄があつたのと、町で備蓄している分を持ってきてもらつて配布していました。その後は、町の議員さんも2人くらい来ていたので皆さんと協力して。これからの避難所運営をどうするかといった話し合いも行いました。他の小学校では体育館のライトが落ちたりとか内壁が落ちたりとかがあり、実は私のいた護川小学校も、金属の塊が幾つか落ちてきていましたので、これは危ないだろうと判断して、学校教育課からも調査に来てもらいました。そして体育館にいるよりとはということで小学校の校舎に避難所を移しました。避難している方に「校舎に移ってください」と声をかけて行つて。

C その後避難所の対応をされていたのですか。

姫野 いえ、週1〜2回は避難所に泊まってはいましたが、17日か18日頃から物資の担当になり、主に支援物資の仕分けや受け入れを行っていました。

C ご自宅には帰られていたのですか。

姫野 自宅には着替えとかを取りに帰ったりはしていましたが、2日間くらいは電算室にある災害対策本部

で寝ていました。自宅で1人で寝るのは怖かつたのと、できるだけ災害対策本部にいてくれということでしたので。19日頃から自分の実家の方に行つてました。自宅に帰つたのはその1週間後くらいだったかと思ひます。

C 災害対策本部での泊まり込みが続いたという感じではなかったのですね。

姫野 そうです。夜は避難所か実家に夜遅くに帰るかでした。支援物資の方も仕分けとか搬入を23時くらいまでやっていたので、帰ってから自分で食事を作る気力もなく、それもあつて実家に帰っていました。

C 支援物資の仕事について詳しくお願いします。

姫野 17、18日頃から5月の連休まで支援物資の対応をしていました。支援物資の搬入は天津中学校の体育館で行つていて、最初は15人くらい、20人はいないくらいでした。対応しきれなくなるとボランティアの方にも手伝ってもらいながら。20日過ぎくらいからは大阪府から支援職員が来てくださったので、その方々とも一緒に対応にあたりました。

C かなりの量が送られて来たのですか。

姫野 送られてくる支援物資は、国からプッシュ型でバンバン届いていました。ほぼ毎日10トン車に満杯で物資が送られてきました。国からの支援物資以外にも、他の市町村や県外の方が自分の車で持ち込んだものもあり毎日忙しかったです。ある意味で恐怖でした、10トン車が到着すると。野菜の出荷場などにローラーで荷送りするコンベアがありますよね。最初はそれがなくて、バケツリレー形式でみんな手で物資を運んでいました。途中で農協からローラーコンベアをお借りして、それで多少楽になりましたね。中でも水が一番きつかったですね。重くて大量なので。担当になった住民福祉部は女性の多い部署だったので運ぶのはかなり厳しかったです。

C 届いた物資はどう対応されていたのですか。

姫野 基本的に届いた支援物資をチェックし、各避難所に送っていました。避難所に送るのは経済部の職員に行ってもらったのですが、こちらでどのくらい避難所に回すかという準備はしないといけませんでした。



大津中学校での支援物資搬入

物資は届くし、それを送り出す準備もしないといけないということで大変でした。係長が各避難所の人数から判断して、このくらいごとに分けてというリストを作ってくれたので私たちはそれに従って、この物資はこれだけという具合に仕分けをしていました。

C 物資の受け入れから仕分け作業をする中で大変だったことを詳しく教えてください。

姫野 支援物資の担当内でも、物品と食品とに分かれて

作業をしていました。特に食品担当は賞味期限の短いものから、決まった時間に食料を各避難所に届けなければなりませんでした。ただ食品に人員があまり割かれておらず、私たち物品担当がそちらもカバーしなければならぬ状況でした。両方の担当をして23時ぐらいまで仕事をしている状況でした。ただ、担当によっては夕方には帰れるところもあったりして、過酷な状況でしたから不満が溜まっていたように思います。23時まで残ったの作業は1〜2週間ほど続いたので皆さんも限界だったのだと思います。途中からはボランティアさんに来ていただいても助かりました。

C ボランティア対応は大変でしたか。

姫野 ボランティアセンターで登録して来られる方が多くて有り難かったのですが、ボランティアさんを動かさないといけないのは大変でした。指示を出す必要がありますが、私たち自身が慣れていないのですから。私たちも手探りでやっていることが多かったので、ボランティアさんから「もっとしつかり指示を出

してくれ」と言われても上手く対応できなかったりして、そういったところは少し大変でした。

C 指示を出すというのは、慣れていないとなかなか難しいでしょうね。

姫野 自分でできることはもちろん自分たちで行いますが、私たちは上の者から指示を仰ぐことが普段は多いのです。だから指示を出す感覚に乏しく、難しかったですね。それで上との連携を取りながら指示を出していました。ただ途中からは、ボランティアさん私たちも慣れてきたのでスムーズになっていきました。それと先ほども少し触れましたが、大阪府の人たちが入ってきたのが大きかったですね。30〜40代の方が入ってきてくれたので、その人たちが指示を出してくれたおかげで円滑に作業が回りました。

C 支援物資の担当後はどのようなことをされていたのですか。

姫野 連休明けくらいからは通常業務に戻りました。私は地震対応の国民健康保険料の減免や医療費の免除

とかの手続きなどをしていました。それを周知すると一気に町民の方々が来られるので、窓口は番号札を作った方が良いのではないかとというぐらいにすごい状況になりましたね。窓口業務が続く日中は自分の仕事自体はできないので9月頃までは残業の日々でした。

C どのくらいお客さんは一日に来られるのですか。

姫野 人数は難しいですが、職員総出で、窓口に来られる方の対応にあたっている感じです。職員が5人臨時職員2人、そして課長1人なのですが、ほぼ全員で窓口対応している感じでした。自席に座っている方が少ない状態でした。

C 激務だったわけですが、その原動力とは何だったと思いますか。

姫野 私が役場職員になろうと思ったきっかけが、東日本大震災だったのです。志望動機として「災害時に現場にいて動きたい」というのがありました。震災直後は「災害の時に頑張ろう」という目標があったので働き時だなど思っていました。しかし、途中から徐々

に疲労も溜まってきました。住民の皆さんからの要望も個別対応が必要なくなってきました。その時は気持ち的にも厳しくてきつかったです、緊急時だし、やらないといけないという気持ちで乗り切っていました。「お疲れ様です」と声をかけてくださる方もおられたりして、そういったお気持ちも原動力になったと思います。

C 東日本大震災が入庁を考えるきっかけになったとのことですが、それについて教えてください。

姫野 大学4年の就職活動時はまだ東日本大震災の前で、民間企業を受けていました。ですが、あの地震を見て、利益を求めるとかではなくて生活に寄り添うような仕事があったという思いが強くなり、それで公務員になろうと思ったのです。そこで次の年、浪人して役場を受験して公務員になりました。東北にボランティアにも行けたら良かったのですが、実際行動に移せるような経済力もなく、何かしたいという思いはあったけど何もできなかった。だからその分、役場で頑張ろうと思いました。

C 震災対応している時、奥さんと連絡は取られていたのですか。

姫野 はい。妻の仕事も19日くらいから再開して、しばらくは福岡から職場に通勤していましたが、26日には熊本に戻ってきていたので私も家に戻りました。

C 本震で自宅内はひどい状況になっていたのではありませんかと思いますが、いつ頃片付けられましたか。

姫野 片付けは5月の連休前に何とか終わりました。仕事の合間をぬって片付けをしたり、2人で20時くらいに帰れた時にちよつとずつやって、徐々に片付けをした感じですね。今のところ震災の備えをしつかりやっているとは言いがたいですが、家具とかは倒れにくいものを選んだり、地震が起こった場合を想定して家の中の配置を考えるようになりました。

C お子さんは当時、お腹の中だったと思いますが、生まれていたらきつと、とても大変だったのではないのでしょうか。

姫野 もしいても僕は何もできなかったと思います、家族のことについては。

C 業務を優先しなければならなかったでしょうからね。奥さんと今後のことについて話をされましたか。

姫野 今後のことまで話す余裕はなかったです。自分の業務のことにいっぱいいっぱい、家に帰ってもご飯を食べてすぐ寝るという感じで妻と話す気力もなかったですね。

C 一番は町のために行動する状態でしたか。

姫野 そうですね。役場職員になった時もそれはしょうがないなと思っていたのですが、実際なってみると辛いですね。

C 家族のことにきちんと意識が向いたのはいつ頃ですか。

姫野 子どもが生まれた時ですね。9月の半ばです。子どもが生まれる前に妻が体調を崩して入院した時期もあったので心配したのですが、無事に生まれてくれましたので。

C 地震当初は心配や不安もたくさんあったと思いますが、無事に出産されて安心されたでしょう。

姫野 はい。ホッとしました。子どもの顔を見るとやつ

ぱり頑張ろうというのは本当に思います。

C 色々なことが一度に起きた震災から徐々に復興に向けて動いていると思います。その過程の中で、それぞれに一区切りがついたという時があったのではないかと思います。姫野さんの場合はどういった時がそれだったでしょうか。

姫野 職場の区切りとしては7月半ばに仮庁舎に入った時です。やっとちゃんとした仕事場という感じになりましたので。また、個人的な区切りとしては、9月くらいに残業がほぼなくなり、普通のリズムで暮らせるようになった時です。ランニングなどの運動もできるようになってやっと日常が戻ってきたと思います。あと、9月半ばには子どもも生まれましたので、そこも一区切りでした。

C 地震を経験し、考え方が何か変わりましたか。

姫野 何かあった時に自分で色々判断しないといけないなと思うようになりました。もっとも、その考えで行動の変化までには至っていないのですけど。な

お、今回の震災では人の良い面もたくさん接しましたが、一方で嫌な部分ももちろん見ましたので、自分はそうならないように気をつけようと心がけています。次にまた今回の震災のような事態があるとしたら、その時はおそらく上の立場になっていると思います。そこでちゃんと指示を出したりできる人になりたいなと思います。

C 姫野さんが考える役場の役割は何でしょうか。

姫野 安心できる環境が、こうした震災時においては特に最終的な拠り所だと思いますので、安心して暮らせる環境を作っていくことですかね。

C これからの姫野さん自身や大津町に対して望むことや、これからやっていきたいなと思っていることがあれば教えてください。

姫野 大津町としてはきめ細やかな支援をしないといけないなと思います。個人としては日頃から何かあった時はこう動かないか、という考えを持っておかないといけないと思っています。

大津町役場 住民福祉部健康保険課

取材日 平成28年11月2日

大塚昌憲（42歳） おつかまさのり

健康保険課に所属し、震災時は、物資担当として膨大な量の救援物資の受け入れと配布を担当した大塚。

前震発生の朝、第3子が誕生。そして本震。妻と生まれたばかりの第3子は病院、2人の子どもを母に預け、救援物資との奮闘を持ち場として、震災対応に当たった。

C 前震時の様子を教えてくださいますか。

大塚 前震の4月14日の明け方に、3番目の子どもが生まれたので、昼間は休みをもらって、病院に行っていました。夜は、2人の子ども（当時4歳と2歳）と自宅に戻ってご飯を食べ、21時前には寝ました。そうしたら、前震が来たわけです。子ども2人は起きなかったもので、実家から母親を呼び、22時くらいに役場の方で登庁しました。

C 病院の奥様や生まれたばかりのお子さんが心配だったと思います。その時の心境は。

大塚 妻と3番目の子供は病院にいましたし、自宅も割と丈夫な家だと思っているので、とりあえず大丈夫かなとは思っていました。母も私の家に来て、こっちが安全だろうからここにいてくれ、と。当時は大変でしたが、今振り返れば、3番目の子ども地震の前に生まれてくれたので、運が良かったと思います。

C そんな中、登庁されたわけですが、登庁後はどのような活動をされたのですか。

大塚 役場に着いて、係長以上は庁舎3階の災害対策本部に行くように言われて、「余震が来ているのに入っているのか」という不安を感じながらも上がっていたら結構揺れて、外に出ることになりました。その後は指示があつて、町の運動公園を見に行きました。そこから戻ると、指定避難所の一つである室小学校の体育館に女性しかいない、男性の手が必要ということで、そちらに行きました。

C 何時頃ですか。

大塚 日付が変わって、15日の深夜1時とか、そのくらいの時間だと思います。

C その後、室小学校におられたのですか。

大塚 そうです。

C 小学校の様子を教えてください。

大塚 室小学校には、避難されている方が300人くらいいました。水はある程度行き渡っていました。毛布の数が全然足りなくて、お年寄りや小さいお

子さんがいる方を優先して配布したのですが、その時はすごい人だかりができて大変でした。

C 毛布や水は役場に備蓄していたものですか。

大塚 はい。ただ今回、町の備蓄だけでは全く足りませんでした。

C 夜が明けてからは、通常業務に戻られたのですか。

大塚 いえ、避難所におりました。朝方になって、ある程度の方は帰られたのですが、仕事に行くからと言ってお子さんだけ避難所に残して行かれる方もおられ、昼間は避難所の方におりました。夕方になって片付けをして、役場の災害対策本部に戻りました。

C 15日はご自宅に戻られたのですか。

大塚 夜になって帰りました。

C 帰られてまたすぐに本震が起きたと思います。その時の状況を教えてください。

大塚 前震の時と同じように子ども2人と寝ていました。かなり揺れて、本棚とか倒れはしなかったですけど、30センチくらい家具が前に出てきたり、スピー

カーが倒れたり、食器棚の中が滅茶苦茶になったりしましたが、今回も子どもたちは起きなかったので、前震の時と同じように母親を呼び、役場に出て行きました。

C 役場に到着後はどうされたのですか。

大塚 食料や水がほとんどない状態だったので、私ともう一人とで県庁に物資を受け取りに行きました。

C 当初から物資担当が割り当てられていたわけではないのですか。

大塚 とりあえずやれる人間がやっていく感じでした。ただ、私たちは県庁の建物内の場所を知っていたので、それで行くことになりました。

C 何時頃に出られたのですか。

大塚 2時か3時頃に公用車で出発したと思います。

C 早い段階で県庁に物資を取りに行かれたということですね。

大塚 そうです。朝に間に合うようにということですが、どこも停電している中、国道57号（東バイパス）を通じて県庁に向かっている時、マンションの1階部分がペ

シャンコになっている状況などを見て、今回はただ事じゃないと感じました。

C 物資を受け取って役場に戻られてからは何をされていたのですか。

大塚 16日は主に食料関係の段取りをしていました。

お湯でできるアルファ米の非常食がありますが、お湯を沸かし、それを作って出すというのを町の生涯学習センターでやっていました。

C 断水していたのではないですか。

大塚 断水はしていましたが、生涯学習センターには施設の貯水タンクがあるので、最後にはなくなりましたが、給水ができました。私はそれから総合運動公園（スポーツの森・大津）に移動しました。そこには自衛隊の給水車などがいましたが、人が殺到していたため、町の職員で整理してほしいとのことでしたので。

C 給水車のところには、元から職員さんが何人かはおられたのですか。

大塚 職員が1人いましたが、給水車にすごい行列ができていました。以前の防災訓練で配布したビニール

製の給水タンクを持って来られる方もおられたのですが、それを見て「それはどこで配っているんだ」「何も無いのにどうやって水を持って帰るのか」とかなりの剣幕でおっしゃる方もいました。配布できるものもなくなっていましたので、説明や行列の整理をやっていました。

C 大塚さんは何を担当されたのですか。



物資倉庫となった大津中学校体育館

大塚 主に物資を担当しました。翌日（17日）からです。それまでは、災害対策本部の指示で目の前のことを必死でやっていました。が、本来の体制に戻ろうというところで、災害時の初動マニュアルのとおり、私の所属する健康保険課は物資を担当することになりました。それまで、食料の配布とかもしていたのですが、食糧担当と物資の担当が整理されていなかったたので、そこからが物資を中心に行動を始めました。

C 物資担当というのは届いたものを整理して、配る仕事になるのですか。

大塚 そうです。支援物資を受領して、避難所にいる方などに物資を配布するのですが、マニュアルにはそれだけしかありませんでした。避難した住民の方々は、大津町の全域に及んでいましたので、物資は各避難所で受け渡すということになり、受け付けた物資を避難所に送っていました。

C 17日以後もその業務を継続されていたのですか。

大塚 物資を受け付けていたのが大津中学校の体育館なのですが、5月の連休明けに学校が再開するまで、

大津中学校で継続していました。

C 物資担当専用の携帯電話があったと聞きました。

大塚 NITさんから物資専用2台お借りし、避難所とのやりとりに使っていました。

C 災害時にはNITから借用するといった協定があったのでしょうか。

大塚 経緯はよく分かりませんが、物資の集積所を開いた時には、携帯電話は来ていたと思います。

C その携帯には電話がかなりかかってきて、物資班としては人手が不足したと思います。応援はありませんか。

大塚 福祉課と健康保険課の職員を中心に十数名でやっていましたが、その後、大津町には関西広域連合から大阪府の支援チームや滋賀県の大津市からも職員が応援に来てくれて、かなり助かりました。電話の受け付けなどは非常に慣れておられて助かりました。今回のような大規模災害になると役場だけではどうにもなりません。ボランティアさんとか他の自治体からの

応援が不可欠だと思いました。

C ボランティアさんは本部の人が募ってから来られるのですか。

大塚 社会福祉協議会がボランティアセンターを立ち上げる話があったのですが、それが実際に立ち上がるまで日数を要したので、その前にも支援をしてくださる方がおられました。物資関係はそういったボランティアを受け入れやすい面がありましたので、ボランティアは非常に助かりました。また、その頃は大津中学校が休校だったので中学生も手伝いに来てくれたりして、有り難かったです。

C 震災後1ヶ月間は大変なことばかりだったと思いますが、その中でも一番大変だったことは何でしたか。

大塚 当時は物資の置き場所がなく、そして、支援の物資がどのくらい来るのか、その物量がまるでピンとこないのです。困りました。10トン車ですごい量があるよと言われても、実際に来てみないと量も分から

ず、到着する時間とかも分からなかったので、計画を立てることもできず、とりあえず到着した分を受け取っていました。量はやはりすごかったです。例えば、テレビで「水が不足しています」と初期の頃に放送されると、足りてきた時期に、ものすごい量の水が支援物資として届きました。到着したものを置く場所もなく、避難所にどんどん出していました、「もう物資は十分だ」と受け入れてもらえないところもありました。避難所の要望を受けながらやっていたのですが、これだけの膨大な物資を受け、それを配布するっていうのを全く想定していなかったため、非常に大変でした。避難所によつては配布に差ができてしまっていたのではないかと思います。

C 配布しきれなくて物資が余ったということもあったのですか。

大塚 やはり水とかは余りました。送ってくださることはとても有り難いことですが、とにかく届いた量のものすごかったです。

C 水がどの程度届くなど、具体的な数字で連絡が来

るわけではなかったのですか。

大塚 状況によります。分かっている場合とそうでない場合があります。「10トン車できます」と言われて、ふたを開けてみたらそんなに積んできていなかったりする場合もありました。最初は、在庫がどのくらいあって、いくら出していくら受け入れたのかを記録していたのですが、到着する量の多さで追いつかなくなりました。それ以上にややこしかったのが、到着するものがバラバラだったことです。段ボールに色々な物を詰め合わせて送ってくださる方がいたり、一箱といても段ボールの大きさが様々だったり。バラバラなサイズや内容で到着する物資をきちんと把握していくのは困難でした。

C 他に困ったことはありませんか。

大塚 ブルーシートの不足です。これはものすごく要望があつて、どんな要望が来るのですが、当然町の災害復旧にも使われる部分が多かったので、ずっと不足していました。ブルーシートは国に要望していたのですが、それが届いたのが5月13日でした。まとめて

届き、10トン車10台分ぐらいありました。これも大変でしたね。

C どこに一時保管されたのですか。

大塚 町の運動公園の駐車場です。

C ところで、物資業務を、5月7日に大津中学校体育館から撤収された後はどうされたのですか。

大塚 大津中学校から撤収した後は廃校になった旧菊阿中学校の体育館と旧矢護川小学校（矢護川コミュニティセンター）の体育館に物資を分散して入れて、そこを拠点に物資を出していきました。

C 物資の仕事がしばらく続いたのですね。

大塚 避難所向けの物資の支援の他に、仮設住宅に入られる方に生活用品を配って提供しますといった企業もありました。撤収に向けて在庫を減らしていくため、幼稚園、保育園、福祉施設などに配布したりもしました。

C かなり長い期間、通常業務よりも物資の活動をメインでされていたのですね。

大塚 そうですね。私は国民健康保険や後期高齢者医療制度などを扱っている部署になりますが、今回の災害によって、保険料の減免とか一部負担金の免除といった業務が出てきました。もちろんそちらの仕事の方が大切ですが、方針だけを整理して後は各担当に頑張ってもらい、物資の方は福祉課の課長と一緒に必要な時に他の職員に手伝ってもらうというスタンスでやっていました。それと、各避難所の生活環境の改善ということで国から洗濯機や冷蔵庫などの電化製品がくるので、それらを取りつける段取りなどもしました。

C 復興に向けて大塚さんが一区切りついたなと思った時期や出来事を教えていただけませんか。

大塚 物資関係は時間が経つにつれ、徐々に落ち着いてきました、時期としては7月、8月です。7月に旧菊阿中学校の体育館、8月の初頭に矢護川コミュニティセンターの体育館を整理しました。物資担当としてはそこが一区切りついたと感じています。通常業務

としては保険料の減免や一部負担金の免除といった国の方針が出たのが7月末でしたので、そこから先は事務を進めていくだけです。仕事を職員に割り振り、足りない部分は臨時職員を任用したりして進めました。もちろん、これも実際やってみないと分からない部分もありましたが、何とかなるだろうと思ったのがやっぱり7月末、8月の頭くらいですかね。

C その時が日常に戻りつつある時だったわけですね。2つの体育館から完全に撤退してしまった日付はいつでしたか。

大塚 旧菊阿中学校の体育館が7月15日、矢護川コミュニティセンターの体育館が8月4日ですね。

C 前震の日にお子さんが生まれ、それから本震が起きて、それ以後ずっと震災対応となつて、お子さんとはまともに対面できないままであつたろうと思います。その行動の原動力は何だったのでしょうか。

大塚 私は阪神・淡路大震災の時に兵庫県にいました。自分のところは被害があつたわけではなかったの

ですけど、その時に、自分の家を建てる時は、家族を安心して残しておける頑丈な家を建てなければなら思っていました。同時に食料も確保しておくようにしていました。そうした準備があつたので、家族のことをあまり心配することなく、安心して役場で仕事をできたのかなと思います。

C 防災への日頃の備えが、いざという時に安心して仕事ができる根本となるのですね。最後になります。が、これからの大津町やご自身に望むことがあれば教えてください。

大塚 大きな地震でしたけれど、人的な被害が大津町は他の町に比べ、少なかったのが幸いでした。ただ、地震の後、多くの住民の皆さんの生活環境が変わつたと思います。私の課の仕事の一つに、住民の健康づくりがあります。今はまだ大変ですが、落ち着いたら、住民の皆さんも、ぜひ自身の体を見直していただきたいと思っています。やっぱり健康が大事です。仕事として、引き続き住民の方々の健康づくりのお手伝いできればと思っています。

大津町役場 土木部都市計画課

取材日 平成28年11月19日

新開和則しんかいかずのり（48歳）

大津町役場の都市計画課で勤務する新開。震災直後は大津町の建物被害の状況把握にあたっていた。5月から本格的な家屋調査が始まると、その膨大な量进行处理していくため、住家被害認定調査本部を持ち場として職員の割り振り、調査の事前準備、報告書記入を担当した。激務を乗り越えてきた原動力は、り災証明書発行を可能にし、住民の復興を次のステップへ移行させたい、という思いであった。

C 4月14日21時26分の前震が起きた時の状況を教えてください。

新開 自宅でテレビを見ている時に揺れが起こり、テレビに震度が表示され、かなり大きな地震が起こったことを認識しました。防災計画で震度5以上の場合は役場へ行くようになっていきます。私は両親と3人で住んでいたのでもう家族みんな集まり安否確認をしました。

C その後、すぐ役場に向かったのですか。
新開 すぐに着替えて地震から5分後には自宅を出ました。

C 家族のことが心配ではなかったですか。
新開 けがとかがなかったのと、物は倒れましたが家には大きな破損もなく、停電もしていなかったのでもうずは行ってくるということで。役場も5分ぐらいのところにありますので、すぐに着きました。

C 庁舎内に入ったのですか。

新開 そうです。ただ、私の所属する課は建物の維持管理をする部署にもなっていましたので役場の耐震性が良くないことは把握していました。それでまず建物が無事に建っているか確認し、内部を見ると大丈夫そうでしたので災害対策本部となる総務課に行きました。

C 総務課に集合されてからの動きは。

新開 まず総務課に集まった時には、すでに14、5人は来ていたと思います。耐震性が良くないという話は総務課にもしていたのでまず災害対策本部を庁舎の西側にある別棟の電算室に移そうということになり、必要機材を運ぶことになりました。集まってすぐだったので22時前ぐらいだったかと思います。

C 新開さんも必要機材を電算室に運ぶ作業をされたわけですね。

新開 避難所の開設を総務課がやるので、それに向けてどこの建物が避難所になるかという話をし、開設する避難所の状況を電話で確認したり、近くの人に建物

が大丈夫か確認に行ってもらったという状況でした。

C 避難所となる施設のその時の被害状況はどうだったのでしょうか。

新開 前震の時にはそれほど大きな被害はなく、それぞれの避難所を開設しましたが、避難して来られる方はそれほど多くなかったです。私たちは確認作業を続けながら朝方までずっと役場にいますという状況でした。

C 夜が明けて、15日は朝から建物被害の確認を行われたのでしょうか。

新開 公共施設だけでなく町の中で壊れている建物を調査して、被害報告としてまとめていかないといけないので、それをどうしようかという打ち合わせを行ったり、行ける範囲ですが、私の課で手分けして見て回ったりしていたので、15日は退庁したのは21時過ぎぐらいでした。

C その日、被害状況を確認した時の心境はいかがでしたか。

新開 揺れは大きかったですけど、比較的被害が少な

かったので、元に戻していくにはそんなに時間がかかることはないのかなと思いました。1ヶ月とか2ヶ月とかあれば普通の状態に戻るだろうという印象でした。

C そして、その深夜16日の1時25分に本震が発生しましたが、その時の状況を教えていただけますか。

新聞 就寝中に目を覚まし、揺れ始めから大きいなと思ったところ、時間が長く横揺れも大きい、前震とは全然違う揺れでした。部屋中のものが倒れ、停電と断水で大変なことになったなとすぐに思いました。ただその時も家族にけがとかはなかったので、着替えてすぐ役場に行きました。

C 役場に着いた後は。

新聞 災害対策本部が電算室に移っていたのでまずはそこに集合しました。その後、災害対策本部自体も停電していたのでそこに非常用電源や照明を運んだり、電話も前回とは違いどんどんかかってきていたので、電話対応に多くの職員が忙殺される状況でした。

C 新聞さんも電話担当をされたと思いますが、どの

ような内容の電話がかかってくるのですか。

新聞 「うちが壊れている」「消防、警察になかなか繋がらない」といった被害状況の電話が殺到していました。また、「避難所はどこにありますか」とか、前震と本震で避難する人の数かなり違ったので避難所の問い合わせが多かったですね。

C その時、電話は何台体制だったのでしょうか。

新聞 最初は4台あり、その後6台とかに増やしていたと思います。それらがずっと鳴っている状況でした。

C 新聞さんは電話対応や電源調達作業など、本部機能の維持に努められていたわけですね。

新聞 そうした業務をやりながら、前震時に開設していた避難所から「人手が足りない」という至急の応援要請があり、集まった職員は避難所へ割り振られました。私は大津中学校に「すぐに行ってください」ということでそちらに行きました。

C 避難所対応ですか。

新聞 車で避難して来られる方が多かったのと、前回

と違って大津中学校はガラスが割れたり、物が落ちて体育館が使えない状態でした。車で来られている方は車中泊をお願いしてグラウンドに入れ、車でない方については校舎を開けてもらい対応していました。大津中学校だけでは足りなかったので隣の農協の駐車場も借りました。

C 最初の時点で大津中学校に職員は何名いたのですか。

新開 2名で対応していたのですが、車がどんどんやって来るので誘導するのに人手が足りず、応援をさらに2人増やすということで、私ともう1人が加わって4人体制で対応しました。

C 避難所対応は明け方まででしたか。

新開 大津中学校には丸2日いました。特に16日の本震があつてから、救援物資や食事などが「いつ来るんだ」と避難者に聞かれ、災害対策本部に問い合わせた。物資がいつ届くか確認しないといけませんでした。物資としてどのようなものが必要なのか、実際に何がどれくらい必要なのかというのは全然分からない状態で

した。そこで、避難所内に本部席を開設してそこに必要なものを置くという作業をしました。ただ、それだけでもかなりの時間と手間がかかりました。避難所には、16、17日の両日泊まり、18日に入れ替わりの人員と交代し、役場の災害対策本部に戻ったと思います。

C 18日に災害対策本部に戻られてその後は。

新開 災害対策本部に戻って今後うちの部署でどう対応していくかということ、避難所にも人手が足りなかったら応援に行かないといけないので、上司と相談して今後どのようにしていくかという打ち合わせをしました。

C 18日以降はどのような活動をされたのですか。

新開 避難所の人手が足りなかったので18日の夜は室小学校に行き、19日の朝に交代し、災害対策本部に帰って来るという状況でした。

C 避難所では寝ることはできたのでしょうか。

新開 避難している方々から「これありませんか」とか「どこに行ったら良いですか」と尋ねられるので、それに対応しながらでしたので、少しでも寝れる時に

仮眠を取っていました。

C あの状況で、どこも混乱していて、対応はその都度その都度という状況ではなかったかと思うのですが。

新聞 避難所を開設し、そこに組織立てて職員を割り当てていくことが防災計画には恐らくあったのでしょうが、なかなか最初は割り当てが上手くいってなくて。割り当てていても、福祉課・税務課とかは救援物資が予想以上に運ばれてきたりすると途端に人手が足りなくなり、また避難者数が予想以上に多いと救援物資を運ぶのにも人手が不足して、なかなか計画通りに上手くはいかなかったんじゃないかと思います。

C なるほど。

新聞 大津町の場合は、当初17箇所か18箇所くらいを指定避難所として開設する予定だったのですが、自主的に公園や駐車場に避難される方がおられ、一番多い時には80箇所以上が避難所ようになっていました。そういったところにも食料を運ぶということになると

人手がかなり不足してしまいました。その後、徐々に避難所が指定のところに絞り込まれていって、それで当初の計画に沿った震災対応が可能になっていったように思います。

C 新聞さんの課の震災時の本来の業務はどういったことになるのですか。

新聞 公共施設の被害確認が主です。公共施設の確認はそれぞれ担当の課があるので、学校なら学校教育課、生涯学習施設だったら生涯学習課とかで確認してもらいました。私の課は大津町でどれくらいの被害があるのかという調査をしなければなりません。それでまず実際に民間の建物にどれくらい被害が出ているのかを調査し、把握することになりました。

C 調査はどのように行っていたのですか。

新聞 当初は役場に連絡があつたところしか壊れていないということ、地震後1週間くらいは、全壊が4件、半壊が2件という状況でした。「大津町は被害が少ないな」と話していたのですが、実際はそうではな

くて、連絡のあったところ以外にも壊れているという話が住民の方から寄せられ、それで早急に調べることになりました。都市計画課から地元の消防団に壊れている建物や傾いている建物の数を調べてくれるよう依頼し、私たちも調査して、1週間ぐらいかけて大よその状況を把握できました。

C どの程度の被害でしたか。

新開 数値は、全壊住宅約30件、その他（倉庫など）約80件、半壊が住宅約145件、その他（倉庫など）約180件くらいということで、建物の被害が多く驚きました。

C 1週間くらい全壊・半壊の調査を行い、その後も震災対応を行っておられたと思うのですが、その中で判断に困るようなことというのはなかったですか。

新開 今でも継続しているのが建物の被害認定と言いまして内閣府の指針で全壊・大規模半壊・半壊・一部損壊に分類する業務です。それによって国からの支援が得られる制度になっているので、それをやらないと

住民の皆さんに支援がいかないのだという説明会が県庁でありました。判定した結果が、り災証明書というものです。県庁での説明で「町全体でやらないといけないので、非常に大変ですよ」という話がありました。が、その時はそんなに大変なのかくらいに考えていました。でも確かに調査を始めると説明された通りで、今も続いていて本当に大変です。



建物の被害認定調査

C 大変だというのはどのようなところでしょうか。

新聞 申請があつて役場職員も含めて調査に行き、そこで判定してから、り災証明書が発行されるシステムなのですが、最初に申請だけで4000件ぐらいあったのです。

C 4000件ですか。

新聞 だいたい1班3人で現地に行つて判定するのですが内閣府の指針に基づく判定で、誰もやったことがないわけです。県庁とかで講習を受けた人が戻つて他の職員に教えるのですが、それでも役場職員だけじゃ人数がまるで足りず他の市町村、県外の市町村に応援を求める形でやっていました。

C 1日に多い時でどれくらい回るのですか。

新聞 1班3人の13班編成、計39人の調査員を派遣し、1日に260から300件弱くらい調査していました。

C 少しでも多く回つて、早く判定結果を出してあげないといけませんよね。

新聞 その判定が出ないと被災された方々への支援が

できないので、迅速にというのが第一でした。早くやらないといけないのですが一方で人手は足りない、そして何よりも役場が壊れて使えないので、5月に浄化センターへ引っ越した後、準備を始めたのでスタートが遅れました。

C 浄化センターに引っ越されたのは何日でしたか。

新聞 5月2日から本格的な調査を始めていますので、4月30日とか5月1日で完全に引っ越しをしたと思います。

C 4月までに被害状況を取りまとめ、県庁での説明会があり、5月からようやく本格的に調査がスタートしたというわけです。

新聞 はい。住民の皆さんから「早くしてくれ」と問い合わせがありました。大阪町の場合は大阪府からサポートしてもらっていたので大阪府及びその周囲の市町村も応援に来てくれ、8月8日まで応援部隊に助けられました。その後は、国からは財務局とか、熊本県からも応援に来ていただき、約1400人ぐらいは延べ人数で応援に来ていただいたと思います。

C 現時点で、申請のあった4000件のうち何割ぐらい終えられているのですか。

新聞 外側から見て調査する応急的な1次調査は一旦終わっているのですが、それでも未だに申し込みが来ているような状態です。次は2次調査と言って建物内部を見る調査があるのですが、それが1230件です。1次調査だと30分くらいで終わるのですが、2次調査というのは内部を見て図面を書いて「この割合がこれだけ壊れてます」といった詳細な調査なのです。これは1時間から1時間半くらいかかる調査なので1日2件から3件くらいしか回れないのです。

C 2次調査というのも、1次調査をやられている間に同時にやられていたのですか。

新聞 1次調査の目処がだいたいついてきて2次調査は6月の頭ぐらいから始めました。

C 被害認定調査とは気が遠くなるような仕事だということが良く分かりました。ところで、応援に来られている方々と一緒に新聞さんも調査をされていたのですか。

新聞 私は調査に行く際の手配、調査の結果が戻ってきてから報告をまとめる役、そして入れ替わって調査される皆さんに調査の方法を説明するといった仕事をしていました。

C 被害認定調査を取り仕切るのが、震災以後の新聞さんの持ち場だったわけですね。

新聞 はい。それが震災当初に与えられた私の部署の最も大きな役割だったと思います。

C 長期間かけて調査をされているわけですが、活動の原動力は何だったのでしょうか。

新聞 「やらなくては」という義務感が根本ですが、それ以外に、この被害認定調査にその後の支援が全て繋がる形になっているので、一刻も早く調査結果を出し、住民の皆さんを次のステップに移してあげたいという思いが強かったです。

C なるほど。ところで、調査に行く手配やまとめることに関しての過程をもう少し詳しくお聞きたいのですが。

新開 大津町の総務課が、市町村会や県知事会などに「応援に来てくれませんか」と依頼をします。それに対する返答に応じて、総務課から何人応援に来る、という情報に届くので、その情報をもとにどうという調査班編成を組むかということを考えます。

C 調査に行かれた職員さんからはこういった形で調査結果が戻ってくるのですか。

新開 被害認定調査票という様式があつて、調査内容をそれに記載してきてもらい、私の方で内容を確認後、被害認定調査の結果を、システムへ入力する作業を行っていました。

C そういう作業が8月くらいまでずっと続くわけですね。調査は順調でしたか。

新開 ご存知のように6月には豪雨水害がありました。豪雨では当然ながら調査できませんでしたが、通常の雨でも思うようには調査が進みません。さらに、夏になると暑く、調査している職員で具合が悪くなる方もおられたりして、順調というわけにはいきません

でした。余談ですが、応援で色々な都道府県から来ていただいた職員さんには方言が通じないとかもありました。

C ご苦労、お察しします。そうやって大津町の復興に向けた調査を続けて来られ、どこかで一区切りついたなと思う時期や出来事はありましたか。

新開 実際まだやっているのですが、あまり一区切りついたという実感はありません。でも他の市町村からの派遣が終わる8月頃には調査の数も減り、通常通りとまではいきませんが、普通に家に帰れるような状況になり、通常業務もできるようになり、その頃に少し一段落したかなと思います。

C それまではずっと泊まり込みだったのですか。

新開 泊まり込みではありませんでしたが、膨大な調査結果が毎日届き、そして翌日の調査準備もしておかないといけないので、毎日終わるのが午前0時を越えることが続いていました。日付が変わってようやく帰れるという状況でした。

C 事前の調査準備があるからこそ翌日の調査もきちんとできるわけで、新開さんの役割は大きかったのではと思います。

新開 やらないと次の日に調査が上手く回っていきません。なるべく効率良く調査をしていただけるように前日の準備というのはしっかりしていました。

C 上手く回らなかったというのは具体的にはどういうことでしょうか。

新開 この日の調査では、こういった道具が必要とかそういうことは事前に分かっているのですが、調査員が他のところに入れたり、忘れたり、持ち帰っている人もいてそこら辺のチェックをしつかりとやっていました。それと、調査のやり方については他がどうやっているか気になり、他の市町村からの情報を得ながら、効率の良いやり方ができないだろうかといつも考えていました。

C 他の市町村というと、益城町などですか。

新開 西原村、南阿蘇村、益城町、菊陽町、合志市などに電話で「どのようにやっていますか」と聞いたり

しました。

C 今回の地震を経験し、新開さんの考え方や行動に何か変化があったのではないかと思うのですが。

新開 私の部署が建物の管理をしているので耐震性のことは考えていたわけですが、大丈夫だと思っていたところが壊れていたり、逆に危険だと思っていたところがそうでもないなど、想定外のところが多く、考えを改めさせられました。それと消防団にも入っているので、防災訓練は年に何回かやっていたのですが、訓練が不足している部分も多かったなど震災を経験してそう思いました。

C 想定を超える部分が多かったということですね。

新開 先ほど話した役割分担とかでも訓練の時は想定はしていますが、実際に災害が起きたら、そこに役割を分担できるだけの人数がいらないという場合もあるのです。

C そういうことを実感したからこそ、今後は見直したりすることも大事になってくるのかなと思います。

新開 今後はこうした経験を生かしていかないといけ

ないだろうと思います。

C 他の方にも何か行動や考え方に変化が生じたのではないかと思うのですが、そういうことを感じることはありませんか。

新開 住民の方は地震があつて自分の建物や住宅を改めて見直されているようで、普段は気につけないようなヒビや傷に対して「この傷大丈夫なのかな」とか「修理はこれで良いのか」という問い合わせがあります。自分の家が大丈夫なのかということを考え直されているようです。

C 最後になりますが、これから新開さん自身が望むことや、やっていきたいことはありますか。

新開 今までやってきた調査については早く収束させて、通常業務に戻ることが目標です。これからの復興計画については私の係や課が関係していく部分が大きいと思うので、そこでするだけ早くシフトできるようになれたらと考えているところです。一番大きな仕

事は、庁舎が壊れているのでこれから解体して建て替えて少しでも早くできるようにしなければならぬということですね。今は仮設のプレハブなど各所に分散してやっているの、早く1箇所に集まれば通常の業務ができるようにしたいと考えています。

C 復興に向けてはまた忙しくなりますね。
新開 今まで、防災計画としては具体化できていない部分もありましたが、この震災を機に新しい防災計画ができてきますので、今回得た経験を生かし、盛り込み、対応していきたいと考えています。

大津町役場 教育部学校教育課

取材日 平成28年11月8日

桐原航平きりはらこうへい（19歳）

役場職員となつてすぐ、熊本地震に見舞われた桐原。

そこから、右も左も分からないまま震災対応に追われる日々が続いた。

激務の中で、対応や業務について学んでいき、「新人職員」から「職員」へと成長していった。

C 前震が4月14日の21時26分に起こったわけですが、その時の状況や様子を教えてくださいませんか。

桐原 家族で夕食をとっていました。ちょうど茶碗を持った瞬間にバーツと揺れが来て机の下に隠れましたね。それから30分後ぐらいに同期の職員と連絡を取り合つて役場に行きました。

C 22時くらいに役場に到着したということですね。

桐原 そうです。22時くらいに着きました。

C 同期の方々と連絡は取り合っていたのですね。

桐原 なんとかですね。生存確認を行いました。

C 連絡手段はLINEですか。

桐原 LINEでした。役場に行くとは各避難所に誰が行くかなどが話し合われていたもので、私は地元で、近所の人の様子も確認できる小学校を希望し、護国小学校に行きました。そして、その夜はそのまま避難所で過ごしました。

C 22時に役場に到着した時の様子はもうでしたか。

桐原 最初は旧庁舎前の駐車場に集まりました。その隣に電算室という建物があるので、そこに災害対策本部ができました。

C 14日の時点で電算室に災害対策本部ができたというわけですね。

桐原 そうです。その後、とにかく駐車場にいる人たちは電算室に集められたのですが、到着して30分後ぐらいだったと思います。22時半か23時ぐらいでした。その後に避難所に向かったので、護川小学校に着いたのは24時ぐらいだったと思います。

C 護川小学校では避難所運営をされたわけですね。

桐原 はい、そうです。

C 何名で行かれたのですか。

桐原 私と先輩の2人です。しかも初対面の先輩でしたので車で行ったのですが、初めましての挨拶から始まったのを覚えています。

C 避難所へ行かれてからの様子は。

桐原 行った時に毛布とかが全然ありませんでした。

そこでイオンからの救援物資を先輩が取りに行かれて、私は体育館に残り、場所の確保や誘導を行いました。

C その時の心境はどのようなものでしたか。

桐原 まだその時も余震でかなり揺れていました。体育館だったので結構音がすごかったです。扉とかもバタバタいていました。そのたびに「ハッ」「怖い」という声が上がりました。小さい子が多かったので、不安を感じる声が多かったように思います。

C 朝までそこにおられたわけですね。

桐原 そうです。8時くらいには避難されていた方も帰られたので、片付けをしました。その後9時くらいまで仮眠をとりました。

C 仮眠にもならないわずかな時間だけですね。その後はそのまま体育館ですか。

桐原 寝たというより、頭を下げたくらいでした。それから朝方に電話連絡があり、それぞれの課の指示に従うようにということでしたので役場に戻りました。私の所属は学校教育課の施設係ですので、学校施設が

今どういう状況か確認するよう指示を受け、車で学校を回りました。

C お一人ですか。

桐原 学校教育課施設係の上司と2人です。

C 全ての学校を見て回られたのですか。

桐原 そうです。ヒビがどこにあるとかの写真を撮っていききました。1日では無理でしたので、何日かに分けてですが。

C 大津町は全部で何校くらいあるのですか。

桐原 小学校が7校、中学校が2校の計9校です。これ全部を回るだけでも結構大変です。それぞれの場所が離れていますので。

C 確認作業を遅くまでやっていたのですか。1校当たりどのくらい時間がかかるものなのでしょうか。

桐原 最初は、建物全部の外側を回ってヒビの有無を確認して、建物を一周したら次の学校という感じで調査をしていました。それを何時までやっていったのか、はつきり覚えていません。どうやっていつ自宅に帰ったのかも記憶がなく、次に記憶があるのは本震です。

本震の時には家に帰って寝ていました。

C 16日深夜1時過ぎ、本震の時の状況や様子を詳しく教えてください。

桐原 少し揺れたので目が覚め、その後大きく揺れ出したので、机の下に隠れました。結構長かったですから。その後、「これは危ない」と家族と話し、すぐに避難所に行きました。前震の時は、地震後も自宅にいたのですが、本震の時はさすがに違いました。

C その時の心境を詳しくお聞かせください。

桐原 意外と冷静だったと思います。とりあえず何を持っていくかを机の下で考えていました。避難所になったものとか。揺れが収まってから考えていた荷物をかき集めて袋に急ぎ詰め込みました。

C ご家族に避難所に行こうと言ったのもご自身ですか。

桐原 そうです。前震の時、家族は自宅にいたのですが、本震の時は危ないということで、荷物を抱え全員玄関にいました。多分14日の前震があったからそれだけ考えることができたのだと思います。最初が本震

だったら、「死ぬ」と思ったでしょうね。

C 避難は護川小学校に行かれたのですか。

桐原 そうです。すごい状況でした。避難する人が体育館に入りきれないくらいでした。

C 避難所では、14日と同じように毛布を配ったりしていたのですか。

桐原 そうです。人数の確認とかもしていました。16日いっぱいはそのにいたのではないかと思います。

C 17以降は学校の見回りをされたのではないのでしょうか。

桐原 そうです、やりました。「15日の調査は無駄になつてしまいましたね」という話をしたことは覚えています。

C 16日と17日辺りでおそらく学校を見て回ったということですね。震災後の活動で他に覚えていることは何かありますか。

桐原 印象に残っているのは、学校給食センターに行つて役場職員でおにぎりを作ったことです。私は配

る係になつていたのですが、自衛隊の人が炊いたお米を役場の人がスムーズにおにぎりにしていったので、この短期間でこんな風になるんだと思つてまじまじと見ていたのは印象深いですね。すごくスムーズな流れで、ラップまでしたりしていたので。

C おにぎりはどこで配られていたのですか。

桐原 学校給食センターで作つたおにぎりは車で避難所に運ぶのですが、2台の車で2往復くらいはしたと思います。

C 震災直後からしばらくは多忙だったと思います。夜、ご自宅に戻れましたか。

桐原 何日かは災害対策本部に待機でした。その頃は帰れていなかったですね。着替えただけ取りに戻ることにはあつたと思うのですけれども。家でご飯を食べたり、寝たりというのは全然してないです。

C ご家族はいつ頃避難所から戻つて来られたのですか。

桐原 覚えてはないのですが、早かつたと思います。自宅は被害があまりなかったので、家の方が良いだら

うと。体育館の上の方からギシギシという音が聞こえて怖くなったといった話をしていたので、それで早めに家に戻ったのだと思います。

C お仕事の話に戻りますが、4月はどんなことをされていたのですか。

桐原 4月いっぱいには本来の仕事はできなくて、避難所に行ったり、物資運びをやっていました。

C 学校教育課ということは、学校の被害を受けていくら修理費を出すのか計算することが主な仕事になっていくわけですか。

桐原 そうです。それは上司がしています。私はまだ全然分かっておらず、お手伝いもできず申し訳ないと思っています。

C 本来ならば、4月のうちに基礎的なことを学んで通常業務に入っていくことだったのではないですか。そこで発生した地震だったので、何も分からない状態だったでしょう。

桐原 そうでした。最初の2週間で基礎の基礎を教え

てもらっているとこでした。前任の方から時間外で教えてもらったりしていて、ちょうど震災の時がその辺りの研修だったのですが。

C 通常業務も分からないでしょうが、震災対応となるとそれ以上に、周囲もあまり分かってない状況があるでしょう。その中でどのように対応されていたのですか。分からなくても避難所運営とかはやらないといけないわけですね。

桐原 記憶がなくなっているのですが、その時は、今できることを自分なりに考えて行動していたのだろうと思います。震災直後は避難者の方は緊張もあったので、指示にはきちんと従っていただけました。が、その後が避難所は大変でした。

C その後というのは。

桐原 5月、6月。住民の皆さんもイライラされて、喧嘩が起ることもありました。ある避難所で警察の方に対応してもらうことになるほどのことがありました。その時が一番きつかったです。

C 大きな喧嘩だったのですね。その後は。

桐原 5月、6月頃から、町民交流施設（オークスプラザ）で仕事が少しできるようになりました。7月19日の日曜日に、仮庁舎に引っ越しをしました。

C ストレートな質問になりますが、オークスプラザでの業務は大変でしたか。

桐原 入庁したばかりで、どの人が役場の人も分からないし、名前も知らない。大津町には住んでいます、違う地区のことになると全く知らない地名ばかりで、「どこどここの避難所に行つて」と言われてもよく分かりませんでした。大変でしたが、多分私よりも周りの人はもっと大変だったと思います。

C 震災対応の中で、4月は面識のない職員さんと一緒に仕事をされる機会が多かったわけですね。

桐原 多かったです。初めて会う方と車の隣同士に乗って「こんにちは」、「初めまして」とまず自己紹介をして仕事をしていました。

C 通常、入庁後の研修期間は業務のことを学んでいくのがメインになると思います。震災という特殊な事態が起きたことで、コミュニケーションの機会がもの

すごく増えたのではないかと思います。

桐原 コミュニケーションばかりでした。地震が起きなかつたら話をする機会もない方も多かったです。ただし、名前は全然覚えられなかつたですけれど。初めての方々ばかりでしたが、どの方もお仕事をしていらっしゃるもので、ちゃんと後についていかねばという気持ちでした。

C 右も左も分からない中で、震災対応に当たってこられたわけですが、復興に向けて桐原さんが一区切りついたと思う時期や出来事というのはありましたか。

桐原 一番大きかったのは、7月19日に課を町民交流施設（オークスプラザ）から仮庁舎に移動したことです。それまで長机だったのがオフィスデスクになった時、「久しぶりだ」と思いました。

C 業務自体は変わらないくらい忙しかったわけですよ。

桐原 業務は特に変わりはありませんでした。でも、環境が変わるだけで天国だと思いました。

C 今までは当たり前だった物が奪われ、それが元に戻ったからこそ喜びだったということですね。ところで、熊本で今回のような地震が起これると思っていましたか。

桐原 ないと思っていました。大丈夫だと思っただけで、防災の準備も怠っていました。



仮庁舎へ移ったばかりの建物内部

C 現在は防災の対策をされていますか。

桐原 防災セットを作りました。着替えと水と懐中電灯など色々自宅に置いて、それを持ったらすぐに出て行けるというものです。

C それは一つの変化ですね。

桐原 そうですね。他には、当たり前前に仕事ができる環境というのは非常に有り難いと思いました。後悔することとして、もう少し仕事内容を勉強する時間があったなら住民の皆さんへの対応とかも変わっていたかもしれないと思います。り災証明書の発行とかもしていましたが、失礼なことを言っただけではないかと心配しています。7月頃にもう1回研修があつてそれで気づきました。反省しました。

C り災証明書の対応も4月にされていたのですか。

桐原 よく分からないまま、周囲に聞きながら、発行の業務をしていました。

C 窓口は何名かで対応されたのですか。

桐原 震災の直後で、対応業務がものすごく、それで本当に最小限の人数しか割けていなかったよう

す。ただり災証明書の発行にも、ものすごい人が並んでおられました。大丈夫だろうかと心配でした。

C 4月、それ以外の仕事もされましたか。

桐原 1回だけ震災ゴミの仮置き場の担当をしました。矢護川という場所です。ゴミの量はすごかったですね。びつくりしました。私はソファ―置き場の担当でした。

C きちんと仕分けていけるのですね。

桐原 はい、そうです。

C 環境保全課の伊東さんからも、ゴミの分別に関する話を聞きました。

桐原 相当大変だったと思います。私はたった1日でしたが、それでも非常に大変でした。担当課の方たちはそれを毎日されていたので、本当にきつかっただろうと思います。

C 色々な仕事を震災以後にやることになったわけですが、自分の持ち場はここだ、というものはありましたか。

桐原 災害関係の仕事の中ではり災証明書関係の業務をかなりやっていたように思います。

C 申請や発行の対応ですか。

桐原 そうです。「ここに書いてください」と記入方法を説明したり、写真を貼ったりということをやっていました。被害が大きいところの住民の方には泣かれている方もおられました。

C 学校施設の被害も大きかったのではないですか。

桐原 はい、体育館の屋根がずれていたりとか落ちていたりとか、大きな被害を受けました。

C 学校側からは、早く修理してほしいと依頼されるわけですよ。

桐原 そうです。住民の方からも先生方からもあります。翌年3月の卒業式は自分たちの学校で行いたい、ということからです。

C すぐ修理に結びつくわけではないですよ。

桐原 はい。国からの補助とかもあり、審査にも時間がかかってなかなか修理に踏み出せなかったりしていたみたいです。

C その時の対応も「もう少し待ってください」という対応しかできませんよね。ところで、どうして役場職員になろうと思ったのですか。

桐原 中学生の頃に役場の方から取材を受ける機会がありました。それまで役場の人は、机に座ってパソコンに向かっているイメージだったのですけれども、その方は広報の部署の女性で、その方の仕事を見たのがきっかけでした。また、私は高校の時に職場体験で大津町の保育園に行ったのですけれども、副園長さんが役場の方だということをその時に知って、「役場の仕事って色々な幅があつて面白いなあ」と思つて興味を持ったのが始まりでした。

C それで採用試験に合格して希望する役場職員になれたわけですが、すぐに地震が起こつて…。

桐原 そうですね。元の庁舎には2週間しかいることができなかったなあと。

C 本来だったらそこで業務をやるはずだったわけですからね。これから職員として本来の仕事を本格的に

担当されていくわけですが、これからの桐原さんご自身や大津町に望むこと、やっていきたいことはありますか。

桐原 自分自身としては、やはり防災証明書発行の時にあまり上手く対応できなかったことがあったので、今後はきちんと住民の方の話を聞いて、それをしっかりと理解し、正確に説明できるようにしていきたいと思います。ただ説明するだけでなく理解してもらえようような説明の仕方というのを徹底していきたいと思っています。仕事の事務的な部分はさらに学ばないといけないことがたくさんあります。覚えることが山ほどです。自宅に戻って、「はあ、できなかったな」と思うこともありましたが、お叱りを受けることも結構ありましたので。

C 入庁初年度、しかも2週目にこうした大きな地震に遭遇した経験というのは大きかったでしょうね。

桐原 大きかったと思います。本当に。

大津町役場 教育部学校教育課

取材日 平成28年11月21日

宇都宮研輔（27歳） うつこのみやけんすけ

学校教育課に所属し、震災時は避難所という現場を走り回っていた宇都宮。

震災対応を行いながら、学校教育課職員として、学校の被害状況把握と学校再

開に向けて業務に全力を尽くした。

現場での活動があつたからこそ、助け合いの場面を多く目にし、「ヒーローとなり得る住民が増えてほしい」という気持ちが大きくなった。

C 前震時の状況や様子を教えてくださいますか。

宇都宮 前震時は、家にいて夕食をとった後でした。大きい揺れだったなとは感じましたが、家の中はそれほど崩れてはいませんでした。役場の規定で震度5以上だと自主的に登庁しなくてはいけないので、ある程度様子を見て、もう揺れないかなと思ったので登庁しました。登庁した後は、もう災害対策本部ができていて、そこからの指示を仰ぎました。

C 職場についたのは何時頃ですか。

宇都宮 22時前には着いていたと思います。

C 揺れた時は、ご家族と一緒におられたのですか。

宇都宮 はい。妻と妻の両親이었습니다。

C 登庁される時、奥さんは心配されませんでしたか。

宇都宮 そうですね。やはり心配はしていましたね。

C ひとまず家は問題なかったので安心して役場に行

かれたということでしょうか。

宇都宮 妻の両親も一緒に、自分が出て行くだけだったので、大丈夫かなと思って。

C その時の心境をお聞かせください。

宇都宮 前震の時はあまり危機感がなかったというか「揺れたな」くらいでした。家も被害はなかったし、役場自体も古いので多少崩れたりとかはあったのですが、人が入れないまでの状態ではなかったので正直危機感は全然なく、「復旧作業があるだろうな」くらいにしか思っていなかったです。

C 役場に到着後は何をされたのですか。

宇都宮 災害対策本部の指示で、私は避難所の担当になりました。矢護川コミュニティセンターという避難所に私を合わせて3人の職員が指示を受けて、公用車で向かいました。23時には着いたと思います。避難所では運営というほどではなく、受け付けみたいな形で自主的に避難して来られる方たちの受け入れをしました。

C 何名くらいの方が来られましたか。

宇都宮 10人か20人くらいだったと思います。前震の時はそこまで多くはなかったです。この辺りはコミュニティがしっかりしている地域で、炊き出しなども自主的にされる地区だったので、行政が手を出すことはあまりなかったです。

C 朝まで矢護川コミュニティセンターにいらっしかったですか。

宇都宮 そうです。まだ食料の支給などはなかったのですが、避難された方の受け付けをする中で、誰が来て誰が帰ったとかひたすらその把握をしていました。あと災害対策本部と連絡のやり取りですね。

C 災害対策本部とは、どのようなことを連絡し合っていたのですか。

宇都宮 ここに何人の方がいますとか、けが人がいないか、必要な物はないか、緊急性がないかなどの確認でした。一応衛星電話があるにはあるのですが、あまり台数も多くないし性能も正直そこまで良くないので、その時は携帯電話などを使いました。

C その後は役場に戻られたのですか。

宇都宮 役場に戻ってきて、朝の6時から7時くらいに外が明るくなってきたのでパトロールに出かけました。私は教育委員会に勤めているので、まず学校の建物がどのくらいの被害を受けているかを確認しました。学校の校長先生や教頭先生と連絡を取りながら見に行きました。

C 何箇所ぐらい見て回られたのですか。

宇都宮 夕方までかけてほとんどの学校を見ました。町内は小学校が7つ、中学校が2つあります。学校施設関係の修繕をする時には、国の補助金がもらえるかどうか町の財政にも影響してきます。補助金をもらうためにはすぐ申請をしないといけないので、早めに写真を撮って、状況を把握しました。一つでも多く記録を残そうと思って。

C それが終わって役場に戻られたのでしょうか。

宇都宮 その後は役場に戻って、記憶があやふやですが避難所運営を他の職員と交代したり、食料とかも配布したように思います。この日は家に帰りついたのが23時ぐらいでした。

C 自宅に戻って、それから2時間ぐらいで本震が起きたことになりましたね。前の日からほぼ寝ておられない状況だったと思います。その時の状況や様子をお聞かせください。

宇都宮 24時には寝ました。そして本震でした。とりあえず外に出てみましたが、ずっと揺れていて家に入れる状況でもなかったもので、車で役場に行きました。10分くらいで役場に着く距離でしたので。

C 本震時の心境はどういったものでしたか。

宇都宮 何て言えば良いのでしょうか。何も考えられなかったというか、考えている暇がなかったという感じでした。避難所などに行って、少しでも座れる時間があると、ラジオなどから流れる被災者へ向けたメッセージなどが聞こえてきて「自分も被災者なんだな」と思いました。「熊本は被災地なんだ」と、何故かそういう気持ちになっていたことを覚えています。

C 午前1時40分ぐらいに役場に到着されて、それからどのような動きでしたか。

宇都宮 記憶がないくらいバタバタしていました。電

気がつかないので顔も全く見えず、誰に指示を仰いで良いかも分からない状態だし、指示を出す側も指示の出し方がないという状況でした。職員と「どうする」と話し合いました。その後、役場から最も近い避難所で一番人が集まる場所として大津中央公園があります。そこは防災拠点の公園として作られていて、防災倉庫もあるので、そこに午前2時頃に行きました。行った時には避難者が100人近くいたと思います。ガソリンで発電機を動かし電源を確保して電気をつけたり、水など色々防災倉庫に入っていたものを配ったりしていました。その後、3時頃には役場に戻ったように記憶しています。

C どちらかというと指示というよりはご自身の判断で動かれたのでしょうか。

宇都宮 そうですね。消防団にも入っているの、ある程度消防としての動きというのが分かっていたところもあるので。

C 揺れた後、どういった震災対応をされていたのか

教えてください。

宇都宮 本震があつて2、3日くらいは避難所にいました。朝は自衛隊の方に手伝ってもらって食料と一緒に各避難所に運んだり、支援物資がたくさん届くので昼間はそれをひたすら体育館に運んだりしていました。それで、あつという間に1日が終わってしまう感じでした。



自衛隊による物資配給

C 通常業務の開始はいつぐらいでしょうか。

宇都宮 通常業務が始まったのは1週間後くらいだったと思います。町民交流施設（オークスプラザ）で住民窓口だけでもということで、住民課、税務課、福祉課といった課と一緒に業務を始めました。4月23日以降、通常業務を行いつつ震災対応となりました。確かそのぐらいに、り災証明書の受け付けも始まりました。役割が色々と割り当てられていたので、通常業務どころではなかったですけど。

C 学校教育課というと、学校再開に向けた仕事が緊急の課題ですね。

宇都宮 まずは、オークスプラザに場所が確保できているから溜まっている仕事の振り分けでした。急ぎの仕事、後回ししても大丈夫なものを仕分け、とにかく急ぎのものを片付けていく感じでした。私たちの仕事はパソコンがないと何もできないのですが、パソコンも数人に1台でした。オークスプラザは電力の関係で全員がパソコンを使うと電源が落ちてしまう環境だったので、何人かで交代しながらパソコンを使う状況でし

た。電話も各課に1台しかなかったので、全然仕事が進まなかったです。それと大事なことが学校の対応です。生徒や先生の安否確認をしていました。いつから学校を再開するかなどを判断していくために、教頭先生方と電話してまず学校の状況を把握してもらいました。それらの情報を集めて、学校再開に向けて業務を行っていました。

C 学校自体の被害は大きかったですか。

宇都宮 先ほど話したように大津町は小中学校が9校あって、その中で2校が避難所として体育館が使えて、それ以外のところは地震で壊れていました。学校の体育館が基本的に避難所になりますが、体育館が使えない状態だったので、校長先生や教頭先生にとりあえず校舎の中を避難所ということで使わせてもらえなしか相談をしました。ただ、校舎内には子どもたちの持ち物があるので、学校としても教育委員会としても許可はしにくいのです。しかしそんなことを言っている状況でもなかったので先生たちに協力をしてもらって校舎を開けてもらいました。ただ避難者には廊下に

寝泊まりをしてもらいました。学校自体もガラスが割れているところがあったので、こまでしか入れないとかその辺の確認は先生たちに協力してもらいました。

C 先生と連携・協力しながら避難所として確立していったわけですね。震災対応の際、他に判断に迷うようなことはありませんか。

宇都宮 学校をいつから再開するかという問題が悩み、大変だったところです。学校再開については教育委員会だけで決めるのではなく、校長先生に来ていただき、各学校の状況を確認しながら話し合いました。足並みを揃えないといけませんので「この学校は被害が少なかったから先に再開する」ということはできず、校長先生たちの意見を集約して、再開の日を決めていきました。

C それが決まると、避難所の閉鎖に繋がっていくわけですね。

宇都宮 そうです。避難している方々にはそうした日

程をお知らせすることになります。

C 他にはどんな仕事がありましたか。

宇都宮 防災無線で各家庭に向けて呼びかけを行いました。前震の時は、「週明けの月曜日に登校してください」という内容の放送を、そして、16日の本震後は「1週間程度休校にします」という内容の放送を流しました。その後も余震があったので「さらに1週間延ばすことになりました」と。防災無線だけでなく、教育委員会からの情報は町のホームページや、町が配信するメールサービスの「からいもくんメール」でも伝えていました。これは、広報紙などで周知して登録を促しています。このメールでは防災情報だけでなく詐欺情報や不審者情報などもお伝えしています。町のホームページを閲覧できない方もおられますし、防災無線も完全に放送が届くわけではないので、防災無線で流した内容をメールでも流すようにしています。「からいもくんメール」は地震前は900人程度だった登録者数が、現在は3000人ほどが登録されています。

るようです。

C 大幅な増加ですね。自宅に戻るまでの食事はどうされていたのですか。

宇都宮 震災対応していた時はずっと菓子パンでした。惣菜パンよりも、菓子パンの方が日持ちするので。二度と食べたくないというくらい菓子パンの日々でしたね。お腹にはたまるけれど、気持ちが悪くなることもありました。その点、非常食のアルファ米は良かったですね。

C ご自宅は大丈夫でしたか。

宇都宮 実は地震後の5月に入籍をしたのですが、地震前の4月に新しいアパートを契約し、新品の電化製品や家財道具を搬入していたのです。その様子を確認に行けたのは地震から2週間後のことでした。ほとんど倒れていましたが、幸い壊れたものはそこまで多くなかったので良かったです。

C 片付けはされたのですか。

宇都宮 いえ、そのままです。自宅の片付けどころで

はなかったのです。私は幸いけがをしましたが、役場職員の中には、けがをした人もいたようです。

C すごい状況ですね。

宇都宮 自宅が全壊した職員もいましたからね。

C それでも役場にきて仕事をしなくてはならないのですね。

宇都宮 そうですね。あの時はもうとりあえず仕事という感じでした。

C そういった活動の原動力になったものは何でしょうか。

宇都宮 何ですかね。それすら考える余裕がなかったですね。目の前の仕事をひたすらやっていたという感じです。格好良く「住民の方々のために」といった言葉を使いたいですが、本当にただただ、今自分ができることをやっていたというのが実際のところでした。人間、追い込まれるとこうなるのだなと思います。

C ひたすら、ですか。大変な状況だったのだろうということが分かります。

宇都宮 ただひたすらでした。とにかく職場に行かなければという気持ちだけで、あの時はほとんどの職員が30連勤くらいしていたと思います。ゴールデンウィークもほとんどの職員が出勤していました。そして、先ほども話しましたが、家に帰って、ひどい状況を目にすると、もう言葉が出ないというか、落胆する気持ちにもなったように思います。ただ私よりも新人職員が大変だったと思います。たぶんスーツも2週間くらいしか着ていないような時期に震災に遭って、一番大変だったと思います。

C 大変だったでしょうね。

宇都宮 新人職員も含め、私たちはずっと現場を動き回っていましたので現場の様子がよく分かりました。一方で、災害対策本部とは連携不足の問題がたくさんありました。現場情報を災害対策本部に報告しても、災害対策本部自体がパンクしていたからでしょう。なかなか伝わらなくて、上手く連携が取れていなかったと思います。

C そのあたりが正常になってきたと感じられたの

は、いつ頃のことですか。

宇都宮 私が感じたのは5月に学校再開した頃かなと思います。

C 震災から復興に向けて奮闘してこられたわけですが、そうした活動に一つの区切りがついたと思う時期はやはり学校再開の時期ですか。

宇都宮 はい、5月9日に学校が再開した時です。この時は、「やつと再開できた」とホッとした気持ちでした。ただ、泊まりの日もあったので災害対策本部で朝を迎えることもありました。

C 熊本でこういった強い地震が起ることを想像していましたか。

宇都宮 想像もしていなかったですね。少し落ち着いてから、冒頭で話しましたように「自分は被災者なんだ」と思えたくらいなので。それぐらい絶対ないと思っていました。

C 熊本地震を通して、宇都宮さん自身の考え方や行動に変化があれば教えていただけますか。

宇都宮 準備です。被災した時の準備というか防災グッズは買いました。車に常に寝袋やシートなども準備しています。あとはタオルや着替えを乗せておくようにしました。1日1泊できるくらいの物や道具は乗せておこうかなと。あとは車から充電できる携帯の充電器とバッテリーですね。バッテリーがなくなっても

ガソリンさえあれば車から充電できるので。震災で一番すごいなと思ったのがLINEでした。電話とメールは、震災直後は混線して繋がらなかったのですが、LINEは繋がっていました。LINEは電話もできます。助かりました。震災時に必要なものと今回身に染みて分かったので、連絡手段の意味で準備しておかないといけないと思いました。

C 震災後、住民の方や同僚に変化したなと感じるところはありますか。

宇都宮 「毛布はまだなの」「水は来ないのか」と言われる方も一部にはおられましたが、自分から「手伝いますよ」と言ってくくださる方や、毛布を運んでいる時

に「バケツリレーしましょうか」と言ってくくださる方がおられて、そういったことが嬉しくて、活動していく原動力になっていたように思います。

C 最後の質問なのですが、これからの宇都宮さん自身や大津町に望むこと、やっていきたいことがあれば教えてください。

宇都宮 自分から進んで行動してくれるヒーローとなり得る住民の方が増えてほしいということです。そういう方が多いと復興も早くなるでしょうから。私自身がやっていきたいことは、考える前に動くということです。震災時、実際に現場に行ってみないと分からないことだらけだったので。地震だけではなく、仕事に関しても、電話だけでは分からないことばかりだと思います。会ってみないと、行ってみないと分からないことがあるというのは改めて思いました。

C 地震の経験があったからこそでしょうか。

宇都宮 はい。現場にいなかったら助けてくれた住民の方々にも、助け合いが行われていた場面にも出会ったことはなかったでしょうから。

おわりに

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。本書は、大津町の皆さんが熊本地震の際に何を思い、どう行動してきたのかなどについて、復興に向けたそれぞれの一步を中心に綴ってきたものです。

「平成28年熊本地震」という同じ震災を経験しながらも、それぞれが起こした行動や感じたことは様々でした。この取材を通して私たちに見えたことは、震災という突然の困難を前にしても、力強く前に進んでおられる大津町の皆さんの姿でした。私たちが取材を始めたばかりの頃、ある方から、「一人の百歩よりも百人の一步が復興には大事だ」という言葉を聞きました。取材させていただいた大津町の皆さんはまさにそれを実践されているのだと思いました。きっと〈大変〉という一言では表せないほどの経験をされてこられたことだろうと思います。お話を伺いながら、それぞれが自分の持ち場で活動し、復興に向けた一步を着実に歩んでおられた姿勢に感動を覚えました。

地震は自然現象で、私たちにはどうすることもできません。「何故ここで、どうして今なのか」という気持ちや誰しもが抱いたのではないのでしょうか。自然からの理不尽な仕打ちを前にした時、怒りの矛先はあらぬ方向に向くこともあります。そうした矛先の一つは行政なのかもしれません。今回、私たちはそうした現場で働く行政職員の方にたくさん取材させていただきました。取材した職員の皆さんは、たまにそうした経験をしながらも、同時に、感謝の言葉をかけてもらうことが原動力となり、町の復興へと向かう一步を刻んでいるように感じました。もちろん、これほどの規模の災害となると、こうした一步は行政だ

けに限らず、全ての皆さんに共通したものだと思いました。

今回は22名という限られた方々の記憶を記録することしかできませんでした。しかし、大津町では、この22名と同様に、復興へと向かう一步を踏み出している方々が無数におられるはずです。そうした一人一人の一步が集まって、大津町全体が復興への一步を踏み出しているのだらうと思います。

平成28年5月、私たちは、大津町での熊本地震を記録する活動を開始し、事前準備を経て、その年の8月から約半年ほどかけて取材を行ってきました。書籍完成までの道のりは長く険しいものでしたが、こうして皆さんの手に取っていただける一冊の本となったのは、取材を快く引き受けて下さった22名の皆様、そして大津町役場の皆様、特に地域づくり推進係の岩下潤次さんと前田健司さんの力強いご支援があったからです。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、この一冊の書籍が震災を乗り越えようとしている大津町の、震災の記憶の一部として、後世に残る記録となれば幸いです。

平成29年2月

熊本県立大学津曲研究室

チーム Coho'zu

飯沼玲佳

上田幸奈

多賀有紀

〈附録〉

熊本地震後の大津町年表【2016.4.14 - 2017.1.16】

年	月 日	大津町	備考
2016	4月14日	大津町で震度5強の地震発生。 大津町役場にて災害対策本部が設置。 指定避難所の開設。	午後9時26分。震源は熊本地方で最大震度7。 マグニチュードは6.5。
	15日	JR豊肥線の熊本・肥後大津・宮地駅間運転見合わせ。 熊本地方で震度6強、6弱、3、4の地震が頻発し、次々に避難所を追加開設。 内閣府、災害救助法の適用を決定。 役場窓口業務は町民交流施設（オークスプラザ）で限定的業務を実施。住民課は端末機不足のため、証明書発行のみ受付。 給水所の設置。	対象施設（矢護川コミュニティセンター、野外活動等研修センター、大津地区公民館分館など）。 適用日 4月14日
			対象施設（室小学校体育館、人権啓発福祉センター、護川小学校体育館、大津小学校体育館）。

16日	大津町で震度6強の地震発生。その後、震度6から震度3の地震が頻発。 自衛隊に支援を要請。 イオン九州（株）から毛布500枚が支援。	午前1時25分。震源は熊本地方で最大震度7。マグニチュードは7.3。（阪神・淡路大震災と同規模）
18日	避難所において、食料品等の配布開始。 水浸しとなったセントラル病院の入院患者約200人を全員県内外の医療機関に搬送完了。 大津町教育委員会から臨時休園、臨時休校の発表。 気象注意報、大雨警報、強風・洪水注意報が発表。 食料品、水以外の物資の配布案内開始。	その後も継続して、パン・おにぎりなどの食料品を提供。
17日	避難者数1万2848人、避難所73箇所開設。 町交流会館（まちづくり交流センター）にて炊き出しを開始。 九州電力が、がけ崩れなどによる復興困難箇所を除き送電復旧を完了。 町民交流施設（オークスプラザ）で住民課が異動処理も受付再開。 町内で窃盗の被害届が寄せられる。	

年	月 日	大津町	備考
	19日	滋賀県大津（おおつ）市から同じ大津という地名が縁で支援物資が送られる。 午前11時50分頃から豊肥線の熊本・肥後大津駅間で運転を再開。	
	21日	内閣府、生活再建支援法の適用を決定。 熊本地震で通行止めになっていた県道北外輪山大津線（通称・ミルクロード）を正午に全線開通。	適用日4月14日
	22日	滋賀県大津市から職員が6人派遣される。	自治体が単独で被災地の支援要員を派遣するのは県内初。
		県・船橋市・柏両市から厚生労働省の要請により、合同で保健師らが順次派遣される。	
		大津町災害ボランティアセンターが町総合運動公園に設置される。	
	24日	災害情報を掲載したほぼ日刊広報おおづを発行。 （5月16日まで）	
	25日	役場通常業務を、町民交流施設（オークスプラザ）ほか各施設に分散して全面再開。 大津菊陽水道企業団が大津町内の各配水池から送り出される水道水について、水質基準に適合していること発表。	
		大津高校・翔陽高校授業再開。	

年	月 日	大津町	備考
	7日	町立小中学校、幼稚園の再開にむけ、指定避難所を12箇所に統合完了。 被災者向けに公務員住宅（国家公務員、県職員、教職員）を障がい者、高齢者、子育て世帯等を優先に一時的に無償提供。 応急仮設住宅を老人ホームすぎなみ園跡地に33戸建設することを発表。	完成予定は6月中旬。
	8日	町総合運動公園にて自衛隊が行っていた無料入浴支援終了。自衛隊による全支援活動を撤収。 震災により休校していた大津町内小中学校が授業再開。	社会福祉協議会、太寿園での無料入浴は受け入れを続行。
	9日	学校施設の社会体育使用に関する貸し出し受付を開始。	対象施設（美咲野小、室小、大津東小、護川小、大津北小、大津小の各体育館）
		J R 豊肥線、不通となった宮地・肥後大津駅を結ぶ臨時の通学バス開始。	
	16日	り災証明書の発行を町民交流施設（オークスプラザ）にて開始。	
		学校施設の社会体育使用への貸し出し開始。	
	23日	大津町室仮設住宅（老人ホームすぎなみ園跡地）入居申込受付開始。	
	24日	本田技研工業（株）熊本製作所、従業員735人を全国の生産拠点等に当面配置することを発表。	

[illegible]

年	月 日	大津町	備考
2017	8月5日	大津町室に続いて開設した応急仮設住宅「南出口仮設住宅」に大津町・南阿蘇村の住民が入居開始。	
	8日	全国知事会からの派遣職員、撤回。	
	11日	本田技研工業（株）熊本製作所の避難所にて、12日の閉鎖を前に盆祭り大会開催。	
		「室南出口仮設団地」（78戸）に本田技研工業（株）熊本製作所の保育スペースを移転決定。保育スペースが設けられたのは県内初。	
	29日	復旧・復興に向けた大津町住民座談会、9月1日までの3日間開催。	
	31日	熊本県町村会からの派遣職員、支援終了。（相良村・湯前町）	
	9月13日	本田技研工業（株）熊本製作所が震災後、完全復旧した姿を公開。	
	30日	J R豊肥線、宮地・肥後大津駅間、復旧めど立たず。	
	10月11日	多良木町からの長期派遣職員受入。	
	31日	町内の避難所全閉鎖。災害対策本部を解散。	
	11月1日	復旧・復興対策本部を設置。	
	1月16日	一部損壊世帯に対する住宅補修見舞金および義援金の受付開始。	

(作成) 多賀有紀・秋山有紗(熊本県立大学津曲研究室)

(監修) 岩下潤次(大津町役場)

(参照) 大津町「大津町役場」／大津町「ほぼ日刊広報おおづ」／

大津町「広報おおづ」／大津町「議会だより」／

熊本日日新聞社「熊本日日新聞」

取材活動の目的



① 活動の意図

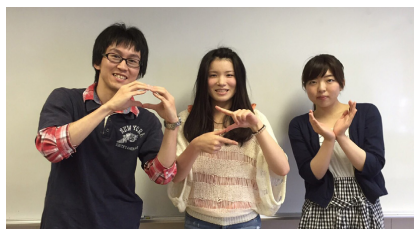
2016年、大きな地震が熊本を襲いました。地震を経験したからこそ伝えたいメッセージや、二度と同じことを繰り返さないための教訓など、この地震から学ぶことはたくさんあると思います。そんな中でそれぞれの人が自分の「持ち場」でどのように取り組み、乗り越えていったのかという過程を取材を通して記録し、後世まで残していくことを意図としています。

② 研究テーマ

研究のテーマは『震災による困難や試練、挫折に直面しながらも、それを乗り越えようとしている人たちの言葉を後世のために記録する』というものです。このために大津町で活躍されている様々な方に取材し、それを言葉として残そうと活動しています。

熊本県立大学 津曲研究室とは

熊本県立大学津曲研究室は津曲隆教授の下、地域と連携し、地域の課題解決のために様々なところで活動しています。今回取材活動を行うのは、その中の「Coho'zu」（コーホーズ）というチームで、大津町役場と連携して活動しています。取材、編集、記事制作に取り組み、一冊の本の完成を目標としています。



特集

熊本県立大学 × 大津町

復興 へと向かう 一歩

熊本地震において、自分の持ち場で懸命に行動していた人たちがいました。その何人かの人たちに直接会って声を聞き、その人たちが起こした行動の一歩は、復興へと向かう未来に繋がっているのだと思いました。これを多くの人たちの一歩へと繋いでいくため、熊本地震に向き合った大津町の姿を、この特集でお届けします。

熊本地震における世間の関心は、被害の大きかった益城町や西原村などに集中しました。被害の大きかった地域は報道されることが多いため、被災から復興へと向かう記録が詳細に残っていくでしょう。しかし大津町は報道される機会が少ない分、記録が残りにくいのではないかと考え、私たちは大津町の人たちが震災に立ち向かった記録を残すことを連携の目的としました。

そんな時大津町である人に会い、復興に向かうためには「一人の百歩よりも、百人の一歩」だという話を聞きました。被災しながらも復興へと向かい、自分の持ち場で行動した人たちの一歩が大津町には無数にあつたはずですから。そのような人たちの行動を記録として残すことは、熊本地震に向き合った町の姿を描くことに繋がる、価値のあることだと考えました。

大津町を頻りに訪問し取材した結果、100人にはおおよびませんでした。この記事を通して、震災に向き合った町の6人の姿をお届けします。紙面の都合でご紹介できるのはごく一部ですが、ぜひご覧ください。

広報おおづ

大学生 津住 大津町在住
古庄 日菜子さん



震災を経験して

東日本大震災の影響で地震についての意識は持っていました。しかしそれは当事者としての意識ではありませんでした。熊本地震で強い揺れを体験し、災害に対し何も備えをしていなかった自分を反省しました。東日本大震災の教訓は多くの犠牲をもとに作られたものはずです。そうした人たちに申し訳ない気持ちになりました。

ボランティアへ

地震直後、混乱した状況の中で私にも何かできないかと考え、SNSで情報を集めていました。ボランティアの呼びかけがたくさんありました。町運動公園球技場で人手が足りないという情報を見つけ、すぐに行動に移しました。友

達と一緒に、食事を運んだり、ゴミを拾ったり、おじいさんたちのマッサージをしたり、話し相手になったり、エコノミー症候群予防のチラシを車のワイパーに挟み込む作業などをしていました。

自分が出ること

4月中旬に益城町にもボランティアに行きました。益城町はいたるところで家屋が倒壊しており、それを目の当たりにしてショックを受けました。その時、学生の私も、できることをしなければと思いました。

地震を経験し、気付いたことはたくさんあります。家族や友人の大切な人や、住むところがあることの大切さなどです。当たり前が壊れるのは一瞬なんだということも知りました。だからこそ私たちが一瞬一瞬を大切に、当たり前を守っていかなければならないのだと思います。町が以前の活気を取り戻すために、今後も自分に出ることを頑張ります。

学生に出来ること

当たり前が壊れ学校に行けなくなった古庄さんと佐々木さん。

学生にできることは何かと自らに問いかけた。

そして「**私たちが行動しなければ**」とボランティアを行った。

大きなことではなくても**学生に出来ること**を。

ボランティアの経験

地震後は一週間以上車中泊をしていました。車中泊は大変でしたが、その時に友人と「何かしないといけないよね」という話になりました。5月3日から28日までは参加できる日はボランティアをしました。初めてのことで分らないことと覚えることも多かったのですが、家に帰ってからその日の復習をして、翌日のボランティアに備えていました。ところが次の日にはさらに仕事の種類が増えていて、あせんとしたこともありました。精神的に辛くな

大学生 津住 大津町在住
古庄 日菜子さん



る時もありましたが、ボランティアをやった良かったと思っています。

当たり前の大切さ

地震によって大学は長期休校となりました。大学に行けなくなり、初めて大学は勉強するだけではありません。友人と会える場所なんだと気付きました。地震直後は友人と会えず、とても寂しいと感じていました。友人と普段どおりに会えないことがこれほど辛いと思ったことはありませんでした。「大学に通う」という私たちにとっては当たり前のことが、有り難く感謝すべきことだと感じ、同時に私たち学生にとって学校という場所を守るべき大事なところなのだと感じました。

危機感を忘れずに

大学が再開した今、ようやく日常が戻った気がしています。再開後の講義の中で「時間が経ったら危機感が薄れていく」という話を聞きまし

取引先から「何かできることはありませんか」との申し出があり、避難している人に要望を聞いて、ブルーシートや水、離乳食、おむつな

臨時配給所として

の食をべた」と喜んで頂きました。

地震直後、道の駅大津は広い駐車場があるため、多くの人が昼夜問わず避難していました。私は営業再開を優先して考えていたのですが、レストランオーナーからの「炊き出しをしたい」という言葉で我に返りました。「今は炊き出しだ」と思い直し19日に準備し、20日は豚汁や井ものなど千食分の炊き出しをしました。SNSで発信するとたくさんの方々が集まり、「久しぶりに温かいものを食べた」と喜んで頂きました。

炊き出し



道の駅大津「駅長」
上野賢一さん

様との会話が増え、お客様をより大にすることになりました。自分の仕事の意味、本質を考えることに繋がったように思います。

自分と言うのも恐縮ですが、地震以後の3カ月は自分のサラリーマン人生の中で一番仕事をしたと思います。本当に必要なものが何かを考えるきっかけになりました。また、たくさんの方からの励ましを受けたことや、買い物をしてもらったことが大変嬉しく、感謝しました。そうしたこともあり、これまで以上にお客様との会話が増え、お客様をより大にすることになりました。自分の仕事の意味、本質を考えることに繋がったように思います。

自分の役目

開させることができました。

どをお願いしました。駐車場を臨時の物資配給所として使うことにして、「3時間後に配布します」とSNSで情報発信したところ、多くの人が集まりました。運営は試行錯誤でしたが、物資の配給を継続しながら、道の駅は20日から一部営業を再開させることができました。



「本当に必要なものは何か」と考えるようになり、
「**考え方が180度変わった**」という上野さんと三池さん。
地震後、道の駅に来られるお客様が減ってしまったことを教訓に、
地元に密着し、お客様を**大切にする**ことの重要性を痛感した。



道の駅大津
三池和臣さん

支援活動とSNS

地震後はしばらく車中泊をしながら、昼は道の駅、夕方は交流センター1での炊き出しの手伝いをしていました。私は道の駅大津では、SNSを使った情報発信をする担当だったので、地震直後も、道の駅での支援物資配給についての情報発信を行っていました。SNSへの反応は凄かったです。町の人口をはるかに

地域に密着した存在へ

超えるアクセス数がありました。多くの人がインターネットを使って情報を得ようとしていたようです。緊急時は、情報が予想以上に広がると思いました。だからこそ、そこには正確な情報を載せることの重要性を感じました。緊急時の情報発信のあり方は今後きちんと考えていく必要があると思います。

地震直後、避難のために道の駅大津に来る人は多く、その時は多くの方々と接しましたが、地震の影響で来られるお客さんは減りました。この経験から考え方が180度近く変わったように感じます。

仕事では、もっと地元密着でいくべきではないかと考えるようになりました。これまでも春のつじ祭りなどのイベント企画をしていたのですが、密着していたつもりだったのですが、密着の意味をさらに考えていかないといけないと思いました。阿蘇への通過点として道の駅大津に来ていた人たちだけでなく、地域の皆さんが足を運ぶような存在になりたい。さらに子どもたちが遊べる、例えばから芋ほり体験などができる場所になれるとも思います。町のために役に立つ存在になるように努力します。

地域おこし協力隊

さいとうたけし

齋藤剛司さん

『立派なことを言ってもしょうがないから地道に泥臭くやっていく。』

その言葉通り、震災後大津町内の店を巡り、開店状況などを発信していた齋藤さん。それは地域の皆さんに次の一歩を踏み出してもらうためのメッセージだった。

避難所での支援

前震時は自宅でした。揺れが収まり「役場の様子を見に行く」と妻に伝え出かけると、すでに多くの職員が集まっていた。避難所を開設することになったので私は子育て・健診センターの避難所開設の手伝いをしました。真っ先に職員の人に提案したことは、建物内の電気をすべて灯して避難してきた人の目印となるようにすること、余震が起きた時にすぐ外に出られるよう土足で施設内に入れるようにしてほしいということでした。東日本大震災を経験した、その時の記憶が残っていたのだと思います。

避難者支援をしていましたが、翌日には避難者がかなり減り、自宅に戻りました。そして本震。すぐに健診センターに戻りました。

建物や車中泊者の見回り、簡易トイレの設置、食事の配食などの手伝いを5月9日まで続けました。

不安を持ちながらも行動へ

私は「特産品開発」や「農産物加工商品の活性化」をするために大津町に期限付きで雇用され、神奈川から夫婦で移住してきました。避難所の支援を行いながらも、「町はどうなってしまうのだろう」とか、「我々夫婦はそのまま熊本で生活していけるのだろうか」といったことを漠然と考えました。地震で産業発展どころではない状況でしたから。しかしあの混乱した中で、不安を抱くだけでは何も状況は変わらないので、今、自分に出来ることをやろうと思って行動を始めました。

日常を取り戻す支援

私は町内のお店を巡り、お店の開店状況や品数の状況などをSNS

自分にも出来ることから

今回の震災で被災はしましたが、被害の大きい市町村に比べると町はまだ余裕があります。そもそもその業務である「特産品開発」や「農産物加工商品の活性化」も復興に向けた取り組みだと思っています。あまり立派なことを言ってもしょうがないですから、泥臭くやっていきます。地道な行動が町の発展の糸口になるかもしれないので、コツコツやっていくのみだと思っています。

次の一歩への糸口

広報おおづ

外牧区嘱託員

さ か た か ず た か
阪田一孝さん

『私を頼って声をかけて下さることが励みでした。』

4月に区長になったばかりの阪田さん。
外牧区は地震被害に加え、
6月には豪雨被害にも見舞われた。
住民からの
「どうすれば良いか」との問いかけに
地区を守らねばという使命感で
区長として判断をしていった。



区長として 災害に向き合う

地震後の対応

前震時の被害は少なかったのですが、16日の本震時は、強烈な揺れで家から外の道路に飛び出しました。ブロック塀が倒れて道路は通ることが出来ない状況になっていました。家族には近くの県道に行くように伝え、私は集落の状況を見に行きました。住民の多くが、近くのグラウンドに集まっていた、地区内の5人の組長さんたちを通して、住民全員の安否を確認しました。その夜は防災用に準備していた発電機でグラウンドを照らして皆で車中泊をし、夜が明けてから地区全員で町運動公園球技場に避難することになりました。

困難を地区で乗り越える

スポーツの森には2、3日ほどいました。地区に戻り、4月20日

頃から地区の公民館で炊き出しを始めました。皆さんが自宅を片付け、暮らせるようになるまでの10日間ほど続けました。炊き出しは、私がお願いして女性メンバーに協力してもらいました。外牧区は住民の協力があって、地震直後の困難を乗り越えたように思います。

追い打ちをかけた豪雨被害

6月後半の豪雨でもこの地区は大きな被害を受けました。崩れた土砂が雨水をせき止め、その水が土石流になり大量に地区に流れ込んできたのです。テレビでも絶え間なく「外牧区、避難指示」という情報が出ていた中で、避難するよう声をかけに回っていましたが、途中で消防団員から制止され、避難していた町運動公園球技場に戻りました。土石流は床上浸水2軒、床下浸水12軒とひどい被害をもたせました。地震から地域を復興させようとしていた矢先でした

頼られることが励みに

で、辛かったですが、住民は全員無事だったのでほっとしました。

私は4月に区長になったばかりでしたので、今回の災害時には、何をどうしたら良いのか全くと言って良いほど分かりませんでした。しかも生まれて初めて経験するような大災害でしたから、なおさらです。不慣れでしたが、それでもこの地区の責任者なので、住民の皆さんから「どうしますか」「どうするの？」「どうですか」と判断を迫られるわけです。その度に大きな決断をしなければならず責任を感じました。

区長という役目は大変でしたが頑張ることが出来たのは、住民の皆さんが私を頼って下さったからです。私を頼って声をかけてもらったことが励みになりました。今後は、この地区も復興に向かわなければなりません。町も厳しい中で、「あれもしてくれ、これもしてくれ」と要望だけを受けるわけにもいかないので、町と一緒に穏やかにですが確実に前へと進んでいくことになるだろうと思っています。今後皆さんに頼って頂けるよう頑張ります。

想

い

混乱から日常へ

～自分の持ち場を取り戻すということ～

この取材で、熊本地震が発生する以前は、「熊本では地震は起こらない」と思っていたという人が多いことを知りました。しかしあの日、突然、身の危険を感じる強い揺れが町を襲いました。多くの人が初めて経験したであろう恐怖の中で、人々はどのような想いで地震に向き合い、行動を起こしたのでしょうか。取材を通して分かった共通項は、皆さん「誰かのため」を原動力に行動していたということでした。家族などの場合もありましたが、あの大混乱の中で、多くの人にとっての「誰か」とは目の前の人たちでした。自分の目の前で困っている人のためにほとんどの人が行動されていたのです。

年齢も立場も異なるたくさんの人たちが、地震の際に自分が居合わせるところを持ち場にして、自分にも来る行動を起こしていました。学生であれば学校、会社員であれば会社が、自分が普段活動する持ち場です。しかし震災時の混乱の中では、その時たまたま居合わせた場がその人の持ち場となって、自分が出来る範囲で地震に立ち向かうべく行動されていました。

地震直後の混乱から日常へと向かう時、それぞれの持ち場は変化していききました。一分一秒を争う地震直後の混乱を切り抜けた後、時期はそれぞれ異なっていました。ある時はと一区切りつく瞬間があり、そこから日常に向かう一歩が踏み出されていくようでした。取材では、その過程が強く印象に残り、こうした過程を復興と呼ぶのだらうとも思いました。

編集後記

取材させて頂いた皆様には心から感謝申し上げます。限られた紙面のめにはどのようにまとめれば良いのか、議論を重ねました。震災の混乱の中、「誰かのため」に行動された6人の方の思いや行動を通して、少しでも読者の皆さんたちが当時の自分の行動や想いを振り返ることのできる機会となれば良いと思います。一人一人の振り返りの集積が、震災の経験を過去のものとするのではなく、町が未来に向かっていくた

めの一歩になるのではないかと思います。私たちは、今後もさらに取材活動が続け、町の震災の記録を後世まで残すため、一冊の本を作りたいと思っています。今回ご紹介できなかった人たちの話もそちらに掲載したいと思っています。完成した際には町の図書館にも置く予定です。最後まで読んで頂きありがとうございます。



たがゆうき 多賀有紀



うえだかな 上田幸奈



いのりな 飯沼玲佳



取材の様子

編著者・掲載者紹介

編著者

熊本県立大学 津曲研究室 教授 津曲隆

チーム Coho'zu コーホーズ 飯沼玲佳 上田幸奈 多賀有紀

掲載者（掲載順）

古庄日菜子（ふるしょう・ひなこ）	大津町在住 大学生
佐々木香澄（ささき・かすみ）	大津町在住 大学生
三池和臣（みいけ・かずおみ）	道の駅・大津社員 / 東熊本青年会議所
上野賢一（うえの・けんいち）	道の駅・大津社長（駅長）
齋藤剛司（さいとう・たけし）	大津町地域おこし協力隊 隊員
古庄政広（ふるしょう・まさひろ）	大津町消防団第6分団長
阪田一孝（さかた・かずたか）	大津町外牧地区 区長
佐藤真二（さとう・しんじ）	大津町議会議員
〈大津町役場〉	
前田健司（まえだ・けんじ）	総務部 総務課
岩下潤次（いわした・じゅんじ）	総務部 総務課
中原裕二（なかはら・ゆうじ）	総務部 財政課
伊東正道（いとう・まさみち）	住民福祉部 環境保全課
原野さくら（はらの・さくら）	住民福祉部 住民課
豊岡莉奈（とよおか・りな）	住民福祉部 住民課
松嶋愛里（まつしま・あいり）	住民福祉部 住民課
松本美由紀（まつもと・みゆき）	住民福祉部 住民課
高橋由紀美（たかはし・ゆきみ）	住民福祉部 福祉課
姫野慎吾（ひめの・しんご）	住民福祉部 健康保険課
大塚昌憲（おおつか・まさのり）	住民福祉部 健康保険課
新開和則（しんかい・かずのり）	土木部 都市計画課
桐原航平（きりはら・こうへい）	教育部 学校教育課
宇都宮研輔（うつのみや・けんすけ）	教育部 学校教育課

編集協力者（津曲研究室）

河邊祐梨子 塚田薫 出口榛之介 藤村雅俊 松崎萌々子
秋山有紗 児玉みゆき 塚田朋実 塘添大輔

熊本県立大学津曲研究室 チーム Coho'zu^{コーホーズ}

津曲研究室は、津曲隆教授の指導の下、複数の学生チームが地域と連携し、地域の課題解決に向けて様々な活動を行っている。

Coho'zu はその中のひとつで、平成 28 年 4 月、4 年生 3 名で結成したチームである。熊本地震の発生により当初の計画を変更し、大津町役場総務課地域づくり推進係と連携して、大津町の震災の記憶を記録する活動を行った。記憶収集のため、大津町にて多くの方に取材し、記録としてまとめた。

平成 28 年熊本地震

復興へと向かう一歩～大津町 22 名の取材記録～

2017 年 4 月 発行

編著者 熊本県立大学津曲研究室 チーム Coho'zu

発行所 熊本県立大学総合管理学部津曲研究室

862-8502 熊本県熊本市東区月出 3 丁目 1 番 100 号

印刷所 株式会社アクセス

A STEP TOWARDS RECONSTRUCTION:

Prefectural University of Kumamoto

Printed in Japan